中央公論

臨時増刊

婦人問題號

第廿八年第九號 第貳百九拾四號

故田岡嶺雲譯並註（三版）

和譯維摩經

附和譯般若心經

總クロース金文字入美本
全一册　正價金七拾錢　郵稅金八錢

佛教八萬四千卷、就中曾に方外緇衣の人に重んぜらるゝのみならず亦其の所說の幽緲と其文字の古奧とを以て古より詩人文人の間に喜ばるゝ者維摩及般若心經の右に出づる者なし、今此二書をとりて逐字譯を施し且つ簡明親切なる挿註を加へ別に卷末に漢文の原文をも添へて一册となしたる者即ち此書也、佛教の眞諦を味はんとする者苟も文章に志ある者は一本を座右に備へ、明窓の下、淨几の上、爽晨靜夜香を焚いて之を讀め。

故田岡嶺雲著【三版】

數奇傳

▼序文　雪嶺博士外十五氏
▼挿畫　未醒、芋錢、月村七枚

總クロース金文字入美本
全二册　正價金九十錢　郵稅金十錢

著者自ら序して曰く『數奇傳一篇、是れ予が生きながら屍の上に建てたる自撰の墓誌也』と。著者病臥五年纔に三尺の牀上を天地として、其の半生を追懷して即ち此篇を爲す、轗軻數奇、戀あり、貧あり、病あり、放浪あり、下獄あり、觀戰あり、多恨善愁の著者が運命に泣き、運命と鬪ひ、遂に運命に安ずるの閱歷は正に詩よりも多趣に、小說よりも多奇也。

（◉新刊◉）
笹川臨風
白河鯉洋　共編

嶺雲文集

全一册
菊判上製函入　頁數八百四十
正價貳圓
小包料　内地十二錢　臺樺朝清四十錢

田岡嶺雲は一代の文章家也。曾て大學に在りし頃、故藤岡東圃博士が同學の間にポープ（英國の理智詩人）に擬せられしに對して、嶺雲はバイロン（同國天才的熱狂詩人）に比せられしと云ふ、げにや其の文、字々熱を吐き、句々血に燃え、多感多情にして、僞らざるは彼の本領なりき。加ふるに識見超邁、情趣高朗、之を行るに天來の妙筆を以てす、又編者臨風先生嘗て『病中放浪』に序して云ふ、我同人中奇峭にして骨あり氣ある文章を書くもの獨り嶺雲を以て第一とすと、今や全集成る、長短二百五十有餘の名什、人生を論じ、戀を語り、人を評し、文を談じ、感想記あり、旅行記あり、千紫萬紅殆ど應接に遑あらざらんとす、苟も文章を云ふ者は、必ず一本を藏せざる不可。

發行所　東京神田雉子町　振替東京第七九九五　玄黃社　●全國書店取次

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田表神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 京橋元數寄屋町 北隆館
仝 京橋西紺屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○定價 金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢 但清國を除く）

冊數／國別	內國	國外	
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢	以上郵稅共
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢	

▲但 新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替 にて御送金の場合は本鄕西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし
一振替貯金 口座は東京三十四番なり
一郵券代用 必ず一割增の事
一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢（集金委託料及送達料）
一金五圓迄 金七錢

一受領證請求 は必ず返信料金を要す

大正二年七月十二日印刷納本
大正二年七月十五日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所 反省社
電話下谷 九一九
振替東京三十四番
電信略號ハンセイ

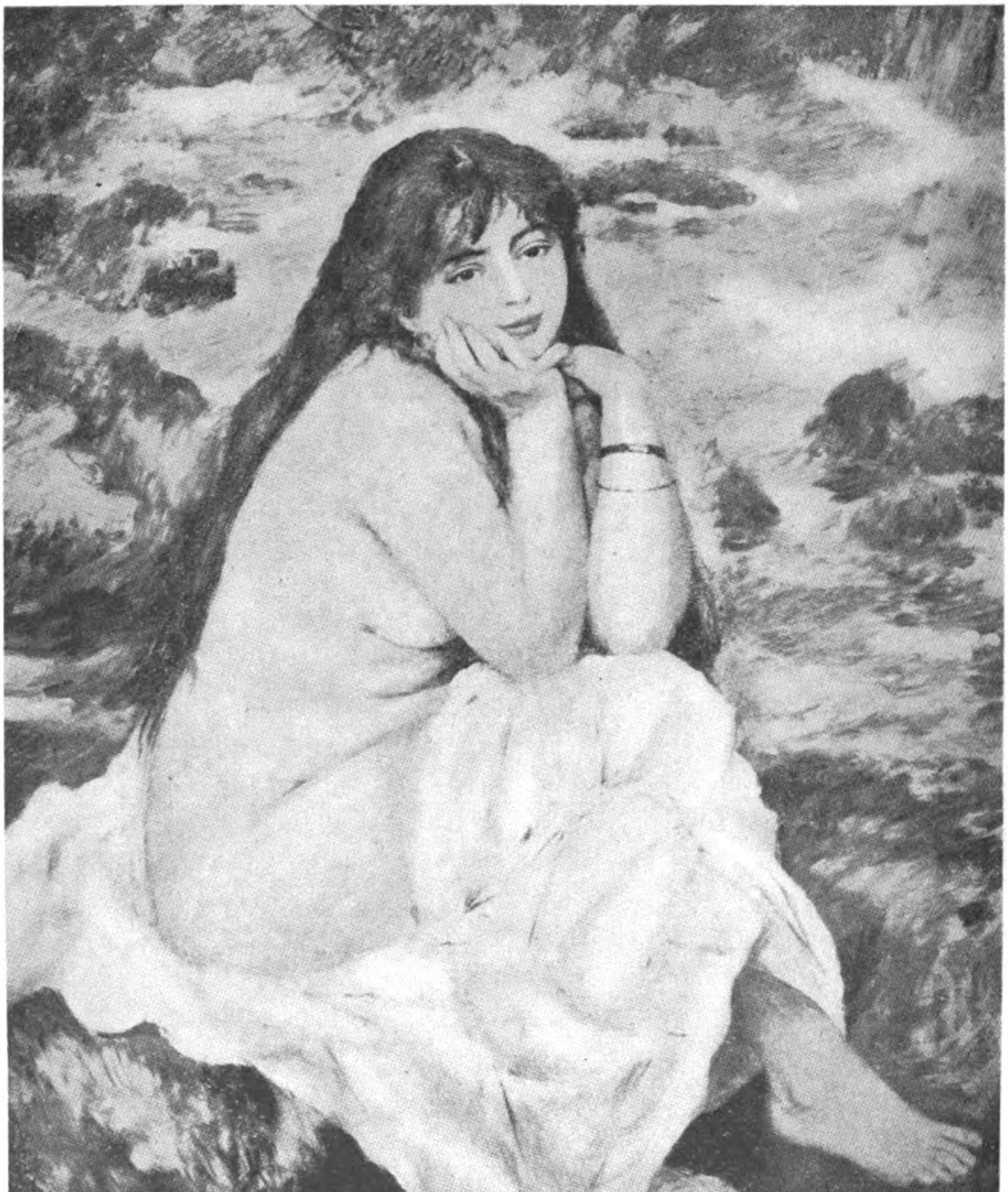
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

○本號特價金五拾錢 郵稅金參錢五厘

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



RENOIR



BAIGNEUSE

臨時増刊
中央公論
第廿八年第九號　七月十五日發行

婦人問題號

十九世紀を以て平民崛起の時代とすれば、廿世紀は明かに婦人覺醒の時代なるべし。今や歐米諸文明國民の心臟を鼓動せしめつゝある思想の大潮流は、我邦人の脈搏にも響き來つて、婦人問題に關する論議日に益ゝ盛んならんとす。

如何なる魔術師と雖も、有を化して無となすこと能はざるが如く、一度び發現したる新思想と新事實とは、假令千百年に亘る歷史的因襲の力を以てするも、又強大なる國家の權力的壓迫を以てするも、遂に之を撲滅し盡し、抹殺し盡す能はざる也。然らば強ひて眼を閉いで之を視ざらんとするは怯といふべく、視て而して姑息なる彌縫に甘んぜんとするは愚といふべし。苟も識慮あるの士は、寧ろ眼を大きく剖きて、正面より其新思想新事實の何物たるかを明かにし、而して之に對する根本的解決法を講ずるを以て、最も賢明にして且つ有效なる措置となすべし。

夫れ良農は深く地を掘つて厚く其根に培ひ、名醫は鋭きメスを揮つて、殘りなく病根を剔抉し去る。已に一の思想あり、一の事實あれば、之を助長するも、之を善導するも、之を矯正するも、將た又之を抑壓するも、總て其思想と事實との眞相を明かにして、而して手を其根本に觸るゝを以て第一義となす。

吾人が茲に婦人問題號を發刊して、普く江湖の熟讀を乞はんとするもの、亦此廿世紀の大問題に對する根本的解決に資するあらんとするの微意に外ならざる也。

近代文藝と婦人問題

島村抱月

緒言

所謂婦人問題を婦人問題として取扱つた文學は、概して淺薄なものである。女子の參政權運動のために書いた小說や、結婚制度變更のために書いた小說に純粹な大文學は無い。此等の問題が這入つたところて、其の作が文學として高い價値を有する場合、作品の燒點は他に存してゐる。少くとも其の問題から一歩を進めた所に存してゐる。問題そのものはたゞ其の材料となり入口となつて輕い地位に立つに過ぎない。言はゞ婦人問題が深化せられて、はじめて大文學をなすのである。人生の全景に響くだけの震

動を有するに至つてはじめて藝術となるのである。

さらば如何なる點で、如何にして婦人問題が文藝の中に深化せられてゐるか。

實行的婦人問題と精神的婦人問題

婦人問題の一般的論說は、既に出すぎる程出てゐるが併し此の問題の興味は、本たうは是れから先にあるのである。我が邦ではまだ此の問題が問題みづからとしても充分の發聲をなしてゐない。之に對する反對も贊成も多く研究された上のものでない。つまりまだ問題が適當の地に据ゑられてゐないのである。そのうちに早くも誤解や曲解で例の通りの危險思想呼ばはりがそれに附着して來さうになつた。今のうちに問題を適當の地に立たせて置かなければ、婦人問題といふ事が發賣禁止と同じ意味に解せられるやうな奇現象が起るかも知れない。

日本で婦人問題を書いたものでは、吉田熊治、上杉愼吉、安部磯雄諸君の著書が、それ〴〵の特色を持つてゐて、私の見た範圍では最も參考となるものゝやうである。併し結論はあまりに敎育的になつたり、方便的になつたりするものが多い。新聞雜誌にも近來は此の問題を取り扱つたものを多く見るやうになつた。中でも『婦人評論』の記者などが立ち入つた研究的の議論をする點で群を離れてゐる。けれ共これまた結論に於いて、今の社會に直に實行し得る程度といふ制限があるためか、問題の根本に對して理解も同情もあるに拘らず、結局は穩健無事といふ所に還つて來るのを急ぐ氣味がある。今一歩立ち入つ

て貰ひたいと思ふ點が殘る。

今日の婦人問題は、言ふまでもなく複雜になつてゐる。ドイツの一著書(『近世婦人運動』――ケーテ・シルマッヘル)では之を四方面に總括してゐる。

第一は教育方面で、女子も男子と同じ教育を受けなくてはならないといふ主張。すなはち重に高等教育の上で男と女とに區別をつけず、大學教育まで全く男子と同じ取扱を受けやうといふのである。所謂女子の教育的解放を求めるものである。

第二は作業の方面で、女子も男子と同じくあらゆる職業に就くことを得、且つ同じ職業である以上は同じ率の報酬を得なくてはならないといふ、職業的解放の要求である。

第三は國法上すなはち對國家の方面で、民法上にすべての權利義務を行ふ能力を認められ、刑法上に男女同一の取扱を受け、公法上に婦人參政權を得んとする、これは法律的解放の要求である。

第四は社會的方面で、婦人の家庭的社會的事業が男子の他の事業と價値に於いて同等であることを認められ、女子を加へない男子の諸活動が不完全なものであることを認められんとする、社會的解放の要求である。

而して是等諸方面の婦人運動の中でも、目下のヨーロッパはイギリスを中心にして第三項の一たる婦人參政權運動に熱中してゐる。啻に今日のみでなく、百餘年前、はじめて歐米に婦人運動の實行的方面があらはれた當時から、實行運動には政治的色彩がついてゐた。この方面から言へば歐米の婦人問題は

參政權運動にはじまると言つてもよい。けれども是れは文字通りに實行的婦人運動と呼ぶべき方面である。教育に於て、職業に於て、法律に於て、社會に於て、みな直ちに實行すべき項目を擧げ、之れを促す方法に於ても、或は演說により、或は會合により、或は請願によりして、斷行を當事者に迫まるといふ遣り方であつた。要するに是等は婦人問題の實行的方面で、直接有效の運動であると共に、その背後には經濟的政治的の要素が複雜に結合してゐる。

併しながら、婦人問題には更に他の一面がある。實行的婦人運動といふのに對して、精神的又は根本的婦人運動と呼んでもよいものがある。現在の事實から考へても、また過去の歷史から觀察しても、此の方面が婦人問題の發源地である。但しこゝて一方を根本的といひ、一方をそれから流れ出たものとしても、決してそれが運動の價値の高下にはならない。要するに婦人問題の二方面である。

女は男よりも劣つてゐるか

ヨーロッパに於ける實行的婦人問題のはじめは、今からざつと百年餘り前であるが、精神的婦人問題は遙に古い歷史を持つてゐる。それが源となつて實行的婦人運動を培つたとも見られる。そして百餘年前からは、おのづから兩側の流れとなつて傳はつたと言つてもよい。私がこゝて興味を持つのは專ら其の精神的方面である。そしてまた、本たうに考察の目的となるのも此の方面の問題である。

實行方面の問題は、それみづからとして道理の上からは、殆ど爭ふ餘地の無いものが多い。多くはま

だ早いとか遲いとかいふ時期の問題に歸したり、條件の問題に歸したりしてしまふ。婦人に選擧權を許すか許さないかといふことも、西洋ではもはや理論上の爭でないやうである。既に女子が獨立して財産を處理し、大學教育を受け得ることまで承認する以上、之に選擧權を許すのは論理の當然の結果である。それが爲めに家庭が荒廢しはすまいかとか、女子の優雅性を失ひはすまいかとか、さながら家庭や優雅は女子の自由に禁壓を加へることによつて僅に維持せられる不自然なものであるかの如く論ずる、自家撞着の淺薄な論據のほか、殆ど何等の正當な理由も立つてゐない。それと今一つは、言はず語らずの間に存する政權分配上の男子の便宜、これも恐らく非論理的にして而も有力な一反對理由となつてゐるに違ひない。其の他細かい種々の反對理由の如きは、男子と女子との能力の異同と優劣とを勝手に混同したり區別したりした不徹底の論か、さうでなければ何等省察のない因襲觀念を基礎にした牽强附會か、さうでなければ、結局選擧權を許すのが正當であつても、今日まだ其の準備が整つてゐないのだといふくらゐに歸して了ふ。

前に擧げたケーテ・シルマッヘルの書物に、アメリカに於ける婦人參政權運動の反對理由七點を擧げて辯駁してゐる所によると、第一、女は凡て結婚して愛せられ扶助せられてゐるといふ事が根柢になつてゐるが、事實必ずしもさうでない女が多い。第二、女は夫が家にゐるため政治の事など考へる暇がなからうといふが、男はさう家にゐるものでない。第三、女はいつも子供に累されてゐるやうにいふが、子供は大きくなつて了ふ、第四、女が政治に關係すると家庭を外にするだらうなどといふが、決して選擧

權を得て女の本性が變ずるものではない、第五、女の多數は選擧權はほしがらないといふが、欲するものが多くなつて行く、第六、女は今までに得た選擧權の一部しか用ゐないといふが、之は統計的事實が否定する、第七、選擧などは評判のよくない女のみがやるといふ說は嘘である。且つ男だつて評判のよくないものもゐる。などゝいふのであるが、是等は要するに兒戲に近い反對論である。

たゞ之を大膽に言ひ切つて、女子は到底男子よりも劣つたものであると斷定することをさへ出來れば、茲にはじめて女子の參政權を拒む根柢が生じて來る。「女子は男子よりも劣つてゐるか」この古くして而も今猶人の心に往來する問題が根本でなくてはならない。之に正面から「然り」と答へることを廻避して置いて、末の方でのみ「女子はただ被治者たるべし、治者たるべからず」と斷定しようとするのは、要するに强辯である。

職業に於ても、選擇の自由と、報酬の均等とは、女子を男子よりも劣つたものと前定しない限り、當然の結論である。個人々々の能力の異同と優劣とは、固より男子の間でも女子の間でも區別せられる。また異同だけは男女の能力の間に或る特殊の方面で存在するかも知れないが、それは男女お互ひである。女子に不適當な事があると共に、男子に不適當な事もある。それが優劣の問題にならないと共に、そもそも初めから問題にならないのである。不適當な事はやらせたつて出來ないのであるから、制限する必要はない。こゝても要するに根本の問題は「女子は男子よりも劣つてゐるか」といふに歸する。之に對する答が總てに對する答である。

教育問題はさすがに一層多く精神問題と接近してゐるだけ、西洋の婦人問題中でも最も早く發生し、且つ最も順當に是認せられ實行せられて來た。今日婦人に男子と同じ高等教育を施すヽとを拒絶する國は、たんとは無い筈てある。オックスフォード、ケムブリッヂが今なほ女子の卒業生に學位を與へないといふのは、變態に過ぎない、早晩與へざるを得ない道理てある。こゝまで來れば、「女子は男子よりも劣つてゐるか」といふ問題が餘ほど白けて來る。これすら最早問題てはないやうな氣もして來る。併し「女子に高等教育は無用なり」「女子は男子の大學に入るを許さず」「女は初めよりすべて料理と裁縫と子守との技術を主として教育すべし」といふ思想の存してゐる限り、「女子は男子よりも劣つてゐるか」といふ根本問題は依然として殘つてゐる。

之もアメリカの一大學て初めて女子の入學を許したとき、女性らしくなくなるだらうとか、學問に食傷した女て國が一杯になるだらうとかいふ反對說もあつたといふが、それは論外として、女子は生理的知識的に劣等だからといふ根本問題も有力てあつたといふ。

兩性論と個人論

婦人問題は結局愛の問題に歸着するものだと思ふ。そして同時にそれがまた人生の問題てなくてはならない。併しそこに到着するまでには說明がいる。

法律上、職業上、教育上の實行的婦人解放論に反對せんとする時最後に衝突する根本問題が「女は男

よりも劣つてゐるか」といふ一點に歸することは上に述べた。この男女優劣論は、表面から見れば所謂性的關係に基く婦人問題であつて、常に異性すなはち男を對象に立てた婦人運動である。それと共に之を裏面から見れば、此の場合男といふのは人間の滿點を代表したものであるから、男より劣つてゐるかといふことは、直ちに滿點の人間即ち一人前の人間になつてゐないかといふことである。一個獨立の價値ある人間であるか何うかといふ疑ひである。人間としての個人性の問題である。婦人問題の根本は亦た、斯うして人間問題、個人性問題にも連續して來る。要するに根本的婦人問題には兩性論と個人論との二面が結合してゐるのである。而して婦人問題の歷史は兩性論に始まつて、個人論に歸結してゐる趣がある。けれども更に其の先を考へれば、再び兩性論に入つて愛の哲學に落ち着くものでないかと思はれる。こゝて愛の哲學といふには勿論特別の意味がある。それを述べるに先だつて、婦人問題の變遷を一瞥して置く必要がある。

私が此の題目を調べたのは、イブセンの『人形の家』を譯するに當つて、此の劇が取り扱つてゐる婦人問題の由來を說明して置かうと思つたのが始まりてある。けれどもそれは都合があつて譯書の緒言の中へは加へなかつた。其のうち青鞜社て講演會をはじめるから、婦人と文藝に關した講座を持つて吳れと言つて來た。

そこで幸ひ婦人問題の變遷に關するものなら、材料も多少あるからといふので、それを何回かにわたつて述べて見ることに約束した。結論はいづれとしても、此の際此の問題の根柢に關しては、男女に限

らず成るべく正確な知識を持つて置くのがお互ひの爲めにいゝと思つたからである。然るに青鞜社の講演會は外部からの壓迫とかで成立たなくなつたと斷つて來た。

此の問題に關する書物で、私の見たのは二十種ばかりであるが、中には最も重要な典據的著書で、私の手に入らなくなつた爲め、他書の引抄で僅に其の一斑を窺つたやうなものもある。隨つて研究もまだ不完全であるが、こゝには其の中から更に必要なそして面白さうな箇條のみを簡單に拔き出すことにする。

男女優劣問題の初め

婦人問題の始めは、女が男に對して同等の社會的地歩を求める聲で、其の聲の生じたのは畢竟女の社會的地位が男よりも劣つてゐたからである。即ち婦人問題の前には先づ女子の劣等狀態といふ事實が橫はつてゐた。之が女の歷史の始まりである。

女の歷史は、それみづからが興味ある一の研究である。之をずつと神話時代にまで溯らせて、原始民族の女性に對する觀念を見ればそこに早く男尊女卑の思想の萌芽を認めることが出來る。例へばギリシヤの神話で、此の世の第一の女パンドーラはジュウス神が人間を罰せんが爲に送つた罪禍の塊である。女人罪障の東洋思想と同じと見てよい。キリスト敎傳說でも、イデンの花園で始めて蛇に誘惑せられるものはアダムではなくて、イーヴである。こゝでは女は一般能力の劣等とか地位の劣等とかいふよりもむ

しろ道徳的劣等のものになつてゐる。また舊約書に神が男をば土塊で造り、女をば其の男の肋骨で造つたことになつてゐるのは、材料の上ではむしろ女の方が尊いやうであるが、順序からいふと、やはり男が先であるだけに尊い。他の同じヒブリウ傳說には、神が男についてゐた尻尾を醜いと言つて切り取つたが、棄てのるは惜しいといふので其の尻尾から女を造つたといふのがある。之などは益々明かに女を劣つたものに見てゐる。勿論キリスト教では一方に男女を平等と見て、みな一様に天國に行き得るものとする。けれども其の反對の思想も矛盾したまゝに存してゐる。そして實際の社會狀態はどうであつたかといふと、ギリシャア、ローマ以後は言ふに及ばず、それ以前の太古民族でも、例外の場合の外、概して女は男に對して奴隷的、從屬的の關係を保つてゐた。(『女の歷史』――ウヰリヤム、アレクサンダー）社會的地位に於て、女は非常に男よりも劣つてゐた。そして同じ狀態が、一昂一落の間に多少の進善をば見ながら、近世にまで傳はつたのである。

では斯やうに男尊女卑の狀態となつた原因は何處にあるかといふと、それはエリス氏が言ふ如く、到底今日の文明の狀態のみで說明する譯に行かないのであるが、主として周圍の力及び遺傳の力が本であらうといふ(『男と女』――ハヴェロック、エリス）それと共に少くとも男女の肉體的組織の上に種類の相違があつて、男は四角なものに適し、女は圓いものに適するといふやうな區別はあつた、それが原始生活に於いて、男の方が周圍の事情に一層多く適切であつた爲めに遂に優勝者となり了せたのである。種類の相違が優劣の相違になつたのである。

ては男女の種類の相違といふのはどんな事か。之れに關して諸研究者の説くところは大略下の意味に歸する。曰はく、男は女よりも速に精力を消耗し、女は男よりも多く保持的である。男は力の發射に適し女は之を確守し忍耐するに適す。女は長く幼稚の狀態に留まり、男は早く老熟の狀態に近づく。(『兩性と社會』――ウキリアム、アイ、トーマス)又曰はく、男は創造し、女は保守する。男は製作し、女は解釋する。男は總括し女は殊別する。『男は感ずるよりも多く考へ、女は考へるよりも多く感ずる(『近代社會に於ける婦人』――アール、バーンス)斯やうにして男と女とは互に相補ふ本性を持つてゐるといふのである。けれども之は天然自然にさうあるといふ研究であるから、女は必ずさうあらざるべからずといふのでは勿論ない。之れに外れた女が出てもそれが批難の理由にはならない。それと共に男女間の以上の相違が優劣の相違でもない。たとそれが周圍の事情に適すると適しないとて、偶然優劣の結果を生じたのである。

但し、斯う見る説は反對論をも生じ得る。初めから女は男よりも肉體精神二つながら劣等であつた自然の結果、その社會的地位も劣等となつたのでないか。優劣の無いのが本來なら、たとへ一時は周圍の事情の爲に女子が劣等者と成りつゝけても、長い年月の間に再び其の正當の地に歸り得ない譯はない。歷史あつて二千年三千年のあひだ、劣等狀態を續けて來た女子は、本來からの劣等者なのではないか。

此の反對論もこれだけとしては、一方の説と同等の根據を持ち得る。併し之れが少くとも同等の根據を有し得るが故に、尙さら結論は女子に利益あり、婦人問題に利益あるものとならざるを得ない。何と

ならば、男女が果たして無優劣の資格を有し得るか否かを確かめるためには、今日の惰性狀態たる婦人の劣等的地位を破り、無理にも彼等をして男子と同じ水平の上に立ち直らせて見るほかないからである。出來得る限り、あらゆる因襲を忘れ、あらゆる私情を捨てゝ、女子と男子とを赤裸々な原始的自然の平等に還らしめ、假すに年月を以てして、女子の傷はれざる自然性を發揮せしめて見なくてはならない。之れが男女の別を撤した人間としての公正な心である。若し女が偶然の行きがかりから劣等者たる三千年の歴史に囚へられたものであつたら、其の三千年の囚はれから救ひ出してやるのが吾々の任務だと言つてよい。萬一いくら救ひ出さうとしても、結局根本に於て度すべからざる劣等者であると證據だてられたら、その時はじめて女子の現在の地位が正しいものとなる。けれどもそれが的確に證據立てられるのは容易の事と思へない。むしろどちらとも斷言せられない試驗狀態が長くつゞくであらう。それならそれて、尙以て其の試驗狀態に早く入らせるのが正しいものゝ務めでなくてはならない。而して試驗狀態に入らせるとは、即ち女子を舊來の劣等的屈從的因襲から離れた獨立自由の人として取り扱つて見ることである。あらゆる意味に於て男女の平等的待遇を課することである。而して此の平等的待遇を要求する運動が婦人問題に外ならない。婦人問題の變遷はやがて女子が有史以來の囚はれから脫しようとする運動の變遷である。

婦人問題の變遷

歐羅巴の婦人問題が自覺的に起つて來る以前から、之れに向ふべき準備現象は生じてゐた。婦人の地位に關して最も早く動搖の端緒を與へたのは中世の騎士道である。十字軍の頃から起つた騎士道が、世の泰平となると共に其の武者修業の目的を變じて、弱き者を助け、美なるものを崇拜するといふ、俠と文とを合したやうなものになつた。而して弱い者とは女の事であり、美しいものとは女の事であるやうになつた。騎士が目的とするものは女に外ならない事となつたのである。既に女子が崇拜の目的となる以上、そこに戀愛の飾りが附かざるを得ない。騎士道の女子崇拜はまた戀愛崇拜となり、こゝに戀愛に仕へる事即ちミンネ、ディーンスト、戀愛を歌ふもの即ちミンネ、ジングルが中世の傳奇に離るべからざる色調となつた。騎士は女と戀愛とに奉仕し、歌を作り樂器を取つて此等のものを讃美する。此の風が傳はつて、中世から近世への移り目、文藝復興期の初めに出たボッカチオ、ペトラルカ等の文學に其の餘香を殘した。近世のロマンチシストの文學にも、材を中古に取つたものには皆此の消息が傳へられる。ワグナーが歌劇の中などにも其の例が多い。

女は人間以上のもので、戀愛は天國にも代へがたいものといふ風に女が尊ばれた結果、女みづからも自尊の心が生ぜざるを得ない。其の上男子の愛を得る方便としても女は修養が必要だと思はれた來た。こゝに初めて女子の學問といふことの種子が播かれて、ラテン語やギリシャ語や哲學やを修める女が生じた。また完全な自覺から起つた修養てなく、たゞ男の愛を得る手段といふ程度のものであつたとしても、兎も角も之れが女子の敎育的解放の一歩たることは爭はない。而して一度敎育上の解放が初まつて、

女子の心性啓發の端緒が開けた以上、女子の自覺がそこに遠い源を汲むのは當然の事である。

けれども其の間には曲折があつた。修養や學問だけで必ずしも男の愛は得られない。その反動として十六七世紀に及ぶ頃の女子はまた元の無學に戻つたらしい。(『女の歴史』――アレクサンダー)それと共に、一方には騎士道それみづからが文學に傳へられてゐる程美しいものばかりでなかつた。中世の騎士の多數は無頼の徒であつた。女を崇拜し戀愛を讃美するといふ事は、處女を弄んだり、お互同志の妻を姦したりすることであつた。强姦、追剝は彼等の仕事であつた。それと今一つ、中世のキリスト教の僧徒が獨身で徒食奢侈であつた結果、到るところに淫行を逞うしたやうである。(『婦人とソーシァリアズム』――アウグスト、ベーベル)斯うして女子の貞操觀の破れる端緒もこゝにあつたらしく、宮廷等に於ける男女間の放縱な生活が反動を呼起して、女子をして却つて消極的に家庭に引籠らせる風をも生じた。

此等の風潮中に立つて、十七世紀の初めにあたり、女子の心性開發の必要を喝破した最初は、イギリスに於ける女流でメーリー、アステル、男性でかの『ロビンソン、クルーソー』の著書デフォーの論文等であつた。女をして男の伴侶たるに適せしめるためには彼等を教育する必要がある、といふのがデフォーの主張であつた。

併しまだ大勢は近世の婦人問題に遠かつた。十七世紀のヨーロッパの女は「柔かな性」「美しい性」「優しい性」であつた。身體も精神も財産も、結婚を共に、擧げて男子に捧げるものであつた。其の酬ひと

して男子は女子に食物を給し、責任を負擔してやる。此の頃の娘に對する親の教訓は嫁しては夫に從順であれ、夫に不行儀があつても、我慢してそれを治めて行くのが婦德である、といふに歸してゐた。(『英國婦人の解放』――ライオン、ブリーズ)

十八世紀も大體に於て淑と貞(デリカシーとチャスチチーと)が女のすべてゞあつた。此の世紀が近世婦人の運動のはじめて眞に自覺に入る時代であつたことは否まれない。此の世紀の初めごろから、イギリスにアヂソンやスチール等の文人が雜誌『テトラー』其の他て女子敎育論をしはじめた。十七世紀文人の跡を追うた意味もあらうが、一つは實際當時の婦人の無智淺劣に苦しんだ結果と察せられる。スチールが書いたものに「多くの女性が斯うして人類社會から失はれて、勞作よりも遙になさけない怠惰の中に時を過ごし行くのを見ると憤りに堪へない」と言つてゐる。此等が刺戟となつて女子の學問修養といふ事がまた勃興して來た。其の結果が所謂イギリスの靑鞜者流(ブルー、ストッキングズ)てある。

靑鞜の起りは千七百五十年頃文藝學術を愛する男女が打ちまじつて一つの會をロンドンで開いた。其の會員中にベンヂャミン、スチリングフリート君といふ人氣者がゐて、いつも靑い靴下をはいてゐた。それから其の會員殊に女流文學者連を靑鞜會員と綽名するに至つたのだと傳へられる。此の前後から有名な女流の學者、女流の文人が續々輩出するに至つた。併し彼等の婦人問題すなはち對男子、對社會の關係に於ける自覺はまだ十分でなかつた。彼等は依然として家庭に引き籠つて柔和に夫の慰藉者となつて

ゐるのを女の理想としてゐた。彼等の學問や文藝は要するに彼等が家庭の隅て獨り心を樂しませ、また子女を薰陶し交際を美しくする道具たるに他ならなかつた。少くともそれによつて男女の對等權を爭ふ氣は起らなかつた。

けれども、一度斯うして心性が開發せられると共に、何時かは必ず女子の心に根本的自覺が起らざるを得ない。少くとも騎士道以後、女子の學問の一消一長する底に潜んでゐたものは女子の自覺である。而して此の潜んだ自覺の導火線となり、之れに爆發を與へたのは十八世紀末ヨーロッパ社會の大動亂、大革命である。男性にルーソーが出て、女流にマヂム、ド、シュテールが出で、アメリカ獨立戰爭があり、フランス革命がある。アメリカ獨立戰爭の結果、初めて婦人參政權運動が此の國に萌し、フランス革命の結果、フランスに女權請願運動が勢を得て來た。それと共に根本的な婦人自覺の問題も此の動搖の間から叫び出された。其の第一の聲を擧げたのが、メーリー、ウオールストンクラフトである。千七百九十二年に出た其の著『女權の擁護』が之れを代表する。ヨーロッパに於ける眞の婦人問題は之れによつて初めて標榜せられたと言つてよい。

メーリー、ウォールストーンクラフトは美しい女て數奇の運命と光榮ある傳記とを持つた婦人である。後年同じく文人て學者であつたゴッドウヰンに嫁し、メーリー、ウォールストーンクラフト、ゴットウヰンとなつて、一女を生むと間もなく死んだ。其の娘が夫の詩人シェリーの二度目の妻君として有名な女である。彼の女の主張によると、女子の罪過の源は其の心の狹隘なのにある。女の個性を獨立せしめて、

之れを廣大にするやうに教育しなくてはならない。婦人も女である前先づ第一に人間でなくてはならない。いつも自分は女でありたいと思ふ心が女を墮落させる。女の義務は第一に自分に對して理性ある動物たることであると。要するに彼の女の發聲で最も重きをなす點は婦人の個性の獨立である、婦人の自己に對する義務である。婦人も人なりといふ自覺である。こゝに到つて婦人問題が其の根本的精神的立脚地に達する。其の以後の婦人問題は、みな此の一命題から分派した實行方面の運動である。政治的動搖に連なつて參政權運動、經濟的變動に連なつた職業運動等がすなはちそれに他ならない。

メーリー、ウオールストーンクラフト以後、根本的婦人問題に重きを置いた論著では、十九世紀の中ごろを代表するジョーン、スチュアート、ミルの『婦人の屈從』、また十九世紀末を代表するものではエレン、カイの諸著等がある。ミルは男女の平等といふことに重きを置き、一方が他方よりも下位に立つといふ事は罪惡であるとした。エレン、カイは結婚と戀愛との問題に重きを置き、すべての解決を眞の戀愛の上に求めんとしてゐる。

新しい女と舊い女の定義

婦人問題の根本は、女も亦一個の人間であるといふ個人格の自覺である。眞に此の自覺を身に感じた以後の女が所謂新しい女でなくてはならぬ。女は常に男よりも劣等の地に立つものとしか思ひ得ないあひだの女が舊い女である。女の新舊は此の一點で區劃せられる。此の自覺の有ると無いとが婦人問題の

すべてゞある。言ふまでもなく、個性の獨立を自覺した女が必ずしも悍驕な粗硬な女であるとは限らない。たま〳〵さうした例のあるのは、其れが畢竟個性の解放を得ようとする手段に他ならない場合が多い。新鮮な大自然の中から生れ出る女は、男と對等な個性の獨立の上に立つて、而かも尚一層美しい女性であるかも知れない。むしろさうあるべきを豫想して一切の婦人問題は成り立つてゐる。其の豫期が無かつたら、吾々の婦人運動に對する熱情は消滅して了ふ。吾々の求めるところは、女を男にしようといふのでなく、男と對等の女にしたいといふのである。自然の女にしたいといふのである。では、それは何の爲か、對等の女が一層美しいからである、自然の女が一層美しいからである、言ひかへれば一層多く眞實の愛に適してゐるからである。劣等の女、作爲の女を、求める心は、自分より弱いもの自分に便利なものを欲する心に過ぎない、功利の心である、功利の心の變形した愛に他ならない。吾々は眞の愛を求めんが爲めに對等の女、自然の女を生れ出てさせたいと思ふ。婦人問題は此處から出發しなくてはならない。けれども普通の婦人問題は、女子の個性の獨立といふ事を以て段落とする、參政權問題も、職業問題も、法律問題も、要するに個人格の獨立を確認せしめんとする過程たるに他ならない。言ひかへれば、獨立した個人としての生存權を實行しようとするものに他ならない。

近代文學と新しい女

文學に現はれた婦人問題では、個性の自覺を取り扱つたものが主である。而して是れと附隨して結婚

の問題が多く取り扱はれてゐる。古來のヨーロッパ文學に、强烈な女はギリシャのクリテムネストラ、エレクトラ等を初として屢々描かれてゐるが、個性の自覺以後の女所謂解放せられた女は全く描かれてゐなかつた。それが十九世紀の中ごろ劇にイブセン、小說にメレディス等の作が出て、初めて其の消息を傳へることゝなつた。メレディスの小說には結婚問題が多く出てゐる。例へば其の『十字路のダイアナ』て、有名な才女カロリーン、ノートンをモデルにして、不幸な結婚の後の戀愛が解放せられた女の上に持ち來たす運命を描いた。併し餘り深く婦人問題に觸れたものとは言へない。ただ比較的新しい女が描かれてゐるといふ程度である。新しい女を一層徹底的に描いたイギリスの文學では、近くショーの劇がある。其の『ウォーレン夫人の職業』に出て來るギギーといふ娘は、明に作者が見た個性の解放後の女であるが、之れは專ら其の信ずる所に直進する女、眞理の前には親子の關係をも認めないやうな女になつてゐる。個性の獨立を堅持してる女といふ方面から描かれたものである。

近代の文學で最も重く婦人問題を取扱つたのは、言ふまでもなくイブセンである。彼れの劇には、解放そのものを描いた『人形の家』のノラ解放前の思想と解放後の思想との戰つてゐるやうな『幽靈』のアルヴィング夫人、解放後の婦人に解決をつけたやうな『海の夫人』のエリーダ等がゐる。而して此等のすべてを通じて結婚問題が配合してある。ノラは個性の解放の必要を自覺すると共に、今までの屈從的結婚の無意義であることを主張した。アルヴィング夫人は愛の亡びた頹廢した夫婦の間を姑息に糊塗して置いた爲に悲劇に陷つた。エリーダは身を賣つたやうな結婚から脫出して、全身の自由を與へられたる時

間眞の愛に歸つた。

愛の哲學

『海の夫人』が暗示する概念によれば、眞の結婚は眞の愛の上に成り立ち、眞の愛は男女が全く無條件的對等の地に立つた時に生ずる。斯う言へば問題は簡單に片づいて了ふ。併し眞の問題は其の先にあるのである。男と女とが先づ對等の個人になつた。普通の婦人問題はそこで一段落を告げてよい。けれども女が一旦男と對等の個人として立ち現はれれば、男女の間は人と人との問題になる。人生の一面たる社會我の問題になる。婦人問題が是から先は人生問題に變ずる。男と女といふ獨立した二個人が相對した時、そこに如何なる意義があるか。曰はく、其の必然約束は愛である。男女の對照は、造化が之れによつて人生の解決の一面若しくは全面たる愛の原則を象徴したのである。

戰爭と戀愛とはすべての事物を正化するといふ諺は、暗に人生の解決の兩極を示したものでないか。愛と戰とは人生の二大原則である。假りに現在の社會生活が人と人との戰に初まつたものとすれば、今の道德的關係は其の休戰狀態である妥協狀態である。道德は戰の變形に過ぎない。いつ其の交讓妥協が破れるかも知れない。現に吾々の道德生活は日に〱あらゆる方面から威嚇せられてゐる。戰々兢々、細心鞠躬、以て僅に其の破綻を免れてゐる。而して此の道德生活が一たび破れゝば續くものは、あらゆる意味に於いての戰ひてある。戰ひは征服を豫想し、征服は自己の獨存唯一を豫想する。自己の獨存唯一

を豫想したとき、洞然として吾々の心の奥に見はれるものは孤獨の寂しさである、生に堪へざる苦痛である。斯うして戰は要するに最後の生を欲する心と矛盾する。

此の時遠くに望むものは愛である。而して愛は相互の無條件的合體を豫想する。人と人とが對等の理解と感情とを以て、而かも全存在を擧げて相互の犧牲となる。自覺ある全存在的犧牲の交換である。此れに似たものは道德の世界にも少くない。併しながら此の愛の解決を缺くる所なく人生に標象するものは、獨り兩性の眞の愛である、眞の戀愛である。男と女としての對人關係は、他の何ものよりも眞の愛に到達する事によつて意義を生ずる。ノラは奇蹟を呼んだ、マーテルリンクは之れに運命の神祕を象徵した。要するに婦人問題は人生問題に入つて愛の哲學に歸着せんとするものでないか。

「新しき女」を論ず

永井柳太郎

西洋の婦人は屢〻次の如きことを云ふ。「女子は男子よりも高等なる生物です。聖書に神様は初め草木を造り、次に禽獸を造り、次にアダムを造り、そのアダムの肋骨を以てイヴを造り給うたと書いてあります。如斯く下等なものから追々と高等なものを御造りになつたのだから、その最後に造られた女は生物中最も高等なのです」と。固より如斯きは一時の座興として云ふに過ぎぬのであるけれども、また以て彼等の男子に對する意氣を窺ふことが出來る。然るに我國に於てはこれと正反對で、男子のみならず、女子も亦己れを以て男子より劣等なるものとなし、社會に於ても、また家庭に於ても、男子を過度に尊重し、男子に仕ふるを以て其任として居る。假へば家督の相續にしても、常に男子を以てせしめ、女子は其命を奉ずるに滿足する。即ち男子ならば如何に年少でも、また其上に幾人の姉樣があつても、それを飛越して家督を相續し、その家族に君臨し得るのであるが、女子は男子なき場合の外之をなすことが出來ぬ。夫婦でも其夫たる者が出入する時、必ず其妻は婢僕とゝもに玄關に送迎するに拘らず、其妻の出入に際しては其夫の送迎を要求しない。甚しきは女子自ら自己を以て穢れたる者と稱し、男子に先んじて入浴などをなさゞるを以て婦德と心得て居る。凡そ如斯き實例は我國に於ける日常の生活に充滿して

居るのであるが、男子も之を當然なりとし、女子自らも之を怪しまぬ。吾等は敢て女尊男卑を主張する者でない。然かし今日の我國に於けるが如き男尊女卑には反對せざるを得ぬ。吾等は男尊女尊を主張する。

二

固より吾等は、或新しき女の主張するが如く、男女の能力は無差別であるから、男女は同等であると云ふのではない。本年正月の「青鞜」に於て岩野女史は男女は心理的のみならず、また生理的にも同樣に發達し得べきことを論じて居るが、吾等は男子と女子とは生理的にも、また心理的にも相異なる特質を有することを疑ひ得ない。先づ生理的に考へて見ても、男子は飽迄も「力」の代表者たることを示してゐる。その體格は雄大にして、筋骨逞しく、また腕力の如きも一般に女子を淩ぎ、その成熟すると丶もに此特質が愈〻明かになる。これに反し女子は何處までも「美」の代表者で、その容姿は天使に譬へらる丶赤子を其儘大きくした樣、色鮮かにして肉付好く、その成熟すると丶もに其艶を增す。裸體にする迄もなく、その體格の相違を知ることが出來るのである。或論者は如斯き解釋を否認して、男女は其昔一たびは同等の體力を有したのであつたけれども、その後常に男子が女子を抑壓し、女子を家內に幽閉したる結果、歲月の經過と丶もに體質が變化し、その變化が遺傳して、遂に今日の如く女子は繊弱き者となつたのであると云ふ。然かし吾等は如斯き論者に對して反問せざるを得ぬ。若し男女の體力が同等であつたのなら、何故に何處に於ても女子が男子の爲めに家內に幽閉されたか。これ先天的に女子の體力が男

子のそれに劣り、かの腕力を重んずる野蠻時代に於て優者たる能はず、常に男子のために征服せられたるがためではないか。また幽閉せられて體質が變化し、それが遺傳して女子は虚弱になつたと云ふけれども、若しそれが本統ならば、その變化せる體質は唯り女性の子孫のみに遺傳すべきでなく、また男性の子孫にも遺傳する譯ではないか。男子の體質は男性の子孫のみに遺傳し、女子の體質は女性の子孫のみに遺傳するものにあらざる以上、如斯き議論に由つて男女の體力が同等であつたといふことを立證することは出來ぬ。

如斯く男女は生理的に相異なれるが、また心理的にも同樣ではない。これを知情意の發達より考ふるに、唯り知力に於ては男女ともに同樣なる發達を遂げ得るやうだ。これ過去の歷史と現在の實例とに徵して爭ふ能はずと雖、然かも情意の活動に至つては男女自から其趣を異にして居る。即ち男子は意力の强烈なることに於て女子を凌ぎ、女子は情緒の濃密なることに於て男子に優る。英國の婦人參政論者中には婦人を以て勞働者の味方なりとし、婦人に參政權を與ふれば、勞働問題の解決は容易なるべしと論ずる者があるが、如斯きは偶〻以て女子は男子より一般に同情に富み、かの猛烈なる國際的生存競爭の如きことよりも寧ろ悲慘なる勞働者の涙を拭ふが如き仕事に多大の熱心を有する者なることを自白したのである。だから慈善とか慰問とか、看護とか、育兒とか、其力よりも寧ろ其情を主とする仕事に於ては、女子の方遙かに男子よりも適し、戰爭とか、外交とか、政治とか、治獄とか、其情よりも寧ろ其意力を主とする事業に於ては男子の方遙かに女子を凌ぐ。歷史を見ると女王の治世が男王の治世よりも隆盛で

あつたやうなことがあるけれども、これを以て女子が男子よりも政治に適するといふ證據とすることは出來ぬ。ルイ十四世が或時バルカンディー公爵夫人に向ひ、何故に女王の治世は常に男子のそれよりも隆盛なるかと尋ねた。すると夫人は「女王の治世に於ては、その政權を執る者多く男子なり。男王の治世に於ては、その政權を執る者多く女子なり。これ前者が後者よりも常に隆盛なる所以ならん。」と答へたさうであるが、これ大いに味ふべき言葉て、かのエリザベス女皇の治世の如き、その政令の多數は寵臣の建議に由つて制定されたのである。

如斯く男子と女子とは、その特質が相異つて居る。蓋し男子と女子との性能が無差別なりとせば、何も此世に男子と女子とが竝存する必要はない。男子か、女子か、孰れかの一方てよい筈である。然るに天人を男女に分ちたるは、これ陽電氣に對して陰電氣を起し、雄蘂に配するに雌蘂を以てせるが如く、先天的に分業の約束があるからてある。然かし男子と女子との天職が違つて居ても、それを以て直ちに優劣の論據となすことは出來ない。男子の間に於ても、その天性に依て職業の選擇に相違がある。即ち或者は政治家に適し、或者は詩人に適し、或者は商人に適し、或者は軍人に適す。然かも吾等は其人の職業に依て其人の優劣を判斷する能はざる如く、女子と男子も亦性の異なるに從て或種の職業に對する適否はあるが、これを以て人間としての價値に差別を付することは出來ぬ。假へば男子の戰爭は何故に女子の育兒よりも高等てあるか。女子の看護は何故に男子の政治よりも下等てあるか。此等のことが立證せられざる以上、女子が男子のなす或職業に不適當てあるとしても、それを以て女子が男子より劣等な

るを證明するに足りない。吾等は或新しき女達が男女の同等なることを論ずるがため、强て兩性の差別を無視せんとするを愚なりとする。雖然、兩性の差別を以て直ちに價値の差別を意味するが如くに考ふるは尙愚てある。

三

凡そ文明の程度の低い社會ほど女子を輕蔑する。固より野蠻な社會にも女子を尊重する風習がないてはない。コロンビアのゴワジロ人の如きは、その種族中の女子を非常に尊敬する。從て喧嘩は大抵の場合に女子の仲裁て治まるのてある。だから外國人が此地方に旅行するには女子を同伴する。さうすれば迫害を受けないさうだ。メキシコのダラフマレス人の間に於ても家庭の主權は全く婦人に屬して居る。だから妻君の許可なしに亭主は何物をも賣買をすることが出來ない。又ニウ・メキシコのナコホと云ふ種族ては妻君は一切働かぬ主義てあるのみならず、家具は鍋桶の如きに至る迄、悉く家妻の私有財產となつて居る。これは多少理由のあることだ。即ち野蠻時代には男女の關係も一定せず、男子は女子に子供を產み附けた儘て、その女子を棄てゝしまふ。そこで家族は屢〻母を中心として成立つので、その結果かう云ふ風に女權力が發達したのだ。併かし大體に於て、その文明の劣等なる社會に於ては、女子の地位も亦劣つて居るのてある。

未開時代に於ては腕力の强大なる者が優者てあるから、男子も腕力なき者は奴隷となり、女子も亦勢ひ男子に屈從するのてある。かの希臘に於ても古代の英雄は凡て畜妾して居たらしい。そして女子は一

般に男子よりも劣等なるものとして待遇せられた。結婚の如きも單に市民を製造する一種の作用と認められ、女子はその製造に使用せらるべき器械となつてゐたのである。世人はよくプラトーの自由戀愛といふことを口にするが、これは今日所謂る自由戀愛とは、その意味が相違して居る。即ちプラトーは國家をして結婚に對する絶對の支配權を得せしめ、一定の年齢に達し、一定の體格を有し、一定の品行を備へたる男女を選び、此等の男女をして隨時に相接せしめ、その子供は誰人の子供なるかを知らしめず、凡てこれを國家の子供として國家が養育の任に當らんことを主張したのである。以て戀愛に對する思想が如何に幼稚て、結婚と云ふことが如何に低き意味に解せられて居つたかを想像する事が出來る。從て女子は男子の玩弄物となり、恰かも今日の日本に於ける娼妓の如く "Hetaera" と稱する者が存在して男子は公然之を玩んだのである。レッキーの「歐洲道德史」を見ると、かのペリクリスの如き政治家も、またソックラテスの如き哲學者も、これと交りを結び、公衆の席上て其美を賞讃したと云ふことが記されてある。羅馬に於ては個人主義の發達せるため、結婚は對等なる男女の間に於ける契約てあると云ふやうに解釋されたが、それても家長の權力が重んぜられたから、事實に於て、女子は尙未だ男子の被治者て對等の權力を得なかつた。これは古代の基督敎徒の間に於ても矢張り左樣て、かの使徒ポーロは以弗所人に與へたる書の第五章に於て次の如きことを云うて居る。「妻なるものよ。主に從ふが如く己れの夫に從ふ可し。そは基督が敎會の首なる如く、夫は妻の首なれば也、基督は身の救主なり。されば敎會の基督に從ふ如く、妻も凡ての夫に從ふべし。」勿論ポーロはそれに引續き「夫なるものよ。基督の敎會を愛

し、そのために己れを捨て給ひし如く、汝等も妻を愛すべし」と附加へて居るけれども、然かも夫を以て妻の首と認め、女子を男子と對等に見なかつたことは明白である。

如斯き思想は比較的近世に到るまで歐洲諸國に於ても存在して居つた。かのミルトンの如きも、その「失樂園(パラダイスロスト)」の第五章に於て「神は掟なり。汝は我が物なり。之れ以上を知らざることぞ女の幸福にして又譽れなれ。」と云つて居る。天賦人權說を唱へたルッソーさへも「エミール」第五章に於て「女子は男子を樂ましむる爲めに造られたり。凡て彼等の教育は男子の目的に適ふものなるべし。男子を樂ませ、男子のために使はれ、男子に依りて愛せられ、男子に依りて敬せられ、男子が若き時之を養育し、男子が成長したる時之に嫁し、男子が疲れたる時之を慰め、男子が迷へる時之を諫むることぞ女子の義務なれ。」とかやうに云つて居る。然るに其後佛蘭西を中心として自由、平等の思想が次第に發達し、單に平民が貴族と同等であるのみならず、女子も亦た男子と同等であるといふやうな思想が勃興した。而して平民の間に貴族の特權を剝奪し、これと平等の權利を獲得せんとする運動の起つた如く、女子の間に於ても亦自から男子の專橫に反抗し、男子と對等の地位を得んとする運動が始まつた。如斯にして一方に女子の社會上に於ける地位の改善を要求すると共に、また地方に文學や學術や技藝に於ても男子に劣らざる女流の天才が續出し、智力上に於ける男女が對等なることを實證し得たのである。爰に於てか女子の地位は獨り社會上に於てのみならず、政治上に於ても次第に向上し、フインランドに於ける女子の如きは、唯り國會議員の選擧權のみならず、また國會議員たるべき被選擧權をも有するに至つたのである。

四

翻て今日に於ける我國の女子を見ると、その地位はソクラテス時代に於ける希臘の女子の地位と多く異なつて居らぬ。全國の都會一として遊廓を有せざるなく、國家は一定の代價を以て女子の肉體を賣買することを公認して居る。東京だけの公娼の統計を見ても五千を超えてゐるが、これに品川、新宿、板橋、千住などの如き接續町村に於けるそれを合算すると、約七千に及ぶ。この外尙ほ約四千の藝妓が居るし、それに銘酒屋、料理屋、飲食店、牛乳店、新聞縱覽所、大弓、半弓、揚弓、玉突などに潜伏して居る私娼を加ふれば、毎日どれだけの女子が男子の爲めに侮辱されて居るか分らぬ。然かも新聞紙の如きは此等の侮辱に對して一言の制裁を加へざるのみならず、却つて多數の女子を玩弄したる者を艶福家と稱し、これを羨むが如き何等の不見識ぞ。名前は預かつて置くが、身自から新聞社長たるとゝもに、また政治家たる人にして赤坂に藝者屋を經營せる人さへある。今世に時めける或政治家の如き、かの日糖事件の審問の際、圖らずも待合で藝者と一所に寢たといふことが剔抉された。然るに世間は之を聞て少しも驚かざりしのみならず、彼自らも臆面なく平常は藝者買もせぬことはないが、あの時だけは覺えが御座らぬと云つて居る。堂々たる紳士が醜業婦を玩弄したることを公言して憚らず、社會も亦これを咎めざるは、共に何たる破廉恥ぞや。これ皆女子を以て男子の玩弄物なりと心得るからである。されば結婚に於てもその嫁を見ること醜業婦の如く、倅が夜遊をして困るから嫁を貰つてやつたいふ。これ嫁を以て醜業婦の代用なりと心得るものにあらずして何ぞ。然かも嫁を貰へばそれて夜遊が止むかと云ふ

に決して然らず、嫁を貰つて居りながら、やはり夜遊に出掛ける。英國などでは未婚の青年が血氣の餘、私かに醜業婦に接することはあるけれども、苟しくも結婚し、相愛すべき妻を持てる男子が醜業婦に接することは卑怯と考へられて居る。然るに日本の男子は既婚者でも、未婚者の如く、夜遊をする。如斯く其妻を侮辱しながら、然かも其妻に對してのみ貞操を要求する。日本の刑法は有夫姦を認めて、有婦姦を認めぬが、如斯きは、或意味に於て、この侮辱を公認して居るのではないか。吾等は日本の女子が如斯き侮辱を被りながら、その侮辱を甘受するの勇氣に驚く。或「新しき女」は、男子と對等の權利を要求すと稱して自から銘酒屋に飲み、または遊廓をひやかしたる由。之れ男子と對等の權利を要求するに非ず、男子と對等の不品行を要求するのである。如斯き行爲は男子の不品行を公認したるに等しく、男子の侮辱に裏書するのである。英國でも、嘗て我國の如く公娼を設置せんとして、一八六四年の政府は傳染病法案（コンテーヂアス、ヂスイーズス、アクト）なるものを議會に提出し、軍隊の駐屯せる地方の醜業婦に檢黴を施さんとしたのであるが、かのジョセフイン、バットラー夫人の如き人々が、これを以て女子を侮辱するものとなし、廿有餘年の間大に奮闘して社會の輿論を喚起し、遂にこの法令を撤廢せしめたのである。これを以て此等の婦人に比ぶれば、その相距ること幾何ぞ。彼等が男子の侮辱を意とせず、男子と對等の不品行を以て滿足する間、新しき女の價値も亦知るべしである。

五

遮莫、吾等は彼等の結婚に對する自覺に同情する。彼等の或者は極端なる言論を弄するがため、その

眞意が世人から誤解せられてゐるやうであるが、その先覺者達の告白には大に傾聽すべきものがある。凡そ日本では女子に經濟的獨立がないから、男子に服從しなければ生活が困難である。故に女子に對する生殺與奪の權は、殆んど男子の掌中に在りと云ふべく、女子は不得已して男子に盲從することゝなつて居るのだ。古き人々は屢〻云ふ、「女子は幼き時其父に從ひ、若くして其夫に從ひ、老ては其子に從ふべし」と。これは我日本に於ける女子の運命が、男子に對して如何に奴隷的なるかを示すものである。既に男子に依賴せずんば生活し能はざる以上、女子が男子の好意を迎ふるがため、あらゆる犧牲を拂はんとし、男子も亦此の弱點に乘じ、女子に對してあらゆる欲望を逞うせんとするは、自然の道理である。吾等の知人に或事情のため、三十歲を超ゆるまで結婚の出來ぬ女があつた。然るに其間に兩親が病沒し、此女は家庭に在つて姉及び姉婿の保護を受けなければならぬこととなつた。爰に於てか彼女は非常に自己の獨身を氣にして、遂に自分より二十許も年上の或男の許へ後妻として嫁入り、澤山の繼子を引受けて苦勞して居る。如斯き婦人は全く生活のために、その一身を愛情なき男子に許したものであつて、恰も淫賣婦が生活の必要に驅られて、他人に其肌を許すと多く異る所がない。然るに彼女の友人は彼女の結婚を祝して曰く、まああの人もこれで身の納まりが付て良かつたと。吾等は如斯き夫婦に於て、眞の生ける人間に相應しき戀愛の實現を見得べきや否やを疑ふ。彼女は生活の必要と習慣の壓迫とに依て、その天眞なる精神の欲求を犧牲としたのである。固より人間は生活を相同うし、苦樂を相共にするに從つて、或程度の同情と友愛とを生ずるものであるから、相愛せずして結婚したとしても、或年月の間常に

同棲する時は、相愛の情を生ぜぬこともあるまい。然かし如斯きは全く境遇に强制せられた愛情であつて、かの牛馬が馬子に懷き、犬猫がその主人を慕ふと多く相異らず、生きた人間の生きた戀愛と云ふことは出來ぬのである。僕嘗て箱根山麓に於ける某氏の別莊に避暑す。町遠くして日々の食膳に上すべき魚類を得ること能はず、依て庭園に養鷄して其卵を食ふことにした。然るに暑氣盛んなるとゝもに雌雄殆んど相接せず、日用の鷄卵の缺乏を生じたので、主人は困却の餘、遂に一計を案出し、繩を以て終日その雌雄を縛付けて置た。然かし肉體を縛付けても、精神を縛付けない以上は駄目だ。やはり相接しないので困つたが、今日の日本の女子の嫁入も亦、之に似たりと思ふ。平塚明子は其著「圓窓より」に於て、次のやうなことを述べて居るのは痛快である。

「新しい女は男の利己心の爲に、無恥にされ、奴隷にされ、肉塊にされた如き女の生活に滿足しない。新しい女は男の便宜の爲に作られた、古き道德、法律を破壞しようと願つて居る。」

吾等は日本の女子の間に如斯き自覺の起つたことに同情する。固より過去に於ても彼等の如き自覺を以て從來の習慣を冷笑し、男子の專橫に抵抗せんと試みた女子は在つた。基督敎會に屬する婦人の間には、よほど以前からさういふ自覺を持て居る者があつたやうだ。だから決して平塚女史が始めて先人未だ云はざる處を云ひ、先人未だ知らざりしものを知つた譯ではない。從て吾等は彼等を以て眞に新しき女と呼び得べきや否やを疑ふ。乍併かの靑鞜社の如き一定の團體が出來て、この自覺を實現せんとする運動(ムーブメント)を起したのは正に新らしい。吾等は此新しき運動を歡迎するとゝもに、その成功を祈る。惟ふに

女史等が如斯き運動の必要を感ずるに至つたのは、全く過去に於ける男子の過失に由るので、吾等は頗て忸怩たらざるを得ない。吾等は多數の男子が尚未だこの眞意を解せず、この眞面目なる女性の自覺を滑稽視し、種々の惡評を以て之に臨むを遺憾とする。

六

要するに新らしき女の運動は、從來に於ける女子が唯男子の生活の一方便として使用せられ、また愛玩せらるゝの不合理なるを自覺せるより起つたものである。即ち女子も人間である以上は、また一箇の人間として實現すべき女子自らの目的を以て居る。從て女子も亦人の妻たり母たる前、先づ人間たる自覺を以て、その個性を陶冶し、その人格を完成するに努力しなければならぬ、だから個性の權威を無視し、人格の尊嚴を傷くる樣な結婚は無意義であると云ふのである。併し「新しき女」は決して結婚そのものを絕對に否認しては居らぬ。現に平塚女史は、「私共は何も敢て總ての婦人に向つて獨身主義を主張する者ではありません」と云つて居る。唯從來の如く如何なる女子でも、その生涯の中必ず一度は誰かの妻にならなければならぬ、妻となる以外に女子の爲すべき事業は存在しないとした習慣を疑つて居るだけだ。これは如何にも當然のことて、吾等は世間の人達が之を了解し能はざることを却て了解し能はぬ。甚しきは平塚女史が獨身て居るのは、生理的に不具者だからである。彼女は不具者としての自己の生活を完全なる女子に適用せんとして居るなどゝいふ。吾等は如斯きことをいふ人々に尋ねたい。かのワシントン、アーピングは未だ結婚に至らざる前、その相約したメリーといふ少女に死別れ、悲歎の餘

遂に何人とも結婚せず、亡きメリーの面影を偲びて、終生を獨身て暮した。此アーピングと、自分が何等の愛情を有せざるに拘らず、父兄に對する義理からして心無く他人に其身を許す日本の婦人と孰れが高尙であるか。又シャロット、ブロンテー女史の「ゼーン、アイル物語」を見よ。その主人公たるゼーンは、白耳義に留學せる時、知らずして妻ある敎授に戀し、相愛を誓ふたのであるが、然かも一度び其敎授に妻あることを發見するや、涙を呑んで其家を辭し、後年故あつて敎授が獨身となりし迄、斷じて何人にも其身を許さなかつた。このゼーシと生活のため如何なる男子に一身を委ぬることをも意とせざる日本の女子と孰れが立派であるか。吾等の知人の中、年既に四十に近きに拘らず、尙未だ獨身の淑女がゐる。彼女は自己の理想に遠き男子に嫁して終生煩悶の中に送るよりも、寧ろ理想の男子を得る能はずんば、獨身者として自由に奮鬪するに如かずと云つて居る。如斯き自信を以て獨身て居る婦人と、何等の分別なくして何等の人格なき男子に嫁し、一生を煩悶の中に終る女子と何れが賢明であるか。吾等は平塚女史の肉體が完全であるか不具であるかを知らぬけれども、人間には生理上の理由以外に於て獨身の生活を送らねばならぬ場合は澤山ある。獨身とさへ云へば、直ちに不具を連想する、そんな考へて結婚をするから、結婚を冷笑する婦人が出來るのだ。要するに結婚なるものは方便であつて目的ではない。結婚は自巳の人格を完成し、生活の意義を全くする一種の手段に過ぎないのであるから、苟も結婚が充實せる生活を傷くるが如き危險ある場合、人間の大目的のため、その結婚を棄つることあるは當然である。而して「新しき女」は如斯き場合に於ける結婚に反對し、時に離婚することあるは、人間の權利であ

ると云ふのであるが、それは妄想でないと思ふ。

七

然かし吾等は「新しき女」に尋ねたい。「新しき女」は結婚よりも獨身を選ぶことを意義ありと認むる場合があつても、原則として結婚を欲するは人間の至情なることを認めぬであらうか。固より古き人達が女子は一生の中誰とでも一度は結婚すべきものだなどゝ云ふのは無意味であるけれども、然かも爰に「新しき女」が理想とするやうな要件を具備した男子があれば、「新しき女」は其男と相愛し、相扶けて生活の意義を完うし得んことを欲せぬであらうか。平塚女史は其著「圓窓より」に於て「婦人は果して結婚すべきものかと云ふことが已に久しき疑問で御座います。……生殖事業を外にして女のなすべき事業はないであらうか。……私共はもうこんなことを信ずることは出來なくなつて居ます。」と云つて居るが、如何にも結婚が單に生殖事業を意味するに過ぎぬとすれば、さう云へるかも知れぬ。然かし眞正の結婚は、そんな職業的なものでもあるまい。もつと深刻な性の精神的及び肉體的欲求から發して居る。この欲求を滿足せしめ得べき對手を發見したる時、尙ほ「新しき女」は結婚することを欲しないか、それを質問したいのである。テニスンの或詩に次のやうな言葉がある。

"Either sex alone
Is half itself, and in *true* marriage lies
Nor equal nor unequal: each fulfils

Defect in each, and always thought in thought,
Purpose in purpose,
Will in will, they grow."

實に如斯く人間は、異性それ自身のみにては未だ眞正の人とは謂へない。男と云ひ女と云ふのも、これ一に半人に過ぎないのである。爰に於て人は遂に此世の何處かに於て、その理想の半人を求め、これと相共に理想的なる人生の意義を盡さんとする。誰でも一定の年齡に達し、自己の何物たるかを考へ、その終生の幸福に思ひ及ぶ時、必ずや心中に一種云ひ難き寂寞を感じて、己が半人の未だ具はらざるを悲しむ。此情が即ち戀愛となるのである。惟ふに「新しき女」と雖、又た如斯き寂寞を感ずるであらう。既に如斯き寂寞を感ずる以上、戀愛の發生を豫防することは出來まい。既に戀愛の發生する以上、結婚を欲せざることが出來ようか。それ「人」と云ふ字を見よ。それは二本の棒が寄り集つて成つて居る。長い棒は短い棒に寄り懸り、短い棒は長い棒を支へて立つて居る。男女の關係また如斯く、相合して人間の意義を全うせんとする天性があるのである。吾等は此點に於て「新しき女」が世間をして誤解せしめざらんことを希望する。

八

平塚女史は「同窓より」の緒言に於て次のやうなことを云つてゐる。

「私は一切の舊きものゝ敵である。

けれどもそれは必ずしも不善なるが故でない。

舊きものには生命がないからだ。

實に舊きものはすでにすでに「死」の所有に歸したものだからだ。」

吾等は「新しき女」の運動に同情するが故、「新しき女」より如斯き言葉を聞くことを欲しない。聖書の箴言に、「義しき道には生命あり。その道筋に亡びなし」といふ句があるが、如何にも如斯く舊くても自然の大法を奉じたる積善の生活には生命がある。如何に新しくとも自然の大法に背きたる不善の生活に於て何處にか生命あらん。それ昨日新らしかりしものも、今日は既に古きものである。今日新しきものも、明日は又古きものとなるのである。若し平塚女史の如き論法を以てすれば、明日新しき女の主張に反對するやうな第二の主張が起れば、女史は其新しき主張に味方して今日の主張を敵としなければならぬ。吾等は「新しき女」が只新しきものを求むるよりも、人情の自然を重んじ、正義なるものを追求せんことを要求したい。何となれば正義なるものにこそ永久の生命があるからである。世間の評判や區々たる人に對する反感や、自分の境遇に對する不平や、そんなものに支配せられず、靜かに天を相手として神代の昔より變ることなく、此天地に充滿せる眞理を憧憬し、そこに永久の生命を求めんことを努めよ。「青鞜」第三卷第一號の附錄に、堀保子と云ふ人が、或人の新しき戀愛觀とも云ふべきものを紹介して〔其人の申しますには、若い男女が相愛の仲となれば、別々に住つてゐて、獨立の生活をなし、そして尙若し他にも相愛の男か女が出來れば、それ等の人とも遠慮なく戀し合ひ、そして若し愛が醒めれば

何時でもその關係を離れると云ふ風になれば理想的なんださうて御座います。」と云つて居る。如何に新らしくても、如斯き部分的な、そして一時的な戀の生活に果して永久の生命があらうか。テニソンは"One can never love twice." と謠つて居るが、實に眞正なる戀愛は全心的な、そして永久的なもので、一たび經驗したならば決して消滅せず、如何に誘惑せられても、これを引戻す程、深い印象を與ふるものではあるまいか。吾等は古き一夫一婦の結婚に却て永久の生命があり、如何に新らしくても、人間の至情に悖り、天地の大法に背くものは生命がないと思ふ。

九

次に「新しき女は」是非とも經濟的獨立の覺悟がなくてはならぬ。今日のやうに女子が男子の生産したるものを消費することの外、他に何等の能力なく、男子を離れて獨立の生活を營み難き有樣では、啻に男子の尊敬を得る能はざるのみならず、また其主張のため最後に至る迄戰ふことは困難である、さればこそ歐米に於ても婦人の精神的獨立の要求起ると共に、直ちに經濟的獨立の方法を講ずるに至つたのである。英國に於ては女子の人口が男子のそれに比して約百萬を超え、生活の必要上已むを得ずそこに至つたのでもあらうが、婦人の生産業に從事せるものは、十五歳以上の者だけでも約四百萬人に及び、殆んど全數の三割四分を占めて居る。婦人參政權運動に從事せる者の如きは、殆んど八割まで一定の職業に從事せるか、若くは獨立の財産を持つて居る女子である。獨逸に於ても婦人運動の起ると共に、"Fra-uenarbeitschulen" 即ち女子職業學校なるものが到る處に設立せられた。從來獨逸の女は三ツのK、即

ち Kirche(教會)、Kleid(衣服)、Küche(料理)に熱心であれば、それで一人前であると云ふやうに、家庭的の教育を受けて居つたのであるが、其後次第に職業的教育を受けて、今日では政治家、裁判官、牧師等の外、殆んどあらゆる階級に進入して男子と其力を爭つて居る。如斯く生活の基礎が定まつてこそ、如何に高遠なる理想に向つても奮闘することが出來るのである。近頃の新聞で見ると靑鞜社の中野初子といふ人は、麴町區の某所で足袋屋を初めたと云ふことが書いてあつた。かういふ風に各自が經濟上に獨立して、獨立の人間として男子と對等の地位に立ち、飽く迄も其主義を持して下らざるに至る時は、男子の女子に對する輕蔑も次第に薄らぐべく、また初めて根柢ある運動として永續せしむることが出來るのである。

"Go, worker of the public weal;
When Knaves combine, and plot, and plan,
Assert the dignity of man,
Teach the dishonest heart's to fell."

— Anon —

醫家より見たる婦人問題

ドクトル　富士川　游

婦人問題とは、社會に於ける婦人の地位を如何にすべきかといふことである、而して、この問題を解決せんがために、現はれたのが所謂婦人運動（Frauenbewegung）である。婦人運動が始まつたのは十八世紀の終りの頃て、男子と女子とは公私の生活にありて互に同等の地位を占むべきものであるといふ主張の下に、その運動は開始せられ、一時は隨分活氣を呈したけれども、幾もなく、その運動は下火となつた、然るに、一千八百三十年頃から、再び婦人運動の火の手が上がり、この度は婦人解放（Frauenemanzipation）といふ名稱が用ゐられ、歐洲諸國に、その運動が始まつたのである。最近十五年間に於ける婦人運動は實に目ざましいもので、婦人は政治に、法律に、學術に、職業に、すべて公と私との生活にありて、男子と同等の地位を占めんことを期して居る。

この婦人運動は勞働問題と共に、輓近の社會問題の中て、これを解決することが至難のものである、故に、余は、茲に、この運動の全體につきて、評論することを止め、身體の上から見て、婦人問題が、如何に處置せらるべきものであるかといふことを說いて見たいのてある。

婦人運動は、その始の間は隨分極端て、擧動も隨分亂暴てあつたが、漸次に、不穩當の點は少なくなり、又その主張の形式も次第次第に移り變つて來て、今日ては眞面目にこれを聽き取るだけの價値はあ

る。大體に於て、今日の婦人解放論は、女子に對する現在の所見及び狀態を一變しようとするので、その範圍は(イ)敎育(ロ)職業(ハ)婚姻及び家庭(ニ)公共生活の四方面に涉り、いづれも、男子と同等ならんことを期するのである。婦人運動の初期にありては、何でもかでも男子と競爭する、男子が遣ることを女子が遣ることの出來ぬ譯はないと云ふやうな勢であつたが、今日ではさうは言はぬ、今日の婦人解放論では、女子の方が男子よりも上手で又男子よりも成功し易い方面に向つて、女子を發展せしめようといふのである。故に、輓近の婦人解放論は、一概に排斥すべきものではなく、これを批評するには十分に愼重の態度を取らねばならぬ。

* * * * *

男子と女子との身體に著しい差別があることは言ふまでもないことである。男子と女子との身體の差異は性徵と名つくべきもので、これには一次性性徵と二次性性徵との二類がある、一次性性徵といふのは男女に固有なる生殖腺で、これは胎生の第二ヶ月に判然と男女に區別せらるゝものである。二次性性徵といふのは生殖腺を除きたる外の、男女に於ける身體の標徵で、これは身體の內と外とに涉りて著しい差異が認めらるるのであるが、その大略を擧げて言ふと、先づ次の通である。

男子性徵	女子性徵
體重、身長の大なること	體重、身長の小なること
肩幅廣きこと	肩幅狹きこと

骨盤狹きこと
身體角ばりて筋肉強く發育す
頭蓋骨の發育につきて、顏面部は腦髓部に勝つ
鬚髭あり
音聲低鈍
全身毛髮發生甚し
乳房發育著しからず

骨盤廣きこと
身體軟にして丸味を帶ぶ
頭蓋骨の發育につきて、腦髓部は顏面部に勝つ
頭髮長し
音聲清朗
全身毛髮發生少なし
乳房發育著甚

右の通りに男子と女子とにありて、二次性性徵の差異がある。その差異は何がために現はれたかと云ふと、全く文明の發展に伴なひて、男子は個性的性格を發揮し、女子は種屬的性格を保存するために、此の如き、身體の差異を現はすに至つたと云ふことは疑ふべからざる次第である。されば、男子と女子との身體に、性徵の相違せるものがあるのは偶然のことでなく、又一朝一夕に現はれて來たものでなく、既往數千年來の長き間に現はれたる適應(Anpassung)の現象の一部に外ならぬのであるから、これには重大の意味がある。文化史の上から見ると、女子といふものは、その雌雄淘汰の方面にては男子よりも重要の部分を占めて居る、即ち種屬の保存といふことは主に女子の任務で、その身體は全く種屬を保存するために必要なる部分を十分に發達せしめて居るのである。精神の方面にありても、亦同様である。

歴史前の人類の男子と女子とを比較するに、腦髓の量には左ほど著明の差異は無かつたが、しかし、その智力と、一定の性格とが、男子と女子とに相違ありしことは、高等動物にて認めらるゝ通てあつたものと思はれる、それが、その後の文明生活と、精神上動作との結果て、女子は經濟上、男子に隷屬することとなつた。即ち外に出てて生存競爭のために强悍の仕事をすることをなさず、内に居て、家内の業務に從ふことが女子の任となつたから、幾千といふ世代を經た後に、次第に男子と女子との身體に差異が現はれ、就中、生存競爭の要具たる腦髓に著しい區別が出來るやうになつたのである。此の如くにして、男子は生存競爭の難事に其力を盡すことを要するがために智力の發達を必要とし、從て腦髓の發育の盛なるを致せるが、女子は之に反して、雌雄間競爭上、平衡を持せんがために女子性の二次性徴を著しく發達せしむること、殊に感情生活の發育を著しくすることを必要としたのである。されば、男子が智力に於てまさり、女子が感情に於てまさるのは、人類の發展に於て、必要缺くべからざるもので、女子が感情生活に於て、男子に優されることは、女子が社會に於て重要の地位を占むるところの要素てある。智力が生存競爭に必要なることは勿論であるが、これを感情生活の發展によりて得るところの歡情に比較して優されりとはすべからず、人類の目的とするところの幸福は智力の冷なる作用にはあらずして、感情生活の暖き作用にて得らるゝものである。故に、女子は、この點に於て、男子とは全くその方面を異にして、しかも、男子に些も劣らざるところの任務を有するものである。

又、生物學上の見地から言へば、自然的の職業は自然的の「オルガンサチオン」に由りて定まるものて、女子の自然的職業は、この點より言へば、婚姻生活に加入して、男子と調和的の生活をなすことてある。率直に言へば、女子の任務は男子と結合して、子供を產生すべきてある、これによりて女子がその家族と國家と、文明とに貢獻することは至大てあり、且つ、これによりて女子がこの世に存在するの意義が明になるのてある。然るに、婦人解放論の所論が世に行はれて、女子が感情生活の發達を求むることなく、男子と同じく智力の進步を欲し、またその子供を產生するの任務を放棄することありとすれば、これは生物學上の規則を破壞するものてある。故に、婦人解放論を論ずるに方りては、先づ、身體の上から見て、この點に留意することが肝腎てある。

女子が、男子と同じく、智力の進步を欲するといふことは、身體の上から見て、不相應のことてあるといふことは、二三大家の既に唱道して居るところてあるが、近頃死亡したる獨逸の醫家メーピウス氏は、その生前に於て、『女子の生理的精神薄弱につきて』と題する一書を著はして、女子の智力が、生理的に薄弱てあるといふことを說いて居る。メーピウス氏の說に據ると、身體の上から見ると、女子は小供と男子大人との間に位するものてある（性徵を除きて）、精神の上から見ても、大抵同樣てある、子供ては頭は、男子大人に比して、比較的大てあるが、女子ては頭は男子大人に比して、絕對的にも比較的にも共に小てある、リウヂングゲル氏の研究に據ると、腦の廻轉溝が初生兒の女にありては、男に於けるよりも構造が單一て、廻轉が少ない、大人の女子でも廻轉が男子の腦に於けるよりも少ないと云ふこと

は證明せられて居る、詰まるところ、精神生活上必要の具たる腦髓の重要部分が、女子にありては男子よりも發育が不良である、さうしてこの差異は出生の當時から已に現はれて居るといふことに歸する。

メービウス氏は斯の如き、解剖學上の事實より、女子の精神能力を研究し始め、進んで心理學上の研究に從事し、詳細に之を叙述したる後に、女子の精神上の能力は、男子に比して大に劣つて居るといふことを結論して居る。もとより覺官の方は、その本態に於て男子と女子とに、差別があるのではないが、女子にありてはこれを興奮せしむるに、强い刺戟が必要である、運動の方は男子と女子とにありて本態が相違して居る、それから、女子にありては本能が男子に於けるより重要の作用をなして居るが、その本能は動物のに似ることが甚しい、女子にありては批評力が乏しく、その道德は感情道德で、概念道德は殆ど認められないと言つて、メービウス氏は女子の精神薄弱を指定して居る。

メービウス氏は、此の如く女子の生理的精神薄弱を指摘して、女子解放論者の說を不條理なりと論じたのであるが、これに對して、婦人解放論者は口を極めてメービウス氏の說を辯駁して居る。婦人解放論者とても、女子の精神作用につきて、メービウス氏の說を根本的に破壞することは出來ぬと見えて、要するに、メービウス氏の說の如くなれば、女子は唯々健康を保つて居れば宜しい、敎育するには及ばぬといふことになるが、これは不條理の甚しきものであると論ずるに過ぎぬのである。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊　　＊

メービウス氏が、女子の身體及び精神を以て、男子に劣れりとするは事實に本づきたる說で、獨斷の

說を以てこれに對し、理を非に枉ぐることは出來ぬのである。然れども、女子の身體と精神とが此の如く男子に比して、大小輕重に於て、男子の下にあればとて、女子は男子に劣れりとはすべからず、男子と女子と、その身體に於て、互に差異あるは、各その任務を異にするがためである。男子はその身體の標徵より言へば、生存競爭の任務を果たすやうに出來て居り、女子は種屬の保存の任務を果たすやうに出來て居るのである。

然るに、婦人解放論の說のやうに、女子にありて、感情生活の發達を制止するといふことは實に危險の次第である。これまで男子と女子との分業に方りて、感情生活を發達せしむるの任務は女子に屬し、生存競爭の狂瀾怒濤のために妨げらるゝことなく、世代を重ぬるに從ひて益〻これを發達せしめて遂にこれを遺傳するやうになつたのである。これに反して、男子の感情は、生存競爭のために常に敵と戰ふが故に、漸く鈍麻衰弱するのである。僅に母親からの遺傳によりて男子は感情生活を保つことが出來るのであるから、女子がこの方面に於て人類の文明に貢することの大なるは最も注意すべき點である。尙ほ高等の文明的敎育及び趣味の發達も、女子の感情生活の發達に本づくものである。然るに、若し、女子にして、進みて生存競爭の戰爭の範圍內に入り、男子の能才と競爭することとなれば、女子の感情生活は、こゝに一大機動を起すものである。

生存競爭場裏では、感情の精美なることは却て結果を惡るくするの不利があるから、この性格の發達は寧ろ望ましからぬことである、能才の競爭にては理性が武器の第一であるから、女子にしてこの競爭

に加はるには理性の發達をつとめ、これに反して精美の感情を養成することを抑止するやうになるのである。それが世代を重ねて段々に傳はりて、到頭女子にありて感情生活の發達を見ることが出來ぬやうになるの危險が現はるゝのである。そればかりでなく、生物學上から見て危險とすべきことは、斯の如き場合にありて、能才の家族の女子系が死滅するのである。ライブマイル氏の研究に據ると、能才の家族の男子系は早晩死滅し、女子は之に反して長く生存して能才の素因を保ち、以て文明人種の仕事を容易ならしむるものであるが、女子が從來の範圍を超えて、生存競爭の戰場內に入り、男子と競爭するときは、その腦力を過勞せしむるがために、男子と同じくその害を受けて死滅するのである。

ライブマイル氏等は又、腦の過勞が生殖腺の力を減殺することを證明したが、この事項は、女子にありては殊に著しく、これがために、能才の女子は結婚せぬか又は結婚してもその子供が弱いか又は子供が生れぬ等の害を現はすに至るのである。

* * * * * *

婦人解放論を主張する方も、これを非難する方も、共に女子を男子と分離し、女子を以て一個獨立の生體として、議論するの傾向がある、これは不條理の甚しきものといはねばならぬ。女子は男子と共に有機社會の一分子をなすべきもので、これを個々に分離しては其生存を全くすべきものではないのである。故に、女子の問題を議するには、必ず、これを男子と合せて、有機社會の一分子として、その價値を評價せねばならぬ。男子が女子に優越して居るとかいふ場合は、個々特定の場合で、女子が有機社會

の一分子をなす上に於て、男子に比して優劣のないことは言ふまでもないことである。而して、男子と女子とに於て、その身體及び精神の仕事に差異のあるは、兩者が相結合して有機社會の一分子を形成するにつきての必要に基づくものであるから、この生物學上の原則に背いて、女子を男子と同等のものとするの企圖は、人類の將來に、危險のものであると言はねばならぬ。但し、女子の社會に於ける地位は目下にありては不都合と認むべき點が少なくない、この事につきては、婦人解放論者の說に傾聽すべきものがある。固より女子は無學でよろしいとは言はれぬ、一定度の高等教育を施すことは必要とせねばならぬ。職業につきても同樣である。然れども、これまで通りの男女の任務の規律を破棄して、女子が男子と同じく、生存競爭の活劇を演ずるといふことは、身體の上から見て、重大の危險があるといふことを、呉々も切言せねばならぬ。而して、これは空論でないといふことを斷つて置きたい。

日本婦人の行くべき道

黑岩周六

『日本の女の行く可き道は如何』と云ふ貴社の問は、斯く行く方が善いと云ふ道であるか、將た善惡に拘はらず斯く成り行くであらうと云ふ止むを得ざる道筋であるか、余は聊か迷ふけれど、善にも惡にも社會の大勢に餘義なくせられて、豫期せざる方へ推向けらるゝのが男女ともに然りであるから、余は止むを得ざる道筋を想像する。

此點から云ふと日本の女でも、日本以外の女でも、甚だしき相違は無いであらう。一方には社會の經濟的事情が女をして、自活の職業を求めねば成らぬ樣に壓迫する。又一方には女自身の欲求が近代の物質的贅澤の要求と相助けて、自分自身の自由に使ひ得る金錢が無くては不滿を感ずることが甚だしいと云ふ事情のトへ追込まるゝ。妻を娶る男子も、成る可くは收入のある樣な女を求め度いと尋ねる。其れに婦人の所謂る自覺が、餘り男子に奴隷の如く將た玩弄品の如く取扱はるることを好まぬに至らしむるから　其點からも自個獨立の收入のあることを必要と感ずる。

此樣な大勢に驅られて、婦人は段々に家庭以外に出て、職業を求めざるを得ぬ次第とは成るであらう。

今までの男子の希望を云へば、成る可く女を家庭の内へ縛り附け、臺所本位の從順な者として置き度いて有らう。現に良妻賢母など云ふ我が敎育の方針も實は臺所本位から割出されて居る。けれど社會の大勢には勝つことが出來ぬ。自然自然に、臺所本位が工場本位と爲り、良妻賢母主義は强妻勇母主義とか、錢妻金母主義とか云ふ樣な者に變ずるで有らう。

之を逃れ難い大勢であると知る以上は此大勢に從ひ

つゝ成る可く其の變化を順潮に導き、途中に悲劇の少い樣に勉むるのが婦人問題の一切であらうと余は信ずる。

西洋先進國の婦人は此の大勢に從つて日本の婦人よりは一歩先きに進んで居るが、英國の選擧權婦人などは、經世家が善導の工夫を誤り、其れが爲めに途中の悲劇を釀成した實例では有るまいか。今の所で日本の婦人は未だ此樣な方面へは向はぬ樣であるけれど、其代り是よりも更に惡性の悲劇が彼等の前途に待ちつゝあるのでは無からうか。

余の見る所では日本婦人の缺點は、未だ男子と對抗すべき、中性の氣質を養ひ得て居らぬ點に在る。中性の氣質とは我れは女性でも無い、男性でも無い單に此社會に於ける一の勤務者であると云ふ心持である。

日本の婦人は今まで女らしく〳〵と勉めて來た。けれど此の女らしくと云ふことは、自活の爲めに職業に從事するには不適當である。苟くも身を何等かの職業界に投ずる以上は、單に勤務者である。男らしくても女らしくても無く、單に「勤務者」らしくせねば成らぬ。是れが即ち中性の氣分である。所が、幾百千年來女らしくのみ仕立られて來た日本の婦人には、何の樣な場合にも、女らしき身振を示すとは出來るけれど、女らしくも男らしくも無い勤務者らしい中性の身振も心振も出來難い。彼等は男を見れば、直に是れは異性である。是れは男であると感ずる。是れが危險の本である。

男を見て彼れは異性であると感ずることは、彼れは我が爲めに亭主と爲り得る動物であると感ずることである。從て我れは妻と爲り得る動物であるとの樣子が何處かに見える。是れが爲めには、勤務者に不似合なる衣服も着けたくなる。笑顔も示し度くなる。愛嬌の一つも振播き度くなる。是れが爲めに誤解も招き、嫉妬も出來、競爭も出來、所謂る女々しい一切の缺點が現はれて、勤務的に云へば、失敗とも成り墮落ともなり、樣々の悲劇が演ぜらるゝのである。

此點を救ふには、女が絕對の貞操觀を持たねばならぬ。絕對の貞操觀とは「生涯夫を持たぬ」と云ふ獨身

主義てある。「貞女は兩夫に見えず」と云ふ今までの貞操觀ては既に一夫だけには見ゆると云ふ欲望を持て居るのてあるから、一は萬物の始めと云ふ如く、其の弛みが萬事の弛みの始めと爲るを免れぬ。

女の獨身主義即ち絕對の貞操は人倫に負くのてある。女が獨身を守り通せば人種が絕滅するのてあると云ふ人も有る。其れは無論の事てあらう。氣の毒ながら女と云ふ者は結婚を廢して人種を絕滅させるか、將た結婚して男の奴隷になるかと云ふ大なるデレンマの中に置かれて有るのてある。即ち女は兩者の一を選ばねば成らぬ。今までは結婚即ち奴隷と云ふ一方を選んて來た。其のお蔭て人種は繼續されて來た。今は社會の大勢が他方を選べと强ひて居る。然るに女自身は兩方を選び度いと要望して居る。結婚も廢せず、男の奴隷にも成らずと云ふのてある。此事自身が即ち矛盾てあり悲劇の本てある。

余の意見は實に邪慳てある。女に對して、汝は社會の大勢に從ひ、人種を絕滅する方を選べと云ふのてある。けれど大なる邪慳の中には大なる慈悲が潜んて居るては有るまいか。

眞に女が獨身主義を立て貫し、全く社會に人種が絕滅すると云ふ懼れの有る迄に强頑ならば、如何にして男子が威張て居ることが出來る者ぞ。男子は如何なる條件にても服して女の膝下に降服する。玆に初めて、女が男を奴隷にする境遇が生ずるては無いか。

女は絕對の貞操と云ふ事に於て、確實に男全體を奴隷にする武器を持て居る。然るに此の天與の大利益を粗末にする爲め、社會ありて以來、男子の奴隷と爲り今日に及んても大なる悲劇無しには此境遇を脫し得ねては無いか。

けれど、女銘々が、自分一人て絕對の貞操を守つた

とて、男子は他の女を迎へることが出來るから何の甲斐も無いと云ふ人も有らう。否、今の女自らが總て斯樣に信じて居る、是れが即ち絶對的貞操が重んぜられぬ所以である。併し能く考へて見れば、貞操の高い女だけ多量に男子の尊敬を得ることが出來る。之に反し貞操の安い女だけ男に輕ぜられ、奴隷視せられる。此點から見れば、自分一人て絶對貞操を守れば自分一人だけ奴隷境を免るゝことが出來る。萬人が之を守れば萬人が男子の奴隷たることを免れて、萬人が却て男子を奴隷にすることが出來る。故に余の信ずる今後の女の覺悟は、自個一人の貞操を固守しつゝ、成る可く他の女の貞操を監視し、他の女をして自個と同樣に貞操の堅固なる者たらしむる樣に勉むべきて有らう。

然るに今の婦人社會の先覺者の中には、男の貞操を八かましく云ひ、有妻の男子が他の女子に通ずることを法律的有罪とせねば婦人の地位は高まらぬなどと言續けて居る方もある。余は敢て斯かる先覺婦人の熱心なる試みを冷却せしめ度く思ふては無いけれど之を眞の有效なる手段であるとは思はぬ。眞に男女の間を清潔にし度いと思はゞ、婦人自ら婦人を監視するが、本統の手段である。婦人の中に有妻の男子に對してさへも貞操を許す樣な無貞操の女が多いからこそ、男子が猥りがましくなるては無いか、男子は決して弛みの無い婦人を挑む者ては無い。

婦人自らの心の中に、我は女であるとの感じが有つて、中性的の自覺が無いが爲めに、從て男を見れば、彼れは我れを愛し得る者であると感じ、其の心が自然に容貌の外にまて現はるゝが爲めに、男子の挑發を招くのである。

余自ら男てありながら、斯くも女にのみ貞操の責任を負はしむるは甚だ卑怯にも見えやうけれど、余は自分の意見を述る際には一の勤務者てあつて、全く中性の感覺を持して居る。余の意見を聞く人が如何に思はふとても余の心へは反響せぬ。是れが公明なる眞理て

あると信ずる。

孰れにしても、一方からは社會の大勢が婦人を驅りて中性の地位へ推出しつゝあるに、婦人自らが中性の覺悟を持し得ぬ樣では其事自らが既に一の悲劇であるのだ。思ふに日本の婦人は其れほど不聰明では無い。今日以後は段々と此の大勢に適應することを知り、自個保存と云ふ天然の大則に從て、幾分づゝか中性の方へ傾き行くで有らう。余は如何に考へても、女らしく女らしくと云ふ今までの婦人の態度が此後の社會へまで支へ行かれ得べしとは思はぬ。段々と日本の女は西洋の女の樣に成り行き、家庭より工場へ出て、自個の力を以て自個の經濟的獨立を支へんと勉むることに至る可しと信ずる。

けれど少くも中性的の覺悟が無ければ經濟的の獨立は得られぬ。中性的の覺悟が有れば、知識も進む、身體も强健にして男と競爭することも出來る。之れが爲めには老孃も生ずるで有らう、けれど日本の人種が絶滅するまでに婦人が主義を守り得る時代は決して來ぬ。其の恐れは決して無い。

若し其恐れの有る時代が來たならば、其れこそ日本婦人の爲めに萬歲である。婦人が大勝利の聲を上げて自ら祝す可き時である。男子の總てが婦人の軍門に降り、如何なる條件にも服從しますと平身低頭する時である。即ち女が今までの奴隷境から脫して男を奴隷境に立たしめ得る時である。

極點は常に中和を持來る。眞に女が絶對貞操觀に殉死する心を生ずれば、丁度男子も奴隷と爲らず女子も奴隷と爲らず、眞に雙方とも我慢の出來る平均の有樣が出て來るで有らう。男女は互ひに相助く可き者であると學者は云ふけれど、余の見る所では相克する者である。其の關係が相互的(コンプリメンタリー)では無く、相反的(アンタゴニスチック)である。男女の間には武裝したる平和の外には決して平和は來ぬ。(完)

經濟上より觀たる婦人問題

松山忠二郎

男女同權論も隨分古い問題である。然し今日でもまだ解決されない問題である。何故なれば女が男と同じやうに今日待遇されてゐないからである。例へば多くの國の法律て、女は嫁せば民法上無能力者と認められて居る。又姦通の場合にも男は何ともないが女は罰せらるゝ。それから殊に最近に世界の問題となつて居る如く男には選擧權があつて女には之が無い。即ち女は今日でも社會上、法律上、政治上總て不對等の待遇を受けて居るのである。其外女子の男子丈けの待遇を受け居てない例は幾らでもあるだらう。現に日本でも女は高等官になれないとか、辯護士になれないとかいふやうな偏頗がある。そこで女の方が段々進んで來れば男子と同じ待遇を得て、此等の不權衡を矯正しようと希望するのは當然てある。そこで婦人問題は起るのである。

然らば女子は何故に男子と同じ丈けの待遇を受くることが出來ないのであるか。動もすれば女子は男子の從屬者のやうに扱はれて居るのは何故てあるか。女子は總體に男子に比して智力が劣つて居るかも知れない。が、中には男子も及ばない如き人が澤山あるのである。女の文豪もあれば美術家もある。悉くの婦人が智力に於て男子に劣るとはいへないのである。然らば體力はどうであるか。之も總體からいへば男子に及ばないであらう。が中にはなか／＼エライ婦人も澤山あるのであつて、古い例であるが、彼の巴御前とか板額とか、又神功皇后の如き、佛蘭西のヂアン・ダークの如き、何れも男優りの婦人てあつて、婦人は必らず男子よりも體力に於てさへ劣つて居るとはいはれぬ。又商

店の管理をしたり、事業を經營したりするのに、男優りの婦人が到る處にあるのである。そして此商店を經營し、事業を管理する婦人は、その下に立派な男子を使用して居るのである。男子の方が女子に使はれてゐるのである。然るに使はれて居る男子の方が社會上にも政治上にも若くは法律上にも一人前の權利を認められてゐながら、使ふ方の婦人は夫れ丈けの待遇を受けない。甚しきは無能力者と見られるのである。婦人が現在の待遇に滿足しないのは當然である。

然らば何故に現在のやうな不理窟な狀態になつたのであるかといへば、之は不理窟でも何でもないのであつて、矢張り相當の理由があるのである。其理由は外でもない。多數の婦人が經濟上に獨立をしないからである。前に擧げた少數の婦人は男優りであるけれども多くは男子によつて衣食するからである。從つて普通の婦人が男子の從屬者のやうな待遇を受けることになるのである。女子が經濟上に於て充分なる獨立が出來れば、すべての權利は男子と對等になるであらうと思ふ。若し之に反して女子が經濟上に獨立しない間は何時まで經つても男子に頭が上らぬのである。いくら理窟をいつても實際は駄目である。女子中の少數の覺醒者は同じ待遇を受ける爲めに努力するが、同時に多數の女子が後から之を打毀はすのである。故に此問題の解決は婦人が經濟上に獨立するや否やによつて定るのである。現に支那の婦人は經濟上最も獨立しないのである。男子によつて衣食するといふことが普通になつてゐる。故に女子の權利は最も少いのである。近來二三の支那の婦人の中には婦人參政權論者もあるんだけれども之は少數の婦人の夢に過ぎないのである。支那に反して婦人を最も尊敬するのは、いふまでもなく歐米である。といふのはいろ／＼理由もあるであらうが、主として歐米の婦人には獨立の生活をするものが多いのである。經濟上獨立してゐるからである。婦人參政權論者は英國は最も有名である。其有名なのは英國の婦人にエライものがあるといふよりは寧ろ其採る所の手段が餘り亂暴であるからである。婦人の權利として

は英國よりは米國の方が進んでゐる。米國の女子の方が多く尊重せられてゐる。之は米國の女が英國の女より經濟上餘計獨立してゐるからである。日本でも實際上女の權力の最も多い所は裏店社會である。それは裏店の婦人が夫婦共稼ぎを實際にやるからである。經濟上獨立してゐるからである。婦人に對して頭の上らない男子は此社會に最も多いのである。之に反して中流以上になれば、普通婦人は男子の收入に依賴して衣食するのである。從つて中流以上の婦人は最も權利を認められないのである。之が婦人の要求に理由があるに拘らず、今日まで容易に行はれない所以である。尤も日本も近來は婦人が大分獨立の生活をする傾向を示して來た。女子の職業も增加した。そこで婦人の權利主張者も澤山出來て來たのである。勿論西洋の婦人の糟粕を嘗めて權利を主張するものもあるが、經濟上に男子に依賴してゐる間は到底駄目である。段々女子の職業が進步して來て經濟上獨立するやうになつてから婦人の要求が有力となるのである。此次には婦人のサッフラゼットも出るであらう。

前にお話した通り、婦人は智力に於ても體力に於ても大して男子に劣らぬのである。從つて經濟上に獨立すればよいのである。そして國の爲めに、女子が段段經濟上に獨立することを希望するのである。之は女子の爲めのみでない、國の爲めにさう思ふのである。今日本の人口を六千萬人とし、其中の半分即ち三千萬が女子と假定する。そして其三千萬の婦人が男子の收入に依賴して生活するのと、經濟上獨立するのとは、一國の生產力に大いなる相違を來すのである。殆んど生產力が二倍する譯である。勿論男子の收入に依賴してゐる婦人と雖も全部遊んで暮す譯でないが、婦人が經濟上獨立すれば一國の生產力が大いに增加するのは明かである。從つて婦人の獨立を希望し、其結果婦人問題も自然に解決せんことを希望するのである。

婦人が男子と同じ權利を要求するについて婦人に一つの弱點がある。そして經濟上獨立しても、男子と同等に行き兼ねる理由が一つある。それは外でない。女

子は兵隊の任務を果すことが出來ない事である。これは女子の弱味である。尤も女子は兵役に行かない代りに他に重要な任務を持つてゐるのである。例へば小國民の養成といふ如き大事の任務を持つてゐるのである。けれども世の中は結局腕力が威を振ふものである。一國の中でも文官よりも武官の方が何時も威張るものである。女子が兵役に出られぬといふことが男子と同等の權力を要求する上に於て一つの弱味である。世間が進歩して女子は經濟上獨立するのみならず、兵役の義務にも服するやうになれば、そこで初めて完全なる男女同權が行はれるのである。女は社會上、經濟上、政治上完全に男子と同樣になるのである。

「新らしい女」を何と觀る

文學博士　三宅雪嶺

兄弟牆に鬩ぎ、外其侮りを禦ぐといふ、兄弟は喧嘩することになつて居る。夫婦喧嘩は犬も喰はぬといひ、夫婦は喧嘩することになつて居る。喧嘩するも何等かの場合に一致するのであり、喧嘩が喧嘩にならず、さうかと思へば青筋を立てゝ喧嘩する。喧嘩はするが、口で怒鳴るやうな結果にならぬ。かゝることは狹くも行はれ、廣くも行はれる。廣い所では四海兄弟といひながら、人種が違ふといふので互に相排斥する。同じ人種の中でも階級を立てゝ相排斥する。かく廣くはなくても強い階級に壓迫さるれば或時期を見て之に反抗する。強い者が勝ち弱い者は負け、秩序が成り立つのであるが、年を經て名が實に伴はなくなれば亂れ初める。長幼序ありといひ、年の長じたものが力を振ふ間、それて秩序が維持せられるが、力あつてもなくても、

年齡て上に立つといふやうになれば之を亂すの避くべからざるに及ぶ。老人閥を破らねばならぬ、青年て事を爲さねばならぬといふのもそれてある。中世のやうに進歩が停滯した時代には在り來りの儘てよいが、進歩が急て、百年どころか、十年間て著しく事情が變ずる有樣ては老人て遣り切れず、更に變化に順應するに堪ふるものが事に當ることになる。青年といふが頻りに問題になつたのは實に斯かる勢の促したのてある。然し青年は否ても應ても早晩老年になる。何時までも青年として同じ位置を占めて居る譯に行かぬ。青年に限ると唱へるのは青年期の間て餘り久しきに續かぬ。十年もたつかたゝぬに青年らしく無いやうに爲るが、後から〳〵と青年が出て青年に限ると唱へる。青年の老人となつたのが隨分多く、青年の先がつかへて居り革命ても起れば其青年が大いに活躍し、例せば支那のやうな老人國ても革命後青年が政府を組織するやうになつたが、左もなければ老人は相當に位置を占めて居る。さう無雜作に取つて代ることが出來ぬ。老人と妥協するとか情意投合するとかいふ方が事を爲し易い。隨て青年て事を爲さねばならぬといひながら何時しか其勢が減つて來る。何としても人間は何時までも青年て居る譯に行かぬ。青年ばかりて組織することは出來ぬ。青年に限るやうにいふのは或弊害に對しての事てあつて、眞に青年ばかりて事を爲さうとすれば遠からず挫けるが普通てある。絕えず青年の元氣を發揚せねば老人閥が出來て動きがつかず、それといつて青年ばかりて事をするといふ事も出來ず、詰り加減ものてある。

今日は青年の老人に對するが如く、女子が男子に對して天賦の權利又は法律上の權利を主張せうとして居る。女子は柔順なるべきものと定つて居つたのて、若し自由說が人類に必然の現象てあるならば、女子も只徒らに柔順てあるべきてないといふに考へつく。然し柔順とか威壓とか、被雇人とか雇人とか、從來通用した意義が果して當つて居るや否やが疑はしい。人は牛馬を使役しても、同樣に人類を使役してならぬといふ

が、牛馬自らから見れば相當の仕事をして相當の食物を得ることになつて居る。人が如何に之を使役するとて食物を與へずに居れぬ。多く使役するには食物の量を多くし、質をもよくせねばならぬ。暑さ寒さにも相當の設備をしてやり、傳染病をも防いでやらねばならぬ。牛馬でもさうであつて人類は尙更である、持つつ持たれつに爲つて居る事が多く、中にも男女の間はさうである。女子は勞力の分量に於て男子より少く、而して餘り男子に劣らぬ生計をして居る。男子程社會に活動せぬのは、自由を殺がれて居るといはゞいへ、活動せずに相當に暮らして行けるのである。長壽者に女子の多いのは男子程心配せぬからであるといはれて居る。男子は汗水たらして女子を養つて居る形がある。然し女子の性質にもいろ／＼あり、恰かも男子で女性に近いのがあると同じく、女子で男性に近いのもある。籠の中に居つて寢ながら食物に有り附くよりも、籠を出て飛びたく思ふのがある。且つ社會が著しく變遷し、專制國の政治が殆ど悉く立憲政治になつた割りに、女子の男子に於ける關係が中世の儘になつて居るのが少くない。改めようと思へば改めたくなつたりする。自由說の盛んになつた後、何程か女子解放の聲を聞くが常である。十八世紀から十九世紀の央頃まで自由主義の運動が盛んであつて、次いで男女同權論の如きが出てた。何程かの消長があつて、今は婦人參政權問題が漸く盛んになつた。フインランドの如き、ニユウジーランドの如き已に之を實行して居る。

日本では男子でも選擧權擴張に冷淡であつて、女子て參政權を得るに熱心なもの丶出ないのは怪むに足らんが、何にせよ封建政治を破り立憲政治にした丈け、女子でも幾分か自由を望むに傾くべきである。近頃女子で權利を主張するのは政治的でないとしても之と關聯して居る。然し元、男女間の關係の事であつて、由來が複雜である。遠くて近きは男女の仲、一通りや二通りに問題を解決するのは餘りに事を無雜作視して居る。學校騷動には必らず職員で生徒の後押しするものあると同じく、青年の運動に老人の後押しするのがあ

り、女子の運動に男子の後押しするのがある。女子の自由を求めるのは一般に自由思想の高まつた流れを受けての事であつても、先づ之を唱へたもの又は唱ふるに助力したものは男子である。女子解放といふ語からして女子に應はしくない。奴隷解放といふに類して居る。奴隷解放は奴隷自ら唱へたのでなく、白人が唱へたのである。男子の女子解放を說くものは人道上眞に然るべき事としてしたのもあり、女子の間に人望を得ようとしたのもあり、いやに女の贔屓するデレ助といふやうなのもあり、いろ／＼ある。而して中にも文藝家は普通と目先きの變つた事を求めるが爲め、女子が柔順と定つて居れば、之と異る所を書きあらはさうとしたりする。特に劇場經營家は此邊に着眼する。如何なる劇でも度々演じては厭きが來る。沙翁ものばかりては誰も見なくなる。何かと有り觸れぬのが肝要である。そこで結婚は神聖てあるとなつて居るのをば、結婚は自由なる約束である。戀愛なければ解けて了ふ。戀愛あつても必らず守らねばならぬと限らぬ。理智の要求もある。同じく人間であつて人間に束縛せらるべきてない。イヤと思へば何時でも飛び出すといふやうな事が奇拔と感ぜられる。さういふ演劇が當りを取ることがある。又それが必らずしも無理でないと感ぜられる無理な結婚が實際に存在して居る。英國は紳士の國といはれながら男女の關係に褒むべからざる事がある。女子の位置を認めるやうな劇は强ち人が是認するのでなくても、多少の興味を惹く。次いで問題にもなる。

日本てはまだ問題になつたかならぬか位のところてある。政治家なり、實業家なりの中には女子を賣物買物に見て居るものが少くない。此邊りてはもつと女子の位置を認めしめるやうな思想が入り込んでもよい。然し女子の權利を主張するやうな女子、剰へ男子に反抗し結婚は如何にてもよいといふやうな連中は結婚に緣遠くなる恐れがある。緣遠くなつても構はぬといふのはそれてよい。然し若い間其意氣込であつて、漸く年の長ずると共に身の振り方に心配し、或は後悔する

やうになつては、早く考を改めるに若くはない。女子にもいろ／＼あつて、平塚明子の如き、書いたもの丶上では一通りならぬ力を持つて居る。其心理狀態は生理的から來て居るか、又は別に事情あるか、何れにしても變り者である。確かに勇氣がある。腹からの勇氣でなく、鼻柱の勇氣かも知れぬが、一種の勇氣がある。新らしい女は其人によつて問題が提供せられたといつてもよい。今後の事は分らぬにしても、其儘に續いて行き、尙益〻思想を練つたならば、或一部の男子を反省せしむる材料となり得るであらう。

然し彼に似而非なるものは遂に彼の如くなることが出來ぬ。二十五歲頃まで其調子で差支ないとして、七八になつて婚期を失つては、啻に親戚の心配者ばかりでなく、自らを持て餘す事になる。自ら持て餘すのも自ら犧牲となつて或問題を提供する事になるが、それ程迄犧牲になるべきかは考へものである。尤も靑鞜社の連中は結婚を避けるとはいはぬ。結婚はしても女子たる相當の位置を占めようといふ意向であらう。それならばさういふ風に事を扱ふべきである。之までの調子では初め面白半分であつて後に結婚の事に心配するを免れぬやうであつた。遣り方次第では何にも結婚の妨げにならぬ。明子自らは一種の見識を備へて居るらしいが、吉原通ひとか、五色の酒とか、阿婆擦れのやうに思はれるのがある。世間で何といつても構はぬといふは勝手であつても、結婚を望んではさうは行かぬ。又一二度の發行禁止で落膽するやうでは略ぼ前途の困難を考ふべきである。若い間は人が何となく面白がるが、中婆になり、本婆になつては如何であるか。明子の如きは明けて通して置いてよい。其父は相當の身分があつて、而して深く娘を信じて居るといふ事である。變り者が一種の天才と認めらる丶とないとも限らぬ。然し問題の提供者は世間が今にも己れの思ふやうになるかに思ふが、注意するものは極めて小部分であつて他は無感覺に通り過ぎて行くことを察すべきである。いろ／＼變つた說は之まで幾つ出たか知れぬ。今の新らしい女の如き幾人も出て居る。十八世紀に屢〻之が

事實にされた。ヴォルテールの結婚の如き、新らしい女又は新らしい男のいふ通りの事をして居る。男女間の關係は古來最も多く經驗を重ね來つたもの丶一つてある。經驗に經驗を重ね、今日の如くになつて居る。何千年前の事か、兩性間の關係が紊れた爲めに神が大洪水を起して人類を亡ぼしたと言ひ傳へて居る。問題の提供は何等か益する所があるが、それて社會を根本から變へ得るやうに思つては餘りに淺果敢てある。さう考へなくては思ひ切つて飛び出す譯に行かぬかも知れぬが、餘り目先きの見えぬことのやうに思はれる。然し之まて自然主義、享樂主義、刹那主義など樣々唱へられた揚句、新らしい女といふが最も多く受けられて居る。新らしい女は新らしい男より力あると思ふならば、さう思ふもよい。然し新らしい女の加勢をするものは女が多いか、男が多いか。其何れの多いのを希望するのか。考ふべきことは幾らてもある。



日本に於ける婦人問題

魯庵生

「太陽」の臨時號たる婦人問題號に、自ら婦人問題を研究した事が無いと稱する或る人の所說を掲げたのを非難する批評があつたが、凡そ婦人問題といふは各自の母なり妻なり娘なりの問題であるから、研究するとしないとを問はず男女を通ずるの問題である。獨り婦人に關する職業に從事するもの、例へば女子教育とか婦人雜誌記者とか或は女流思想家とかに限りて專有されべき問題では無い。且總ての公平な、的確な判斷は較やもすれば因襲のドグマに捉はれ易い專門家よりは何物にも煩はされないバイスタンダーに待つ場合が往々有る。改革といふものは屢〻門外の聲に生ずるのである。

余の如きも實は熱心な婦人問題研究者では無い、婦人に關する著述は甚だ僅かしか讀んでをらぬ。夫故に婦人問題に容喙する資格が無い事を自ら認めてをるし、更に進んで深く研究するだけの興味をも燃やしてをらぬ。が、余の瞥見する處に由ると、婦人に關する諸家の意見の大多數は婦人を賤視した偏見が先入主をなしてをる。婦人に同情する說も婦人を一等下れる低級者と見て同情するので、丁度米國人が嘗て日本人に對して與へた同情と同じ種類の同情である。一方又、新らしい女を任ずる婦人は熱心の度を通り越して濫りに咆哮し、議論も行爲も往々放縱に流れる氣味があるらしい。プロパゲートアとし

ては止むを得ない手段かも知れないが若干常經を失してをる。が、どつちが時代の大勢に伴なつてる乎、と云ふと、大勢は少數の婦人の主張に味方してをる。

日本の婦人問題といふが、現に日本にて頻りに論じられてる婦人問題は日本の專有では無くて、世界を通じての共通の叫びである。唯日本は世界の文明の最後進國であるゆゑ、何事にも歷史を一足飛びにした觀があつて、一方新思想者の主張の基礎が薄弱であつたり、一方には又馬鹿々々しいほど古い二三百年も昔しの說が相當の權威を有して行はれてをる。今では夫れほど馬鹿々々しくは無いが、ツイ二三年前までは常盤御前や袈裟御前が婦人のお手本となつてゐたのだ。

歐羅巴に於ける婦人問題は遠く羅馬希臘まで遡る事が出來るが、近時の問題の最始の主張者としてはメリー・ウォルストーンクラフトを推す。夫人は一七五九に生れて九七年に歿した。今から百五十年ほど前で、日本の天明寬政頃に榮えた人だ。此夫人の傳記は讀んだ事が無いから、ワルポールの評した「ペチコーツを纏うた豺狼」といふが當つてるか、或は良人ゴドウヰンが稱した通りの「家事生活の崇拜者」であるかドウカ知らぬが、米人イムレーとの戀愛談から想像すると、普通の女の道德からは非難を免がれざる人であらう。が、同時に才藻識見の凡ならざるをも認められてゐたので、其の"Vindication of the Rights of Women"が現時の婦人問題の先鋒をなしたのである。ミルの著名な婦人論に先だつ事約八十年前である。勿論此以前に婦人の權利を主張したコンドルセー亞流の論客はあつたが、婦人自ら進んで主張したのはウォルストーンクラフト夫人が初めてゞある。

英吉利でさへがウォルストーンクラフト夫人が提唱して以來百五十年を經て初めて今日のサッフレジエットの運動が社會を動かす事が出來たのであるから、女大學の教訓の覺め切れない日本で冷笑と擯斥と壓迫とを以て迎へられるは當然である。日本で初めて一夫一婦論を主張したのは福澤諭吉氏で、婦人の權利を認めた契約書を交換して結婚したのは森有禮氏であつた。何れも明治七八年頃で、其頃は日本の總ての舊物を破壞した時代であつたから、政府が率先して婦人を海外に留學せしめ、殆んど男子と少しも違はない服裝をした女學生が東京市中を往來してゐた。今と違つて辯護士規則も喧ましくなかつたからであるが、何とかいふ女の代言人さへあつた。婦人運動といふものも無かつたし、又極めて少數者であつたが、婦人の發展は今よりは却て目覺しかつた。此の當時の革命の元氣が切めてモウ十年繼續してゐたなら我々の文明はモウ一層進歩してゐたらう。其後、明治十七八年頃、伊公井侯が外交に鋭意するや盛んに歐化熱を鼓吹し、女子の社會的位置をも進め、女子教育をも振ひ、基督教まで奬勵するやうになつた。當時の歐化熱は外交政策の必要上から生じたので、國民の覺醒で無いから附燒刃の感があつたが、伊公井侯が政府の首班に坐して盛んに鼓吹したのだから、幾何もなく保守派の反感を買ふほど凄まじい勢ひであつた。無論保守論者の云ふ如く皮相の文明の模倣で、眞の文明的自覺では無かつたが、日本の婦人の社會的位置は此趨勢に乘じて確かに一段進歩した。且又、今日ほど國富が豐かで無かつたから歐洲生活の一部分たりとも學んだものは、極めて少數な上流階級に限られてゐたが、上下を通じて歐洲生活の準備をして、中流以上の家は奥さんからおさんどんまでが夜なべを廢して英語を勉強し、外國

人と交際する爲めのエチケットを學んだ。今から考へると聊か滑稽じみてゐるが、歐洲生活を憧憬する熱心は實に盛んなものであつた。今日の當局者をして云はしめたなら當時の伊公井侯は危險思想者であつて、其の危險思想を直ちに經綸として行つたのである。

明治の文化史を研究するものは此時代を忘れてはならぬ。伊公井侯が國民を率ゐて大いなるコメヂーを演じたとも云ひ得られるが、日本の文明の進轉は此時代に負ふ處がある。若し此時代が無かつたなら、內亂は度々繰返されて穩健なる政治の發達を示さなかつたてあらうし、藝術も科學も今日ほどに進まなかつたてあらう。婦人の知識、風俗、社會的位置も亦今日ほど發達しなかつたてあらう。勿論當時の思想は極めて幼稚てあつたから、國民が伊公井侯の鼓吹に盲目的に煽動されたばかりてなく、伊公井侯も亦或は歐洲文明の外觀だけ移植すれば歐洲人の威欵を買ふ事が出來ると思つてゐたのかも知れぬ。が、今日の賢明な政治家にはコンナ突飛な眞似は迚も出來ない。公侯の外交政策はコメヂーと云へばコメヂーてあるが、丁度洪水の汎濫が往々沃土を殘して去るやうに、國民は公侯の失敗と同時に再び以前の保守的情態に復して了つても、取殘された文明的土壤に培(つちか)はれた文化の芽が今日の進步を齎らしたのてある。

其時代の女子教育は、學校及び學生の數こそ少なかつたが今よりは高級てあつた。伊公井侯の政策が破れて保守的反動の國粹熱が勃興すると同時に、森有禮氏が奬勵した文部省の女子高等教育の方針は著るしく低級に降下されて了つた。良妻賢母主義や技藝中心の女子教育は此時代からボツ〳〵初まつたの

てある。高等女學校で茶道や生花を敎へて、其以前はおさんどんまでが勉強した外國語は殆んど有つても無くても好い隨意課目になつて了つた。今日の中年の奥さん達が割合に無學なのは此時代に敎育されたからである。

兩度の大戰爭を經て日本の國力が世界に認められ國民の自信が强くなると同時に婦人も亦覺醒するに到つたは當然である。殊に藝術の勃興に伴つて藝術に形成された歐洲の思想が瀰漫して婦人の自覺を促迫した。勿論公平な眼で見て、日本に於ける婦人の自覺なるものはまだ薄弱であるを免がれないが、今までの男から力を與へた婦人の運動では無くて、婦人自身のインナー・ボイスから生じたのは爭はれない。無論、大多數の婦人は此種の「新らしい女」の叫びに交渉しなからうし、「新らしい女」の中でも眞に自己及び同性姉妹の重大な問題として身を犧牲にしようと思つてるものは幾何も無からうが、之までの男から唱へられた婦人問題のやうな空虛なものでは無い。其議論にこそ深淺あれ、其主張にこそ强弱あれ、其思想上の徑路は歐洲に於けると同じ脈を通貫してゐるものゆゑ、一部の批評家が云ふ如き一時の氣紛れでも浮れ心でも無い。矢張歐羅巴の婦人の憂ひとする處を憂ひ、憤りとする處を憤るので、知識に煩はされた精神的虛榮でも婚嫁に失望した自暴自棄でも無くて、確實なる思想の根柢に生じてゐる。唯日本の所謂「新らしい女」が歐洲の婦人が感ずるやうに思想の根柢に痛切に感じてゐるか否かゞ疑問であるが、兎にかく歐洲婦人と同じ痛患を感じて此叫びとなつたのであるから、大多數者が輕視し冷視し笑殺し默殺してゐても、此叫びが漸次に大きくなつて社會を動搖するやうになる。現に「新らしい女」な

る問題が半ば好奇的に或は半ば嘲弄的に扱はれてゐても、現時の最も人氣ある問題となつてをる。文部省や内務省が壓迫せんとする手段の當否又成否は兎もかくも壓迫の必要を感じたのは此の「新らしい女」の運動の公衆に及ぼす勢力を認めたからであらう。

元來婦人問題の勃興は歐羅巴ても極新らしいので、ミルが『サブジェクシヨン、オブ、ウーメン』を著はしたのは日本て福澤氏や森氏が一夫一婦や男女同權を主張した時代と餘り離れない僅に五十年前であつた。其根本は自由平等を信條とする民主思想に生じてるので、政治上には兎もかくも君民同治の立憲政體を產み出して、文明國は皆此の統治法に依る事になつたが、渠等の絶叫する平等は政治上に尊卑の階級を打破して同一權利を獲得したゞけでは留まらない。社會上の階級の不平等は打破し得ても男女間の不平等は依然として存在してゐる。女は政治上に干與する事を許されない。女の就くべき公職は限られてをる。女の享受する待遇は男に比べて遙に下つてをる。道德上にも法律上にも女は不公平な制裁を受けてをる。例へば家庭に於てすら、女は家庭の主人といふ空名だけに滿足して男の支配に服從してをらねばならない。之が果してナチュラル・ローてあるか否かは少くも疑問とすべき價値がある。假に女の主張するやうな說が道理て無いとしても、現在の男女關係の狀態が正當公平てあるとは思はれない。玆に婦人運動が生じたので、說其物の論理的價値は別としても、此の如き運動を生ずべき理由は確として存在してをる。

日本ては封建の因襲が女の腦髓に深く浸込んでをる。婦人の精神上の自由が女大學的道德て毒殺され

てをつて、男の暴慢の犧牲となるを女の美德と迷信し、男の從屬的位置に甘んじて、決して男の領分に踏込まない。夫故に歐羅巴の婦人運動が槪して政治上に初まるに反して、日本では政治に興味を有する婦人は昔しから極めて乏しい。女は公的生活に出るもので無いと昔しから敎へられてゐた道德が腦の底まで染込んでるからである。例へば今日の日本の婦人問題の如きも藝術に由て自覺したのだから、所謂「新らしい女」の叫びも「ローマンチック・ラヴの自由」を呼號するので、政治上及び社會上の男女の不平等に對しては餘り痛痒を感じてをらんやうだ。勿論此の「戀愛の自由」は男女間の根本道德に觸れてる重要な問題であつて、エレン・ケイの如き實に此問題の爲め火花を散らしてをるが、此問題に就ても日本の「新らしい女」の主張はまだ詩的である、空想的である。戀愛の因襲的束縛から生じた實際の事實には未だ觸れてゐない。例へば戀愛の解放といふ理窟を云つてるが、此解放が事實上にどう現はれるかといふ事には餘り頓着しない。今日の法律や習慣から云つたら戀愛の自由は正當な婚姻と認定されない。自づから私生兒と登錄して社會から日陰者の待遇を受けねばならない。又男が關係を無視しても訴ふるに道なくして忍んでをらねばならない。恁ういふ實際問題をドウ處分したら宜からう。「戀愛の自由」を叫ぶものとてはドウシテモ同時に此の法律上の實際問題にまで言及しなければならない筈だが、日本の「新らしい女」は未だ詩的な叫びをのみしてをる。

敎育者側や道學先生輩から靑年男女の墮落といふ聲が頻りに聞える。其の所謂墮落者の大部分は如何

なる哲學を以てしても辯解する事の出來ない墮落者であらうが、中には必ず戀愛の自由を主張するものの正當なる戀愛の發現もあらう。誤りたる習慣の爲め墮落と見做されて不合理なる制裁に壓迫されねばならんのだ。且又男は妻帶者と未婚者の區別なく、如何なる放縱なる生活を送るも不問に置かるゝに反して、女は一と度戀愛の經驗をすれば結婚の權利の何分一かを剝脫されて了ふ。言換へれば男は如何なる放肆なる性慾生活を送るも何等の制裁なきが故に、己れのプルータリチーを滿足させる爲めに女の結婚の權利を剝脫するを少しも憚からんのだ。戀愛自由を叫ぶ「新らしい女」は同時に戀愛の破壞を敢てするゝ憚らない男の性慾的不規律を制裁する法律制定を訴へねばならない。教育者や道學先生輩は頻りに女の墮落を責めるが、女の正當なる戀愛を蹂躙するは男の放縱なる習慣である。

憾うい ふ婚姻法及び婚姻儀式の改革、夫權重くして妻權輕き現在の法律の改正、姦淫に關する男の重罪の規定、續いては公娼制度、檢黴法の取締等「戀愛の自由」を中心としての現時の法律及び習慣に革むべき事は澤山ある。唯詩的や空想的に叫んだゞけては足りない。實際の事實に觸れない内は其叫びは如何に大であつても世間を搖かすに足りない。日本の「新らしい女」の婦人問題が多數者の爲め冷笑せらるゝはツマリ其叫びが詩的であつて、實際上の内容が無いからである。

且現在の「新らしい女」の叫びは本と藝術に醒めたのであるから「戀愛の自由」の外最つと實際的な社會問題に觸れてゐない。藝術以外には殆んど沒交涉である。例へば現に女の職業は著るしく增加し、所謂「新らしい女」を任ずる內の何分一は自ら衣食してゐるものである。然るに女に對する報酬は——之も

亦日本ばかりの問題では無いが——男に比べると著るしく薄い。一例を擧げると、日本の資本家が女を使用する有力なる理由の一つとして女の給金の低いのを數へてをる。同一の任務に服し同一の成績を擧げながら、女は男の受けるものゝ半分乃至三分一しか得る事が出來ない。が、日本ではまだ之を訴へたものが一人も無いやうである。

例へば又參政權の問題の如き、日本では早過ぎるといふ人が大多數であらうが、男子ならば如何なる愚人でも法定の租税を收むるものは選擧權を有し、婦人ならば何百萬圓の資産を有してゐても村會議員すら選ぶ事が出來ぬといふは不合理である。例へばミリオネヤの家の主人が歿して其相續者が猶ほ幼年なる場合は、立派な賢明な寡婦があつても多額な租税を拂ふ其家は選擧權を喪ふ筈である。今日では女で高等官になつてるものもある。相當な高等教育を受けたものもある。然るに女であるが故に縱令法定の納税の義務を果してゐても、選擧權を與へられないといふは不合理極つてをる。英國でさへが今猶ほサツフレジエツトが猛烈なる運動をして猶ほ目的を果す事が出來ないのだから、日本では無論まだ早過ぎるだらうが、是等の問題に於ては所謂「新らしい女」は殆んど沈默して何事をも云はない。

一言すれば日本の所謂「新らしい女」の叫びは、多數の論客が冷笑する如き無意味の聲でなくて、必然生ずべき絶叫——男女間の道德上及び社會上の權利の不平等に覺醒して生ずる絶叫であるが、其叫びが未だ切實な感じを現はすに足るだけ實際問題に少しも觸れてをらない。ツマリ現下の『新らしい女』の叫びは藝術に覺めた聲であるから、同じ性慾道德(セクシュアル、エシックス)の改革の要求であつても其主張に "Die Neue Genera-

tion」に主張されるやうな事實上及び科學上の根據に缺乏してをる。夫故に渠等の運動はマジメであるかも知れぬが稚氣を脫しない。眞劍かも知れぬが頗る薄弱である。其の根柢の基礎が固くないやうに疑はるゝも止むを得ない。

是れ併し乍ら所謂「新らしい女」の主張や態度のみでは無い。本來日本の藝術の研究的基礎が薄弱であつて唯詩的叫喚を以て能事畢れりとする如き狀態であるから、恁ういふ上滑りのした藝術に根帶を有する「新らしい女」の運動が亦薄弱であるのは當然であつて、此の力の無い聲すらも猶ほ「ヤング・ジェネレーシヨン」を動搖し、文部省や內務省をして警戒せしめたのは薄弱ながらも近代思想に根據を有して、歐羅巴の新らしい女と同じ空氣を呼吸してゐるからである。

更に一言すると、今日の日本の婦人問題は今まで繰返された婦人問題と異なつて、女が切實に因襲の壓迫に感じたインナー・アゴニィの叫びであるから、縱令渠等の叫びは猶ほ薄弱であつても、輕々に看過する事は出來ない。又濫りに因襲の勢力を以て壓迫しようとしても決して壓迫出來得るものではない。が、同時に女も亦今の藝術的の叫びから一轉して實際の事實に觸れたコントロバーシーに入らなければ眞に社會を動搖する事は出來ない。我々は英吉利のサツフレジェツトの運動を感服してゐるものでは無いが、唯空想的に社會を呪つて少しく壓迫を加ふれば直ぐ萎縮し屈從するやうな日本の女の腑甲斐無いにも驚く。日本の婦人問題を思ふ毎に我々は久しく昏睡して覺めざる婦人矯風會の奮起を希望する。

現代女子教育の根本方針

△寧ろ頑固に流れても堅實なれ

文部大臣 法學博士　奥田義人

女子教育の事について、私は別に新奇な考を持つて居る譯ではない。矢張り從來文部省で採つて居つた方針――即ち良妻賢母主義の方針で何處までも進んで行きたいと思つて居る。世間にはいろ／＼新思想とかいつて騒ぎ立てたり、又方針の變更を必要とするが如き議論も見えるやうであるが、之は文部省の知らざる所て、學校教育としては何處までも良妻賢母主義で行きたいものと思ふ。

これまでの經驗に徴して見ても、一家の子女の良不良は、最も其母親の賢不賢によつて定まるといつてもよい位であるから、母親たるものはどうしても健全の思想を以て自分の子女の教育に當らなければならぬ。いくら學校で教育しても、家庭を支配する母親たるものが健全なる思想を持つて居るにあらざれば、教育の本旨を全うせしむることが出來ないのである。それで或意味からいへば兒童などの教育は、學校教育も重いけれども、家庭教育の方が一層重いともいひ得るのである。昔の封建時代などには學校といふものがなかつた。然るにも拘らず、國民の腦髓が大體に於て健全なることを得たのは畢竟家庭がしつかりして居つたお蔭てある。今日に於ては固より學校教育が盛んになつて居るが、子女教育の基礎をなすものは矢張り家庭でなくてはならぬ。已に家庭が子女教育の基礎をなすならば、其家庭を支配する母親が、健全なる思想を持たねばならぬことはいふまでもなき事である。

夫れ故に女子教育の方針としては矢張り從來の良妻賢母主義——即ち温良淑徳なる婦人の養成を主眼とせねばならぬ。假令多少頑固に流れるといふ位であつても、寧ろ堅實なる方を欲するのである。今日流行のハイカラ風——徒らに華美を競ひ、虚榮に憧れるやうな風潮に對しては、學校教育の上に於ては絶對的に矯正しなくてはならぬと思ふ。

それについては單に女子教育に當る人のみならず、世の志ある人、殊に婦人雜誌を經營する人などには餘程注意をして筆を執つて貰はぬと、動もすれば、虚榮心を増長せしめ、又空理空想に耽るの弊を釀成しないと限らぬと思ふ。一體理窟を研究するといふ事はわるい事でない。學者が學理を究めるやうに奧深く突きつめた所迄研究して考へるのは其人の精神修養ともなるから差支ない。併し漫りに之を發表して、社會一般の人に讀ませるといふ事は餘程考へなければならぬ。なまじかの婦人は十中の九分九厘まで之を正解することが出來ずして、其爲めに邪徑に迷ふことになり易い。男子でさへも不健全なものを讀めば善くない結果を生ずることが多いから、婦人がそれに捲き込まれるといふのは無理のないことである。若しさうなれば、いくら學校で矢釜しくいつたつても駄目である。折角立派なる婦人を作り上げようとする努力も空に歸し、良妻賢母たる修養を打毀はして了ふことになる。之を私は深く憂ふるのであるから、世の婦人雜誌などに筆を執る人には此點大いに注意して貰ひたいものと思ふ。

近頃は新らしい女とか新眞婦人とかいふ名稱が出來て、いろ／＼演説をやつたり、又雜誌を出したりなどして居るのをチヨイ／＼見るが、どういふ趣意か私には分らない。單に歐羅巴の小説とか戲曲とかを見て、婦人の任務や前途の事も考へず、漫然と新奇な事を唱導するのは餘り面白くないと考へる。

然し又一面から考へると、從來、婦人に對する男子の行動も當を得たものでない。之は男子の方でも謹まなければならぬ。いくら婦人が賢婦人であつても、男子が其家庭を紊すやうな事をすれば、自然波瀾が起る。

波瀾が起れば、子女の教育も出來にくいのは自然の結果である。それで一面に於て家庭と學校と相待つて子女の教育に當るべきものとすれば、一面に於て男子も亦自分の行動を謹み、子女教育の基礎をなす家庭の圓滿を紊さゞるやうに心掛けんことを希望するのである。

△人格主義の教育

成女高等女學校長 宮田修

教師としての私がモットーとしてゐる所は、「現代は就中健實な人物を要求す」といふことである。それが即ち私の日々仕事をしてゐる上の信仰であり、又方針である。總じて今日の教育は、男でも女でも、此意味に於いて仕立てゝ行くべきものだと考へてゐる。其健全なる人物といふのは、言ひ換へれば人格的に働き得られる人といふ意味である。ところで女子も矢張り其意味で、教育すべきだと信じて居る。假令大多數の者は將來家庭に入つて、妻とも成り、母とも成る運命を有つてゐるにしたところで、それを始めから妻母といふ小さい者に推しつけて了はないで、先づ其根本たり土臺たる人格を養つて行かなくてはならぬと言ふのが十年一日の如くに考へてゐる自分の方針である。其點に於いて一部の良妻賢母主義に反對した事がある。それは何故かと言ふに、所謂良妻賢母主義の說明を聞いてみると、夫等多くの人の主張は、單に家庭に働かしめる狹い意味の準備教育が女子教育の凡てであるかの如く見え、且つ其遣り方が人物を向上發展させるといふ事よりも、――それも將來の家庭といふ事を見ないで、過去數千年の昔から作られて來た一種型に嵌つた家庭を標準として、――その型へ打込んで行かうとするやうな、極めて非時代的な消極的な態度を執るやうに思はれたからである。で、さういふ風に觀察してみると世間多くの女子教育は、其作用こそ新しけれ、その目的はいかにも舊く、いつも社會の自然に進むべき事態に反對するやうな結果を齎すかの如き觀がある。

玆に自分は此意味に於いて、わざと良妻賢母主義と云ふ言葉を棄てゝ別に人格主義を標榜した所以である。假令彼等が將來家庭に入つて妻母と成つても、眞に良てあり賢てあるのは、外に道は無い。只彼等が人格的の自覺を有ち人格的の働きを爲して行けばそれが頓て良妻てあり賢母てあると言ふ事が出來る。もう一つは社會生活が段々變つて來れば、自然と結婚の年齡も變つて來ようし、又銘々が世を渡る日暮らしの有樣も變つて來るてあらう。中には境遇上又は一身の事情上已むを得ず獨身生活をせなければならぬ者も生じて來ようし、一言以て言へば、單なる家庭生活といふ事のみに止らず社會生活をせなければならぬ場合も生じて來る。此際に於いても與へられた教育は有效でなくてはならない。然るに人格主義の教育を與へておくならば有用の材たるを得るは當然てある。而して其本人も幸福に送れようし、周圍も歡んで迎へることも出來よう。といふのが掻い撮んで話す人格教育の理由である。

偖それをば基礎して教育上の作用を述べて見れば、

第一には身體を作ることに充分の準備をなさなければならぬ。本來男女は其の生涯に於いて勞役の工合が違つてゐるのであるから、昔から女の身體は男子の如く堅固には出來てをらぬ。總てがデリケートな組織をなしてをるのである。然しそれにしても之を今日の婦人に較べて見れば、日々の生活狀態が自然であり非科學的であつたゞけ、勢ひ知らず識らずの間に身體を動すことも多かつた。それが又婦人にとつては身體の養ひとなつてゐた。例へば臺所の仕事をするとか、井戸の水を汲むとか、手桶を提げるとかいふ事が身體の軀幹を動かし、內臟の運動を着けて自然に强壯な道を開きつゝあつた。然るに科學の應用が日々に進んで來た現代の家庭生活は箸より重い物は持たぬといふ諺通りになつて、この儘で打捨てゝおけば羸弱事に堪へないやうになつて了ふであらう。さうすると第一に關係するのは子供である。よしんば子供は其强弱に拘らず生れるとしても、分娩には困難を伴ふ事になる。世間に產婆や產科醫の增加するのや、歐米の女子の中に分娩を

厭ふものの多くなつたのは、つまり此間の消息を示して居るのである。

以上は家庭の事であるが、さて彼等が社會的の用事をせねばならぬ場合に處して、いくら働くべき覺悟を有つて居ても、體力が弱くて働くに堪へなくなつたなら、つまり一國の不經濟一人の不幸である。即ち電話交換手の病氣統計などを視ても、案外病人が澤山出來て來ることがわかる。啻に交換手ばかりの話でない。最近內閣の統計局で調べた統計を見ても、肺病其他の傳染病で死ぬ病人の最多數は、男子でなくて女子、女子の內でも二十前後の者であるのは、社會衞生上特に注目すべき事であらう。本來女はひわ／＼してゐるけれど、案外丈夫で病に罹らぬと言つてをつたものが、近頃は其反對で男より多くの病人を出すやうになつたのは何故かと言ふに、昔の女は概して其腦を使はなかつたのも其一つであるが、家庭に於いても身體を自然的に動かす機會が多かつたのも其二である。然るに今の女は男子と同樣に世の中へ出て働かなければならぬ。働くことになると多く腦を痛めて而して少しく體を勞するから自然こんな結果になるのである、乃ち何れから云つても其健實な身心を要する今の女は、適當な方法を講じて丈夫にならなくてはならない。仍て今の女學校でも此所要に應じて體操の一科を設けて比較的多くの時間をとつてあるが、現在のやうな餘りに形式に流れて居る有樣では、果して效果が有るか何うか疑問である。力の這入らない、精神の籠らないものに何れだけの效能があるか、是れは問題である。此意味に於いて、どうか全身の力を籠めて遣らねばならぬといふ方策を與へて、そこで身體を作り上げるといふのが將來の女子教育の着眼點の一つであらうと思ふのである。

又同時に考ふべきは知識上の問題である。今日の多くの教育者の中には、女は家庭に入る者が多數であるから、餘り多くの學問を授けるに及ばないと言ふ見地から、從來の高等女學校以外に程度の卑い學問と裁縫技藝を授ける實科女學校を設置してゐる。而して或る地方になると折角出來て居た高等女學校を引下して實

科女學校にしたものもある。是れは非常な間違であらうと思ふ。自分は實科女學校なるものに悉く反對しはしないが、今日の如く力を此方に入れるといふことは國民生活を危くするものとさへ考へる。時代は進化し發展して、何と言つても今日は知識の論爭を要する時代である。最早武力が優れてさへゐれば國家安泰と言ふときてはない。その反對に男子の頭腦は日々に進歩してゐる。然るに其伴侶たるべき女子の頭腦がそれより數等下つたものであるとしたら果して圓滿な道連れとなつて行くことが出來るか。是れは少し考へて見れば明瞭な事であらうと思ふ。尤も今日迄養成して來た女子の學生中で多少學問の有る者で、一知半解の屁理窟を列べて却て譯の解らない生活を送つてゐる者もあるが、それがあるからと言つて直ちに女子の教育は危險であるなどといふのは餘り近眼に過ぎると思ふ。彼等をして踏み誤れる生活を爲せるのは知識が徹底して居ないからである。其知識の徹底しないのは高い教育を授けた弊ではなくて、まるで小さな學者を作り出すやうな、不消化の知識、專門學の見本知識を授くるに止まつて、國民生活なり家庭生活なり、日常生活に能く當嵌まつた知識を授けてゐない弊であらうと思ふ。其教科書の多くを見ると專門學者の究めた事柄の煎汁を駢べたやうなもので、夫を法律の講釋同樣逐條的に授業するといふのが一般の遣り方である。故に多少其方に興味を有つた者で他日更に其堂奥に入らうとする者には手ほどきとして宜しいかも知れぬが、其知識を腹中に藏めて、是を實地に運用し、その日〳〵の生活を豐富にして行くといふ者には腕を熟させないで劍を與へると同樣、害あつて利は少ないのである。さればと云つて此弊を誤解して低級の知識に滿足させやうとするのは、日進月歩の時代に處する道ではない。だから今後の教育は此等の弊をためてもつと徹底した豐富な知識を與へ、更に望むらくは程度も高めて、時代に適應する婦人を出すやうにして行かなければならぬと思ふ。

此兩者を充分に整へて行けば、世間の所謂問題とし

てゐる風致上の事柄の如き、又は個人々々の德操の問題の如きも、自ら解決が着いて來て玆に健實なる人格は出來、鞏固な社會は生じ、當局が常に憂ひてゐる國家の將來にも必ずしつかりした基礎を立てゝ行く事が出來ると信ずる。徒らに一時の現象を見て周章狼狽いてはならない。根本義を忘れた敎育方針や、敎育法は弊多くして利は無いと信ずる。

△内剛外柔にして内助の功を全うする女子を作るに在り

女子高等師範學校長　中川謙二郎

現代女子敎育の根本方針如何とのお問ひであるが、女子敎育の方針は文部省で定められて居るから、我々は固より之を遵奉すべきであつて、其外に出ることも出來ねば又別に異なる意見もないのである。只時勢と共に多少其解釋を異にするかも知れぬが、方針として賢母良妻の養成で至極よろしいと考へる。

一體女子は人の妻となり母となるのであるが、母というても只子を産む丈けの母となるのではなくて、國民の母――次代國民の母となるのであるから、先づ第一に身體の强健といふことに最も重きを置かなくてはならぬ。國民の母の身體の大切なることを女子に自覺させなければならぬ。一般の人々も此點には深く注意すべきであると思ふ。又心の持方に於ては、私は内剛外柔といふ事が一番に大切な事と考へる。「死は鴻毛より輕し」といふ事が軍人に賜つた勅諭の中にあるが、日本の婦人たるものは、其階級の如何に拘らず、軍人が戰場に出ると同じく、場合に依り死は鴻毛よりも輕しとする觀念を常に堅く深く養つて置かねばならぬ。かかる場合には屢ゝ遭遇するものでないとしても、或場合には矢張り軍人の戰場に於けると同じ覺悟を要することが絶無とはいへぬ。其時には潔く死に就くといふ決心と態度を内に納めて、一家の爲め一國の爲め働くといふ、健氣な女子を敎育することが大切であると思ふ。只然し其爲めに外から見て、何か變物と思はるゝや

うてはならぬ。外柔にして内剛といふ事が是に於て最も必要な事と考へる。

それから女子は妻として内助の功を全うするといふ事が最も大切であるが、其内助といふ意味も時勢によつて幾らか違つて來ることゝ思ふ。今日では男子の教育も進み、男子の社會に對する關係も非常に複雜になつて來て居るから、内助といつても、昔日とは多少趣を異にする。即ち夫の職業をも大體理解し、又自分の夫が大體如何なる人物なるかをも諒解し、それによつて内助の實を擧げなくてはならぬ。斯くの如き女子を作るのが即ち新教育又は現代教育といへばいはるゝのである。

兎に角女子は家にあつては階級の如何を問はず、勤勞を樂むの氣風を養はなくてはならぬ、家にはそれぞれの家業があるから、直接又は間接に、其家業を援くることの出來る婦人を養成するのが必要である。我我はこんなやうな見解を以て、文部省の方針を遵奉して、賢なたる妻たり母たる女子を作りたいものと心掛けて居る。

△良妻賢母主義

文部次官　福原鐐二郎

女子教育の根本方針は依然として良妻賢母主義である。女は必ず嫁すべき者であつて、嫁しては能く家を治め、良妻となり賢母と成ることが其理想でなければならぬ。素より近頃の社會的經濟的狀態は總ての女をして妻母たらしめない事情も有り、中には獨身生活を送る人も、今後は少くとも多少出て來るであらうと考へられる。であるから此等特種の事情の下に生産的教育を施すことを拒むものでは無いが、教育方針は大數に從つて立てるのであつて、而も女は一般に嫁して妻母となるべき性質の者で有る以上、矢張り良妻賢母主義を採るより外は無いと思ふ。

△良妻賢母主義と人格主義の調和

女子高等師範教授 下田次郎

女子教育の根本方針を考へるについても、自分に娘を持つて居る人と持つて居ない人では、或は考の相違があるかと思ふ。世には良妻賢母主義は女子教育の主義としては今日は最早や時勢後れであるかの如き言説をなす人もあるが、實際自分が十七八になつた娘を持つたとして考へて、果して娘を生涯獨身で暮らさせやうといふ氣になるものだらうか。自分の親類や友達に年頃の娘を持つてゐる人が澤山あるが、皆嫁にやることを焦つて居る。一年でも後れると緣遠くなることを氣遣つて、どうかして適當な所に遣りたいと苦心して居る有樣は、他處目にも親の情さこそと思はれることである。自分にも生れたばかりの女の子が一人あるが之から廿年經つた後に、結婚などはさせずに一人者で暮らささうなどとは夢にも思はない。女の子を持たぬ人又は若い人は理論上どんな教育の主義を唱へるか知らないが、實際問題となつたならば、どの父でも母でも我が娘の良妻賢母たることを願はぬものは恐らく一人もないだらうと思ふ。それで私はこの主義は女子教育に於ける萬古不變の主義であることを確信する。誰が何といつても、どんな立派な文學に於て其反對が説かれてもビクともしない積である。然し良妻賢母といふのは四つの文字で、一つの形式、器に過ぎないものである。大切なものは其形式に嵌める内容であり、器に盛る正味であるのである。昔には昔の良妻賢母主義があつたであらう。今には今の良妻賢母主義がなくてはならぬ。我々は現代に生活するので最も現代の生活に都合のよい、且つ有要なる生活法を採らねばならぬ。過去に出來たものは其時代に都合がよかつたから出來たのである。過去のものであるからといつて不便をも忍んで其儘之を墨守する必要はない。固より過去に於ける善美にして今日も通用の利くものは勿論之を保存し、遵守しなくてはならぬが、融通の利かぬ古いもの

を其儘採用して今日の生活を束縛し、其進步を妨ぐる必要は少しもない譯である。過去の生活は簡單てあつたが今日の生活は複雜である。物質的に、精神的に皆今日は比較にならぬ程込み入つて來て居る。其時代に於ける良賢妻母は只昔のやうな簡單な精神なり技能なりによつて其職分を充して行くことは出來ない。要するに今日の良妻賢母なるものは昔のそれよりも一層深くて廣い準備が要る。即ち一層高い敎育が必要なる所以てある。

然らば良妻賢母主義なるものは婦人の生活の全體てあつて、其の外婦人としての存在の理由又は價値はないかといふに決してさうてない。人は男女を問はず、職分の如何を論ぜず、皆人てなくてはならぬ。即ち婦人も妻たり母たる外に又一個の人格を備へた人としての生活をしなくてはならぬ。其生活は精神的、内的生活である。外部の人や物と、いはゞ關係を絶つた自己特殊の内的生活を營まねばならぬ。最も「自分てある生活」を營まねばならぬ。言ひ換ふれば自覺せる生活、内容のある「我」のある生活をすることが必要てある。此方面をも考へないと、只良妻賢母が婦人の全生命てあるかの如く思ふのは間違てある、淺見てある。之が人格の骨髓で總ての思想動作の發する源てあり、中心の火てある。之を忘れた良妻賢母は龍を描いて睛を點ぜざるが如きもので、低級の又は死んだ良妻賢母主義といはねばならぬ。之は獨り精神の修養によつてのみ出來ることとて、男子に對すると等しく婦人に向つても精神の修養を絶叫せねばならぬのである。

日本に於ける百般の事業は常に歐米日新の進步に注目して之に後れざらんことを勤め、各方面の研究も相當に出來て居るが、獨り婦人問題については餘り研究されず、女子敎育について意見を述ぶる人すらも、婦人問題に關する外國の書籍に眼を曝すとが不思議に少い樣てある。隨つて婦人を見るの深みがなく、從來の低級なる婦人觀によつて、女子敎育を說いて居る次第てある。其眼の覺めない、思想の後れて居ることは他の方面の進步に比べて不思議な程である。女子敎育に

從事するものは勿論、之について言説せんとするものは今少し最近の歐米に於ける思想をも理解し、今少しく深く考へるやうにして貰ひたいものである。

時代の要求に應じた教育

三輪田高等女學校教頭　三輪田元道

女子教育の根本方針をお話しする前に、二三歴史的學說を引用する必要があらうと思ふ。先づ女子教育といふ上に就いて世界の思想界に二つの異彩を放つものがある。一つは西洋の思想であつて、他は支那の思想である。

此二つの國を異にし時を異にした學說に相一致する所のあるのは面白い現象だと思ふ。

支那思想の根本は支那哲學から割出したものである。福澤先生が新女大學に男を主とし女を從とするのは根據のないものであると言つてをられる。常識の發達した先生としては適當な考であらうと思ふが、要するに先生は哲學が嫌ひだつた立場から割出されたものであらうと思ふ。

支那哲學は一元的に玄を立てゝ、玄の分れて陰となり陽となり、複雜な變化が終に萬物を形作るに至つたのであると說いてゐる。支那思想の上から言へば統一が取れてゐると謂はねばならぬ。これが果して眞理であるか否かは疑問であるし、牽强附會な所も出て來るし、男主女從と言つても肉體的に言つたのか、精神的に言つたのか、それも判然としない。要するに觀念の取扱であつて、支那思想に基いた道德を悉く實行してゆくのは困難であるが、思想の統一の上に教育が立つてをる事だけは認識せなければならぬ。

西洋ではルッソー、コントの哲學者が不思議と支那式の思想を有つてゐる。それは時代の然らしむる所てあるが、將た偶然かは知らぬが、恐らく彼等自らの内に生れたる思想であらうと考へられる。

ルッソーは一切の歷史を打破し理想的生活を人間界

に實現せんと欲した。彼は歷史を破壞したに拘らず、政治社會の方面に於いては民約說に表れてをる如く自由となり平等となつて唱へられ、その自由平等を唱へたに拘らず女子敎育に關する彼の考は著しく支那式にして彼の理想とは一致しない所がある。エミールのソフイヤは從順にして家事に勉勵する女である。一寸不思議な現象ではあるが、彼の考は政治宗敎哲學の革命てあつて、敎育に至つては甚だしく實際的の立場に立つてゐたからてある。

コントは言ふまでもなく實證哲學の開祖てあるが、其東洋式てあつた所以は機關的組織の統一が學問の目的てあると考へたからてある。男女は分業的に考へると外と內とに分れる。而して彼は彼の考を社會組織の上においたが故に其學說の據つて出づる所決して偶然てはないのてある。東西兩洋に表れた此思想は今日から見ると不思議に一致した女子敎育觀が唱へられた譯てある。

偖今日婦人界の新傾向、新しい女の運動はルッソーの考から出發したものてあるといふが、それは臆說てある。全く其趣きを異にしてゐる。卽ち此傾向は純文學の產物てあると言つてよい。哲學は形式を取扱ひ、文學は社會の血となり肉となつて顯れる。文學は感情的てあるが故に往々理性を超脫してゐる。寫す所は實際社會てあつても、其志す所は實際社會を超脫する所にある。故に女は男に對する社會的生物てあるといふ事實を離れて、何れも同じき一個の人として見んとしてゐる。是が抑々今日の傾向を惹出した因とも見られる。

之を哲學の方面から見ると、ミルは一哲學者てあつて、婦人解放の開祖てある。社會の種々雜多な因襲や羈絆に囚はれしめることなく、自由を與へなければならぬといふのてある。然しながら一般に純文學の刺戟は强烈て、イプセン、ズーデルマン、ショーの描いた女主人公の或者がそれてある。が日本に於いては未だ新しい女はゐない。少數の團體も未だ眞の婦人運動とまでは行つてゐない。幽靈の正體見たり枯尾花て、徒らに空騷ぎを爲てゐるのではなからうかと思ふ。

そこで私の女子敎育に對する態度は何うかといふに一言にして謂はゞ折衷派である。古來折衷と平凡とは隣り合せてある。然しヘーゲルの哲學が說くやうに、ジャボンの枝に枝が附くが如く肯定と否定と、肯定と否定が軈て進歩の基をなすものとすれば、折衷說は必ずしも排斥すべきものではなからうと思ふ。人を人として敎育することも素より必要である。機械の如く人形の如く之を取扱ふといふ事決して當を得たものではない。又支那思想が敎ふるやうに「百里にして喪に奔らず」とか、「男女七歲にして席を同じうせず」とか言ふやうなことは今日之を採用することは出來ぬ昔の夢である。今日男子の敎育と女子の敎育とを區別するが如きは間違ひである。文字文章に至つても男と女とを區別し、數學の如きに至つても男の數學と女の數學とを區別して敎ふるが如きは甚だしき迷惑と謂はねばならぬ。男女共に人である以上、人としての敎育を施してゆくことに努めるのは當然の事たるべきであらうと思ふ。

然しながら又玆に整然たる男女の區別のあることも事實である。子を產むことは男には出來ない女の特徵である。裁縫とか料理とかは男にも出來るのみならず專門大家は寧ろ男子に多い。只出產と育兒とは女の天職である。裁縫とか料理とかの現在女の職業とせらるる所のものも、世の進歩に連れ、分業組織の發達に從つて必ずしも職とせねばならぬことはない。只育兒だけは母の任務として女特有の性質を有するものである。キリストをして神たらしめたのは偏へに母の愛に因る。人間を作るのは母たる者の務である。女は母たり妻たるべく作られてゐる。然しながら敎育は女の妻たり母たるを强ふる必要はない。之を自然の儘に放任しておいても女は妻となり母となるべき性質を有つてゐるのである。であるから妻と成り母と成つた場合には斯くすべきであることを敎へるのは可い。時に結婚をしない女があるからとても、之を罵倒したり嘲笑したりするのは思はざるの甚しきものである、と謂はねばならぬ。

之を要するに女子敎育の根本方針は、先づ人としての女を作り、次に妻としての女を養ひ、最後に國民としての女を養成する事に力めねばならぬ。結婚するとしないとに拘らず女は人てある。故に人としての女を養ひ、次に結婚をした場合に執らねばならぬ女の務を養ひ、最後に國民として生産力を養ひ、政治の良否を判斷し、立憲政治の運用等を考へる事の出來る女を作るべきてある。てあるから妻として淑徳を養ふべきは言ふ迄もないが、尙其上に有爲有能にして夫の内助となるべき賴母しき女を作ることが必要てある。而して吾吾敎育者は現實に立脚し、理想に片手をおいて理實と理想との地平線上を辿つてゆかなければならぬ。常に一定不變の理想に向つて進む譯にはゆかない。時代の進運に伴ひ、時代の要求に應じて女子の敎育を施すべきてある。一定の型に嵌めて動かさざらんとするは蓋し誤れるものと言つて可なりと思ふ。

人、女、國民としての敎育

日本女子大學校長　成瀨仁藏

女子敎育の方針は之を三種に分つことが出來る。第一に人としての敎育、第二に女としての敎育、而して第三に國民としての敎育てある。女は妻てあり母てある前に先づ人て無ければならない。女も男と同じく人てある以上、男と同じく人としての敎育を受けねばならぬ。然しながら女は何處までも女てある。男の爲すべき任務とそこに自ら區別せられたる任務を有する。彼の新しき女の主張が往々にして男女の差別を無視せんとするが如きは思はざるの甚だしきものと言はねばならぬ。最後に女といへども之を國家より見れば國民てある。國家に生存する以上は女も國民としての任務を有しなければならぬ。吾等は此見地よりして女子敎育を掌るものてある。是れ即ち女子敎育の根本方針と言つてよからうと思ふ。（談）

時勢に適應する婦人を作れ

文學博士 井上哲次郎

近來日本の女子の事について論議するものが餘程多くなつて來たのであるが、之は女子の思想上に著しき變化を來たした結果、或は之を非難し、或は之を贊成し、或は之を矯正せんとするものが種々なる方面から起つて來た爲めてある。就いては日本の女子敎育も亦從來の方針を一變すべきてあるかどうてあるか。そこに疑問を生じて來る次第てある。

處が女子敎育はどうしても實際社會の要求に應じて施して行かなければならぬ。社會の要求を顧みないて敎育を施すといふ事は迂濶な仕方てある。そして又必らず甚しい非難を招く原因てある。さういふ點から考へて行くと、どうしても多數の女子といふものは、結婚をして家庭を作るべき運命を負うて居るのてあるからして、さういふ女子に適切なる敎育を施すより外はないのてある。之は從來もさういふ事て來たのてあるが、今後と雖も大體に於てはそれと違つた事はなからうと思はれるのてある。

それて女子といふものは先づ男子と同じやうに一個の人格として立派な素養を得なければならん。詰り人としての立派な資格を得るやうに敎育を施さなければならぬ。立派な人格となれば、人の妻となつても又人の母となつても必らず立派な行をするに相違ない。それに女子といふものは、必らずしも妻たり母たりといふ事だけてはないのてある。又其外にいろ〳〵な關係を生ずるのてある。或場合には人の長となる事もある。例へば女戸主となつて多くの丁稚小僧を使役するやうな事もあり、又人の朋友てある關係もあり、又工女や何かのやうに人に使役せらるるやうな境遇にあることもあり、又隨分高貴の地位に立て多數の人に尊敬せらるるやうなのもある。兎に角女子の境遇はいろ〳〵ある。單に妻たり母たる境遇のみてはない。そこてさういふ種々なる違つた境遇に對して一個の人格として恥

かしからぬ立派な措置を採る様にするには、どうしても人としての資格を養成しなくてはならぬのである。それであるから女子を教育するのに單に女子としてのみ教育するにあらずして、男子と同じく一個の人格として教育しなくてはならぬ。夫れ故に國民教育に於ても、初めには男女共に同じ教育を施す。教科書なども同じである。けれども段々成長するに從つて多少違はなければならぬ。もし高等小學になれば同じ教科書では困る。中學程度になれば尙更ら區別する必要が多くなる。然しそれは何ゝ女が男より劣るからといふのではなく、男女の職分が違つて來るからの事である。例へば同じ男子の中でも目的によつていろ〳〵其教育を違へて行く。實業家になるものは小學校からして直ぐ實業學校へ行く。又同じく實業學校といつても商業に行くものあり、工業に行くものもあり、又農業に行くものもある。又宗教に行くものは早くから宗教學校に行くといふやうに、男子の中でも將來の目的によつて教育を異にする。それと同じく男女は各ゝその分業があるから、從つて女子は女子の將來に適する教育を受けるのである。さうしないと、社會の爲めにもならぬし、又當人の爲めにもならぬのである。それで成長するに從つて女子の教育は男子と違つて來るのである。而して其最ゝ違つて來る所は何處にあるかといふに、女子は人の妻たり人の母たるといふ處にある。これが最も顯著な點である。即ち世間でいふ良妻賢母主義の教育を必要とするのである。

處が近來女子の思想に一大變化を來たしたのであるが、其變化はどういふ事かといふのに、女子の獨立自由を主張して、そして人の妻たることを嫌うて、結婚を拒み、家庭を嫌ひ、哺育を嫌ひ、總てさういふやうな、面倒な煩さいやうな事を嫌つて、氣隨氣儘な放縱生活を選ばんとする傾向が見えて居る。尤も其中には女子の自覺といふべき、いゝ意味も混つて居るが、今の處では混濁して居つて純粹のよいものばかりでない。自覺といつてもまだ朦朧たる所があつて品行や何かの點に於ても甚だ忌むべきことが少くないやうであ

る。そして倫理や宗教や、すべてさういふものを拒絕して、刹那〳〵の生活――彼等の所謂現實主義に囚はれた有樣であるからして、どうも崇高なる倫理や宗教を以て自ら律する賢夫人のやうな狀態を見出すことは出來ない。さういふ女子が一轉して非常によくならうといふのには、今のやうな思想では駄目である。今のやうな思想を以たて充されて居る女は、日本の堅實なる將來を造り出すには餘りに不健全であつて又其基礎があやふやである。そしてさういふ思想は確かに起つて居るに相違ないけれども、日本の女子の全體からいへば誠に一小部分である。一小部分ではあるけれども、比較的教育ある女子の間に其思想が蟠つて居るので、之が長い間には多數の女子の思想を誘拐する惧れがある。それで將來を考へるとなか〳〵油斷はならぬ。隨つて女子教育の方針を如何にするかといふ事がなかなか大事な問題となつて來るのである。

一體國民教育は將來の國民を作るべき大切の機關であつて、其方針の良否は直ちに國家の盛衰にも關すべき重大の事柄である。若し國民教育の方針にしてぐらつくといふやうな事があれば、教育の效果を擧げることなどは思ひも寄らぬ。そこで現在に於て不健全なる考の女子が多少あつても、國民教育は其等のものに動かさるゝことなく、何處までも實際生活といふことから眼を放さず、人の妻とし、人の母として立つに充分なる教育を施さなくてはならぬ。けれども人の妻たり人の母たりといふ意味を餘り狹く解するのは宜しくない。妻や母たることのみを考へて同時に一個の人格たることを忘れてはならぬと思ふ。

良妻賢母といふ事については、世間何人も固より異論のあるべき筈がない。不良なる妻、愚昧なる母となるやうな教育を婦人に施せといふ人は一人もなからうと思ふ。又如何なる男子と雖も自分の妻を迎ふるに方つて不良なる妻を選ぶものはない。又自分の母の不賢なるを願ふものも決してない。それだから實際生活に照らし合はして考ふれば、どうしても妻としても母としても申分のない立派な女――即ち良妻賢母たるべき

婦人を養成するとが女子教育の根本であらねばならぬとが分らうと思ふ。只然しながら何が良妻たり、何が賢母たるかの內容に至つては、時勢によつて多少異るのであるから、教育の任に當るものは此點を充分注意して、よく活社會の實務に適應することが出來る良妻賢母を作らねばならぬ。昔の封建時代の儘の良妻賢母ては今日の時勢に適しない。夫れ故に名こそ昔と同じ事であれ、其良たり其賢たる內容に至ては大いに違はなくてはならぬ。故に教育の任に當るものは活眼を開いて活社會の趨勢を見て、時勢に適應するやうな良妻賢母を作らなければならぬと思ふ。

女子教育の根本的方針

實踐女學校長　下田歌子

女子教科の根本的方針に就きて卑見を述べよとの事てありまするが、是は中々容易の問題てはありませぬし、病後の身の、殊に學期末と云ふ多忙に際し到底熟考するなどの事も出來ませぬから、お尋ねの御希望には添ひますまいが、唯打ち思ふ儘を簡單に申し述べる事と致しませう。其故この問題にもきつぱり當て嵌らぬやうな所は切に勘辨を願ひます。

右は女子教育としては輕からぬ問題てありますから、自分は是を容易に論定解決しようとするのてはありませぬ。自分は唯此の問題に對して斯くもあらなんと欲する所の希望の一端を申す迄てあります。

扨目下の女子教育の目的方針は種々に分れて居るやうてすが、先大別すれば雜と二つになりませう。この二つが最も多くの人の唱へて居る所てあらうと存じます。乃ち賢母良妻主義て、女子を教ふるには必ず成長つては他に嫁ぐべきもの、嫁がば良妻たれ賢母たれよと申すのてありませう。今一つは人格を作れと云ふ主義て、これは何も女子だからとて、必ず結婚をしなくてはならぬと云ふ譯のものては無い。否是非とも結婚しなくてはならぬと教ふるから、卑屈にもなり因循にもなるのだ。天晴日本婦人として恥かしからぬ立派な人格となりさへすれば宜い。二十世紀の女子教育は賢母良妻たれと云ふやうな小さい範圍に押し籠めてしまふべきものては無いと申す意味てあるやうてす。が、自分が考へますには、人格を作れと云ふ事と、賢母良妻たれと云ふ事とは、どうも別樣のものては無からう

と思ふのでございます。乃ち極めて立派な人格ならば、其の他に嫁するに及びては、必ず賢母ともなりませう。良妻とも云はれませう。又其の賢母たり良妻たる人ならば、よし獨立して自己の意思の儘を行ふにした所が、必ず立派な人格であり、立派な行爲であるに相違ありませぬ。で、是は何も左樣に劃然と分けて喧ましく云はずとも宜しいであらうかと存じます。其なら如何云ふ風に女子を敎へ導くかと申すならば、其は矢張先日本婦人として恥かしからぬ人格を作らん事を希ひ、そして其の心得としては、少女としては斯く〱、妻として云々、母としては云々の行ひを修せよと申したならば宜くはありますまいか。そして尚其の上に自分が切に〱希ふ所のものは上流と云はず下層と云はず、我が大日本帝國の女性としての覺悟、委しく云へば世界特種の國家に生を得たる婦人としては、縱令草一つ採るにも針一つ運ばするにも、愛國てふ念を離れぬやうにありたいと思ふのでございます。彼の猶太人種の中には非常な利財家があり、非凡な政治家があつても、矢張亡國の民たる輕蔑を免がれませぬ。又支那國民の勤勉耐忍將た蓄財の才は、我が國民の遠く及ばぬ所でありますけれ共、其の事ある秋に臨みて、全く平素の紛紛擾々たるに似ず、一致團結唯一に君國の爲に、私怨を忘れ、名利を抛つ、天晴なる愛國心の强且大なるに及ばぬが爲に、遂に今日の如き現象を呈し來たつたでありませう。國亡びては山河ありとも亦誰と共に之を領しませう。君亡くしては亦誰の爲に誠を捧げませう。畏き事でありますが、去年の此の頃明治天皇陛下の御大喪に遇ひ奉りし時の事を考へますと思ひ半ばに過るではありませぬか。是忠君愛國心の養成は國家の方から見ては勿論大切な事でありませうが、又個人々々に取つても、大事な事であります。常に心が公けの事に引きつけられて居る時は、小さい事にくだらぬ苦勞をしなくなるものであります。昔、佛敎の下層社會に流行を極めた頃は、何一つするにも菩薩樣の御恩を忘るな。御恩報捨の心を失ふなと敎へたもので、其が中々少なからぬ功を奏しました。ですから、現今では、此の方法を再び善用新化して、何をするにも公けの爲、國の爲と云ふ事を忘るなと斯う申したいものと存じます。彼の個人主義は、我に利己主義と間違つて行はれんとする今日に於いて、第二の國民が母となり、一般家庭の柱石たるべき女子を敎育するに當りては、一層忽せならぬ事と思ふのでございます。

煙
スモオク

近代名著文庫四編

ツルゲーネフ著
大貫晶川氏譯

▲無比の美本──『死の勝利』と同裝

定價金壹圓　郵税八錢

『煙』一篇、ツルゲーネフ獨特の惋切悲痛の戀物語である。零落した貴族の娘と若い大學生との間に結ばれた情思を經として、露西亞の新時代を描いた此一篇は、數多き此作者の物語の中でも、一頭地を擢んじた傑作と稱せられてゐる。飽迄も妖艷な魅力的な、日に驕る緋罌粟のやうに常に榮華の夢に醉はうとするイリナ、敬虔な可憫な野菊のやうにつゝましいタチヤナ──。ツルゲーネフの女性描寫は、此二女性に得意の限を盡して居る。情熱的な沈欝な考へ深いリドヒノフの悲哀と苦悶とは、新時代の青年の何人と雖もよく共鳴せずには居られまい。煙！煙！戀愛も希望も今は皆果敢無い、人間のすべては煙であつたと嘆じた彼が長息に、何人かよく胸を拊たれぬものがあらう。

近代名著文庫

■死の勝利　ダンヌンツイオ作──生田長江氏譯　定價一圓四十錢　郵送料十二錢

■サフオ　ドオデエ作──武林無想庵氏譯　定價九十五錢　郵送料八錢

■遊蕩兒　オスカアワイルド作──本間久雄氏譯　定價一圓二十錢　郵送料八錢

鴨
イブセン

森田草平氏譯

第三版發賣

袖珍型天金美麗本

定價金六十錢　郵税六錢

▲東京日日新聞曰く、イプセンが五十七歳の作で『人形の家』に遲るゝ六年に出版された戲曲 The wild Duck の翻譯であるが若い寫眞師は自分の妻が其結婚以前に於て紳商と關係のあつた事を知り、愛兒も自分の子であるか否かと疑ふ、寫眞師に妻の秘密を知らしめたる『理想の要求』を叫び廻る友人も面白く鴨といふ家禽が此の事件に纏綿してゐるが、此鴨が、屋根裏に禽獸を飼つて己が小天地としてゐる銃獵ずきの老中尉が所得の一物であるなどは殊に面白い、イブセン先生は豪いと今更に敬服の次第だ、『人形の家』などよりは遙に面白い。

東京麹町區飯田町三丁目二十五番地

新潮社

電話番町二二二三番
振替東京一七四二番

（中付一の一）

青柳有美先生著

美人論

■誰も研究した事のない事が書いてある。

■美人も醜女も遊冶郎も木強漢も皆讀め。

定價七十五錢
送料金八錢

東京神田西小川町
明治出版社
振替東京三三九三四

(中付一の二)

◎現代の要求は本書に依て研究せよ讀め世の若き男女!!!

マックスオーレル著
島村抱月序
藤井白雲子譯
最新刊

若き男女へ

四六判洋装
定價七拾五錢
郵稅八錢

東京市京橋區南槇町
正文館
振替東京二一九五五

‖速かに本書を一讀して理想の家庭を作れ‖

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

蘆花 德富健次郎著

みゝずのたはこと

紙數約八百頁

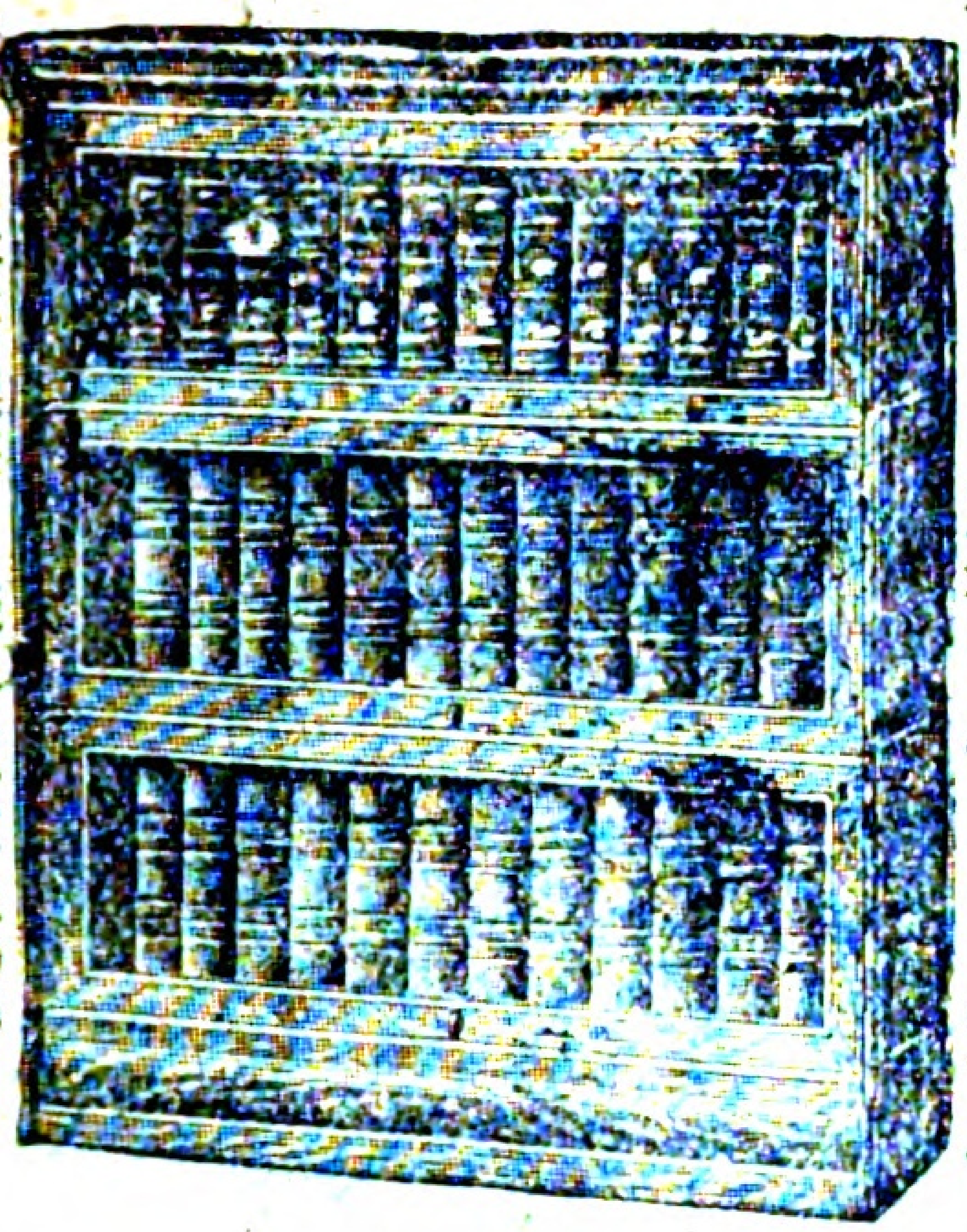
十九版

著者が田園生活の産物なる短小説、即興スケッチ、瞑想默思紀行等皆始めて世に出づるもの、みを集む雲花の歌、麥の風、涙と笑と恐怖と幽玄の詩趣卷中に充滿す、出版來既に數萬部を賣盡し十九版發賣す

定價一圓五十錢 郵税十六錢

發行所 東京市銀座通新橋際(振替東京二〇〇〇)新橋堂出版部
東京日本橋吳服町八(振替二〇七七六)服部書店

組合せ本箱



◉文明の家庭に必備の家具

▲某宮家徳川公爵家大隈伯爵家を始め其他諸名家より御註文の榮を辱ふせる本箱!!

▲多數の優美なる特徴を有し現時歐米諸國に大流行を極め居れる本箱!!

定價
金廿六圓 檜製
金廿八圓 欅製
金卅圓 櫻製
運賃荷造費御自辨構造を示せる目錄は往復葉書にて御申次第進呈

發賣所 東京市銀座大通新橋際(振替東京二〇〇〇番 電話京橋一九九番)
新橋堂家具部

健康を増進せよ!!身體の強壯を計れ

今や體力養成の絶好季!!

體力養成叢書

◎第一篇 大澤醫學博士述 **冷水浴と冷水摩擦** 定價二十錢 郵税四錢

◎第二篇 二木醫學博士述 **腹式呼吸** 定價廿五錢 郵税四錢

◎第三篇 栗本醫學博士述 **海水浴** 定價廿五錢 郵税四錢

◎第四篇 樫田醫學士述 **滋養物の攝取** 定價五十錢 郵税六錢

◎第五篇 遠山醫學博士述 **深呼吸** 定價廿五錢 郵税四錢

東京市銀座大通新橋際
新橋堂出版部
(電話新橋一九一九番 振替東京二〇〇〇番)

(中付一の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



露西亞の女

中澤臨川

露西亞の女と云ひましても、いろ〳〵な階級があるので一概にかうと斷定するわけにはまゐりません。また左樣な概括論ほど當にならないものはありますまい。殊にあの邦では平生宮廷に出入してゐるやうな上流社會と農民(ムジック)との間には其生活や風習まで全然沒交涉なほど懸け離れた所がありまして、まるで別の星の世界に住む生物ほどに違つてゐます。それからまた、近頃では餘程變つてまゐりましたが、一昔前までは斯の邦に『インテリゲンチャ』と呼ぶ一階級が在りまして、前申した二階級の何れとも似も附かない新世界を形造つて居りました。

チェーホフの『百姓』と云ふ小說などを見ますると、無智な農民の間に女性の占めてゐる位置は誠にみじめなものであります。その男尊女卑の習慣と云つたら、とても東洋のどの邦でも見られないほど甚(ひ)どいものです。露西亞の民謠を披いて見ますと、その中には家婦がその養父や夫の暴力を怨む聲が繰返し

繰返し謡はれてあります。彼の邦の下流社會にはつい先頃まで舊式の家族制度が行はれてゐて、幾十人かの大家族が同じ家に住んでゐました。その家の中では家長の勢力は無限であります。養父が嫁を暴力で弄ぶなど云ふことは平氣で行はれたものです。それでゐてまた夫の權力が無限に大きく、嬶と毛皮は打つ物だと云ふやうな意味の諺さへ行はれてゐます。「自分の嬶が打てないやうで、何が打てる。」——「俺の嬶だ、俺れの物だ」——斯んな言草もあります。十七世紀頃までは、花婿が寢室へ鞭を掛けて置いて嫁を打つたと云ふ奇習さへ傳はつてゐました。てゝ民謡には『絹の鞭』を使へなどと云ふやさしい言葉もあります。

どうです、之を今日の上流社會の女性と較べますなら、洵に雲壤の差ではありませんか。近頃の小說に現てゐるやうなあの邦の貴族社會の女性ほど虛榮的なそして不品行な者はありますまい。妻君が色男の一人や二人持つこと位は尋常の沙汰のやうにせられてゐます。ツルゲーネフの『烟』の中へ出てくるやうな妖婦も珍らしくないことと思はれます。

露西亞の歷史を研べて見ますと、女權の發達と云ふことが際だつて眼に附きます。この邦では二百年以前までは、昔の韃靼の習慣に則りまして、東洋的の男尊女卑の思想が上下の社會を支配してゐました。女子間の交際などと云ふことは全然無かつたさうです。それがあの有名な彼得一世の代になつてから西歐の文明を採入れて、女子もまた强制的に男子と同じ宴會の席へ出させるやうに致しました。それがあの邦で女權を認め始めた最初の運動でありまして、今日の覺醒的な——ソヒヤ、ペロプスカヤや、ソニヤ

コバレブスキーのやうな――女性を出す端緒を成したのでありますあの專横武斷な大帝が現代の女權運動の創始者であつたなどは、全く面白い現象で、一寸普通の歷史家の思ひ附かない點でありませう。それから後の發達は著しく顯著なものでした。これは一つには露西亞の女性の生れ付き持つ非常な美點に基因するのでありまして、その事は追々後で述べるつもりです。

この邦の青年男女にはおしなべて知識欲の熾んな、自力の充つた所があります。彼等が新しい異國の文明を採入れて、自分の物にしようとする欲望は、丁度乾いた土が雨露を吸ひ込むやうでありますニコラス一世の頃から青年男子間に自覺的に起つた斯樣な運動は女子の間にも影響せずには濟みませんでした。若い男子達は新しい眼を𥅽いて、新しい異性の間に新しい關係を覓めるやうになりました。必然の要求が相對者を動かさずに措きませうか。

「戀とは何か」――斯うレルモントフが自分の戀してゐた少女の寫眞帖に書き附けました。――「戀は肉體的にも道德的にも平等でなければならない……自分が愛せられるよりより尠く愛するとは――醜。自分が愛せられるよりより多く愛するとは――不幸。さて何方にしたのもか？」實際之がその頃の自覺的青年のうぶな疑問でした。之に對する少女の覺悟はどうありましたらうか。「自分の愛せられるだけ丁度それだけ愛すればよい」何と云ふ幼稚な答でせう。然かしその言葉の中には純白な初生的な平等の觀念が燃えてゐます。

然かしその自由も平等もさう容易く獲られる物ではありません。同じ詩人の書いた『浴泉記』の中のペ

ナロツンは實にその爲めに苦みました。彼はその戀人の至純な戀やそれから起る犧牲だけでは滿足が能きません。彼は奴隷や犬を欲しませんでした。彼は自分と對等の力のある自由の生命の籠つた人格をその戀人に望みました。それが根因でいろ／＼の悲劇が起つたのです。彼女は彼と對等の位置に自分を上げるか、それとも思ひきり成りさがつて情婦の關係にその身を置くかの二途を擇ぶほかはありませんでした。女の自覺する道には實際かうした悲劇があります。

今一つの例を擧げて見ませう。平民文學者のウスペンスキーが晩年に書いた小説に斯んな話がります。ある片田舍に、至つて賤しい醫者の代診がゐました。所がその男は仲々の理想家で、貧民を救助したり、百姓の病人を治したりして世の中の爲めに盡してゐました。然る所、彼はある頃から斯う云ふ事を考へ始めました。『どうも時によると、人は頼りにする樹蔭が欲しくなるものだ。貴下が冬の寒さに凍へきつてゐるとすると、ひま／＼には一寸溫めてくれて、二言三言話でもしようと云ふ者があつてもよいとお思ひでせう。』――恁んな調子で彼は女を捜し始めました。所が、女は幾らもあるが、彼の氣に適つた者が見付からないでゐました。一體彼はどう云ふ女を捜さうと云ふのでせう。彼の首根つ子に噛り付く女のかず／＼を見て、彼は斯う言ひました。『一寸も發達と云ふものが無い。たゞ彼等の頭には純白な狂氣があるだけだ』と。が、兎角するうちに、一人の若い後家さんが彼の心を牽きました。彼女だけは代診の心を解してくれるやうに見えました。然かしいざとなつて見ると、彼女は三人の孤兒を自分と與に連れ込まうと云ふのです。之では彼はその理想とする仕事に手も足も出ないことになる。『女と云ふ奴はみんな

公益を斯んな意味に採つてゐる」と言つて、彼はあわてゝ逃げ出しました。

同じやうな冒険が幾度か續きました。そのうちに彼は、今度こそはと思ふやうな綺麗な聰明な娘の子を搜し出しました、彼はその女の爲めに、いろ〳〵の書物を買つてやつたりして教育いたしました。すつかり自分の理想に協つたやうに仕上げてから、愈々結婚と云ふことになつたのです。すると間の惡いものでふとした事から彼は斯う云ふ事實を見付け出しました。今までにその娘は、彼に知らせずに、幾度か彼の所へ來る貧しい病人を斷わつたことがあると分かりました。娘の方でも惡い氣でやつた仕業ではない。つまり彼の爲めを思ふからで、夜中に彼の疲れて寢てゐる所へ來た者などをちよい〳〵無斷で返したと云ふに過ぎないのです。所が、理想家の代診にはそれが氣に適りません。この女もまた彼の心を全然酌みとることが能きないと見て取つて、斷然離れて了ひました。『私は淋しい町へ隱遁して私の義務だけを盡さう。女の愛などは私にはもう用がない。それは却て私に害をなし、私の良心を弱めるだけだ。もし私から良心の光が失せて了つたら、それこそ私は何になるだらう。唯だ種族を增やすだけに生きてゐるやうなものだ。……女には善やそのほかの德はある。然かし智的發達にかけては全く狹いものだ』と、斯う彼は言つてゐます。

ウスペンスキーの筆は例に依て滑稽趣味の勝つたもので、この代診も一種のカリカチユアのやうに描かれてありますが、その根柢には仲々眞面目な時代問題がひそんでゐます。要するに貴族的なペチヨリンにしても、この賤しい代診にしても、自分の要求に應ずる新しい智的自覺の女を覓めてゐるとは確か

てあります。かやうな男性の要求、斯樣な熱望がその反響なしに濟まされませうか。

露西亞にピザレフと云ふ名高い批評家がありました。その人が或る小說を評した文章があります。其小說の筋と云ふのは、一人の田舍娘――至極のお人好ではあるが、敎育のない、至つて無智な世間並の娘が戀をして、男に騙されて、散々な目に遇つて、あらゆる不幸を見ると云ふのであります。この小說は甚だまづい物であるが、ピザレフの批評で却て名高くなりました。彼は斯う言つてゐます。斯樣な女は世間に幾らもある。殆んど總ての娘達の運命がみなそれである。で、彼は斯樣な女の事を『金巾娘』と呼んでゐます。言ふ意味は、世の中に對する彼女の知識は彼女の金巾の着物の範圍を出てない。金巾敎育を受けて、金巾流の考でゐる娘達の運命は、何うしても此小說に描かれた女のやうな羽目に陷らざるを得ない……と云ふのであります。で、當時に於けるこの文章の影響は非常なものでありまして、どの娘もどの娘も皆んな之を讀みました。今でも盛にそれが讀まれてゐるさうです。『自分は何うあつても、慘めな金巾娘にはなりたくない。知識を養つて世間を覺えやう。自分でも充分に物を考へやう。それで自分の未來を作つて行かう。』斯う云ふ思想があの邦の新女性の間に漲るやうになつたのです。

本然の性質に於ては、露西亞の女性はその男性に比して非常に優れてゐるやうに思はれます。ツルゲーネフの小說を多く讀んだ方は、必ずこの事に氣が附かれたとと思ひます。一體に露西亞の靑年には意志の堅固でない、所謂ハムレット型の意氣地無しが澤山にあるやうです。露西亞で言ふ『オブロモフ主義』がさうです。プーシキンのオニエギンでも、ツルゲーネフのルーヂンでも、小說などに現て來る大概の人

物が皆この型にはまつてゐます。之に引代へて、此邦の女性には意志の非常に強い、外柔內剛て、はね返りてなくて知識欲の克つた者が多くあります。て、斯樣な美德を供へた女達が、時世の要求に連れて、次第に覺醒して來た狀態は實にめざましいものてした。私などがよく外國の小說などを披いて見ます時ても、いつも斯樣な露西亞の女性に出逢つた時ほど、好ましく心行くとはありません。從順て、質素て、優雅て、非常に献身て、それてゐて意志が堅固て、自由を愛するとが何よりも強い。實際クロポトキンが言つたやうに、斯樣な女こそ露西亞が持つたつた一つの貴い寶かも知れません。

プーシキンの『オニエギン』と云ふ作が、先づ斯樣な新女性の出現を第一に豫言して居ります。田舍の物持の娘、後にある將軍の所へ嫁入つて、交際社會の花と謳はれてゐる女主人公のタチアナが古い戀人に遇ふ條下があります。その戀人は昔の田舍娘のタチアナを嫌つて、振向ても呉れなかつた。それが今は時めく彼女を見て思を焦してゐるのてあります。て、タチアナがその男に答へる獨語が名高いものてす。……妾も昔は若かつた。もつと美しかつた。その時妾は貴君を愛してゐました。然るに田舍娘の戀は貴君の好奇心を牽くに足りませんてした。貴君は今日の妾の富や名譽を羨んて來られたものてせうか、お聞きなさい、その富も宮仕ひのきらびも實は妾には空なものてす。美しい衣物や贅澤な舞踏會を妾は好きません。小さい本棚と、荒れた庭、その昔貴君に逢つた田舍の茅屋、戀しい乳母の眠つてゐます樹蔭の墓が何よりも妾にいとしいものてす。……この有名な詩聖の句は永久に露西亞の若い娘達の心に繰返し繰返し響かなければなりません。

ゴンチャロフの小說『オブロモフ』に現てくる女主人公のオルガは矢張このタチアナに似た性質の女で、豐富な露西亞文學の有するいろ〳〵な性格の中でも、際だつてよく描かれたものであります。その主人公のオブロモフほどまた露西亞流の極端な物臭さ主義の代表者はない。田舍の貴族の家に生れて、幼ない頃から何一つ自分の手に懸けたともないほどの彼は、寢返り一つ打つとすら物憂いと云ふ有樣でした。オルガの熱心な戀も、彼女の强い意志の力も彼には何の手答がありません。彼等は遂々思切つて別れるとになりました。「では私達は別れませう……」斯うオルガが申しました。「若し私達が結婚したと致しましたら、行末はどう成りませう。貴君は毎日毎日寢てばかりゐられるに違ひない。必然さうです。でも、妾としては――貴君の御存じの通り――唯だ年を老るとの能きない性質です。妾はいつまでも生活に疲れません。それだのに、私達は同じやうな日を迯り歲を迯つて、クリスマスの日を待つたり、謝肉祭を迎へたりするのでせう。夜會へ行つたり、踊つたりして、わけもなく其の日を暮すのでせう。一日の空しく過ぎたとを神樣に感謝して夜の床へ這入るのでせう。そして今日も矢張昨日のやうに無事であれかしと祈り乍ら朝の眠を覺ますのでせう。それが私達の行末でせう。必然さうです。然かしそれが實際の生活でせうか、妾は必然その下で萎みます。妾は殺されます。それでは妾が貴君を幸福にするとが能きますまい。」

一たん自覺に達した後の、その邦の女性には斯樣に强い賴母しい意志の閃めきが認められます。何が社會にこれほど貴い寶がありませう。ツルゲーネフの『通信』と云ふ小說の中へ出てくる娘は、矢張男

に騙(だま)されて不幸な目に逢つた女ではあるが、最早前申しました無智な金巾娘ではありません。「自分で物を考へることを臆劫(おつくう)とも困難とも思はない」自覺の人であります。彼女は少女の憧憬と、之に對する異性の不可抗な力とを能く知つてゐますが、また移り易い男の心を見破るだけの眼を持ち、失戀の齎す不幸に打勝つ覺悟をも能く心得てゐました。「之が總ての終だと云ふことを直に見ぬいて、あだな希望に迷はされない娘は仕合です。どんな勇敢な正直な男方でも、在りのまゝの事實を妾達に打明けるだけの勇氣と熱望を持つた方は尠ないものです。……兎もあれ、妾は斯う信じてゐます。貴君方(あなた)は妾どもを騙(だま)すとともに御自分をも欺いてゐられるのだ」と。……何と云ふ貴い諦らめてありませう。そこには最早奴隷的の卑下はありません。却て高尚な自覺的の犧牲心が閃めいてゐます。眞如の女性の面影が見えます。

こゝまで覺醒した女になりますと、もう男子と同等だけではありません。寧ろ同等以上です。殊に露西亞のやうな國柄では、無氣力な男子がその爲めに女子に勵まされて、行く道を敎はるやうなことは珍らしくありません。ルーヂンのナタシヤに對する關係などは正にそれであります。

ノランデスの「露西亞印象記」に次のやうな事實が物語られてゐます。暫く聖彼得堡にゐた有名な外國人が、その滯在中に十七歳になる或る露西亞の娘と知合になりました。その娘は容貌(きりやう)の好い、悧發さうな眼付をした、深切でそれでゐて擧動(そぶり)の至つてはき〳〵した女であつたが、その娘が、彼の出發の間際に次のやうな手紙を送りました。

「この場合は丁度好い機會(をり)だと思ひますから、失禮ですが私の思つてゐる事を、少し言はして下さい。

これは私一人の申すことではありません。まだ貴下がよく御存じない露西亞の青年の大部分に代つて申上げるのです。一昨日D——家でお會ひ申したとき、お話するつもりでしたが、わづかに數分間では兎ても盡きないので止めました。貴下は若い人達と知合になることが比較的少なかつたと惜しまれましたが、それは貴下の御滯在の時期が丁度惡るかつたからです。どの公立學校も唯今試驗中です。然かし、そんな事情が全くないにしても、露西亞の青年達は貴下と充分知合になるわけにはまゐりません。私どもは人生の最高善——自由と、それから離れがたき凡ての幸福とを奪られてゐます。然かし人生に意義と價値とを賦へる其たゞ一つの物に私共が冷淡と思召されては困ります。もしも運命が私共にほんの僅かでも幸福を送つて吳れますなら、私共は貰つた凡てのものを人一倍に愛します。また人一倍に尊重します。私共は何よりも解放的な科學を喜びます。露西亞の青年には自分達の感じたことを筆に現はす事さへ許されてゐません。然し、それが爲めに貴下が眞の事情がお解りにならないので、私達に就て不當な印象を懷かれるやうでは私は愛國者として默つてゐられません。貴下は嘗てルーヂンは露西亞人の無氣力な性質の代表者だと申されました。それを承つたとき「無氣力！」と憶ふ私は歎息いたしました。否え違ひます。露西亞文學はたゞ露西亞國民の生活と生格との不完全な反照だと云ふことを憶えてゐて頂きたい。よしんば、彼のやうな者が私どもを啞にし聾にしようとも、私共はそんなことに敗けない少數者である事を忘れないで頂きたい。兎に角、私共は實際にルーヂンのやうではありません。ルーヂンは賢こい、多少は物のわかる男でしたが、然かし精神の薄つぺらな男でした。彼は何人をも何物をも愛しませんでした。彼

は美しい理想に魅されてゐました。然し同胞に對する誠の熱心な愛に牽かされたとはありません。彼がナタシャに對する戀の破れたのも、殊に人生に失敗して英雄になり損つたのも、全くその爲めです。然かし神に誓ひます——決して私共を人世の物憂き戰に對する失敗者だと思つて下さいますな。全くそれは寃罪てす。他日必ず露西亞が其政治上の痼疾から救はれて、自由に男らしく現はれる日があると私は確く信じてゐます。私は露西亞の國民を信ずるばかりてなく、我々の教育ある青年を信じ、眞なるが故に美なるあらゆる物に對する彼等の受容性を信じます。それは私共が事物の意義を闡明し、我々により廣い眼界を開いてくれる人々には深い尊敬を拂つてゐるのてもお判りになりませう。』

これが生粹な露西亞氣質の娘てあります。斯樣な女が實社會に立つた場合はどう云ふ行動を採るかと申しますと、それは、一八五五年頃から其邦に現はれた社會的革命の波に煽られて、最も鮮明な印象を殘して居ります。ツルゲーネフは早く斯樣な女性の出現を觀察致しました。『その前夜』の中のヘレンがそれてあります。彼女は陰鬱な家庭生活に堪へられるには餘りに生々した女てした。彼女はもつと廣い活動の世界に憧れました。『善人になるだけては充分てない。進んて善事を爲なければならない。——さうだ、それが人生の最大事だ。』と、斯う彼女はその日記に書き付けました。彼女の周圍には二人の戀人がありました。一人は藝術家のシュビンて、多少の天才を有つた男てあつたが、一種の輕薄才子て、兎てもヘレンの理想には添ひません。今一人は、極く眞面目な未來の大學教授て、ほかに申分のない男てあるが如何にも氣力の足りない男てした。彼女はまだ滿足を得られません。そのうちにブルガリヤの愛國

者で故國の爲めに自由を恢復すると云ふことを唯一の目的にして努力してゐる男が現はれました。彼は鐵石のやうな意志を持つて、あらゆる哲學的の冥想などには一切眼も呉れずに、ひたすら行爲の前に盲進いたしました。ヘレンは遂々無理やり彼の跡を追ひかけて縋り附きます。愛國者も彼女の熱烈な意志に力を得て、共棲を許すと云ふのであります。『よろしい、然らば神と萬人の前で私の妻になれ。』

斯樣に露西亞の女はたゞにその夫を愛しうるばかりでなく、英雄や殉難者をも愛しうる廣い力を持つてゐます。否な、彼女は社會的理想をも愛しえて、その爲めには自分も英雄となり殉難者となることが能きたのであります。ネクラゾフの『露西亞の女』と云ふ詩にはその意味の事が歌つてあります。彼女は高尚な志望を持つた男子の伴侶となり、慰藉者となりして、彼等の事業を助ける上に、どれだけ功績があつたか解りません。前にお話したヘレンのやうな女の實例は幾らでも擧げえられます。つい四五年前の事でありますが、ナタシヤ、クリノバと云ふ女がありました。背のすらりとした、顏の蒼白い、黑い髮の毛と灰色の眼を持つた有名な美人でした。彼女の夫と云のは有名な革命黨員で『熊』と云ふ綽名で知られてゐました。彼等は或時芬蘭から本國へダイナマイトを密送するに就て、新婚旅行の服裝をして、汽車へ乘り込みました。彼女が盛裝して列車中の奏演會などへ現ますと、何處の女王かと怪まれるほど引立つて見えたさうです。所が、彼女の夫にはいつも乞食に物を惠む習慣がありました。それを刑事が能く知つてゐたので、彼等のある者が乞食に化けて、途中でその夫を捕まへました。男は直ちに死刑に處せられました。彼女も死刑の宣告を受けたが一等を減ぜられて、鎖附きで十五年間シベリヤへ流されました。

女の鎖附きの流罪人と云ふのは彼女が始めてださうです。仲間の噂さては有名な「熊」を助けて、あれだけの仕事をさせたのは、彼女の功が其大半に居ると謂はれます。

統計に依りますと、自分から進んで、男の追放人に随いて西比利亞まで出懸けて行く女が年々二千人からあります。有名な醫師のミワィヤル博士が刺殺の陰謀に加はつて流刑に處せられた時に、高貴な位置にある男爵夫人のレーピンデルが其跡を追ひました。

然様な女達の中には辛抱強く、氣丈て、いかなる苦惨も反抗も物とも思はないやうな者が澤山にあります。ある若い細君て、矢張西比利亞へ流された女が、斯んな手紙を書いてゐます。『親愛なる友人諸君——皆さんは嘸ぞ私の身の上を氣づかつてゐて下さるてせうが、私に取つては一生涯こんな幸福なことはありません。私に嫌氣の差しかゝつた、いとしい夫と暫く別れてゐるのも愉快てなりません。然し、そんな些細なとはどうても可いのてす。私はこの町の囚人として扱はれませんて、女王のやうに款待されてゐます。町中のものが、みんな流罪人か、その子孫か若、くはそのお友達てす。みんなが私に深切——いや忠義——を盡すので競爭して呉れます。どんな晩ても、私は舞踏會へ行かないとはありません。此處はほんとに舞踏の天國てすよ。……』何と云ふ氣强い快活な女てせう。

また斯様な女達の中には如何なる權勢の前にも決して膝を屈しないと云ふ氣慨が現はれてゐます。斯んな話がある。毎年一回の復活祭に皇帝は聖彼得堡の帝國女學校を訪ふ例になつてゐます。その時皇帝は好意の章として其ポケットから手巾を落すと、姫達が我勝に之を握み合つて片々に引裂いて、皆んな

てその一片を取る。それから皇帝はそのうちて一番優れた少女を引抜いて一緒に食卓に就きます。皇帝の箸の付いたお餘りの皿を貰つた少女は非常な光榮とせられてゐるのてす。然るに茲に亞歷山二世を驚倒さした一珍事が起りました。帝が例の通り臨御の折、其學校て一番優れた生徒として、同じ食卓に就かしめた波蘭の一少女に、帝自ら焙肉と馬鈴薯の皿の餘りを授けて遣りますと、少女は靜かに給仕をさし招いて、その儘其皿を渡してやりました。

權勢威武に屈しない斯樣な態度と、前の話のやうに辛抱强く强情な性質とを合せた實例があります。これも未だ十年を出ない最近の話てすが、カラ地方て其處の總督が監獄を見舞に行つた。その時總督は檢閱して歩き乍らベンチに腰を掛けてゐるエリサベス、コバルスキーと稱ぶ女の前を通りかゝりました。が、女は一向平氣なもので、頭を下げるてもなければ見向きもしないのです。總督は怒のまゝに嚴しく彼女を睨み付けて、地方の上長官に對する無禮を詰りました。その時女の答が斯うてす。

『妾が貴下を選擧したわけてはない。』

て、彼女は矢張腰を下したまゝて見向かうとも致しません。總督は憤の餘り部下に命じて直ちに彼女を他のより過酷な牢室に移しました。所がどうてせう。左樣な私情の取扱には他の女囚が承知いたしません、彼等は總督の轉任を强ひるために三度まて「飢餓同盟」を行りました。その最後の同盟は實に十六日間繼續したさうてす。或る若い女囚などは、自ら總督に面會を求めて、いきなり其顏面を打つたと云ふとほど反抗を續けました。それから後の成行は聞洩してわかりません。

實際斯樣な女達の淨い信念が何處まで堅いかと云ふとは想像以上です。コレレンコオの小說に『奇怪』と云ふのがあります(確か森鷗外さんが何處かで譯されました。)

その筋は一人の革命黨の貴女を二人の憲兵が西比利亞まで護送してまゐりました。所がその一方の男が女の若くて綺麗なのに戀慕し始めました。彼は無教育な兵士でしたが容貌は立派な男でした。彼女はその男から自分の行先を聞知つてから申しました。『よろしい其處には妾達の同志がゐます』。で、その目的地に着くや否や、女は嘗てから名を聞いてゐたが、然しまだ見知らない青年の宿へさつさと行つて了ひました。そのうち彼女は肺病を煩つて床に就きました。一ケ月程たつてから件の憲兵はまたその町を通つて、彼女を搜し當てゝ、宿へ行つてみますと、例の青年が其病床で看護してゐるのを見ました。そして彼女とその青年とが今日までも猶ほ形式的な"you"で互に呼び合つてゐるのを見て驚いたのです。何う云ふ羈絆が彼等の間をかう深く深く結び附けてゐるかと云ふ事が憲兵には第一の不思議でありました。勿論普通の男女間の戀でないとは明かでありますが、さりとて主義の友と云ふやうな高尚なとは彼には判りません。そこで憲兵は自分の積る思を打明けて女を口說いて見た所が美事に跳付けられました。彼女は男としての彼を嫌つてゐたのではありません。たゞ彼が憲兵である、彼女の奉じてゐる道を妨げる者だといふ上から彼を憎んだのであります。彼女の眼から見れば憲兵は自分等を迫害する一つの道具に過ぎないのです。あはれな憲兵にはその道理が薩張呑み込めませんでした。それが彼に採て第二の不思議であると云ふのです。

同じやうな例が尚ほあります。質素な服裝をした一人の聰明な若い娘が、オレル地方の或る田舍町にやつてまゐりました、寫眞から死んだ者の肖像を引延ばすつまらない生業て其生計を立ててゐました。彼女はずつと前から他の娘達と一緒に百姓の間に雜つて、讀書の道を教へたり、百姓の妻に裁縫を教へたりしてゐました。彼女は矢張當時の幾多の青年のやうに『平民の中へ行く』とを理想としてゐたのてあります。彼女はその高い信念から貴族や金持を嫌つてゐたとは非常なものてした。まるて彼等は人間てないやうに思つてゐました。所が、段々と馴染になるにつれて彼女が信用し始めたたつた一人の貴女がありました。その時彼女の言つた言葉が面白いてはありませんか。『貴女は人間らしい、私共の一人と思ひませう。』

近頃ては西比利亞の流刑地も段々と賑つて來て、流罪人同志ていろ／＼な機關を作り出すやうにもなりました。苦みの中の樂園てす。共濟組織もあれば、共同臺所もあり、小さい乍らに圖書館を造つたり、時折は眞面目な講演も開かれるのてす。實際其處は彼等に採つては好い試煉場てあり、學校てあります。二三年前に西比利亞のある町に、矢張流刑人て、同志から『菫』と稱ばれてゐた廿歲ばかりの娘がありました。彼女は十六歲の時に何の咎もなく、全く、無實の罪て此處へ連れられて來たのてありますが、そこて色々と教育されたり、四邊の人々の信念に動かされたりして、遂々自分の邦の歷史や革命の眞意を解するやうになつたと申されます。鳶色の髮の毛の愛くるしい彼女は今日もなほあの荒涼の地て難業苦業を積んてゐるとと思はれます。

私の話は思はず側へそれましたが、その序に今少し革命黨の女の話をさせて戴きたい。なぜなら、露西亞の新しい女を好く解するには彼等の顔を十二分に見知つて置く必要があるからでありなす。

ソフイア、ペロブスカヤ！何と云ふやさしい、しほらしい、快活で奇智に富んで鐵石のやうな意志の下に聰明な智量を藏した。それでゐて奉公の犧牲心の燃えるやうな、熱誠至淳の女でありませう。詩人ジヤンキン、ミラーが彼女の死を聞いて、遙々異がつた大陸から追悼の詩を寄せたのも寔に故あることと思はれます。丁度一八六〇年頃から、露西亞の邦には新しい光が生れました。その頃からその邦の青年間に起つた新運動ほど眞面目で目覺ましいものはありますまい。祖國のために、人道の爲めに、幾億の虐げられた農民の爲めに――先づ自己改造の爲めに。斯う云ふ動機から彼等はいろ〳〵と計畫し、いろ〳〵な運動を起して進みました。そのとは玆に詳しく申述べる餘地はありませんが、兎に角斯樣な運動の源流を成しました一小倶樂部が其頃聖彼得堡に出來ました。『チエーコブスキー團』と申しまして、其中心人物のチエーコブスキーは露西亞革命の父と稱ばれてゐる位てす。この團隊からはクロポトキンとかステプニヤックとか云ふ幾多の有名な人物が現はれてゐます。彼等の會合の場所は大都會の町端れの小さな借家で表面の借主は或る職工の妻となつてゐましたが、當の主人は玆にお話するソフイア、ペロブスカヤでありました。

ソフイアはクロポトキンと同じやうに其邦の大公爵家の生れであります。父は長いこと首都の總督と云ふ重任を負つてゐたほどでありまして、彼女も幼い頃から宮廷へ出入して、上流社會の華奢な空氣の中に

育てられました。それにも關らず、彼女は當時の青年の新運動に感染されまして、夙くから『自由』の洗禮を受けました。その頃の若い娘達で、丁度彼女と同じやうな高い社會上の位置を賭して、同じ新運動に加つた者は實に幾十人からあつたのです。彼女の姉の弱々しいマリアでさへ一時はその仲間入を致しました。實際それは露西亞の覺醒期であると同時に、その邦の女性の覺醒期でもあつたのです。彼女の家庭敎師に有名な批評家のチエルニシエブスキーやドブロリユーボフのゐたと云ふとも面白い事實でありませう。

斯うしてソフイアは聖彼得堡の高等女學校にゐる頃から、『チエーコブスキー團』に加はるやうになりました。この團體は初めは唯だ熱心な青年達が集まつて知識を研き、國法で禁ぜられてゐる書物を讀むぐらゐの會合でありましたが、時勢に連れて次第に社會的に活動するやうになりました。その頃の追懐をクロポトキンが面白く談つてゐます。ソフイアが職工の妻君の名義で借りてゐた例の町端れの小家で彼等は時々會合いたしました。で、この團體の實際の主人は勿論ソフイアでありました。その頃彼女が木綿の衣物を着て、男靴を履いて、頭へ麻之手巾を被ぶり、ネバ河から酌んだ水を手桶で兩肩に擔いだ有樣は全然ほんものの職工の妻君だつたと笑つてありますが、どうです、さう言ふクロポトキン自身が少年の頃は皇帝の侍童を務めてゐながら、晩になると其官服を脫棄てゝ遙々郊外へ徒歩で農民の傳道に出掛けたなどは面白い對照ではありませんか。その小屋の中では彼女の初々しく女らしい、それでゐて聰明な眼付が總ての人を喜ばせました。彼女は至つて『やかましや』で、小じんまりと部屋を整理するとが

好きでした。よく泥靴などで上つて可愛い眼で叱られた者もあります。要するに彼女はその團體の女王にして、同時に家婦でありました。彼女の一番嫌ひな者は『女のやうな男』だつたさうです。

斯樣な會合がその邦の嚴しい官憲の眼を逃れやう筈はありません。もう其處此處では仰山な捕縛が始まりました。監獄は政治犯で追々賑つてまゐりました。一八七五年にはソフイアも一度捉まつて、危ない所を家の威光で漸く赦されました。彼女は暫くクリミヤへ逃げてゐましたが、それから今度は醫學を志して、看護婦の學校を卒業いたしました――農民の病人を救ふと云ふのが目的で。一八七七年に彼女は復た捕縛されました。それは有名な『百九十三人の訊問』に關聯してゞありますが、幸にその時にも無罪になつたのです。それから後の彼女の活動は次第に大膽に次第に危險な性質を帶びて來て、或は同志の脫獄を計つたり、そのほかいろ〳〵な企を致しましたので、彼女の身邊には刻々に危期が迫つてまゐりました。或人が外國へ逃亡を勸めました時に、彼女は斯う申しました。『無益に外の土地で暮すよりは妾は故國で斃れます。』然るにこの言葉が讖をなして、それから間も無く彼女は斷頭臺の露と消えたのであります。

彼女が自分の事業に對する信念の强かつたことは豫想外でありました。『私達は偉きな仕事を始めた。恐らくその完成には二世紀はかゝりませう。然かし是非仕遂げなければなりません。』で、斯樣な勇氣を以て事に當つた彼女の最期は、また水際立つて立派なものでありました。實に古來の死刑囚で斯樣に晏如として死に對つた例はなからうとまで謂はれてゐます。

彼女が最期にその母に宛てた手紙ほど情愛の籠つたものはありません。これを見てもいかに彼女が情深く女らしい女であつたかと云ふとが解ります。それでゐて、其中には些の女々しい文句もありません『……どうぞ妾の拙い運命を歎いて下さいますな。これは妾自ら作つたので、貴女の御存じの通り正しく妾の良心に適つてゐます。妾には他に爲ようは御座いません。妾は自分の良心の命ずるまゝに從ひました。戀しい母上を棄てて妾は邦家のために出て行きます。當然來べき死が妾の心に恐れを與へるものと思召して下さいますな。妾がこの歳月、日がな時がな忘れずに覺悟してゐた事が、丁度唯今起つてまゐりましただけです。この數日中には妾は妾の一生かけて心も身も捧げ盡した信念理想に殉ずるとが能きます。いとし母上樣、どれほど妾は幸福でせう。繰返し申しますが、どうぞ決して私の爲めに歎いて下さいますな。……』恁樣な事がその中に書いてあります。

ソフィアの死にましたのは彼女が廿六歳の時でありました。それでも彼女之生々して健康な風采はその頃十八歳位にしか見えなかつたと申します。ソフィアは別に美人と云ふ方ではありませんが、小柄な體格で、ブロンド色の髮の毛の房々した、大きなはつきりとした靑い眼を持つた、薔薇色の唇をして、そして笑ふ時に綺麗な白い齒を見せる娘でありました。若々しく音樂的な聲がまた至つて彼女のいぢらしい所で、快活で敏捷なそぶりが人の注意を牽きました。服裝は極く質素ではありましたが、淸潔好きでした。丁度英國風の娘にも喩へられませうか。然かし、人間の心ほど不可測で神祕なものはありません。斯樣な娘の胸にどんな堅い信念と行爲の勇氣が潛むかと云ふとを誰が告げ得られませう。

生前からソフィアの其母に對する愛情は人並優れて美しいものでありましたが、彼女はまた非常に子供を可愛がり、殊に世の中の病人に對しては、どんなにか深い憐愍の情を持つてゐました。彼女が看護婦を志したのもその爲めてあります。彼女の病人に對する態度は、親切て、辛抱強くて、獻心的てありました。

それに就て思出すのは、ツルゲーネフの『散文詩』の中にある『ユー、ビー、ブレブスキーの記念の爲めに』と云ふ一文てあります。彼女（ブレブスキー）は國外のみすぼらしい野營病院のなかに窒扶斯て死んだまゝ既う十四日間も横たはつてゐます。醫者も別にまゐりませんてした。今までさんざ彼女に看護された兵士達が來て、水一滴その口に濺いて遣つたわけてもありません。彼女は若くて美しかつたのです。世の中て彼女を知らない者はありませんてした。高貴の人々ても彼女に注意を拂ひ、貴婦人には羨まれました。幾人もの靑年に思はれ、人生は彼女の頭上に微笑んてゐました。然るに柔かい優しい心、そして犧牲に對してこれ程強く、これほど熱心な心！　彼女は身を提して、他人を救けると云ふよりほかには幸福を知らんのてした。何んな祕密の寶を彼女はその胸に藏んてゐたのてありませう。彼女の犧牲は遂げられました。其仕事は終りました。たゞ傷ましいのは、今も彼女の遺骸に對して一の感謝を拂ふ者の無いことてあります。遮莫、彼女は感謝に對してすら恥ぢ怕れるのてありました。………私はこの一插話を讀んて、それからソフィア、ペロブスカヤの生涯を想ひ比べるたびに、一種超自然の尊崇の念を禁ずることが能きません。

近頃有名な革命婦人ではマリー、スピリドノバがあります。この人の生涯に就きましても色々と面白い話がありますが、餘り長くなるので申し上げません。彼女は非常な美人として有名であります。『いろいろと苦勞の章は見えるが、それでも彼女の美貌は變らない』と言はれて居ります。或る地方で總督の專横を懲らさんとして、捕縛されてから、今日まで長い年月の間西比利亞に流されて、苦力に服して居ります。

今一人は今年七十二歲になるカゼリン、ブレシユコフスキーと呼ぶ婦人があります。彼女は若い折に廿三年間西比利亞に追放されて歸つて來てから、つい四年前にまた流罪の宣告を受けて、再び古馴染の土地にたつてまゐりました。二度目の彼女の罪狀は甚だ曖昧で、たゞ法廷に呼ばれた折、『お前は社會黨か』と訊かれて『左樣です』と答へたのが甚だと云はれて居ります。彼女の生涯は斯うです。彼女は十六歲にしてポルテーアを讀み、ツルソーを讀み、デイデローを讀み、佛蘭西革命史を暗記してゐました。彼女は廿六歲で結婚して子を設けました。彼女は或時明白にその夫に向つて『貴夫は自由の爲めに流刑や死を忍ぶ御覺悟はありませんか』と訊いた所が、その夫から『否』と云ふ返事を受けました。二人の行く道は別れました。彼女は已むを得ず夫を棄てゝ、その理想の爲めに西比利亞の土まで踏んで出ました。露西亞人に採ては便宜主義の『妥協』は禁物です。

前にも御話したやうに、一八六〇年代の露西亞の新機運が造つた婦人運動が唯だ狹い革命の方面にばかり限られたものと思ふのは間違です。それは實に重要な一方面には相違ないが、彼等の運動にはもつ

と廣い人文的の意味がありました。思想の自由、兩性の對峙、婦人の獨立と云ふやうな問題を、彼等は同時にそして根本的に解かうと努めました。その中には勿論結婚や戀愛の問題も含まれてゐました。今日の歐羅巴でエレン、カイの說くやうな道德問題シユライネル女史の說くやうな勞働問題、そのほか各國で流行の女權問題を、露西亞の婦人は既う六十餘年も前に解釋してゐるのであります。

彼等の先づ努力したのは高等敎育の問題であります。彼等は古い昔の夢から覺めるや否や、思想の自由とその欲望の爲めに熱狂しました。幾千からの青年女子が廣い邦の隅々から聖彼得堡や莫斯科へ集つてまゐりました。幾つもの小さな團隊が彼等の間に組織せられて、自己敎育の道が拓かれました。彼等はまた仲間同士で、翻譯や出版や印刷や製本の機關を設けて、田舍から出て來た貧しい女學生の爲めに自活し乍ら勉强の能きるやうな方法をも講じてゐました。實際その頃のこの邦の青年間に行はれた燃えたつやうな知識欲の發現はどの邦の歷史にも見られない圖であります。

然るに政府では斯樣な婦人運動を甚だ喜びません。女子の大學へ入學することは絕對に禁止してあります。當局者は時の高等女學校の卒業生には大學へ這入るだけの準備がないと云ふやうな口實で彼等の熱望を沮めてゐました。「よろしい。それなら妾達は大學豫備校を設けませう。どうか何なりと要求をおつしやつて下さい。許可されうれば、資格はどうなりと妾達の方で作ります。」斯う言つて彼等は迫りました。が、政府では仲々それを許さうとは致しませんでした。それでも、時代の要求には反かれないものと見えて、その頃から急に女學校がふえ出して三百餘りにもなりました。

若い女達は已むを得ず自分達で私塾を起したり、客間で講演會を開いたりするやうになりました。大學の教授で、斯樣な運動に興味をもつ人達が、そつと來ては講義を聞かしました。夏期休日に彼得堡の近郊で行はれた科學實習には幾十人かの婦人が交つてゐたさうです。産婆の講習會などでも、普通の決まつた學科のほかに、いろ〳〵と科學の原理や科外講義を强ふるやうになりました。彼等は能ふ限りの機會にどんな間隙でも、求めて深入りいたしました。グルーベル博士が彼等のためにその解剖室を解放いたしますと、彼等の熱心とその妙技が忽ち老教授を驚かして、彼等に左袒させるやうに致させました。茲にまた或る教授から日曜または夜間にその實驗室を貸すと云ふ許可を得たとしますと、彼等は決して其日曜と夜とを空費致しませんでした。

必然の要求から、彼等の多くの者は外國へ出かけてまゐりました。或者は獨逸の教授の所へ行つて聽講の許しを得ました。或者はハイデルベルグで法律や歷史を研究し、或者は伯林で數學を學びました。ツーリツヒの大學や專門學校には一時は百人以上の露西亞の女學生がゐました。醫學博士の學位を取つた娘が幾人も現はれました。實際彼等の力量は幾度か公然と鴻學の稱讚を博したのであります。クロポトキンの話に、彼が一八七二年にツーリツヒを訪つた時、その土地の專門學校にゐた故國の若い娘達が、易と微積分學を使つて熱學の問題を解いてゐたのを見て驚歎したと云ふとであります。

露西亞の若い娘達の旺盛な知識欲を示す好い例があります。ブランデスが其邦を漫遊した折出逢つたと云ふ人々の中に次のやうな女がありました。眞斯科の場末で、庭のある小さい家に、非常に華奢な生

れつきの娘がありました。彼女は長い間重病で煩つてゐて、その爲め、何か物に激した時は、口がきけなくなることが度々ありました。彼女は蒲柳の質のために女の資格がなかつたせゐでもありますが、純粹な智的生活ばかり送つて、全く精神上の事業に耽つてゐました。いやが上にも強い彼女の智力上の熱心とその方面に就ての努力とは、病身な身體に打克つて屢々世に現はれました。彼女は澤山な外國の書物を翻譯し、自分でもいろ〳〵と書きました。その方面に對する彼女の勢力と最も深い謙遜心との結合は對話者を驚かしたとあります。

もつと適切な例があります。それはソニア、コバレブスキーの一生であります。この極めてシャイな神經質な、それでゐて色々の方面に天才を有してゐて、内に堅固な意志を藏してゐた女のドラマチックな生涯は兎ても短い頁では說き盡すことが能きません。彼女の弱年な折には、能くその家へドストエフスキーが遊びに來たさうで、その頃の思出を彼女は小說體の筆にして殘してゐます。彼女は科學者としても文學者としても立派な事業を殘して逝きました。ジョージ、エリオットやイブセンなども非常に彼女を褒めてゐます。作物から見ると、何處か英國のエミリー、ブロンテを思はせるやうな女でした。

彼女は若くからハイデルベルグへ行つて數學を勉强いたしました。それから伯林へ移つて有名なワイエルストラッス博士のもとに其研究を續け、廿四歲の折にゲッチンゲンの大學で博士の稱號を授かりました。その時の論文は今でも名高いものになつてゐます。後、彼女はストックホルム大學へ招聘されて數學の敎授になりました。女子で男子の大學の敎授になつた者は世界中で彼女が始めてだと云ふことです。

それでゐてをかしいてはありませんか、この大學教授の餘り若々しい娘姿を見ては、誰も彼女のことを『ソーニア』とか『小雀』とか云ふ甘へた名前よりほかには呼ぶものがなかつたと云ふことです。

そのうちにこの邦の政府でも時代の要求に驅られて、聖彼得堡大學で女子に醫學の聽講を許しました。然かしそれも唯一時て閉されました。それてゐて驚くべきことには一九〇〇年頃には、露西亞で開業醫の免狀を持つた女が七百人から出來ました。女敎師になり、看護婦になつた者は數知れないほどあります。彼等はたゞ職業問題から斯樣な位置を擇んだばかりてはありません。その內心には人道の光が強く燃えてゐました。こゝが露西亞の女權問題の何より貴い特異な一面てありませう。クリミヤ戰爭の時に、病院附として彼等の現はした功績の偉大てあつたには、流石に新しい女嫌ひの皇帝をも驚かしたと言はれてゐます。

總ての新運動――殊に熱誠な青年のそれには、時として極端な行動が伴ひます。露西亞の新しい女も矢張その例に洩れないので、その頃の彼等は髮の毛を短かく刈り、男の着るやうな衣物を着て、殊更にその獨立と自由を表明して歩いたさうてす。然かし斯樣な無邪氣な過失ほど、罪のなく可愛らしいものはありますまい。

さう云ふ新しい女と舊い習慣との間には何處の邦でも衝突と、之に伴ふ悲劇とを免れません。ノラやマグダの演じたやうな幕は露西亞にもありました。モーリス、ベーリングの書いた物の中に斯う云ふ話があります。彼は或時聖彼得堡て次のやうな梗概の寫實劇を見たと談つてゐます。今は、もう隱退した或

る老敎師の家庭に、その妻と十五歳になるひとり娘がありました。お人好の老夫婦は叨りに娘の歸りを待ち詫びてゐます。どうも親子の間には次第に懸け離れが出來てまゐりました。娘の方ではなるべく自分の行動を隱すやうに致して居ります。それが老夫婦には實に氣懸りでなりません。老父は待ちあぐんで、斯んなことを口走ります。『俺の時代には俺等は自由派だつた。俺等は靜かにその目的の爲めに働いた。然るに今の奴等と來ては只街で吼えてゐるばかりだ。全く天才と云ふものが失くなつた。』斯う言ひ乍ら彼は壁に掛けてあるヘルッエンの肖像を眺めました。『こんな偉人が今日何處にある。』其處へ遂々娘が歸つてまゐります。綺麗な、あどけない、質素な女です。老夫婦は心配して、どうか彼女の行つてゐた所を敎へて呉れるやうにと切に賴みます。然かし。その實彼等は彼女の行先を暗に知つてゐます。娘の方でも親が自分の行く先に氣付いてゐることを知つてゐます。さう悟らされる觀客もまた此娘がある革命黨に關係のあることを思はずにはゐられません。然かし娘は仲々打明けようと致しません。そこで老父が、彼女にその道を踏み迷つてゐることを戒めると、娘の答が斯うです。『あなたには兎てもお解りになりません。世の中には二種の愛があります——小さな愛と偉さな愛と。小さな愛とは人が自分の椅子やテーブルを可愛がつたり、自分の父母を愛したりするを謂ふので、偉さな愛とは基督が全人類を愛したやうに、人道の爲めに男子の爲めに、人民の爲めにする愛を謂ふのです。』……………て、最後の幕ではこの娘が世間並の戀から彼女を愛してゐる男を振棄て、心配さうな老父母を振棄てゝ、或る重要な使命を帶びて默つて家を飛び出すと云ふのであります。

露西亞の新婦人の解いた重要な問題の一つはその結婚問題でありませう。レロイ、ボルユーが露西亞に關する有名な書物の中で、たつた一つ全く考へ違ひをしてゐたことは、その邦の青年男女間の自由な交際に關する觀察であります。餘りに國情が違ふために、流石に卓識な批評家もその尺度を誤つたのであります。チコオミロフが之に對する辯解には充分に頷かれる節があります。所謂露西亞の『インテリゲンチャ』の仲間に行はれる若い男女の交際の自由なことは、とても他國人の想像に及ばない所です。兩性間の交際が斯くまで自由に行はれる所は他にはありません。露西亞の進んだ社會で二人の男女が連立つて歩く位のことは誰でも怪しみません。それを何でも佛蘭西などのやうに、男と女と出逢ふが最後すぐにも接つき合ふもののやうに思つて『猿仲間』だなどと云ふ批評を下す方が間違つてゐます。露西亞の母親は平氣でその娘を若い男の側に手離して置きます。世界のどの國でも此處ほど男女間の關係に無頓着な所はありません。一八七〇年は佛蘭西の軍隊が瑞西の國境を越したことがありました。無理な進軍の後で、兵士達は雨に晒され乍ら大道にその夜を明すのでありました。その時女ばかりの家で彼等の爲めに戸を明けた所は無かつたがたつた一軒、丁度その邦に留學してゐた二人の露西亞の娘が、自分達の一つきりの部屋を兵士に貸しました。それで一晩中彼等と一緒に過ごして世間での愚かしい皮肉な批評などは氣に懸けませんでした。

　自由戀愛と云ふ意義は、この邦では他の邦々の人の考へてゐるのとは多少其趣が違つてゐます。それは既に久しい以前から全露西亞の有識社會が承認してゐる主義で、丁度近頃エレン、カイなどが說いてゐ

るのと同じやうなものてあります。實際露西亞の眞面目な社會ほど眞銘な自由戀愛、戀愛崇拜の行はれてゐる國はありません——神聖なものとして、それ自らが正當且つ自由なものとして。

この邦のある貴族に二人の兄弟がありました。兄は既に結婚してゐたが子供が有りませんてした。所が、ある時その夫人が姙娠しました。彼女はその夫に向つて、自分のお腹の子の父は實は貴夫の弟だと告げました。

そこて兄弟の間に決鬪が起りましたが、幸に生命には別條がありませんてした。て、夫人は夫を離れて義理の弟の所へまゐりました。そして澤山に子を殖しました。舅姑の喜びは一通りてはありません。彼等は雙手を擧げて新夫婦を歡迎いたしました。また斯う云ふ話もあります。某大學の教授がその同僚の妻君と惚れ合ひました。て、彼はその婦人と同居して、戸口には兩人の名札を掲げて、御客を同じ部屋て迎へる、また一緒に招待も受けました。

一體が斯樣な國柄てあるから、近頃のむづかしい結婚問題もこの邦ては比較的に解釋が容易てありました。それはチエルニシエブスキーが『何を爲すべきか』と云ふ小說を書いた頃から殆んど解決せられたのてあります。凡そこの書物ほど露西亞てよく讀まれたものはありません。ツルゲーネフの書ても、トルストイの書ても、是程深い感銘をその邦の讀者に與へたものはありますまい。小說としては至極整はない物てあるが、素とが議論を根柢とした作て、經濟問題とか結婚問題とか幾多の焦眉の問題に解決を與へてゐるのて、この書一冊が既に一個の革命てありました。婦人問題の解釋はジョージ、サンから來

てゐると云ふ説もあります。

丁度この書物の出た頃は、あの邦で結婚や離婚に關する議論が熾んであつたので、チエルニシエブスキーはこの書に據て其解釋を試みようと致しました。話の筋は斯うです。醫學生のロプコフがバブロブナと云ふ女を戀して結婚しました。永らく平和の家庭が續きましたが、そのうちに夫人はその夫の友人のキルサノフと惚れ合ふことになりました。それを知つた夫のロプコフは兎ても平和に二人の戀人の間に立てないことを知つて、自殺を裝つて亞米利加に逃れました。そして數年の後歸つて來て、自分は他の妻君を迎へて、先妻やその夫とも睦まじく交際を續けて行くと云ふのであります。

以上はほんの荒筋でありますが、著者がその中で説いてゐる結婚問題の解釋は、要するに斯うでありますす。結婚は重大の問題である。一度結婚したものは容易く他の男女に惚れ合ふやうなことは愼まなければなりません。時々起る情慾の發作は新しい戀と云ふ名には値しません。眞正の戀と見えるものも、實際はたゞ一時の肉的誘惑に過ぎないものが多いのです。よしまた眞實に新しい戀が起るにしても、その戀の熟するまでには充分に考量する餘裕がありませう。その戀の齎す結果を考へる暇がありませう。然かしいかに考へ、いかに愼重の態度を採つても免れない場合があります。新しい戀の悲しくも襲ひ來る場合があります。世間知らずの娘が無理に結婚を強ひられた場合、男女二人が互に理解なく結婚した場合、結婚してから後に追々と夫婦間に理想や趣味の衝突を來した場合などにはよく斯樣な慘事が起り易いものです。その場合はもう已むを得ない。破鏡の歎は一生懐いても(かやうな場合かやうな悲歎は却て

誠實な品性を鍛へるものです）お互に別れるのが上分別でありませう。無理に不自然な結婚を續けて、互に賊ひ其子を賊ふよりも餘程優つてゐると云ふのであります。チエルニシエブスキーのこの解決は全く異存なくその都の新時代に受け容れられました。

て、露西亞の男女は儀式的の結婚など云ふことは餘り重く視て居りません。また生活問題から結婚を視るやうなことも至極稀であります。それで匆かしく結婚して了つて後で後悔の起つた場合などは、夫婦間にをかしな寛容の德を示すこともあります。兩人はお互に雙方に自由勝手な眞似をさせて、たゞ仲の好い友人として日常を送るやうなことは珍らしくありません。またこの邦の處女は他國には見られないほど人生に對する高い理想を有つてゐて、無意義な生活を送ることを喜ばない爲めに、冷靜に肉慾的に其身を任せたり、利益の爲めに結婚したりすることを慚ぢてゐます。それでゐて、一旦ある男と眞面目に戀し合つた場合には、親の許しも受けず、法律上の形式も踏まずに、さつさと其男と關係を附けて了つて更に慚とも思ひません。世間の取沙汰など何とも思ひませう。

歴史及文藝の上に現れたる日本の女

笹川臨風

たつた一人の女の爲に所謂學者の間にすつたもんだが起り、いゝ年をした鬚の生えた連中が大勢寄てたかつて相談だの質問だのをやらかす、其餘勢が學校の存廢にまで及ぶと云ふ有樣、新聞が二段も三段も毎日其記事で埋めて居るなぞを見ても、女の勢力は大したものである。勿論女の爲に家藏乃至國家までを亡くすのであるから、別段あんな騷ぎも不思議ではあるまい。新しい女〱と評判はあるが、それも高が四五人、ましてへなちよこ揃ひであるのに、それが五色の酒を飮んだの、登樓したのと云て、新聞雜誌、人の口端にまで喧しい。して見ると女は愛嬌のある德なものだ。けれども此新しい女は數が少くつても、いかにへなちよこばかりでも、奇矯な行て名を賣らうとするにしても、兎に角女が現在の地位に不滿足であつて、何等か要求したいと云ふ趨勢のあることは明かである。世間は其奇矯の行に驚いて、新しい女と云ふと、一概に頭から輕蔑して叱りつけ罵倒するが、之は同情のない殘酷なやり方である。新しい女の名と聲とは現代に對する不平の破裂である、大きく云へば婦人革命の第一聲である。

女は柔順で鳩の如く小羊の如くあれかしとは男の要求である。長い間の歷史は女を斯く仕上げた。伊弉冊尊が伊弉諾尊より先きに、あな可愛男をと云はれたのは不祥であつたから、其後やり直しをしたと云ふのを見ると、神代にも男尊女卑の影がちらつく。大國主神の后須勢理姫命が『ぬしこそは男にいま

せば、打見る島の崎に、かき見る、磯の崎おちず、若草の、妻持たせらめ、吾はもよ、女にしあれば、汝おきて、夫はなし、汝おきて、夫はなし」と歎かれたので、昔から男は道樂者で多妻で、女は堅いもので一夫だと云ふ相場が定まつて居たやうだ。しかしそんならば當時は女の地位がそんなに低いかと云ふに、どうして實際にはさうでなかつた。天照大神が女性であらせられたことは云ふも論なし、景行天皇の御世には周芳の娑麼には、神夏磯媛あり、碩田の速見には速津媛あり、諸縣の君泉媛あり、阿蘇に阿蘇津媛あり、八女の縣に八女津媛あり、いづれも渠帥であつて、男兒を頤使して居た權力家である。魏書の卑彌呼が神功皇后と同人か異人かは姑く置いて、九州地方の女豪傑は流石の景行天皇を手こずらせ奉つたほどである。

弟橘媛が日本武尊の御命に代らせ給はつたのは、日本婦人が其夫に向て現はしたる犧牲的精神である。隼別皇子が雌鳥の皇女と欠落して「橋立のさがしき山も我妹子と二人越ゆれば、安席かも」と詠ぜられたのは、戀の甘い歡樂である。死罪を赦されんが爲に、倭直吾子籠が其妹日之媛を奉つたのを見ると婦人も一の物品扱であつた。允恭紀に、當時の風俗、宴會に於て儛者儛ひ終て、自ら座長に對て曰く娘子を奉らむとあるを見ても、女は一の引出物であつた。

しかし飯豊青皇女は一時政を攝し給ひ、女帝推古に至ては決して凡庸の君ではなく、馬子の野心さへ抑へ給はつた。物部大連麁鹿火の妻は夫をして勅使を辭さしめて世の中の物議を免れさせる。甘美媛は其夫の輕薄を憤りて、之と語を交へず調伊企儺の妻大葉子は虜となつて、慨然として、日本婦人の壯烈

を示す、蘇我の馬子の妻は其夫を勸めて兄なる物部守屋を亡ぼさせる、上毛野君形名の妻は夫が祖先の名を辱しむるを慨して自ら蝦夷の軍を破つた。日本婦人の內助の功は中々光彩を放つたものだ。

光明皇后は奈良朝の大立物でおはした。吉祥寺モデルと云ひ傳へられるだけて、佛法興隆には大した勢力があらせられた。しかし此時代の前後一體に自由結婚の風が行はれたのは常陸風土紀の筑波山の條及童女松原の嬥歌の會のことを見ると分る。此風は猶後世までつゞいたであらう。平安朝に入ると、藤原藥子と云ふ女策士が居る。まんまと大望はしくじつたが、兎に角平城上皇を重祚させやうと云ふ規模の大きい計略を立てたものだ。藤原氏になると、門閥の爭家門の爭の爲に帝室の外戚となることが必要で女が大切になつて來た。內麿の女順子は仁明天皇の皇后に立ち、冬嗣の女明子は文德天皇の皇后となり基經の女穎子及妹子は淸和天皇の女御、同溫子は宇多天皇の中宮、同穩子は醍醐天皇の皇后となつてから以來、世は女の天下てある。又太平の世となり、晝のやうな御殿に引込んて、詩歌管絃に興ずる公卿殿上人は淫樂を生命とする所から、從て女の歡心を求むることに腐心する。一條天皇の中宮上東門院彰子と同じ帝の皇后定子との競爭から、其下にも競つて才媛を聚める。漢文漢詩は男のすなる物てあつたが、やゝすたれ氣味となつて、國文和歌は丁度婦人に似合はしいから、此等の才媛中には文學に趣いて、日本文學の爲に光輝を添へたものが少くない。御堂時代は女の活躍した時代て、新しい女が輩出した。けれども猶源語の帚木には「世の中と云ふもの、さのみこそ、今も昔も定りたること侍らね、中に就ても、女の過世は浮びたるなんあはれに侍る」と述懷して居るし、又女の身嗜みを論じては、同じ物語の常夏の卷に

「女は身を常に心づかひして、守りたらんなんよかるべき、心易く打捨たるさまにもてなしたる、しななきわざなり、さりとて、いとさかしく身堅めて、不動の陀羅尼誦み、ゐん作りて居たらんも惡し、うつゝの人にもあまりけどほく、もの隔てがましきなど、けだかきやうとて、人にくゝ、心美しうはあらぬわざなり」と云つて居る。流石に新しい女ではあつたが、紫式部は清少納言流ではなくて、慎みのよい大人しい才鋒を包だところが見える。平家の女は藤原全盛の後をついて、優にやさしい所があつて、藝術の上には其才が現はれる。嚴島經卷の畫や經文は多く此等平家の婦人連の手になつて居ると云ふのを見てもそこに奥床しい香がする。

婦人の地位が卑くなつて來たのは、佛教が與て力あることは明かである。華嚴經に「女人は地獄の使なり、能く佛の種子を斷たず外面は菩薩に似て、内心は夜叉の如し云々」と說き銀色女經に「三世の諸佛の眼は大地に墮落すとも、法界の諸女人は永く成佛の期なし云々」と、斯う婦人を蔑すんだ、一の原因は、婦人が墮落の基となるから、邪淫戒として戒めた如く、婦人を卑めて遠けたのであらう。男が墮落の恐があるからとて、婦人を落したのは、得手勝手の議論である。けれども日蓮のやうな新宗教を開いた人は、婦人の味方であつた。日蓮の月水御書には「古へも女人の御不審について申たる人も多く候へども、一代聖教にさして說れたる處のなき歟の故に證文分明に出したる人もおはせず、日蓮粗聖教を見候にも酒肉五辛婬事なんどの様に、不淨を分明に月日をさして禁めたる様に、月水をいたみたる經論を未だ勘へず候也、在世の時多く盛んの女人尼になり、佛法に行ぜしかども、月水の時と申て嫌はれたる

時なし、是を以て推量り奉るに、月水と申す物は外より來れる不淨にもあらず、只女人の癖かたわ生死の種を繼ぐべき理にや、又長病の樣なる物なり、例せば死尿なんどは人の身より出づれども、能く淨くなしぬれば別にいみもなし是體に侍る事歟、されば印度支那なんどにもいたく忌むよしも聞えず」と開けたことを云ひ、女人成佛鈔には「龍女畜生道の衆生として、戒綏の姿を改めずして、即身成佛せし事は不思議なり、是を始として釋尊の姨母摩訶波闍波提比丘尼等、勸持品にして一切衆生喜見如來と授記を被り、羅喉羅の母耶輸陀羅女も眷屬の比丘尼と共に具足千萬光相如來となり、鬼道の女人たる十羅刹も成佛す」と女の爲に氣焔を揚げた。しかし男と女とを較べては、同生同名御書に「女人はたとへば藤の如し、男は松の如し、須臾も離れぬれば立ちあがる事なし」と說き、乙御前御書には「女人は夫を魂とす、夫なければ女人魂なし」と云つて居る。一向宗になると、僧侶の妻帶をも許して、萬事世俗的になつて、ピユリタン生活を脫却した。從て婦人に對する見解も峻嚴ではなくなつた。

鎌倉の尼將軍平政子になると、政治的手腕もしつかりとして、善く情を抑へて理性に依て行動した。鎌倉幕府の基礎は此人に依て全く鞏固となつたのである。情に依て活き、情の前には威風も富貴もなかつたのは靜御前である。一體に武士氣質が婦人にまて及ぼして居た時代てあるから、癪に觸るといふと剃髮して尼となつた白拍子などさへもあつた。

我國には貞烈婦人の例を引くと、必ず袈裟御前が擧げられる。然らずんば靜御前てある。靜のことは義經記のやうな演義物てなくて、吾妻鏡のやうな正確な記錄に見えて居るが、源平時代の婦人を代表す

べき袈裟のことは、源平盛衰記より他に見えない。しかしどうも袈裟のことは支那の話の轉化てはあるまいかと思はれる。此事は先日も一寸或雜誌記者に話したことがあるが、猶之を詳にすると、支那の晉書の載記十四苻融傳の中に斯う云ふことが載て居る。京杞の人董豐が遊學して歸つて妻の家に宿つた所が、其夜妻が賊の爲に殺された、妻の兄は豐が之を殺したのてあらうと疑て豐を訴へる。豐は捕へられて拷問に逢ひ、苦痛に堪へず。心にもなく自分が殺したのだと云ふ。苻融は恰も秦王苻堅の司隸校尉となり、當時の大岡越前守てあつた。所て融はどうも豐が寃罪に陷たのてあらうと察したから豐に汝が往還のうちに何か怪しいことはなかつたか、又卜筮つたことはなかたかと尋ねる、すると豐は夢の話をして又卜者が獄訟を憂ふ三枕を遠け、三沐を避けよと云たことを語り、さて云ふやう其夜妻が沐を具へ、又枕を授けましたが、卜者の話を思ひ出したので止めました。すると、妻は自ら沐し、枕して寢ましたと申す。うんそこぢやと、融は手を拍て、夢に依て其の下手人が馮昌なるものてあらうと判じ昌を捕へて之を鞠問する。とう〳〵昌は白狀して、元來豐の妻と董豐を殺さんことを約し、新沐と枕とを其しるしと定めましたので、誤て女を殺しましたと云た。之ては豐の妻は貞烈てなくて、姦婦てあつたのが、とんだ失策をやつて、自業自得の最期を遂げたのてある。此話が誤り傳へられたのか、又語り傳へられたうちに轉化したのか、それとも別の種か、今昔物語卷十に長安女代レ夫遂レ枕爲レ敵被レ殺語と云ふのがある。今は昔支那の長安に美しい女が居て、夫があつた。然るに此夫には敵がある。此敵が此女の夫を殺さん爲に其家に來たが、其夫は他に行て家に居ない。敵は斯くと見て女の父を捕ふ。女之を哀しく思ひたるに

敵の云ふには、汝夫を出さずは父を殺さんとのことてあつた。女云ふ、夫の爲に父を殺さうや。今夜忍びて夫を殺しに來り給へ、此屋に夫は東枕に臥し、我は西枕に寢よう。東枕のものを殺し給へと。此夜女は男を西枕に寢させ、自分は東枕に寢て、とう〳〵殺された、敵は斯くと知て、心から悔悟し、遂に其夫と親友の契をしたと云ふことだ。此話はもと劉向の列女傳に出て居るが、甚だ能く袈裟のことゝ似て居る。髮を沐たことは董豐の方に在るが、今昔の方には其事がない。二つの話が一つになつて袈裟のことになつたかのやうに思はれる。唯遠藤武者盛遠のやうな大膽不敵の、怖いもの知らずが若い身そらて、急に佛門に入たと云ふことは餘程何か入り込だ事情がなければならぬ。戀人を殺して、一念發起したなどはさもありさうなことだ。しかし其戀人は唯精神で惚れ合た間柄だけて、しかも盛遠だけが飽の片思ひてあつたか、それとも猶一歩も二歩も進て居たかは問題だ。盛遠だけが片思ひて、袈裟は何とも思はなかつたならば甘じて殺されることもあるまい。日本婦人としても之を其夫に告げて、何とか處置をするてあらう。して見ると曾ては相互の間に戀愛が成り立つて居たのでもあらう、一歩進むれば肉の關係があつたかも知れぬ。しかし之は源平盛衰記を正面から解釋して云ふのであつて、演義氏が支那話を轉化させたのだとすると、まだ外に事情が伏在して居たのであらう。無論それは戀愛に關係したことて、盛遠の大悟徹底の因を作つたものに相違ない。斯う云ふ風に見ると、袈裟の貞烈談も一個の小說ではあるまいか、此時代に貞烈がないとは云はぬ、靜御前が白拍子の身でありながら、吉野山に入りにし人の跡を慕ひ、梶原景茂が其袖を引いたのを辱しめたなどはまことに見上げたものてあるが、一體に藤原時代、

殊に御堂關白時代の拘束なく、桎梏なく束縛なく、盛に本能主義を發揮した時代とは遠くない頃であるから、貞操などもちと危い方であつたらう。常盤御前などは寧ろ時代精神を發揮したことゝ思はれる。

武家時代には忠義を奬勵するとゝもに婦人には貞操を致せと勸めて居る。貞永式目に離別妻妾知ニ行前夫所領ニ事の條があつて、功あり過なきの妻妾は離別せらると雖も前夫は讓る所の所領を悔み返す能はずと云ひ、次に御家人に非ざるの輩、女子幷に傀儡子白拍子及び凡ての卑女等夫の所領を誘取（こしらへと）り、知行するものは之を召上らるべし、但し後家となりて貞節あるものは制の限りに非ずと規定して居る。猶武藏守北條泰時の消息には「所詮從者王に忠を致し、子は親に孝なり、妻は夫に從はゞ人の心の曲れるをば棄て直きをば賞めて、自ら士民由緒の謀にや候とて、かやうに沙汰候」とある。鎌倉の末から南北朝にかけては我が國民精神の最も發揮した所であるが、二條の落首に、「爲中美物に飽きみちて、俎板烏帽子ゆがめつゝ、氣色めきたる京侍、たそがれ時となりぬれば、浮れてありく色好み、いくそばくぞや數知れず、内裏をがみと名付けたる、人の妻鞆のうかれぬはよその見る目も心地あし」とあるのは、其暗黑面であつた。

戰亂の世になると、女は殆ど度外視せらる。家を守り、夫の無事を祈り、子供の世話を燒くより外に能はない。世の中が太平だと貴族は安逸であるから文藝にたづさはる。從て其左右に侍る婦人までが趣味があつて文藝の作家ともなり、批評家鑑賞家ともなるが、戰亂の際には貴族にも其餘裕がなく、從て婦人にも趣味や餘裕がなくなる。文藝は獨り世外に超然たる僧侶の手に渡て、婦人などは全く關係がない。之が足利の季世の姿であつた。尤も東山の頃には將軍義政の室富子などがあつて、閨門に勢力を振つた

ものだが。之はいつの世にもあることてある。淀君の織手は大阪傾覆の一原因ともなつた。それて徳川時代を通じて先づ一般に武士的敎育の爲に中流以上の婦人は身嗜みのよい、貞淑な婦人と化して、日本婦人の典型を作つた。

然るに商人が富み、其富の權力が盛になるとともに、淫靡の風も盛になり、花柳社會が賑やかになり、從て其社會の婦人が大分婦人史に幅を利かすやうになつて來た。町奴が當時の武士的精神から流れ出て武士的階級に反抗して任俠の風を立つるとゝもに、花柳社會の如も一種の意氣とか張とかを以て自ら負ふやうになつた。元祿以後には此風が大分盛になる。

「古代は緣付きの首途には親里の別れを悲み、涙に袖をしたしけるに、今時娘さかしくなりて仲人をもどかしく、身拵へ取いそぎ、駕籠待ち兼ね、尻輕に乘移りて、悅喜鼻の先にあらはなり」と好色一代女にあるのを見ても時代はもうそんな堅くるしい時代ではなかつた。

俗つれ〴〵には「吉原は淋しく見えて內證の繁昌、兎角金澤山の所故なり、さるに依て女郎の志自ら強くなりぬと、宮島と云ふ書物に見えしに違はず遊女は好男次第にて、其時々々の色を增すものなり、紅葉は千人の目にも太夫と見えしは、中頃の高尾にぞありける」と云ひ、元祿太平記には「慾深き大盡の願ひには、風俗物ごしをば島原の女郎に、吉原のはりを持せ、丸山の夜の物を着せて大阪の揚屋で遊んで見たいと云ふも道理、客をとらぬ故に散茶とは云ひながら、野暮な大盡をば幾度もはねつけ、五會七會の客には世間話も碌にせず、さは十四五度の御見といへども、いかな事捨文一つもやらず、去とは氣の强い女郎達、やはり自慢故かと惡う思ひながら、馴染を重ぬるにつけては、ほんまの心中を立て、上

に情の底を叩き、物日の約束を堅めては、朝から仲の間の茶屋に出て待請け、二足馬の音を數へ、源様見ましたどこへ、小さん付ましてゆけ、ようまださんしたの」とある。之て見ても、此社會に一種の氣風があつたことが分る。「助六さんと意休さんとを比べると雪と墨」と揚卷は喝破して居るてはないか。今更野暮らしくも此に繰返す必要はないのである。

江戸時代には、一方に武士的婦人なる春日局などを出した。勿論春日局の事實は傳へるほどのものてはないが、兎に角厳格な忠義一轍の女てあつた。しかし一方には近松劇其他に現はれたやうな、義理と人情との板挾みとなつて人情に殉じた女も少からずあつた。殊に江戸の婦人としては遊女に任俠の風があり、ついて深川の羽織などの藝者に面白い氣質があつて、我が婦人史を飾つて居る。江戸は文藝は盛てあつたが、婦人の活動が少なく、良妻賢母主義てあつたから、婦人の文藝家は甚だ乏しい。小説戯曲に筆を染めたものは古い處て小野お通ぐらゐを除いては先づないと云つて可。婦人の文學と云へば歌俳諧位て、寧ろ貧弱てあつた。藝術にも之と云つて取り立てゝ云ふものがない。清原雪信女・紅蘭・玉瀾・春沙などが先づ關の山てあらう。

舊道德に支配された婦人が社會の進歩とともに漸く自覺するのは、蓋し自然の數てあらう。唯其自覺のしようが急激に淺膚て突飛てあるのは、之れ世間の同情を買はぬ故てあらう。しかし之も亦婦人界の革命に於ける破壞運動と見れば差支がない。先覺者たるべき男子は罵倒するにも及ばず、壓迫するにも及ばず、又おだてるにも及ばず、尻馬に乘て隨喜するにも及ばず、善く之を導て婦人界の改革をしてやつたらよからうと思ふ。余は新しい女に對して、酷薄なる世評の非を唱へる。

若き婦人に送る書

水野盈太郎

以下の言葉は、特にこれを二三の人に向つて送る爲めに書いたものではなく、或る意味から公開の書として書いたものである。たゞこれを書くについて自分は手簡の往復をした數人の婦人の生活が心に浮んで來て居ることを斷つて置かねばならぬ。これ等の人々もやはり生活の上に革命を起さうとした人々である。そしてその人々の心の狀態が、殆ど同じ場合と、意味とを持つて居た。これから推して、少くとも現在の同胞の婦人達の中に、この人々と同じ心に居る人の數が意外に多い事を思ひ得た。或る年齡と、或る敎育とを受けた人々の多數が、殆どこの人人と同じ心の生活をして居ることが思はれる。斯う言ふ意味でこの書を公開のものとしようとしたのである。又、斯う言ふ意味で、自分の言葉の對象は制限されて居るものである。

一

此頃は日本の言論の一部が、婦人の周圍に集つて來た。これに依つて、從來日本人の思想―と言ふよりは、感念の中に、雜然として入つて、理解されずに信じられて居た石塊が殆ど總て洗ひ出されて來た。あらゆる方面から言葉が發せられて「婦人」の――特に若い婦人の周圍に集つて來て居る。しかし、この現象が決して幸福な事ではない。この中には少しも眞實な處がない。たゞ議論をされて居るに過ぎない事である。その聞く人にとつては躁がしい勝手な饒舌を聞かされるに過ぎない事である。その議論をして居る人達は、自分では大切なことをして居るつもりでも、事實は遊戲をして居るのである。それはさうなつて來る筈である。

その人達の多數は少しも直接に若い婦人の生活と言ふことを、身が親しく理解することとせず(或は爲得ず)して、たゞ知識の上の論理を以つて、ものを決めて行かうとするからである。

斯う言ふ議論は、少しも現在生きて居る婦人の肉體と交渉がない。たゞ雜音にすぎない。現に生きて居る肉體とは少しも交渉のない知識にすぎない。勿論、これ等の百千萬言は、一人の靈魂を眞に破る力もない。救ふ力もない。現在の若い婦人達は全く心が飢ゑて居る。それは求むる處が多くして、その心を充すことの出來ない飢ゑではなく、求むるものをも知らず、全く與へられることのない飢ゑである。この飢ゑは恐しい飢ゑである。

今の若い婦人程、自己に對して純一な生活の出來ない境遇に置かれて居るものはない。この人々に對して社會は十重二十重の欺瞞を强ひて居る。この人々の生活は實に薄弱である。それに對して犯し入つて居る種種の觀念は、この人々を閉塞させようとして居る。しかも一方には、人間が自己に對して純一になつて生きると云ふ事の美しさと、尊さと、自由さとを敎へるものが、その人々の心を打つて來る。又、あまりに密閉されて居るので、この人々の神經は、その等の事に對して尖鋭になつて居る。(これは公平に、詳細に考究せられねばならない問題である。)

そこで、この人々の現在直接の事業は、現狀打破と言ふことである。それはこれらの人々にとつて、現在の生活が呼吸を閉塞される苦痛であり、同時にその身體を圍繞した人々の心は、その尖鋭になつて居る神經に針を打たれる痛さに滿ちたものである。この密閉された中から突破して出ようとし、この痛みに對して反抗して行かうとするのは、殆ど總ての人の上に見られる處である。たゞこれだけでは消極的な行動になつて現はれるに過ぎない。これが積極的になつて現はれて來たものが、現在の日本の婦人運動である。今の場合では若い婦人達にとつて、これだけでも、或る福音が含まれて居るに違ひない。

しかし、自分は今こゝでは、自分が見たゞけのものについて、自分の言葉を續けて行き度い。自分は假にこの大きい聲になつて居る或る婦人達の運動を他處に見ながら、一二の普通の人々の心について言葉を續けて行き度いと思ふのである。

自分の知つて居る人々は、總て盲目であつた。たゞ感情の力だけで盲動して居る人達であつた。人としては總て順良である。この人達は痛さに對してすぐ彈ね上つて叫ばうとする心を持つて居る。同時に安らかな中には快く眠り行く人達である。普通の家庭の中にある娘達の中で、たゞ感情を美しむ心だけが養はれて居る人達である。

しかし、この人々がやはり革命を起さなければならなくなつて來て居る。この人々さへその呼吸が閉塞されようとして爆發してしまつて居る。さて、この人々が爆發してしまつた後である。この人々は何に依つて導かれ、何に依つて救はる可きか、自分には何一つそれがあることを知らない。勿論、その人々もそれを知つては居ない。その人々の盲動は、盲動だけに終らうとして居る。

斯う言ふ人々にとつて、現狀打破はそれは意外に目に餘る仕事である。しかし、それは盲目な感情の力だけでも成し得られる事である。たゞ女性の從來の習慣から、これはその人々の臆病を乘り起す一つの勇氣にすぎない事である。それを、その人々は意外に大事業として見て居る。その結果として、その人々が眞に生る道は、これであると思つて行かうとして居るのである。更らに根本の問題があることを、その人達は考へ至らぬ中に無いものにしてしまつて行くのである。

だから、その革命をして、密閉された世界から出て來た人は、生れ變つた人ではなく、場所を換へられた人に過ぎないのである。自分の心を養ふ事すら知らない人である。依然として、感情に盲目な人である。たゞ痛みに對して彈ね上つて叫ぶだけの人である。世間はこの人達にとつて到る處、その呼吸を密閉しようとして居るものに見えるに違ひない。この人達の言葉

が如何に怜悧てあつても、如何に考へ深さうに聞かれても、それには少しも根がない。何事についても眞底それ自身の生の上に立つて考へたものてはない。

て、この人々の歩いて行く道程危險て、無方針て、理由のない道はない。この人達は、又、以前の生活に降服して行くか、それてなければ自ら弄ぶやうになるその二つしかないと思はれるのてある。この人達はたた爆發し易い心を持つて居るだけてある。その尖鋭は少しも恐しくものの中に侵入して行く力を持つて居ずに、空中に向つて爆發する力を持つて居るだけてある

それだから、この人々に向つては、直接にはさう多くの問題はない。たゞこれを圍繞して居る社會、その社會の中にある人格のない觀念に對して、却つて非常に問題が多いのを見る。

二

以上が、自分の對象にした婦人達の極めて粗い輪廓てある。

自分がこの人々から受ける言葉を見ると、この人達は自己の生の上に立つてものを言はうとせずに、やはり人に絡み付いて、自分を伸ばさうとして居る。この程度の弱さと空虚とて生きて居る、しかし、恐しい程その身を投げ出して、ものを求めて居る。自分はこの場合の心の貧しさを、更に少しく怜悧な人々の自ら作つて居る殼よりも尊いと思つて居る。だが、これらの人に與へられるものを思つて行くと、それは慄然とさせるものがある。この人達は自己の生について考へる力を缺いて居る。自己を獨立させて、眞實に一人の生きた人として考へると言ふ努力がない。この人達は偶像を崇拜するか勢力に雷同して行くかより外にない。だから、この人達の心の貧しさは、或る解釋を持つ人同情のある理解を持つて居る人にとつてのみ尊いのである。又、さういふ人に依つてのみその人達の生命に伸びて行くのてある。

自分は斯う言ふ人々の、この心が水の泡のやうに滅びて行くのを考へることが出來る。この人々はまだ漂泊者てある。まだ心の世界を浮動して行く浮雲てある。

それがたゞ感情の力で動いて居るに過ぎない。これ等の人達に向つて、

「自分の生と言ふことを深くお考へなさい」と言ふより外に何の言葉があらう。

「自己を進めて行くものは、自己の生より外はない。」と言ふより外はない。如何なる事をするよりも、先づこの人達は、自分を人間にしようと考へて努力するより以上の根本的な重大な問題はないと思はれる。

しかし、この自己を「人間」にすると言ふ言葉は、少しく空漠な、依り處のない言葉に聞える。又、どのやうにでも解釋の出來るものにも思はれる。これに對して、自分は現在のこの人達に言ふのは、今、吾々が自分自身で歩かうとして、突破して行かうとして尖つて居る道よりはずつと距離のある平靜な、低調な世界である。これは自分がその人々を輕視し、侮蔑して考へたのではない。どうしてもその人達が一度は、そこをくゞつて出て來ねばならない心であると思ふからである。

自分は人の歩き進んで行く足は、誠に遅々たるものであると思ふ。その間には驚く可き飛躍もあり突進もあるのは勿論であるが、その進む足は——もし確實に地を踏んで行く人にとつては、自分に對して失望の起る程、遅々としたものであると思ふ。その上に形體の上に進化論が説いて居るステップがあると同じく、その靈魂にも進化論のルウルが行はれて行かねばならない。隨分、大きな力を費して、多くの徒勞をして、遅遅とした足どりで進んで行くものである。自分はそれを信じなければならないと思つて居る。これを自分に敎へてくれた友達は、勇敢な、全力的なそれに對する努力の實行者であつた。自分はその人の生活に依つて自己に對する失望から救はれたものである。

自分はやはり人に向つても、これを説くより外はないと思ふ。

今、自分の對象である女の人達は、先づ夫々の性格に依つて、特別に尖つて行く特別の道を求めて行くと言ふトップに立つて居る人と考へるより、前の世界に

居る。心の生活の上から見ると、もつと子供の世界に居る人と思はれる。

それて自分はこの人々が、その生れ變らうとする新鮮な心の強い要求て、あらゆる順良な婦人の生活――生きた人の心を味はれることを希望する。味ふと言ふことは、深い理解を以つて、その生活を自分の生活と相生きさせて行くことてある。自分はこの人達がストライキングな、一種のアナアキズムと見える女人の生活をその對象として考へることを、現在に於ては誤つたものてあると思ふ。さう言ふことは、この人達を導いて、眞實の自由な世界に入れるのではなく、それを導いてたゞ徒らに岐路に入らせるのてある。自分は一度、更らに新しい意味て、同情の深い、靜かな、暖かな心の世界に、その人々が浸ることを要求する。この人々の永い生育の道はこゝから發して行かなければならないと思はれる。

この人達は、人間に對し、自己に對してさへ眞に徹底した、深い底から湧き出す愛がない。凡てのものに對して生命と言ふことを考へる心の力もない。自分はその人達の狀態は殆ど盲目なものが、自己の暴力に支配されて居るのを見るに過ぎないと言ひたい。

自分は現在、その人達が爆發しつゝある心を、全力を擧げて靜かにならしめんことを希望する。それは自己の力を強くする爲めてある。自己の力を中に充たす爲めてある。爆發して放散して行く力を壓搾して、眞に自己に歸つて、自己の生活力を確實にすることてある。そして專心にその心の眞の食物を求めて行くのが第一の道てあると思ふ。

勿論、凡て新しくなければいけない。前の時代にあつたものに向つても、必ず新しい心て、人の思ひ通りて考へずに、自分の心て考へ味はなければいけない。この人達の飢ゑが醫されると言ふことは――眞實に醫されると言ふことは、これより外の道はないと思はれる。

自分はこれ等の人達の心の中に、さま〴〵の形てデイスイリユウジヨンがあることを知つて居る。しかしそ

のディスイリユウジョンは極く簡單であると思ふ。これを瞥す可からざるものとして見るのは誤りである。貧しい心の生活から起つたものと、自己の生活を知らぬ心から起つたものとして見ても、誤つて居ないと思はれる位のものである。これ等は、形として恐しいものであるに係らず、實質に於てはさう恐る可きものではない。

たゞ、自分はこの人々が、昂奮し、爆發して、放散させて行く力を、自分で壓搾して自分の生命を充實させて行くと言ふ努力について考へる時に、甚だしく不安を感じるのである。果してそれを爲し得る意力が持續するであらうか。その力が全身の血となつて、その身體に潜むで行くに至るまで、自分で自分を保ち得るだらうか。しかし、自分には、如何にしても、この力に依つて、その人達が自己の生の芽を培つて、目を開き、茂つて行く事を考へるより外に道はないと思はれる。

この自己の直接な、根本の問題が起らねばこの人々にとつての眞の革命はない。眞の自由の世界は現はれて來ない。

自分は現在吾々の眼前に起つて居る婦人の問題を、必然のものと思ひ、且つ重大な事であると思ふ。これに對して、男は遊戯的な議論をして居る時ではないと思ふ。吾々の當對者が惱んで居る問題はすぐ後には、吾々の直接な問題になつて來るのである。人間と人間との問題になつて來るのである。一方には吾々の生活の上から、一方には人類の進歩の爲めに、吾々はよそみして歩いては居られない。

女子大罵倒論

青柳有美

▲緒論▼

猫やチンコロでも、随分人間に可愛がられて、美しい衣物のやうなものを着せて貰つたり、頸のあたりに銀の鈴をブラ下げて貰つたり、更に富豪の家に育てられる洋犬なぞになると、黄金の頸輪をさへ懸けさして貰らふのみならず、牛肉牛乳スープと、贅澤至極な御馳走までも、日々三度々々に頂戴する。萬年町の貧民は愚かな事、かく申す有美のやうな虚名ばかりの文筆勞働者など、到底夢にも見られぬ大優遇を蒙る。是に於て、猫やチンコロたるもの、此く人間以上の待遇を受くるのに慢心し我れは畜類に非ず、神に近き人間以上のビーイングなりなどホザきくさらば、誰か笑はざらんやだ。『實に以て僣上の沙汰、畜生の癖に……』と人間どもは臍に茶を沸して、罵倒するは必然である。女が、男共にチヤホヤ囃し立てられ 御機嫌を窺つて貰つたり、男が女の爲に大金を惜まず、美しい衣服装身具や麗々しい調度を調へて呉れたり、時には産を傾け城を傾け國を傾くるものさへあるのを見て、女は男以上である、人間以上のものである、神に近いもの、人世に天降れる天使であるなぞと思はゞ、それは實に僣上此上無き沙汰の限で、我が分を知らぬと申すものだ。男が女の爲に大金をも惜まず、衣服調度を調へやり、産を傾け、城を傾け國を傾くるのをも忘れて、可愛がるのは、女が若かくエライ高等な動物であるからでは無い、恰度人間が猫やチンコロを可愛がると同じで、女は男の保護を最も多く要する、男よりも劣等の動物と思ふからの事である。この處に御氣が付かれず、男を一概に鼻の下の長いもの、お芽出度いもの、女よりも一枚下のものなぞと自惚れあがらば、それこそ飛んでも無い設量見で、男から優待を受けてるのは、其實、猫やチンコロと同一視せられ、畜生と同一の御取扱を受けてる爲めなるを知らぬ淺慮の至りと申さねばならぬ。さて〳〵、女とは馬鹿なものでムるワイな。

▲女は人に非ず▼

猿は人間よりも、尻の毛が三本足らぬので、それで人間に成れず、畜生道にウロ〳〵してるんださうなが、女も男に比べると、矢張尻の毛が足らぬらしい。猿のやうに三本までゞも無からうが、確に一本半位は足らぬに相違ない。是に於てか、男を若し人間なりとしたら、女は人間と猿との中間にある動物で、半獸類とでも命名すべき種屬のものだらう。女が、兎角、禽獸の眞似をしたがつて、頸にボーアと稱する鳥の羽や獸の毛で拵へた襟卷を纏ふたり、帽子や袴に駝鳥の羽を着けたりするのも、これが爲めかと思はれる。第一、英吉利語にMANと云ふ言葉があるが、これは、男といふ意味にも通ずるが、又、人間といふ意味にもなる。然し、女を表示する言葉のWOMANは、單に女といふたけで、人間の意味には通用致さぬ。かく英吉利語に於て、マンは人間の意味にも轉化し得られるのに、ウーマンが人間の意味に通用の出來ぬ言葉であるのを見ても、女は男の如く人間の列に加はる事の出來ぬものだといふ消息が能く知れるだらう。そんなら、女は、人間の列には加はれぬが、天の使や神様たちの列に加はれるかといふに、此の世の中に有りと有らゆる事で、女が男の手を借らずに出來るといふものが、何に一つあらうか。男よりも女が上手だといふ仕事が又、御生憎さまながら一つも無い。それでは女は人間から離れて神様や天使に近いので無く、人間から離れて明に猿に近い方の部に屬するものと云はればならぬでは無いか。

依て若し、今進化論者の如き立場から、動物の優劣階級を定めたら、男、女、猿といふやうな順序になるだらう。如何しても女は男と猿との間にあつて、人間なるまでには、まだ〳〵進化に多大の時間を要する劣等動物である。勿論、或る女は確に或る男よりも、種々の點に於て優れてるだらう。然し之は一般的に云ふと身長の低いとせられてある日本人種のうちにも、一般的には身長の高いとせられてある歐洲人より、時に高いのがあると同一理で、全くの例外と見るべきものだ。人間でも白癡は數を算へることを知らぬが、象や犬なぞのうちに、却て加減算を行ひ得るものさへある。こんな例と同じで、男の低能なものと、女の俊秀なものとを比べたら、夫れ或は女が優れてるやうにも見えやうが、之を以て直に、女を男に比較し、少なくとも女は男と同等の能力ありなぞ言ふのは、早計も又甚しと申さねばならぬ。あゝ、早計なる哉早計なる哉だ。文學や、科學や、哲學や、美術や、宗教や、政法や、醫術や技術の如き高尚な學術技藝思索、乃至手腕を要する方面に、女が到底功名手柄を揚ぐる事の出來ぬものたるは、假令、一二の例外があるにせよ、モウ動かすべからざる既定の事實である。敢て、ヘブロック、エリスやマンテガツチアのやうに、女の腦髓と男の腦髓とを比較したり何かして小六ケしい理窟を並べたてるまでも無い。また、そんな事は誰でもやれる。有態は女が男の眞似の出來ぬ事として誇りつゝある所謂女の長所なるものを大に罵倒して見たいのだ。女の長所とせらるゝものさへ、男に劣るとしたら、其他は無論申すまでも無く男に劣るんだから、女は如何にしても人間

と猿との間に位する半獣類で、人間らしい顔をして男と並んで行けるもので無い事が、頗る明瞭になるでは無いか。

▲女の産婆▼

近頃は、トリアゲ婆さん必ずしも婆さんに非ずで、若い十七八から二十二三の美しいのさへある御時勢だから、産婆とは穏かならざる名稱だとあつて、大阪の緒方病院を初じめ、トリアゲ婆さんのことを産婆と稱へずに、助産婦といふ頗る學術的な新らしい名稱を以て呼ぶに至つたが、それにしても、言葉の終には矢張「婦」の字が付いて、トリアゲは女で無ければならぬ事になつてる。未だにトリアゲ爺さんも無ければ、又助産夫も無い。トリアゲは昔から今日に至るまで、全く女に限るものゝやうにせられてある。然し、能く考へて見ると、是れは實にゾツとするほど恐ろしい次第で、女ばかりが此く傳説的に助産の事を司り、産婆若くは助産婦なる言葉を形成するまでに至つたが爲め、何の位多くの人の子が殺されて居るか、測り知るべからざる程だ。女が、助産をする爲に多くの殺さずに濟む生兒が何のくらゐ死し、又、死なずに濟むべき産婦の斃れてるのが如何に夥しいか知れぬ。助産は、之を其性質の上から云へば、外科に近いもので、膽力の入用な、綿密なる學術的の注意を要する仕事である、世界何れの邦でも、女に外科手術の出來る醫者の殆んど無い事は、誰でも知つてる通りである。女に、稀にキウリー夫人のやうなのがあるにしても、學術的に働かすべき注意力の乏しいこと、是れも今日誰一人として否定するものは無い。その外科手術の能に乏しい、膽力の無い女が、外科手術に近い、膽力を要する助産をするんだから、到底完全に行きさうな筈が無い。産婦の産後に斃れるのは、多く産褥熱に罹るためであるが、産褥熱の原因になるものは、主に分娩の際及び其後に於ける消毒の不行屆である。學術的注意力の不充分な女は、當然消毒にも不注意である。女が助産手たるために、産褥熱が多く起ると云はれても、辯解するの辭は無からう。若し、傳説的の此の慣習が、幸ひに一朝破壞せられて、男が助産をするやうになり、産婆とか助産婦とかいふ言葉が廢れて、助産手と稱ばれ、男の産婆が女の産婆よりも多くなる時代が、此の世に將來したら産後の病氣なぞ殆んど其跡を絶ち、産褥熱なども皆無に近いものとなり、助産の方法にも、男の助産手の鋭敏なる腦髓から生れた新らしい工夫が應用せられ、助産學上の技術は長足の進歩を見るに相違ない。元來、分娩なるものは生理的作用で、病的發作で無いんだから、幾ら、お産をしても無病であるべきが當然なのに、産後の病氣の多いのは、皆な是れ女が助産を司る爲である。女の産婆は、一種の人殺しだ。男が産婆になつたら、産婦がイヤがるだらうと心配するものもあらうが、夫れは、まだ女の心を知らぬ淺見者流の言である。女は婦人病なぞに罹つても、女醫者に診察して貰ふのを厭つて、却て男醫者を好むものたる事實がある處より推論すれば、男の産婆が出來さへすれば、却て女の産婆よりも、姙婦産婦が此の方を悦ぶのは必然だ。

然るに、今日まで、女が産婆として跋扈するを得、男の助産手が現れなかつたのには、男の嫉妬心が基因を成してゐるのだ。若し、我が妻の安全なる分娩を望まば、男も此の妙な猜疑的嫉妬心を除却して、男の産婆たる助産手を歡迎するまでの度量を養ふべき筈だ。殆んど、古來より女に專屬の職業たる如くに解せられた助産業でさへ、女よりも男の方に適業なりとしたら、女は何の長所を以て男に對抗する事が出來ようか。女は駄目だ、人間では無い、人間と猿との間にある半獸類動物である。

▲女の裁縫▼

男の學校には裁縫科といふものが無い。女の學校にばかり裁縫科がある。男には裁縫は出來ぬが、女には之が出來る。幾ら男が威張つても是ばかりは女に敵ふまいなぞと威張りくさる女もある。然し、有美なんかが聞くと、チヤンチヤラ可笑しく、是れ又以て臍茶の沙汰と云はざるを得ぬ。昔から男は讀み書き算術、女は針仕事と裁縫と、陰の形に伴ふ如きツキものとせられて來たのは事實で、女の學校では裁縫を奬勵し、家庭で亦女に裁縫を奬勵する事も同じく事實、男の學校で裁縫を教授せぬのも事實である。又、男は女房や子供の爲に衣物を縫うてやつたり、靴下の穴を繕うてやつたりせぬのみか、自分の袂の綻びさへ繕はず、皆な之を女の手でさせるのも事實である。されど此の事實あるのみの故を以て、男は裁縫の出來ぬもので、女ばかりが出來る上達し得らるゝものと思はゞ、それは大なる自慢で、言語道斷の沙汰と申すべきだ。男とて裁縫をやればやれぬでも無いが、そんな事を行る時間がある位なら、猶ほ力を注ぐべき天下國家の大事、人生の大事があるから、靴下の穴や袂の綻びなんか繕ふ小事は、到底一大事を爲す能力の無い劣等動物たる女の手に全部委して置くに過ざぬのだ。荷車は、幾ら重い荷物を積んであつたにしたところが、二十人でも三十人でも之に懸りさへすれば、人間の力で曳けぬといふ筈は無い、必ずや曳ける。然し、そんな馬鹿げた事をしては貴い人間の勞力を徒費することになる故、劣等動物たる馬か牛に曳かせる事にして居るのだ。女が、裁縫のやうな愚にもつかぬ仕事をするに至つたのも、男の眼から觀ると、女は馬や牛と同様の劣等動物で、裁縫くらゐをして毎日靴下の穴か袂の綻びでも繕らうてるのが、誠に、ふさはしく思はれたからのことである。男だとて、一たび鋏刀を握り針と絲を手にし、尺度を使ひ、裁物庖丁を動かし始めると、流石は男だけあつて、女が幾ら競爭しても及びかねるほど立派な裁ち物、立派な縫ひ物を拵へあげ得られる。論より證據だ。少し、氣の利いた衣類になると、到底、女の手では仕立てられぬでは無いか。衣服にも、矢張、之を裁縫する者の腕次第で、繪畫や彫刻と同じやうに、表情の出て來るものだが、女の裁縫した衣類に限り、何うも此の表情に乏しい。グツタリしたゾベラ〳〵したものになる。羽織や袴の仕立てあがつたのを着て見ると、直ぐ、それが男の裁縫したものか女の手に成つたものかが知れる位だ。男の手で出來たものは、羽織の襟でも袴の襞でも、ピンと

して鎌倉式の彫刻か建築のやうなところがあり、頗る着心地のヨイものであるが、女の裁縫したものになると、このピンとしたところが無い。世界中、到るところの裁縫店でも、高等な裁縫師には皆な男が雇はれて女は簡單な裁ち縫ひをするばかりに過ぎぬ。是れだけでも、女は裁縫に於てすら、到底、男子の敵でないことが知れやう。まづ／＼、靴下の穴修繕、袂の綻び縫ひくらゐのところが關の山と申さねばならぬ。殆んど古來より女に專屬の仕事のやうに考へられて、學校では特別念入に精々教へ込まれ、家庭でも精々口喧しく奬勵せられてる裁縫さへ、女は男に及ばぬものとしたら、女は何を以て男に對抗する事が出來ようか。あゝ、女は駄目だ、女は劣等動物である、人間と猿との中間に位する半獸類である。

▲女の料理▼

割烹科。これも男の學校にはなく、女の學校にばかりある科目で、料理は女に專屬の技術のやうに心得られてるのが、今の世の大勢である。成る程、時には亭主に紅い湯衵の洗濯をなせる程な勇氣のある特別生れ損ひの女なんかのうちには、男に御飯を炊かしたり何かするやうな事もあらうが、それは例外中の例外で、多くの場合に於て、女は常に一家の炊事を司り、煮たり燒いたり、味噌を摺つたりする。然し、それ丈けだ。本當の料理は、男で無ければ、到底作ることの出來ぬものである。畏れ多いが、宮中大膳職の御料理人に、一人たりとて女が御採用になつて居らぬでは無いか。若し男よりも女の方に料理の技術に達した名人があるものとしたら、差當り宮中なぞでは必ず大膳職に女を御採用相成るべき筈のものだ。然るに、一人も女の御採用に相成り居らぬところより觀ても、女に專屬する特殊の技術なる如く女の間に誇られつゝある料理の技術も、結局は到底男に及ばぬものたる事が、頗る非常に明かである。單に宮中の大膳職ばかりでは無い、少し大きな貴族の家庭になると、其家の料理番は屹度男である。否な、小さな近所そこらの料理屋の料理番さへ、皆な男で、女を料理番のイタマイにしてるところは、まづ／＼皆無と云つても可い位のものだ。大きな料理屋のイタマイは、無論悉く男である。東京の精養軒、帝國ホテル、ホテルメトロポールあたりに、女のコックといふものが一人でもあるか。皆な男では無いか。世界中で最も女權の擴張した國と目せらるゝ北亞米利加合衆國に於てさへ、少し大きな料理屋や旅館の主厨やコックは、悉く男である。これだけの事實を見ても、女は到底料理人として、男に敵することの出來ぬのが、一目瞭然たりといふべしだ。女の出來る割烹は、總菜料理ぐらゐが關の山で、お芋の煮ころばしあたりが御得意のところだらう。それも、男が能きぬから、女に行らするのでは無い、貴い男といふ人間が、そんな何う出來上つても、天下國家の大事に關係ない、又、人生の大事に影響せぬやうなクダらぬ事に精力を折る必要が無いところから、之を女といふ無能な劣等動物の爲すがまゝに任せて置くに過ぎぬ。料理の鹽梅とか加減とかいふものは、恰度、刀を鍛へる時の湯加減のやうに頗る微妙な消息

のもので、判斷力の遲鈍な、明確な知覺を構成するだけの腦力に乏しい、女の貧弱な腦髓で、兎ても會得せられさうな筈が無い。女が立派な料理人になれぬのは當然だ。殊に、日本料理の刺身なんかになると、餘程、之を作る者の技倆が冴へて居らぬと、綺麗に出來上らぬものである。羽織の襟や袴の襞をピンと仕立あげる事の出來ぬ女が、何うして刺身を切味で甘く食はせるやうに作られ得るものか。能きない、斷じて出來ない割烹教師なんかにも、女が稀れなのは、全く是が爲めである。女といへば、直ぐ料理と聯想せらるゝまでに、女の特殊技術のうちに算へらるゝ料理に於てさへ、此く男に劣るものとしたら、女は何を以て男に對抗して行けやうか。女は、矢張、駄目だ。女は劣等動物である。人間と猿との中間に位する半獸類だ。而して、男は人間である。英語のマンは、人間の意味にも男の意味にも共通なんだからネ。

▲女の看護婦▼

看護婦にはナイチンゲールがあるなんかんと、病人の看護婦だけは、女の一手專賣たるかの如くに、凄じい勢で吹聽めさる篤志婦人がある。ところが、これとて頗る怪しいもので、女の看護婦ほど信賴の出來かねるものは、又とあるまい。一寸見から云へば、白い消毒服に、同じ白の帽子を輕くつけた瀟洒たる姿、如何にも神々しさうである、天の使ひらしく思はれる。然し、まづ、看病人として、女の不適任なる第一は、天性愛憎心が深く、不公平なる處にある。一視同仁、誰れにでも如何なる病人にも同一の態度と心情とを以てする事が出來ぬ。氣の向いた病人には、親切も盡すが、氣の向かぬ病人に接しては、親切を盡さぬのみか、寧ろ殘酷なほどの態度に出でる。それから、男が看護人ならば、別に容姿を作つたり、シナを見せたりとるやうな馬鹿げた眞似もせずに濟むが、看護婦になると、さうは行かず。女の病人に、對する時は、惡られてはならぬと容姿を作つておヒンを見せやうとし、男の病人に對しては持前の助平根性を發揮して、ワルイ女と思はれたくなさの一念から、瀕死の病人を眼前に控へながらも、矢張、シナを作り、容姿を繕らふ事に氣骨を折る。それだけ、看病の方には、自然、身が入らず心を飛んでも無い方に奪はれてしまふ事になる。其處に行くと、男の看病人は、愛憎の念が女よりも乏しいから、幾ら多數の病人を一手に引受けても、萬遍なく公平なる取扱が出來、最も注意を要する病人に、最も多くの注意を拂ふ次第となる。又、おヒンを作ツたり、シナを見せたり、容姿を繕らふなんかといふ氣も無いから、全心を病人の看護にのみ傾け得られる。その上又、女は理性に乏しく判斷力が明敏で無いから、時々刻々變化する病症に對し、之に適應する臨機の所置なんかが、兎ても取れやう筈がない。少し、病症に變化でもあると、その時に最も適した對症看護を瞬時の間に行ふ思案が出てず、一々醫師に許に駈けつけ、其命令を受けねばならぬやうな始末になる。然し、それでは、常に手遅れ勝に陷り病勢を募らしむるより外に仕方が無いでは無いか。殊に、大病人なんかに、急激な變化でもあると、忽ち泡を喰つてドギマギし、何んと手を下

して可いものやら、頭の中がモヤ〳〵して、トンと桿が取れなくなッてしまふのが女看護婦の常だ。それでも、猶ほ看護は女の一手專賣だと云はれ得るだらうか。是に於てか、本當の看護は、何うしても膽力が天性で、明敏なる判斷力を有し、臨機應變の處置を爲し得る腦力のある男に限るといふ事になる。瀕死の重病人が、ウン〳〵呻ッてる最中でも『また呻ッてるよ』ッてな冷淡な調子で、平然たる態度を取り、若いお醫者さんなんかと戯れ、高笑ひに興ずるやうな事は、能く大きな病院あたりで見る圖であるが、冷酷なことは、女の看護婦だから出來ることで、男の看護夫ならば、到底、敢てするを忍び難しとするところのものだ。ナイチンゲールは、何んな女であッたか知らぬ。クリミヤ戰爭の野戰病院に入院した傷病兵共は、ナイチンゲールの姿の影にさへ接吻したほどだと言ひ傳へられるも、それは嬢が看病人としてエライところがあつた爲めでなく、これまで女の臭ひさへせぬやうな野戰病院に、女の身で嬢が姿を現した爲めに、傷病兵共が助平根性を久方ぶりに滿足さすることが出來て、之を嬉しがるの餘り、嬢を難有がり、其姿にさへ接吻したくなつたといふに過ぎぬものだらう。恰度、女片の無い殖民地に女が一人でも行くと、如何なお多福でも、女に饑えた男共から難有がれ、忽ち引く手許多となると同じ道理である。女の一手專賣の如くに取り囃されつゝある看護事業に於てさへ、女は到底男に敵はぬものとしたら、何を以て對抗する事が能きやうか。あゝ、女は駄目だ、女は劣等動物である。看護も、矢張、男に限るとしたものだ。女は、人間と猿との間にある半獸類だ。

▲女の文學者▼

猿も之を教育すれば、輕業も行れば猿芝居も演じ、危險い綱渡りも出來、判官にもなり勘平にもなり清姫にもなる。アントニーやブルタスにも成れやう。猿には劣る動物の犬と雖ども、之を馴すと猶ほ犬芝居が行れ、チン〳〵ワン〳〵、さてはオマワリからお預りまでも行り得るやうになる。紐育の動物園には泣いて涙を流すライオンさへあつたとやら。能く、仕立てあげさへすれば、鸚鵡でも簡單な計數が出來るやうになる。況んや、猿のごとく尻の毛が三本まで人間より不足してるといふでも無く、わづかに一本半くらゐしか、男より不足して居らぬ女といふ動物に於てをやだ。近頃は男の眞似をして、役者に成りたいからとて女座とか申すものに成る女がある。成る程、教育をしたら、女とても役者になれぬでは無からう。然し幾ら教育したからとて、眞似は眞似で猿芝居に近かい帝國劇場とか、近代劇協會とか有樂座とか云ふところの、猿役者たるに過ぎぬ。女が役者として不適當なことは、曾て詳しく兩三年前の『中央公論』と、六七年前の『新聲』とに論じ置き申した故、玆には詳說を省くが、女の美術家、技術家、宗教家、醫師、科學者、法律家、哲學者、これとて出來ぬ事は無い、教育の結果、チラリパラリと曉天の星のやうに其處此處に見受けるが、ドウせ碌なもので無く、何れも男の猿眞似をして猿芝居の興行をして居るに過ぎぬのだ。その愚にもつかぬ猿眞

似が相應の評判になり、世間の注意を惹き、松井須磨子問題の記事で、東京の堂々たる新聞が、毎日二段も三段も、紙面を埋めたりするのは、時々田舍の祭禮などに猿芝居が廻つて來ると、滅多に無い珍らしいものだから、人間の芝居よりも却て評判になり、連日の大入を占めるのと同じだ。ところが、女は如何にも、美術家や技術家や宗敎家や醫師や科學者や法律家や哲學者やとしてエライものになれまいか知らぬが、文學者なら隨分エライのがある、ヂヨールヂ、エリオツトを視よ、ブラウニング夫人を視よ、ヂエーン、インヂエローを視よ、マダム、ローランを視よ紫式部を視よ、淸小納言を視よ、樋口一葉を視よ、與謝野晶子を視よ、又、有美の切りに讃める麺麭屋女將さん相馬黑光を視よなんかと、頗る非常に女文學者の肩を持つものがある。然し、女は文學者としても矢張駄目だ。これは、女文學者の作物を讀むと直ぐ知れる事だが、女の作つた詩文だから、必ず簡易で誰にでも、解り可く出來てるだらうと思つたら、大間違ひ、豈に計らんや、評判のある女文學者の作物ほど、讀んで難解なのが通例である。ヂヨールヂ、エリオツトのものでも、ブラウニング夫人のものでも、紫式部のものでも、一葉や晶子のものでも、皆なさうである。これは、讀む者に、之を解し得るだけの力が無く、女文學者は男の及ばぬところに想や筆が屆くためかといふに然らず、實際に於て作者が、成るべく六ケしく書き立てよう作りあげようと陰謀むからの事だ。日本人の作つた英文と英米人の作つた英文とを比較したら、日本人の英文の方が日本人に解し易く作られてるだらうと誰しも思ふだらうが、事實は其反對で、英文に達者だとの評判のある日本人の書いたものほど、難解の箇所が多く、英米人の英文の方が却て日本人の英文より解せられ易いのが例である。これは、日本人の方の書いたものだからとて英米人に馬鹿にせられてはならぬとの一念發起し、日本人は到底英米人ほどに英語を解し得ざる癖に、エラさうに見せかけるべく、切りに英米人の眞似をしたがり、スラングや何にかを振り廻すからの事だ。その出來上つたものが解し易からざる英文となるも當然では無いか。女文學者の作物は、恰度、日本人の作つた英文だ。男が詩を作り文を作るのを見て、急に劣けぬ氣を起し、文學的作物を生産しようとしても、元來が男だけの能力が無く、尻の毛が一本半足りもせぬ女の癖に、僭上千萬にも男の眞似をして世間を嚇かさうといふ根性なのだから、女の作物だからとて馬鹿にせられてはならぬと、大にエラさうに見せかけるべく、種々の技巧を弄するので、出來上つた作物は、世間の人樣が讀んでも、解り難いものになつてしまふのである。かく、女文學者の作物が、概して解せられ易からざる傾向のあるものたるだけに徴しても、女文學者は、單に男文學者の糟粕を嘗め、男文學者の眞似をすることに是れ日も足らぬ猿芝居の猿役者たるに過ぎぬことが明かになる。現に、ヂヨーヂ、エリオツトは本名をメーリー、アン、クロツスといふ女であるのに、殊に男らしいクリスチヤン、ネームのヂヨールヂをつけた雅號のヂヨールヂ、エリオツトで其作物を公にしたなぞは、如何に女文學者なるものが、男の眞似をしよう〳〵とするに心懸けてるかを窺ふに足る有力な一材料とな

るだらう。女は駄目だ、男より離れ、女文學者として獨立の立場を占め女文學者として男と異る特色を發揮し得るほどの力が無い。女は劣等動物である。如何にしても人間と猿との中間に位する半獸類たるを免れ得ない。

▲女の淫賣▼

段々考へ來り、算へ來ると、女が男の手を離れ、男の眞似をせず、女の特殊なる技倆技術として男の前に誇り男と競爭し得るものが、全然一つも無くなる。然し、唯一つあるらしい。それは淫賣だ。淫賣にかけてだけは、流石に優等動物たる男も、劣等な半獸類動物の女と競爭する事が出來ぬ。俳優なぞのうちには、時に男淫賣といふのがあつて、女もすなる淫賣をやり、又元祿の比にはカゲマと稱せられし男淫賣夫もあつたといふが、兎ても女の淫賣に比べて見ると、實にお恥しい次第で、一週間に一度も客があッたら稍々で、先づ以て商賣繁昌の部類に屬する方だらう。淫賣にかけては男はまだ／＼幼稚至極で、到底、女の敵でムらぬ。千枚張の面の皮の上に又一段と濃く白粉を塗り立て、動物園の檻に住む熊かなんかのやうに、格子内に控へてオッに濟し込み、堂々と臆面もなく張店といふものをやらかし、素客がゾメいて繰り込んで來ると、急に懷中鏡を出し、白粉の剝げかけたのを仕上直し、『モシ／＼チョイト！御髯の旦那！伊藤さん！安藤さん！ッぱサ！帽子の旦那！チョイトお寄んなさいよ。空いてますよ』なんかと頓狂な金切聲を出し、格子先に男が立ちでもすると、見ず知らずの他人でも少しも笑止がらず、之を百年の知己の如くに取扱ひ、吸付煙草といふものを呈上するまでの大膽さと勇氣とは、到底、男に見ることが出來ぬ。男の淫賣は、まだ／＼それほどまで組織的に發達して居らぬ。女は淫賣だけにかけては、如何にもエライもので、野郎共はたゞ／＼感歎して引き退り、恐入り奉るより外に道が無い。女は淫賣に於て天の神樣から特別の御惠を受けてるのである。烏賊のやうな軟體動物は、敵の危害に對し之を防ぐに足る武器を缺いてるところより、天の神樣は黑い墨汁を烏賊の體中に蓄へしめ、一たび敵の危害に陷らんとする危機一髮の際に臨めば、この墨汁を噴いて、敵の眼潰とし、敵が大に面喰ッてマゴ／＼する虛に乘じて姿を晦まし、敵の危害より逃れ、其生命を全うし得らるゝやうに仕掛けてある。女は劣等動物で、優等動物たる男のやうに、盤根錯節に堪へ、有らゆる危害とも戰ひ、猶且つ其生命を全うし得るだけの腕力も無ければ又智慮分別も無い。少し周圍から壓迫や危害を加へられんとすれば、忽ち飯の食ひハグレになり、生命が危險となる。是に於てか、天の神樣は、恰も烏賊に墨汁を與へ給ふが如く、劣等動物にして半獸たる女に、淫賣の出來る體組織及び心的作用を與え給ひ、何うしても食へる目途が無くなつたら、淫賣で食うて行けるやうにして下されたのだ。淫賣は實に女に取りての天與の特權で、又最後の隱場である。世界各國の國法、又能く天意を奉體し、女に授けられた此の天賦の特權を保護し、男には淫賣を許可せぬが、女にのみは概ね之を許可し、女の淫賣を公然の職業たらし

め、鑑札を御下附になるのみならず、之に危害を加へんとする者を防ぐべく、特に巡査をして常に淫賣地域を斡邏せしむる國家さへある。ところで、此く男が到底女と競爭しても勝つ見込の無い、女にのみ特に天恩人恩の豊かな此の淫賣さへ、女は男の手より離れ、獨立しては營業が出來ず、常にゴロツキといふ男や何んかの保護を受け居らぬに於ては、忽ち翌日から營業に故障を生じ、安全に淫賣を營まれぬやうになつてしまふ。女の專賣に屬する職業たる淫賣すら、斯く男の保護なくして一日も營めぬものとしたら、何を以て女は男に對抗せんとするか。女は駄目である、劣等動物だ、淫賣さへ男無しには出來ぬ半獸類である。

▲女の育兒▼

男に懷胎しろの姙娠しろの、お產をしろのといふたところで、それは出來ぬ相談だ。女は、この男の出來ぬ懷胎姙娠をし、お產をして子供を分娩することが出來るから、實におエライものサ。然し、男の出來ぬ此のお產が出來るからとて、そんなに女が威張りくさるなら、有美なんかは餘りの可笑しさに片腹痛く感じ、そのお產の出來るのを誇るのが、寧ろ女の劣等動物たして、智慮の淺薄なるを證明する所以だと嘲りたくなる。子供を產める〳〵と女は威張めさるが、雙生兒を產むものは、まアそんなにタンと無い、況んや三ツ兒に於てをやだ、其昔、德川將軍家御盛んの比におかせられては、三生兒を產むと、藩主から御褒美を下し置かれしほどなものである。子供を產むが、そんなにエライ事なら、チンコロや猫の牝は實に以て女よりもエライもので、一ツ時に七疋も十疋も一ダースも子供を產む。更に廿日鼠は、一層女よりもエライ、鼠算で、子供を殖して行く。子供を產むことにかけては、女たるものゝ廿日鼠よりも遙に遠く、否なチンコロや猫にだも及ば無い。人間が肴の骨を食へぬのに、犬や猫が肴の骨を、難なく食へるからとて、それが如何して、犬や猫が人間よりもエライといふて威張る證據にならうか。男の出來ぬお產を女が出來るからとて、女のエラがるのは、人間の食へぬ肴の骨を食へるからとて、犬や猫が人間よりもエラくござるぞと威張るのと同然である。況んや滿九ケ月と二日も費して、漸く一人よりしか產めもせぬ分際で！次に又、男は子供を養育して行けぬが、女は出來るから、エライなぞと、賴まれもせぬのに女の爲に氣を吐くものもある。然し、女が子供を育てるに上手と申す說ほど當てにならぬは無い。なるほど女だからとて子供に乳の喃ませるくらゐの事は知つてるだらう、イロハの手習を敎へる位のことは心得てるだらう、又、今頃のハイカラ奥さん連のうちには、エー、ビー、シイーのアルハベットぐらゐのところを、成る程、子供に敎へ込む事が出來よう。けれども、それ丈けである。子供が少し我が命を用ゐぬやうになると、母なる女は必ず直ぐ『坊や、そんなに、おイタをすると、阿父さんに言ひつけるよ』と、父なる男を笠に着、虎の威を借る狐のやうに、男の名を借るお蔭で、漸く初めて子女敎育の實を擧げ、子供に躾をつけて行くでは無いか。子供の眞の敎育、即ち子供を人らしい人に敎育して行くのは、一に父なる男の名に於て初

めて行はれるのだ。父なる男無くして、子供の教育は、本當に行はれさうな筈がない。幼にして父を失ひ、母ばかりの手で育てあげられた子供に、碌な人間になれる者なく、概ね不良少年となるのも、當然である。また、一朝、子供が健康を害し少しばかり病人にでもなつて御覧うじろ、その時に於ける母なる女の狼狽周章加減は又一種特別で、まづ之を醫者に診せて可いものか什麼かさへ判斷が付かなくなる。病人を醫者に診せるか見せぬかといふやうな事は、頗る簡單な問題で、一秒時間の考慮をも要せず、忽ちにして決し得らるべき性質のものなのに、この頗る簡單な問題さへも、自ら單獨の意見で決する事が出來ず、必ず父なる男を捉へて『郎君々々！如何しませう？』と相談を持ちかける。これほどまでに智慮が淺薄で、判斷力の乏しい女が、何うして子供の發育やら教育やらを、男の手を離れ、獨立して行ッてゆけるものか。出來ぬ、出來ぬ、斷じて出來ぬ。男よりも優れたる技倆ありと一般に持て囃さるゝ子供の養育教育に於てさへ、其實際に臨むと、直に男の力を借らねばならぬやうなザマの女は、然らば、何を以て男に對抗する事が出來ようか。女は駄目だ、女は人間と猿との間に位する劣等動物だ。あゝ女は半獸類である。

▲女の犧牲獻身▼

女は、男よりも犧牲獻身の精神に富んで居る、自己の利害を犧牲にしても、他人殊に我が愛する男の爲に盡くす氣が充滿して居る、これが女に特殊の性質で、これは利己心の強い男なんかに、夢にも見る能はざる美徳だなぞと、唱道し得さる心得違の男さへ、時にはあるぐらゐだから、御本人の女は、切りに此の犧牲獻身の精神とかいふものを、振り廻はしたり、臭はしたりして吹聽し、如何にも此の美徳を女ばかりが占有するかの如くに、吹きたてる。ところが、此の美徳なるものは、矢張、甚だ以て怪しく、犧牲獻身の精神どころか、徹頭徹尾、女は利己一點張の塊で、念頭たゞ、自己の利害觀念あるのみだ。他人の幸福や利益快樂は、如何が相成らうとも、自己の心に滿足をさへ得れば、それで天下泰平といふのが、女の眞情である。女の嫉妬心は、男よりも強いといふのが、まづ第一に、女なるものに犧牲獻身の精神が乏しい證據である。果して犧牲獻身の精神が盛なりとしたら、假令、我が愛する情郎にして、その利益の爲め、或は快樂の爲め、或は幸福の爲め、他の女に情を移し、他の女を愛し、我れを疎んずる傾があるやうになつたからとて、俄に嫉妬の焰を燃し、其男を責め苦め得らるべき道理は無い、此處が即ち犧牲獻身の實を現すところだと心得、我が情を犧牲にし、我が身を其男の幸福利益快樂を增進する爲め、犠祭の供物に獻げ、其男の爲すが儘に、思ふがまゝに爲さしむべきである。然るに、此く擧動ふ事が出來ずに嫉妬するのは、犧牲獻身の精神に乏しいからの事だ。之と恰度反對で、男は女に比し、嫉妬心が弱いといふ一事からのみでも、女より男が却て犧牲獻身の精神に富んでることが立證し得られる。男は、實にエライものだ、全然、犧牲獻身的である。身を獻じ名譽を犧牲にするばかりか、我

が愛人の爲めには、古來家を傾け、土藏を傾け、城を傾け國をさへ傾けたものが、許多もある。西郷隆盛は私學校健兒の爲にさへ、名譽と生命をさへ犠牲にした。然し、女には、こんなにまで犠牲獻身の精神に富んだのが、在るまい。女の犠牲獻身は、精々のところで、兩親から親切にして貰へるのを犠牲にして、親の許さぬ男に嫁ぎ、五十萬圓の資產ある男に嫁げる家柄なのを犠牲にして、三十五萬圓の資產だけしか無い男の許に嫁ぎ、一日肴の切身二枚を供して身を養ひくれる男のあるのに之を振り切り、好いたからとて肴の切味一日一枚しか食はしてくれる收入より無い男と同棲し、身體の攝取すべき營養分を一日に付肴の切身一枚分だけ差引男に獻上する位のものに過ぎぬ。女の犠牲獻身とは、大抵、こんな程度のものである。その上、然る些細な犠牲獻身と雖ども、之を口へではやらぬ。その報酬として、之を受けた男より全心の愛を要求し、其男をして其男の持てる有らゆるものを、我が爲に犠牲に供せしめ、大切な友人、向上發達進歩の精神さへも、我が爲に棄てさしめやうとするのである。俗に海老魚で鯛を釣るといふ諺があるが、女の犠牲獻身は全く海老魚鯛主義で、少しばかり犠牲メイたものを肴にして見せかけ、男に大犠牲を拂はしめんとする敵本主義に外ならぬ。古往今來、男の爲に身を棄てた女は少ないが、女の爲に、身も產も位階も棄てた男は實に夥しいものだ。「主のためなら手鍋提げても……」とは、能く女の口癖にする常套語である。然し、これも矢張又、敵本主義で、女の自我慾を滿足さする爲めには男を臨、其妻をして、手鍋を提げさせねばならぬ境遇にまでも墮落さするを厭はぬといふ意味を、或る婉曲に言ひ表はしたものたるに過ぎぬ。女が犠牲獻身の精神に富むなぞとは、眞ッかいな僞り、實に殘酷至極なもので、我が利益、幸福、快樂を滿足さする爲めには、男を如何なるムゴイ目に遇はしても、カマハズとする半獸類、その名が女である。女の斯く殘忍なる性質あることは、嬰兒殺しなんかを行ふものが、男に無くして、女にばかりあるのに徴するも明かだ。齋藤綠雨が、自分の身體さへ持ち扱ひに苦んでる處に、犠牲獻身だなんかと、女に其身體まで持ち込まれては大變、平に御免を〱といふたのも無理はムらぬテ。女に特殊の道德なりとせられた犠牲獻身の精神さへ、斯く女よりも男の方が富んでるものとしたら、女は何を以て男に對抗せんとするか。女は全く半獸類だ。人間と猿との間に位する劣等動物である。

▲女は男の敵▼

七人の子を成しても、女に心を許すな。女は實に男の敵である。ショウペンハウエルは、巷に絶えぬ噪音の爲め、何の位多くの天才が滅ぼされ、何のくらゐ多くの新發見が、その發生の半途に於て葬られてしまつたか知れぬと、噪音の存在を痛歎したが、女の在る爲に、如何に男が善事を爲し、大業を成就するのを、色々妨げられて居るか、測り知られぬ。多くの天才も素より女の爲に亡された。貧しい親族を世話して厄介でも見てやらうかと思ふものは男だが、之を聞いて頬を膨らし、直ぐに米の値段の高いことを並べ立てゝ抗議を申込むものは家內の女である。友人

縁者でも少し招いて、交情を温めやうかと思へば、『又お客さまですか』と顔を火吹達磨のやうに膨らし、來客の二三人もあれば、天下の一大事でも起つたかの如くに心得て、アタフタ狼狽し、成るべく來客の一人にても少くして家内の勞を減ずるを得、能ふべくんば、我が亭主を一人の友人とも交際せしめず、一人の知己をも天下に有せしめず、唯相知るものは一人の妻あるのみに至らしめ、妻一人に男の全心全力を注がしめたいのが、妻なる女の偽らざる心である。將來有望の青年を見立てゝ之を發はんとし、居候の資格にて家に寄寓せしむれば、飛んでも無い厄介者でも飛び込んで來たかの如くに心得、苦い顔をするのも、矢張り女である。妻なる女は、戀人なる女は、男が其女よりも學術を愛し技藝を愛し、思索を愛し、事業を愛し、職務を尊重するのを觀て悦ばず、思索も事業も職務も研究も、總て之を其女より賤いものとして疎じさせやうとする。昔から、發明家の發明や思索家の思索事業に故障を申立てゝ妨害を試み、その理由として米櫃の問題を擔ぎ出す者は、必ず女である。發明家や思索家が、何れほどまで多く、女に苦められ、迫害せられたか、實に言語の外にある。男に其友人を失はしむるに至るものも女なれば、男の最も貴しとする出所進退を過まらしむるものも女である。男に向上の意氣を失ふに至らしむるものも女なれば、又、男のためには大事の祕密を漏洩するものも女である。男が折角思索や讀書に耽つて、夜の更けるのにも心附かず、全身の熱心を或る何物にか注いで居る時に、『最早、お寢み遊ばせ。お身體の毒ですから……』なんかんと、婉曲な體裁の可い辭令を假つて、男の邪魔をするものは、女である。女には、同情といふやうな高尚な感情は、到底有り得ぬものだ。實に女とは恐ろしいものである。男の爲さんとする善事を、片ッぱしから、叩き壞して行く惡魔である。美しさうな、蟲も殺さぬやうな顔を裝ひ、優しさうな聲を出しながら、其實、[illegible]に呪詛を男の頭上に送りつゝある惡魔が、是れ即ち女といふものである。外面如菩薩内心如夜叉とは、こゝの事だ。お釋迦樣は流石にウマイ事を云はれたものだ。女は實に男の敵である。男よ、戈を取り絶えず女と戰へ。新しい女なんかに脅かされて、少しでも麾旗の手を緩めるやうでは相成ませぬぞ。女は男の敵である。狼や蛇が人間の敵である如く、女は男の敵である。あゝ、女は半獣類である。人間と狼との中間にある劣等動物だ。

▲女の教育▼

女が男に、目下のところ何事につけ劣り、始終男に敗けねばならぬのは、今日まで女の教育が不充分であつたからの事で、これからの女子教育が進歩し、女も男と同一の教育を受くるやうにさへなれば、必ずや男に劣らぬ能力あり、心情あるものとなれるに相違無しなぞと、能く世間の馬鹿者共は囃したてる。成る程、女子教育の進歩する間、男子教育の進歩が、一時御中止と相成らば、或は女の能力心情が、或る期間の後に至り、男と同等のものになるかも知れぬ。然し女子教育の進歩する間には、甚だお氣の毒ながら男子教育も遠慮なくズン／＼進歩して行き、男の能力

心情の程度は今より數十等も上になる。否な、女子敎育等が、算術級數で進步するやうなら、男子敎育は幾何級數で進步して行く。是に於てか、女子敎育が如何に進步し、假りに女の能力心情が、今日に於ける男の能力心情の程度までに發達しても、その時には、又、男の能力心情も、今日の程度より遙に進步發達して居るから、男女間に於ける能力心情の懸隔は、永久に之を除去する事の出來ぬもので、女は飽までも劣等動物の半獸類たる低い位置にあらねばならぬ。近頃、新しい女の平塚明子とかいふのが『私は太陽である』と仰せ出された。ナル程、ナル程！女は、劣等動物の半獸類よりも更に以下で、熱と光だけはあるが生命のないといふ代物たる無機物に等しい者に、追々は相成るといふ意味の、是は自白であるかも知れませんテ。イソップ物語に面白い話がある。一日猫が人間の眞似をして、美服堂々人間と一緒に人間らしく食卓に就いた。フオークの持ち方、ナイフの使ひ方、如何にも一見したところ人間並で、全く人間として通用の出來るものであつたが、食事の最中、一疋の鼠が食堂に現はれると、今の今まで人間と毫も異るところの無かつた猫が、急に椅子から跳ね下り、四足匍匐になつて、入り來し鼠目がけて飛びつき、忽ち猫の本性を暴露してしまつたとの事である。元來が、劣等動物の半獸類たる女だ、一時は敎育の力で人間並に見へることもあらうが、何か事件が起ると、忽ら半獸類たり劣等動物たるの本性を暴露するに至るは當然だ。あゝ、女は劣等動物である。今のところ勞銀さへ男と同一額を取れぬでは無いか。新しい女も糸瓜もあつたものでは無い。聞いて呆れるばかりサ。敎育の力によつても、到底、男と同一人間並のものになれず、女にのみ專屬の技倆美德の如くに傳へられてるものが、又、到底、男に及ばぬものとしたら、女は何を以て男に對抗して行けやうか。到底何ものに於ても男には敵し難い。止む無くんば、犬の如く其の尖りたる犬齒を以て、男の腕に噛みつく位のものだらう。あゝ、女は劣等動物である。人間と猿との中間に位する半獸類だ。故に曰くサ、進化の程度から論斷すると、男、女、猿の順序になると。（了）

近代婦人思想の出發點

薄井秀一

新しい女はモウ古い女のやうに男の云ふ事を聞かなくなつた。

彼等は女も男と同樣に人間である。性を異にするが爲に優劣の差別は無いと云ふ立場から、男と同等の權

利を要求し、精神的にも物質的にも獨立した生活を主張して居る。そして總ての束縛と壓制から脫れ、舊時代の服從的女德に反抗し、女子に關する在來の因襲と制度とを破壞せんとしつゝある。

近代婦人の有する斯くの如き思想は如何にも突飛にして危險な樣に思はれるけれど、之を突飛にして危險だと思ふのは新しき思想を解せざる舊時代の人々だけである。苟も變遷しつゝある世界の思想史に眼を曝して居る人々から見れば、近代の婦人思想は當然の結果茲に進んで來たので、少しも突飛ではない。然も此思想は曾て男子が懷き今尙懷きつゝある事、男子の懷ける此思想が直ちに女子を刺戟して茲に至らしめた事を思ふ時、吾人はそれ程之を危險だとは思ふ事が出來ぬ。

又舊時代の人々は近代の婦人が男子に對する挑戰的態度及び反道德的態度を見て、女子の男性化と罵り、社會の安寧を紊るものだと叫び、彼等を以て新時代の生める畸形兒だと考へて居る。けれども是等の新しき女は、舊時代の社會が彼等の生るゝ可き條件と素地とを作つて置いたが爲に生れたので、新時代の生んだ畸形兒と云ふよりも寧ろ舊時代の生んだ正嫡だと云つた方が——親には肖て居ないとしても——適當である。新時代は唯彼等の生まるゝに際して產婆の役を務め、更に哺育の任に當つて居るに過ぎぬ。

中世以前の女子の境遇

女子は過去數十年の間男子の從屬者として、又男子に對する被征服者として、一段低い地位に生きて來た。そして世界の文明國に於ける男子は時代の推移すると共に著しく進步したけれど、從屬者であつた女子は精神的にも智的にも、又物質的にも其進步は甚だ緩漫で、前世紀の初め頃までは殆んど進步の跡を見る事が出來なかつたのである。

從つて過去の歷史は主に男子の作つた歷史であると同時に、其文明も亦男子の手に依つて作られた文明である。更に現在に於ける社會を見ても其大部分は男子の領域で、家庭以外に女子の有する社會的領域は極め

て少い。事實を其儘に云ふと、被征服者であつた女子は精神的にも智的にも物質的にも、弱者であり且つ劣者であつたが爲に、過去の歴史と文明とに參加する事が出來なかつたのだ。又長い間男子に對して服從的道德を守つて來たのも此故に外ならぬ。

然し女子は原始的にも弱者であり且つ劣者であつたらうか、又女子は將來も永遠に弱者たり劣者たる地位に居なければならぬであらうか、此點に至つては甚だ疑問である。

自然史に現はれた男女の關係を見ると、定まれる夫婦の關係が無かつた亂婚時代に於ては、兩性の間に今日の如く際立つた優劣の區別は無かつたのである、性を異にするが爲に有する生理的心理的の差別のあつた事は云ふ迄も無いが、其地位は慥かに平等であつた。そして亂婚時代には父を定める事が出來なかつた爲に生れた子は母の手に依つてのみ養育されたので、自ら母の權力が强かつた時代もある。けれど多少進んで夫婦の關係が定まるに至つては、其仕事の分業となるに從ひ、其地位もだん／＼區別される樣になつた。

奪掠結婚、賣買結婚等に依つて女子が物品視せられ奴隷視された事も女子の地位を失つた第一の原因であるが、定まつた妻たり母たる關係も女子をして弱者たり劣者たらしめた主なる原因である。即ち男子が妻子を養育する爲に社會的勞働に從事したのに對して、女子は分娩哺育及び家事をのみ其仕事とした爲に、先づ體力に於て次第に弱者となつた。そして生産を司る男子が社會的に勢力を得、男子に依つて養はるゝ女子が經濟的從屬者となつたのは自然の結果である。其上に女子は廣く社會と接觸する機會の少かつた爲智能を啓發する機會が無かつたので、智的方面に於ても何時しか劣者の地位に立たねばならなくなつた。かくて强者たる男子は弱者たる女子を征服し、劣者たる女子は優者たる男子に服從する事になつたのである。

次第に進んで野蠻時代から文明時代に入り、文明が益々進歩しても此プリンシプルは變らなかつた。長い間、廣い國々に於ては、種々の變遷及び數多の異つた

事實もあつたけれど、要するに古代から中世の道德及び社會的制度の根本思想は何處までも强者の權力に對する弱者の服從であつた。歐洲に於ては基督敎の博愛主義と仁慈とに依つて、女子は一面に同情と保護とを受けたのであるが、當時に於ける家族制度の進步と社會組織の發達は、女子を益〻狹い家庭と美しき愛情と都合好き服從との中に押し籠めて、少しも之に向上發展の途を與へなかつた。

殊に女子が經濟的從屬者であつた事は、愈〻弱者たり劣者たる地位に甘んじなければならなかつた原因である。何となれば古代及び中世の女子は悉く男子の手に依つて養はれ、男子の手を離れては獨立して生存する事が出來なかつたからである。斯くて獨立なき女子は自ら其自由を失ひ、强者たる男子は益〻其權力を擴張して之を征服し、束縛し、女子は終に子供を生み家事を修むる以外に全く無能力者となつて了つた。

然し人類の進步は一直線にのみ進むものでは無い。歐洲に於ては十八世紀の末葉に、權力對服從の根本思想を破壞する大革命が起つた。

文藝復興期の新人生觀

世界に於ける思想發達の上から見ると、近世史の根抵に橫はる最初の最も力ある原動力は、人心解放と個人的覺醒とであつた。近代文明は此解放と覺醒とに依つて造られたものだと云つても好い。近代婦人の思想も此處から起つたのだ。

歐洲中世の人心が宗敎に支配され、超自然的權威を認め、出世間的思想の下に後世を願つて居る間は天下泰平であつたけれど、近代文明の魁を爲した種々の世界的發見や科學的硏究が進步するに及んで、未來を夢みて居る中世の眠りは何時しか覺めかゝつて來た。眼に見えざる力をのみ信じ、停滯して少しも進まざる人心は、總ての幸福を死んだ後に求め、現世を輕んずる思想に飽いて來た。玆に於て彼等は古代希臘の自然的にして且現世的なる文明を硏究し、或は鼓吹して其空虛なる生活を充實せしめ、現世に於ける自我の要求を

滿足せしめんとしたのである。之が即ちルネッサンス時代の思想である。

ルネッサンスの時代に於ては古代文明を鼓吹し古代文藝を復興すると共に、著しく自然科學が進步した事に依つて、中世紀の超自然的なる人生觀は更に動搖を來した。即ち自然科學の進步に伴ふ人智の發達は、あらゆる非合理的な形式主義を打破せんとし、先づ第一に權威を失つたものは、從來最も重んぜられて居た教會の形式主義である。かくて今迄理想を重んじて居た人々は實際を尊ぶ樣になり、束縛と沈滯とに惱める人人は次第に舊來の因襲から脱れんとする樣になつた。そして超自然的人生觀に滿足する能はざる人々は、何れも新たなる人生の意義を見出さんとするに至つたのである。

　文藝復興期に於ける人生の實生活を重んずる思想は時代の推移すると共に益々發達し、應て唯物論或は快樂主義となつて次の啓蒙期を劃したのである。十八世紀の初期に於てヴォルテールが、宇宙及び人生に關する神學的說明を排斥して、新たに科學的說明を試みんとしたのも此爲である。斯くの如く歐洲文明國の思想界は文藝復興期から啓蒙期にかけて、超自然的神學的人生觀より一轉して自然的科學的人生觀に變じたのである。而して之と共に人心は舊來の因襲的束縛から脱れんとし、思想解放個人的覺醒の事實は益々其色彩を明かにして來た。

　かくて十八世紀は信仰の時代から理性の時代に遷らんとしたのであるが、思想解放、個人的覺醒が社會的事實となつて現はれた時、一般社會の民衆は從來政治的及び經濟的服從を强ひられた封建制度の權威を否定するに至つたのである。

　勿論此思想は當時の婦人界と何等の交渉も無かつたのであるが、少數なる强者の權威に壓迫され、因襲と形式の下に束縛されて個人的權利を得る事の出來なかつた此時代の民衆は男子よりも一段低きものとして、又男子の從屬者として、之に服從して居た女子の境遇と殆んど同じ事であつた。即ち男子に對して女子が無

能力者であつた如く、貴族に對する平民は人種の異る如く卑しきものとして取扱はれて居たのである。

斯くの如き事實の上から考へて見ると當時の民衆がルネッサンス以後の智的及び物質的進歩と、新しき人生觀に動かされて封建制度に反抗すると同時に、女子も亦男子に對して反旗を飜すのは當然の徑路となる可き筈であるが、當時の女子は其地位を自覺す可く、智的にも經濟的にも餘りに其力が乏しかつた。從つて此思想は少しも當時の女子を刺戟しなかつたけれど、後に之が女子の自覺ー覺醒する好個のお手本となつた事は明かな事實である。

だから現代のフエミニズムは其淵源を尋ねると、既に此時代から胚胎して居たと云つても好い。次にルッソーの出づるに及んで、久しく眠つて居た女子もだん〲醒めかゝつて來た。

ルッソーの自由平等論

ルッソーが生れた當時の社會は、自然科學の勃興と人心解放とに依つて歐洲の文化は著しく進んだけれど實社會の狀態は君主對民衆、權力對服從の暗闘最中であつた。

ホルバッハの語を借りて云へば『大なる者權力ある者は憚る處もなく貧しくして且不幸なる者を壓倒し、民衆は勞働を强ひられ膏血を絞られ、涙を以て大地を潤ほさなければならぬ』時代であつた。彼が語を繼いで『斯くの如きは少數の大なる者と强者との奢侈逸樂及び墮落に貢せんが爲のみである。宗教と政治との謬見は世界を變じて阿鼻叫喚の巷とした』と叫んだのも無理がない。即ち當時の社會は思想の上に於ても、文化の上に於ても、著しく進んだのであるが、民衆は獨斷的權威の下に其運命を支配され個人は自由と權利とを要求し乍ら封建制度と歴史的因襲に束縛されて、云ひ難き不安と苦痛とを感じなければならなかつた。

ルッソーは斯くの如き社會の狀態を見て、あらゆる方面から思想の誤謬と制度の缺點を指摘した。ルッソーの主張する處に依れば、人は生れた時に於て何の束

縛も差別もなく極めて自由なものである。それが成長するに及んで種々の形式や因襲や制度に束縛されて不幸なものとなる。之は何れも現在の文明が虚僞虚飾に滿ちて居るからだと云ふのである。即ち文明の進歩に依つて貧富の懸隔を生じ、貴賤上下の區別された事は其最も主なる原因で、其爲に少數の强者が專制權を持つて多數の弱者を虐げる樣になつた。貴族は下流社會の者を奴隷の如く卑んで居るけれども、彼等も亦同じ人間である。第一社會には神政的權威だの封建的權威だのと云ふ樣な、不公平にして獨斷的な權威のある可き筈が無い。社會は何處迄も人民の自由意志の上に立つ契約に依つて成立しなければならぬ。試みに原始時代を見よ、彼等は何れも自由生活に依り素朴にして愛す可き幸福な生活を送つたてはないか、人間が生るゝ時に得た自由は何物も奪ふ事が出來ぬ。と、彼は斯くの如く考へたのである。

ルッソーが自然に歸れと叫び、自由平等論を唱へ民主々義を說いたのは總て此思想から出發した。而して長い間形式と束縛に苦み、沈滯と服從とに飽きた人心は、獅子吼の如きルッソーの絕叫を聞いて夢から覺めた如く、天來の福音の如く其聲は彼等の胸に共鳴したのである。かくて十八世紀の末葉に於て、自然を尙び、自由を欲する人々は、齊しく起つて天賦の人權を得んとした。彼の佛蘭西革命は實に此時に起つたのだ。

ルッソーの思想や佛蘭西革命などは、僕が玆にクダクダしく述べる迄もなく、歐洲の近世史を讀んだ人は何人でも知つて居る如くであるが、近代の婦人思想は實に此處から出發したのである。歐洲の人心が超自然的人生觀に飽き、少數の强者の獨斷的權威に反抗した如く、歐洲の婦人が覺醒して犧牲的美德に飽き、男子の壓制と束縛から脫せんとしたのは此時分からである我國に於ける一部の婦人が此頃になつて漸く自覺せんとする如きは非常な遲ればせと云はねばならぬ。

思ふに佛蘭西革命が自由民權論を實現する爲に試みられた最初の最も著明にして悽慘なる運動であつた如く、今や英國に於ける過激な婦人參政權論者に依つて

行はれつゝある運動は、近代婦人思想を實現する爲の最も悽慘なる最初の革命戰ではあるまいか。

佛蘭西革命と婦人解放

十八世紀の末葉佛蘭西革命の起らんとする時、歐洲の婦人は何時しか新しき時代精神に觸れて、民主々義を了解し之が運動に參加した事は何人も知る如くである。

云ふ迄もなくルッソーの絕叫も佛蘭西革命の根本思想も何等婦人の地位境遇に關する處なく、女子は依然として男子の從屬者たり、弱者としての服從的道德を守つて居たのであるが、古き神政的基礎及び封建制度を破壞し、自然を尙び、個人の自由を重んずる此時代精神は、長き奴隸的境遇に飽いた婦人を動かし、彼等を自覺せしめずには止まなかつたのである。

國家の基礎が國民であると云ふ事は當時何人も疑ふ者は無かつたのであるが、同時に國民は男子のみでない、國民は男女の共同に依つて成るものだと云ふ思想は今更の如く人々の頭に響く樣になつた。其處で、國法は國民全體の意志を表示するものでなければならぬと云ふ考は、自ら女子も亦男子と同じく立法に參與する權利があると云ふ主張を生んだ。

而して此思想は一部の進んだ女子の間に於てのみならず、男子の間に於ても認められ、コンドルセーの如きは熱心なる女權贊成論者であつた。コンドルセーはルッソーと共に自由平等論の立場から、社會に於ける一切の制度は最も貧しく最も數多き階級を、肉體的に又精神的に改善する目的を以て定むる可きものであると唱へたが、此論旨を女子に應用する時、一種の貧くして數多き女子の爲に、女權論へと到達したのである。コンドルセーは說いて曰く『女子も亦男子と同じく人間である、天賦の人權は性の相違に依つて區別す可きものではない、けれども男子は過去及び現在に於て女子の人格權利を無視し、之を蹂躙したのは橫暴と云はねばならぬ。勿論男女兩性の智能には各々長短あり、得失もあるだらうが、それは唯互ひに補益す可きもの

て、之に依つて上下の差別を付ける可きものではない』と。

人心解放、個人的覺醒に基く自由平等論は、其思想を同うして形を變へ、今尙ほ男子に對する女子の要求として現はれたのである。卽ち、曾て封建制度の下に弱者として其自由を束縛されたる民衆が自由民權論を叫んだ如く、長い間無能力者として男子に屈從し、男子の專制的權力に支配されて居た女子は、其犧牲的道德と束縛から脫れ、天賦の自由と平等とを得る爲に、曩に男子が叫んだ自由平等論を反對に唱へる事になつたのである。其云ふ所に多少の相違があるとしても、彼等の主張及び要求の根柢に橫はる思想は慥かに之である。民權論者が專制政治に反抗して、舊來の道德及び制度を破壞したのも、女子が舊來の女德、因襲及び制度を破壞せんとするのも其思想的內容に至つては全く同じ事だ。

かくて女權論は一時に沸騰し、進步せる婦人は之が爲に團體を組織したり政治的運動を起して大に努力したけれど、一般に於ける女子自身もそれ程進步せず。社會も亦之を認めなかつたので、彼等の熱心なる運動も徒勞に歸し、實際的には何等の獲得する處も無かつたのである。然し全く徒勞ではなかつた。此思想は軈て全歐羅巴的思潮となり、其後女子敎育の普及に依る婦人自身の進步と社會狀態の推移に依る經濟的獨立とに依つて、一時消滅した樣に見えた婦人解放論は更に力あるものとして勃興して來た。

個人主義と女子の自覺

以上は歐洲に於ける近代婦人思想に就て述べたのであるが、歐洲以外の國に於ても婦人解放論は殆んど之と同じ徑路を執つて居る。

米國に於ては自由の精神を生命として戰つた獨立戰爭以後、女子の自由と權利を要求する聲が起つて來たではないか。時代はズット遲れて居るけれど、現に支那に於ても近來頻りに輩出する新しき女は、之と同じ思想に基づいて起れる革命戰爭が生んだ產物である。

省みれば我國に於ても亦さうである。女權論の初めて起つたのは、明治維新以後泰西思潮の輸入と共に自由民權論が盛んになり、立憲政治の基礎を定めらるゝ前後であつた。

前にも述べた如く佛蘭西革命に次いて起つた女權論は、主として、國家は男女より成るが故に女子も亦男子と同等に參政權を得なければならぬと云ふ政治思想が中心であつた。之を現代の婦人解放論に比較すれば甚だ單純にして且つ實際に伴はぬ空想的な部分がないでもなかつた。然し時代の進歩するに從つて女子の自覺する者は益〻多く、殊に經濟的變化は極めて實際的にして困難なる數多の婦人問題を生ずるに至り、かくて現在の婦人解放論は其根柢に力を加ふると共に、幾多の複雜なる意義を有する樣になつた。

我國に於ても亦之と同じ樣に、自由民權論に次て起つた女權論は單純なる政治思想を中心とするもので、何時しか消滅して了つたのであるが、今や進歩せる新しき女に依つて唱へられつゝある婦人解放論は非常に力強きものとなつて現はれた。即ち女子敎育の進歩及び經濟的窮迫は彼等をして痛切に其地位を自覺せしめ舊時代の思想から見れば奇矯なるが如く思はれるけれど、精神的にも物質的にも現代の社會には、劃切なる種々の要求を主張する樣になつた。

斯くの如き現代の婦人思想を、曩に起つた女權論と比べて見ると、其間には何の關係もない樣であるが、然し根本の思想に至つては全く同一である。自由民權論を生んだ個人主義、平等主義及び自然主義は曩の女權論を生むと共に、やがて今日の婦人を覺醒せしめ、之に伴ふ經濟關係は益〻彼等に力を與へたのである。

之を要するに世界の婦人解放論及び其運動は、何れも舊時代の社會及び道德の根本思想であつた「强者の權力對弱者の服從」を破壞する革命に刺戟されて起つた即ち近代の大潮流の一なる個人主義の發達は、威受性の强き女子をして從來の境遇と其本性を自覺せしめ自然と玆に到達せしめたのである。又之を一面より見ればローマンチシズムの中世からナチラリズムの近世

に移つた思想的變遷に依つて生れたものだと云ふ事も出來る。果して然らば、權力對服從の道德を棄てゝ平等の道德に入らんとする時代に於て、個人主義及び自然主義を理解する婦人が、近代の初めに於て民衆が自由平等の權利を得た如く、男子の壓制と束縛とから脱れて、古き因襲と古き制度を破壞し、自由と平等と獨立の權利を得んとするのは當然の事ではあるまいか。

而して從來男子の從屬者として、又家庭と人情とを中心として生きた來た女子が、理性の眼を開いて個人の地位を自覺し、因襲を脱して新たなる天地を見出さんとする時、其思想及び態度が服從より獨立へ、家庭より社會へ、人情より理智へ、形の美より實質へと赴くのは自然の結果である。

實に近代婦人思想は斯の如く起る可くして起つた。然し起る可くして起つたと云ふ理由だけて之を是認す可きものか何うか。之を解決するには更に研究しなければならぬ。

赤道直下に遊女となれる日本娘

生田葵

黄金を鍍めし様に燦爛として輝いて熱帶の空を蔽ふ星影の中には十字星や、南極星も見えて居た。而して宵の明星が此地では恐ろしく大きく、海の方に何の事はない燈明臺の如く光り大きく輝く不思議さを話し合ひながら、私達は彼南(ピナン)の街の少しも濕氣の無い、宛ら赤色の混灰土を踏むやうな感じのする土上を踏んで、暫時は賑はしい街路の方へと進んだ。其處此處の微暗い街路の影から立派な文明人の裝ひをして顯れて來るのは大抵支那人であつた。歐洲人は數を見る事が少なく、其の邊の家の軒下には二人三人宛團欒して、肌の黒い馬來人が其の宵の安らかなる寢床を得たのを嬉んで小聲に話合つて横臥つて居た。犬は處々に見懸けたが然うした人影に向つて少しも吠えなかつた。兩側でも强烈な太陽の光りを遮斷するに堪ふる分厚な立派な漆喰塗りの西洋館であつたが、其れが支那人の不潔と、印度人の放埒とで汚れて見えた。

空氣は恐ろしく乾いて居て、未だ三町と歩かないのに、一種此の土地に身體の適しない證據の疲勞を覺え、咽喉は烈しく渴いて來た。友人のT氏はもう少しの道だからと云つて、少しも其の歩を緩めやうとは爲なかつた。とある街路を横切ると、不意に押合ふやうな群集と、其の群集を照らす光りの海とが眼の前に顯はれて來た。私は今宵行かうと思ふ街に到着した事を知つた。街路の上は支那人の勞働者と

見ゆる手合であつた。然うして其の中には無論多くの馬來人も交つて居る。怪し氣な瓶を幷べて種々な甘い水を賣る支那人や、今朝森から取つて來たパインアップルや柑を賣る印度人が共に馬來語で客を呼んで居るかと思ふと角店にあつた支那人の小料理店の二階からは例の支那人の音樂が世界の音樂は之れ一つしか無いと云つたやうな驕慢な聲を放つて、自國民衆の歡樂心を唆つて居る。一體奈何した事だらうと奇異の眼を瞪りつゝ恁る態を見ると云ふと支那の婦人が男の手に凭懸つて其處此處の軒に下佇立んで居るのが見えた。其の中を私とT氏とは容赦なく掻分けるやうにして進んだのであつたが、事實異人種の臭氣を嗅ぐに餘りと馴れない私の鼻は、非常な不快と苦痛とを與へた。T氏が佇立て、『見給へ。』と注意せらるゝ迄、然うした苦痛と、自國以外の音樂を全く愛好しようと爲ない支那人の耳や心情に就いて思考て頭腦を一杯にして居た私は、此の聲で不用意に顏を轉ずると、其處に自國の娘――土人も支那人も一樣に日本娘と云つて居る――が一人は絣の模樣を置いたメリンスの單衣を着て、一人は不恰好な洋裝をして軒下に立つて私の方を見て居るのを發見した。其の軒下から直ぐ其の家の庭へと續いて、其處には一脚の大きな丸卓机が置かれて、周圍の五六脚の椅子には猶然うした日本の娘が、三人迄腰を懸けて居た。私が彼方を見たやうに、彼方でも私と私の友人とを見たが、併も一言も發し合はなかつた。婦人達は堅く唇を噤み、瞳を他に外らし其の儘、家の中の圓卓机へと歸り往つて赤い布帛の笠を懸けた電氣燈の光りに照らされて居た。私達の事を話したと見えて、椅子に靠り懸つて居た三人は身體を延ばして私の方を見たが、直ぐと視線を外らして了つた。周圍の血を異にする群集は直ぐと此の光景を

見出し、其れを以て自個の好奇心を滿たさうとするやうに、之等の婦人と私とを交る〲眺めた後、婦人の方に向つて、放縱な態度を見せて調戯ひ出した。婦人達は此の人の惡い支那人や印度人の調戯ひに一言も應へず、私達を氣兼して、日本の娘たる品格を落すまいと肅然として控へて居る樣子が氣の毒な程感知せられた。私の友人のTは私の腕を取つて外の方へと連れて往つた。直ぐ向側に同じ店を見出した。軒下に立つて其の宵の務めを果さうと、汚い群れ――確に汚い群れに違ひ無い。中膚ばかりでなく精神迄も黑い色の浸み込んだ――に向つて投懸けて居る秋波や、手招きや、卑猥なる馬來語の戯言の前に忽然私達は顯はれたのである。直ぐ前と同じ樣に其の唇は閉ぢられて了つて、何だか相圖するやうに馬來語の一言が聞えると、中に控へて居た女達は一整に彼方へ視線を向けたが、其中の年若な一人の濃く頰紅塗つたのは、突と席を放れ、私の方へ進んで來て、人懷し氣な態に凝視るのであつた。もとより私達を其の家に呼ばうとは爲なかつた。呼ぶには私等は餘り嚴格過ぎた樣子を爲て居るらしかつた。私はは自分の心照に合し善意に解して、彼女は唯日本人懷しさの餘りに歩き出して來たとのみ感じられた。私は何と云ふ事なしに私が日本を放れて來た港々の烟は心に描かれて、彼女の日本と別れて來た容子が忍はれた。

「彼女は何年日本の山河を見ないのであらう。然うして奈何した樣子て日本と別れて來たのであらう。」

物馴れた朋友のT氏は早や突と其の側に寄つて言葉を交して居る。

「御船の御方てせう。まあ御這入りまつせ。」

「有難う。貴女の家には何人居るの？」

「えゝ、七人居ますよ。何も御遊びにならなくても可いんですから御這入りまつせ。私貴方にラムネを御馳走しますわ」

T氏は煙草の火を借りた丈けて其の女と別れた。其の女の談話て隣家は佛蘭西の女達の居る娼家だと云ふ事を知つた。閉おた二階の窓からは燈火が洩れ手風琴の音に交つて、外國の水夫らしいのが唱ふやうな聲が聞えて居たのみて直接彼等の醜い姿は街路の上に見えなかつた。其の隣家は支那の娼家てあつた。故國の風習を其の儘持つて來て、庭の正面には繁昌神が祭つてある。五六人の年の老けたのや若いのは顔に濃い化粧を施し戯歌を唱つて將碁盤に向つて勝ち負けを爭つて居る。遣手らしい血の荒れた眼の怖い三十過ぎの女が二人居て、若い女達に往來を素見き往く客筋の男に就いて注意を與へて居る。支那の娼家の入口の特徴は表が全く開かれて無く、太い丸太を横に通した戸が閉てられてあるのてあるが、T氏は兎角に支那人が多人數入込んて亂暴を働くので、支那の娼家丈けは自衛的に恁うした構造を爲るのだと告げた。

街は今が混雜の頂上てあるらしい。一日の勞働を終つた後の身體なり、心なりを兩側に建並ぶ娼家の入口から流れ出る燈火の中に浸して、歡樂に飢ゑ切つた凄じい顔をした人種が、全く蠢くやうな聲を發して通つて居る。と見ると左側に又も日本娘の幷ぶ一軒を發見した。其れと隣り合つて耳の尖と鼻の尖端に環を附け、半裸體の腕にも足首にも金色の環を飾つた黒人の娼婦が、悲哀な調子を含んだ俗謠を唱つて、通り懸る男にマツシニイを連呼して居るのが見えた。其處の軒先の三和土が特別に光つて見えた

のは馬來の女の徒足で立つて、往きつ戻りつして客を呼ぶからであらう。恁る馬來の家は五軒ばかり幷んで居たが其の中の二軒程は家の中に燈火が無いと思はれる程に暗く、壁に沿つた、寢臺に橫はつて居る人影が向側の家の灯で見られるやうなので、不潔と醜陋とは遺憾なく窺はるゝのみならず、軒下を往つ戻りつするばかりでなく、勞れ果た身體を柱に靠せ懸けた黑い姿は、無智蒙昧を通越して、獸類に近いもののやうな感じがした。併も其の向側には燈火華かな日本娘の店は次から次へと軒を幷べて、支那人や馬來人種に向つて戀を挑み懸つて居るのである。T氏は四年前に一度此の土地へ來たのであるが、其の時は僅かに家數は十軒足らずであつたのにと、此の街を一周して、日本娘の數が百六十人、家數は二十七軒と聞いた後に愕きの眼を瞠るのであつた。私は母國を遠く離れた熱帶の島の中で、恁る名譽なる日本國民の事業を見た所爲であらう。烈しい咽喉の渴きを覺えたので、四辻の馬來人の夜店から水を買つて飮まうとすると、T氏は此の街の水の不潔を說いて、矢張り何であらうとも沸したものをとの事で、私達は又ゝ懷し氣に呼懸けた女の聲に縋つて一軒の店へと這入つて湯を貰つて飮んだ、婦人に向つて日本の言語で流暢に話得らるゝ快樂に渴して居た身には、對手の女が境遇と徑路を思ふと共に無限の悲痛となつて身に迫つて來た。日本の女が持つ深切な情も、涙ゝ持つて居るのであらうと、物馴れたT氏は自身が經て來た印度內地の多くの日本娘の消息など語つた後、本國に對しての戀の情の分量を計るのであつたが、日本郵船の船が這入るので、日本人の姿は時々見得らるゝものゝ、此の家の樓主は、私達が日本を戀しがり、日本の人を戀しがるので、何としても日本人を客に取らさないと一人の女は應へた。比較的

に年老つた束髮に洋裝なのは、もう日本人の男の肌の匂ひは忘れて了つたと云つた、私は瓜哇を經回つて來た同船のK博士が

『瓜哇の內地へ這入ると、土人の女房に行處の無い日本の娼婦上りの女が澤山居た。』

と云ふ言葉を此の時想ひ起した。此處に七人幷んで居る女の中に何人丈け日本に歸り得て、日本の土に父母の埋つた同じ土に其の骸を埋め得らるゝてあらうと思つた。其の家を出てゝ、角を廻つて猶ほ賑かな街を行くと今度は兩側になつてメリンス友仙の派手な模樣を着た女達の數多くが眼に映る。紙卷煙草を吹かしながら冷然として見送るのもあつた。延び上つて此方を眺め、手招きするのもあつた、

『やあ、彼の女は香港に居た女だ。』

と云つてT氏は一軒の家へ這入つて往つた。併し其れは人間違ひてあつた。其の女は盤谷やカルタツタを經て來た後此地へ來たのてあるが、此土地の繁昌する所以は、家賃と水道稅を拂ふ外何等稅金を拂ふ必要が無いからだと云つた。私の前に居た女は突然私に向つて、

『東京に大火事があつたと云ふ事てすが何の邊てす?』

東京辯て問ふのてあつた。私が詳しく話して遣ると、

『それぢや安心てすわ。私は麴町なんてすから……』

と云つて、麴町の何の邊と聞いても應へなかつた。

『まあ奈何うしたつても日本へ歸られないね、此處迄來て居るんだから……』

T氏が調戯ひ半分に云ふと、
「奈何してゞす。」
麹町の女は其れは恐ろしく眞劍になつて云つたが、一つ唾を飲込んでから、
「いゝえ。屹度歸ります。えゝ、歸りますとも、歸らずと奈何うするんです。縁起でも無い那麽事は云はずに置いて下さい。」
忿然として云ひ放つた。私が小聲で、
「奈うして恁う云ふ所へ來るやうになつたのだい？」
「云はずとも知れてるぢやありませんか誘拐てすわ。誰がすき好んで這麽所へ來ませう、聞えたつて係はないのですよ、其れに違ひ無いんですもの。此處に居る六人共初めは皆欺されたんですよ。」
　云つて其處に列居る朋輩の女を見廻した、中には拾六歳になつたばかりの女も居た。然うして其の女が折から這入つて來た馬來人の客に馬來語で媚を呈して居た。無智な其の眼の輝き、紅を塗つて居るとは云へ蛆の湧いて居るやうな其の唇、然うして着飾つた衣裳の衿の間から見ゆる荒れた其皮膚や、骨の出た頬の色には淺間敷しい程の捨鉢になつて居る心が總ての女に窺はれるのであつた。T氏は其の女達を前に置いて其の收得に就いて訊ねた。東京の女は何等隱す處のない樣子で、
「半々ですよ。五圓稼げりや、二圓五拾錢は私の所得です。ですが能くしたもので、借金が兎角に殖え勝ちでなか／＼身拔けが出來ない仕懸けになつて居るんですよ。貴方達は之から日本へ御歸りになるん

てすか。」

「いや、僕は土耳古へ行くてす、コンスタンチノープルにも、五人這入り込んださうだ。」

「其りや何の邊なんてす、私達は御金の儲かる處なら何處迄ても行くてすよ。」

T氏が先初見間違へた女は應へた。醜い其の容貌は、一生恁る賤しい稼業をする外には、若い男からは回顧りだもせられまいと思はるゝ程てあつた。其の女は重ねて云つた。

「錫蘭島の古倫母は此の頃はなか〳〵英國の方て嚴しくつてね、去年の秋頃迄は五人程て稼いて居て、其れはいゝ御金になつたさうてすがね、とう〳〵牢へ入れられるやうな事になつたので、此の春頃其處を引上げて印度のマドロス港へ落附いたさうてすが、今分てはなか〳〵繁昌して居るさうてすよ。」

「日本の男を戀しく思はないかい。」

私が其の女に問ふと、一種物凄い冷笑的の笑を頬に浮べたのみて何とも應へなかつたが、稍〻暫時してから、

「男も男てすが、御金が戀しいんてすわ、御金さへ吳りや、支那人ても馬來の人てもてすは。」

「でも日本の男の方がいゝ臭氣がするだらう。馬來人の肌は臭いぢやないか。」

T氏は云うた。其れには女達は何とも應へなかつた。明るい電燈の灯の下に、無智な魂が曝されながらも、猶ほ生の矜りと、歡樂を得る望みを抱いて、自己を嘲笑ひながらも犇き合つて居るんだと思ふ外何等の思考も私には浮ばなかつた。其の淺間敷い、汚れた、卑穢な魂は日本人なのてある。地中海に沿

うた國々の人達が熱帶の富源地に向つて行く時に、未だ日本人を見ない其眼に、先づ此の日本の娘の姿が映るんだ。光榮な事柄である。

　其の夜の宿へ歸る道すがらT氏は新嘉坡に居る八百人に近い日本娘の心裏狀態と此の地に居る女の心裏狀態に非常に懸隔のある事を話した。新嘉坡は母國に近い丈けに、其れ程に故國ヶ戀しがらず、猶も重なる借金の爲めに、又其の地へ來てから覺えた博奕の負けから、情夫との失敗から、烈しい好奇心――其れは婦人で無くては解し得られない情緒の漲つた好奇心の爲めに、猶も奧深く幸福を探す目的で入り込んで行くのである。印度の內地を旅行すると能く然うした女の一團に遭遇つて荒れ果てた其の靈魂にも、日本人たる感情の殘つて居るのを發見する事があると語つた。T氏は猶も語を續けて、

『新嘉坡で經營せられて居る日本人の女郎屋の金主は、大抵黑人で、或時は日本娘一人に對して一萬圓程も貸出したのであるが、中途で不正な男が借倒したので、今は娘一人に千圓位しか貸出しせぬ。』

と語つた。借りた其の金で護謨山を經營して可なり成功したのもあるが、失敗したのも多いさうである。私等二人は熱帶の街に日本人が營んで居る旅館の一室で夜更ける迄も語つた。何にまれ、三百人近く居る日本人に對して、母國は何等の命令一片の布告さへも與へて居らないのである。日本に屬した國旗は郵船會社の代理店の旗の外何にもないのである。此處に居る女たちに對しては、何等本國の思想を傳ふる機關もなければ、彼等はたゞ醜き者の玩弄物としかなる外、何等適當なる慰樂を得る道すらも無いのである。樓主の壓迫と、鞭とは是等の女達の背に向つて、日毎に加はつて居るのである。私達は旅館の

手代から聞いた彼等の慘憺たる末路を聞いて、只歎息するより外に術はなかつた。本國のあらゆる階級が高きに／＼と努力する中に、彼等の群は正反對に進みつゝあるのである。私は其れに就いても領事の駐在して居る香港にある日本の堂々たる遊廓に就いて云はねばならぬ。私等の其の街へ到着したのは、夜の八時頃であつた。殆ど日本の女郎屋と構造を同じうしたと云つていゝ其の建築は、違ふ點を土間に靡裝した身體を陳列して居るのに止まつて居るので、其の一廓二十軒に對して、英國政廳の巡査が立番して、一切の支那人や黒人を遮斷して居るのであつた。遊客は外國の水兵が重なるもので、何處の店にも其等の客へ充滿して居た。從つて服裝は日本の手品師然たる洋裝した女が多く、自由に其の口から聞覺えの英語にて卑猥なる言葉を連發して居る。未だ十五六歳になると思はるゝ小娘が髮を縮らして、佛蘭西や英國の水兵の身體に靠り懸り縋れ懸つて、喃々として語つて居る態は、いくら寛容な精神を抱いて居るものにしても、一つの不思議な顯象として脅かさるゝに違ひ無い。私達に對しては至つて慇懃で、日本の品格ある令孃と同樣の言葉にて迎へて、少しも猥りがましい態度を見せぬのも一つの不思議である。私は其の時も其の香港に永く住居する友達に案内されて往つたのであるが、友達の問ふのに對して洋裝の能く身に似合つた一人の女は、長崎訛りのある辯て、

『私は日本人の御客を取るのは厭ですは、西洋人の方が餘程深切なんですもの。』

冗戲言でなくて、心から恁う云つて居るのを其の薄唇から聞いた。其處に幷んで居る他の女達が其れを聞いて怪む樣子もなく、各自の華やかに裝うた身體を粉顏に灯火に照らされて、表を通る水兵を呼込んで居

るのであつた。併し云つて置きたいのは、此の街へ這入つても猶嚴然として島田髷に裾模様を着物を矜る女の居る事であつた。無論其れも遊女なのである。（完）

凡そ一年半の豫定にて外遊せる牛田葵山氏は今後時々彼地の婦人問題、演劇文藝等に關する趣味ある記事を本誌に寄稿せらるゝ約あり。

民權自由の女性と男女同權論者

吉野臥城

（一）

婦人の覺醒とか、新しい女の自覺とか、結構な言葉の流行して來たのは、つい此頃の事だが、既に三十年も前から然うした傾向があつた。其の時分にはまだ女子教育が普及してなかつたから、覺醒した頭腦も少數であつて、今日程の反響はなかつた。が、徳川時代の窮屈な檻から、明治の廣濶な庭に放たれた婦人が『是れてはいけない』と自分を振り返つて見て、危い立脚地にある事に氣付いたのは、注意すべき現象である。

どこの國でも同じ事だが、唯婦人のみの覺醒とか、自覺とか云ふことはない。男も覺醒すれば女も覺醒する、男も自覺すれば女も自覺すると云つた風に、兩性相待つて其處に進歩の一線が劃されるのだ。男が眠つてゐるのに女だけが醒めても、社會が然う認めて與れない。女が覺めてゐるのを男が認めた時に、始めて社會に反響するので、新しい意味を生じて來る。で、新しい男があるので、新しい女を了解して與れ、社會に於ける女の立脚地と云ふものも、自然定まつて來るのだ。

忌憚なく云へば、新しい女の出るのは、いつも新しい男より一歩遲れる。男性が覺醒した後に、女性の覺醒が伴ふ順序になつてゐる。但し朝起だけは炊爨の都合上、女が先にする事になつてゐるが、夫れでも男に起される事が多い。今日の新しい女の自覺なども、餘程男が手傳つてゐる。新しい男の感化を受けてゐる。男が唱へ出した自然主義の影響を蒙つてゐる『是れではいけない』と男が自覺して、新思想、新藝術に向つた時に、女も『是れではいけない』、相槌を打つて、自分を振り返つて見たのだ。

三十年前の女とても亦然うであつた。三百年の幕府を朽木を倒すやうに倒して、王政維新の新しい苗木を植ゑた。其の苗木のものになつた時に、瑞々しい枝葉が茂つて、薫の強い花が咲いた。夫れが民權自由の新しい思想であつた。黴臭い儒教思想、薄暗い佛教思想を呼吸して來た因習の五月雨(さみだれ)の濕(しめ)つぽい處に、フランスの放縱な、自由な、明るい氣分が浮んで來たから堪らない。是れまで鬱屈してゐた頭腦が、ぱつと明るくなつて、政治上の自然主義が叫ばれたのであつた。

維新の新政府が出來て、樞要の地位を占めたものは、藩閥では身分の低い、年の若いものばかりであつた。封建から郡縣に革つた急激な政變は、人の心を新にして、今日まで滅却されてゐた『我』を發見せしめた。さうして、其の潜在せる能力を自覺せしめた。『我も人なり彼も人なり』

と叫んで、猛然と蹶起するに至つたのは、蓋し當然のことだ。總ての若い人々が政治の上に眼を注いで、民權自由を唱へたのも、時代が時代であつたからで、今日から觀て外面的であつたと云はれても仕方がない。斯う云ふ時代であつたから、當時の新しい女と見るべき者は、矢張男と一緒になつて民權自由を口にもし、實行もした。舊習慣から脫け出て若い女の『我』を主張したのは、婦人活動史に於て見遁すことの出來ない事だ。

（二）

新聞紙の刊行が許可されて、言論の自由を得たのは明治五年であつた當時の若い人々の言論は、多く思想上の問題よりも政治上の諸問題で、火を吐くやうな熱烈なものであつた。血を以て新政府を樹立し得た薩長氏の行動を目擊した彼等であるから、新しい或物を獲るに就ては血を見ねばならぬものと思つてゐた。勿論自分等の主義主張の前には、皆一命を捨てる覺悟を持つてゐた。言論の自由を得て、口に筆に忌憚なく思想や意見を發表し得たと云ふ事よりも、此の一命を捨てゝもと云ふ意氣確信は因習を打破するに非常な力があつた。

いかほど言論の自由を得ても、筆は筆、口は口、實行は實行と別になつてゐては、社會の一勢力とならないのだが、新しい或物を獲ようとする若い人々は、言論即實行であつた。老人連からは空に字を書くやうな書生論と嘲けられたが、其の書生論が天下を聳動した。社會の大勢力となつた。眠れる者を覺まし、醒めたる者を起たせるの刺戟劑ともなり、興奮劑ともなつた。十年前後には、政黨政社樣の者が起つて、民權自由論が野に山に高く反響した。今日ではもう銅像の人となつて、御本人もぼけ加減ではあるが、板垣は民權自由の花形で、天晴な新しい男であつた。

『自由』の二字に、當年の若い人々は憧れた。自由！ 自由!! 自由を語る人でなければ、新知識ではなかつた。新しい人ではなかつた。今日の新しい女が覺醒よ、自覺よと叫ぶよりも、より以上に熾烈に、社會に一種の權威をもつてゐた。斯う云ふ時勢の裏から、婦人の立脚地を考へ『是れではいけない』と振ひ立つ新しい女の出るのは自然の數である。

果して、民權自由の女性が生れた。國會要求の聲の盛んな十四五年の頃、白襟に島田と云ふ姿で演壇に現はれた女がある。ちやうど青鞜社の岩野清子が丸髷姿で中央會堂の演壇に現はれ、新眞婦人會の木村駒子が紫被布で和強樂堂の講壇に立つたやうな、異樣なもので、尠からず當年の新しい男を驚かした。夫れは、民權自由の新しい女岸田俊子であつた。古い女の眼にはお轉婆とも魔性の女とも見えたのであつたが、民權自由論者は彼女に同情し、一般の若い人々も彼女の聲に傾聽を惜まなかつた。

俊子は專ら政談演說を試みたので、日本に於ける婦人參政權運動の先驅と見られないでもない。尤も男子に反抗して迄も參政權を獲ようとは焦つて居なかつたが、國會が開かれゝば、婦人も政治に容喙することが出來、自由な運動も出來るものと、當然思つて居たらしかつた。民權自由の聲に同じて振ひ立つたのは、少くとも其の爲めであつた。彼女は呉服屋の娘で、洋學の素養は無かつたが、漢詩を作る程の才は有つた。時勢を見るの明も巧に世に處するの術も知つてゐた。一體に才の勝つた女であるし、今日まで枉屈してゐた町人の娘なので、頭を擡げるのは此の秋だと思つたのだ。て、十九歳の時に政治結社に加盟し、男の群にあつて政論を上下してゐた。其の政談演說の如きも、政府攻擊や藩閥打破の絶叫で、憲政の新しい一日の速かに來らんことを望んでゐた。彼女は此の日の來ることに由つて婦人も男子と同等の權利を得、美しい幸福の輝きを見るものと信じてゐた。だから、彼女は政治問題としては民權自由を唱へ、婦人問題としては男女同權を主張してゐた。

男女同權と云ふのも、民權自由と同じく翻譯思想には相違ないが、小兒が大人のする事を眞似るやうな盲目的なものではなかつた。婦人の職業とか、獨身生活とか、其處までは考へて居なかつたが、女は男よりも劣等なもので無いことを知つた。男の上に出ることは出來ないまでも、少くとも男と同等に步むことが出來ると悟つた。政治運動でも何でも、男と同樣にすることの必要を感じて、實行方面に向つたのだ、彼女は服裝までも男と同樣にはしなかつたが、政治結社に出入する婦人の中には、縞の袴を穿いたり何かするものもあつた。新しい女のカフエーに出入して、青い赤い黃色い酒のグラスを嘗めながら、藝術的氣分とやらを味ふのと似たものであつた。ちよつと男のやる樣な事をやつて見るのは、何れの時代でも新しい女の試みることだ。

今の新しい女にも男性的な氣分はあるが、民權自由の女性は全く髯のない優しい男であつた。演說でも、

交際でも男の行き方と然う差異(ちがひ)はなかつた。俊子なども、其の素行に就ては、隨分非難されたものだ。事實さう云ふことが有つても無くても、男と同等の交際をしようとする者には免れないことだ。彼女はそんな非難には頓著なく、政談演説をやつて歩いた。併し彼女は巧に自分の理想を實行した爲めに、民權自由の女性が多く悲慘な放浪を續けねばならなかつたのに、家庭の幸福に浴することが出來た。夫れは最初の下院議長となつた中島信行と、自由結婚をしたことである。中島の先妻は陸奥宗光の妹で、二人の小兒を遺して死んだので、彼女は其の後添となつたのだが、互に愛し合つた仲ではあり、同主義同趣味であつたので良人と共に活動を續けた。

俊子は、伊藤や板垣等とも膝を衝き合せて話もし、政界の黑幕となつて懸引位はしてゐた。何時であつたか、『信行はそんな思ひ切つた事は出來ますまいよ』などと云つて、政界の士を煙に捲いた事もあつた。『自由の燈』には、隨分と凄い筆を揮つたもので、政府者にも睨まれて居つた。湘煙女史の名は、今日でも人の記憶に殘つてゐる。當年に傑出した女性の一人として、其の周圍を研究して見たなら、もつと面白い事があるかも知れぬ。

(三)

俊子の政治結社に出入してゐる頃には、松本萩江、下田歌子、中川幸子なども民權自由の空氣に活きてゐた。歌子は俊子などよりも、もつと才氣に富んだ女で顏が美しいのだから、新しい女として充分の活動が出來さうであつた。男女同權に對しても、しつかりした意見をもつてゐた。獨身ではあり、美貌ではあり、華やかな空氣の中に呼吸してゐたので、其の素行の非難は、俊子よりもずつと甚しかつた。俊子は結婚と同時に、平凡な女と化して了つたやうに思はれたが、歌子は一度亭主をなくしてから、獨身を續けたから兎角の噂は絶えなかつた。今日でも何うかすると、新聞の一段位は賑はすことがある。彼女は民權自由の高潮に達した時に、宮中を辭して、政界に打つて出ようとの野心

がないてもなかつた。伊藤なども彼女の天分を認めてゐたので、望を囑して居り、興味ある眼で見てゐた。幸子は北越の政界に頭を擡げて、政談演説もやれば壯士に聲援もやり、思ひ切つた亂暴なこともやつた。若い時に亭主に別れたので、自分の立場を考へ、男子に負けまいと思つて活動したと云つて居た。

熱狂した政界の波瀾に投じて、世の注意を一身に集めたのは、大阪事件の景山英子であつた。此の陰謀は、自由黨の領袖大井憲太郎等が同志を率ゐて朝鮮に渡り同國の開化黨を助けて、守舊黨の政府を轉覆しようとの計畫であつた。是れは政府の對政黨策が日一日と峻嚴を加へて來たので、不平で堪らず、其の鬱憤を外に洩さうとしたのであつた。處が、首謀の一人たる磯山淸兵衞が變心した爲めに、大阪重罪裁判所で宣告を受ける事になつた。英子も連座して、處刑されたので、少からず婦人界の神經を刺戟した。彼女は當時十七八歲の妙齡であつたが、花のやうな紅の血涙で民權自由の女性史の初頁を彩つた。

新しい運動は、其の時代の人の眼には突飛なやうに映ずるので、種々な非難も受け、迫害を蒙る、夫れを突破してゆく勇氣と精力とがなければならぬ。多少の犧牲は拂はねばならぬ。現に英國婦人の參政權運動でも少からぬ犧牲を拂つてゐる。隨分と執念く、粘り强く、屈せず撓まずやつてゐる。我が國の男女同權運動も變な方向に進んで、目的を外れた所に犧牲を拂つたが、新しい女を考へさせるには充分であつた。

英子は出獄して後、時代から置き去られた形で振はず。松本でも、下田でも、中川でも政治方面に羽翼を伸す機會が永久に奪はれて了つたので、沈默するより外なかつた。『國會が開けたなら』と云ふ期待が水泡に歸し、却て以前より窮屈な束縛を受ける事となつた。と云ふのは、明治二十五年に制定された治安警察法で婦人の政談集會に會同し、政治結社に加入することを禁じられたからで、總ての女は、政治に耳を閉づべく强制された。

憲法では、婦人の參政權を認めず。治安警察法では

婦人の權利を制限し、曾て自由に政談演說を試みたのが、夫れを傍聽する事すら出來なくなつた。民權自由を唱へた女性も、男女同權を叫んだ婦人も、顧みて苦笑せざるを得なかつた。

(四)

民權自由の女性と行き方が違ふが、同時代に女子敎育とか、男女交際とか云ふ方面に、考へを向けた女がゐた。男女同權にした所が、唯空な叫びては不可い。女子も相當な敎育を受け、新しい知識、新しい思想を蓄へて、男子に對して恥ぢない實質を持つて居なければならぬ。斯う考へて、其の方面に進んだのは、木村秀子や、鷲山彌生等てあつた。

彌生は今の女醫專門學校の吉岡て、男女同權以下に亭主を取扱つてゐるから、當時の主張を實現した樣なものだ。秀子は突飛てはあつたが、彌生よりも才氣があり、趣味があつて、面白い女てあつた。男女交際會の主唱者だけに、若い詩人や小說家とも交つてゐた。女子敎育書の飜譯や、交際論など云ふ著述もある筈だ。

秀子は明治十二年に東京醫學に學び、全科を卒業してから、獨英の語學を研究した。十七年に醫術開業試驗を內務省に出願し、翌年大學に上書して入學を請願すること數回に及んだが許されない。高等中學に入らうとしたが、夫れも許されない。女子を入學させる制度がないのは不都合だと云ふので、直接當時の文相に面會して衷情を訴へ、大學の選科に入ることを許された。此の通り不負魂の女て、押が強く、何處までも男女同權を實行しようとする。二十年一月小石川に東京女子專門學校を設け、自ら敎頭となつて授業を始めたが、入學者が至つて尠い。明治の女もこんなざまでは心細い、女子敎育の必要を鼓吹せねばならぬと敦圉いて、敎育書の飜譯に從事したが、完成しないで斃れて了つた。享年僅かに二十歲てあつたが、其の短生涯に新しい試みをやつたのは、後の若い女を刺戟することが尠くない。

民間にはフランスの思華が咲いてゐるのに、伊藤はドイツの官僚政治の綠て鎮壓しようとした。新しい內

閥が出來た頃は、歐化政略の利目が著はれて、若い女達は唯もう譯もなく醉はされて了つた。井上の條約改正に成功しようと、日比谷に鹿鳴館を建て、連夜内外の紳士淑女を集めて舞踏會を開いた。戀の憧れ、歡樂の夢、ピアノはうら若い心臟に浪を打たせた。交際界の明星と稱された戶田極子は云ふ迄もなく、田邊蓮舟の娘の龍子(今の三宅花圃)なども、舞踏の群にゐた。外形的の文明に醉うた、ハイカラ女性は澤山に此處から生れた。

婦人の洋裝の流行したのも一時て、追々に「我」にかへつたが、自由結婚とか、男女交際とか云ふことは、ます〳〵盛んになつて來た。龍子なども、男女同權論者として久しく江湖に名を馳せてゐた。二十五年後は、新しい女の民權自由や男女同權の論議を避けて、内的生活に向つて來た。口よりも筆に、政論よりも文藝に努力する傾向になつた。

其後は女子教育の盛時て、束髮が廂髮となり、蝦茶式部が新しい女となり、文藝に、美術に、宗教に、おの〳〵其の天分を發揮するやうになつた。けれども、最初に唱導された民權自由、男女同權の思想が根柢を作して來てるのだから、新らしい女の自我發展は、創作だけに止まるものではない。きつと行く處まで行くに相違ないと信ずる。

閨秀名家一人一題

「新らしき女の行くべき道」をよみて新眞婦人の三女史を論ず

岩野清

私は幸か不幸か新眞婦人會の方々の一人にもお目にかゝつた事もないから、勿論お話しゝた事もない。で新眞婦人會の主なる婦人方を評すると云ふのも單に雑誌「眞新婦人」と、「新らしき女の行くべき道」（同社の人々の合著になる）にお書きになつたものからうかゞふばかりであると云ふ事をお斷わりしておく。

先づ「新らしき女の行くべき道」を開いて第一に接したのは西川文子女史の新眞婦人會の目的と云ふ題の下にお書きになつた婦人の眞の自覺に對する西川女史の御意見を拜讀した。

女史は冒頭にから書いてゐる。

「私は婦人が徒らに男子の眞似をしたり、男子に反抗したりするのが眞の婦人の自覺だとは思はない。」

私は此一二行を讀んだ時に先づ第一に驚かされた。西川女史は何を說き出すのか。自覺と云ふ事をどんな意味にとつてお出になるのか。男子の眞似をすると云ふのは男子の様に髮をさんばつにし〻男帶をしめて歩くと云ふ服裝の上に於ての眞似であらうか？　或は男子が舊習慣舊道徳にあきたりなくなつて新らたに自分一個の生活の様式を作つたり、自分一個の道徳を作つたりするのを婦人が眞似をすると云ふ意味なのか、何れにもとれる様であるが、私は善意に解釋して恐らく筆者の心では前者の方の服裝乃至動作の態度などをさしてお出のだらうととつた。

假りにも、女である。人である。と自覺した婦人が、男子でなければ人間でないなどゝ考へるべき筈はない。女も人間であると自覺した婦人が強ひて男子になる必要はない。男子でなくとも人間であるのに、男子の眞似をする必要はない。女であると云ふ共事が同時に人間であると云ふ事である。自覺したる女は、人間の中の女性と云ふものゝ讃美者であり自分が女性である事を誇りとする人であらうと思ふ。であるから勿論自己に目さめたる女性としては斷じて男子の眞似などをするのを潔よしとする筈はない。服裝や動作は勿論の事、思想に於てでも眞似と云ふ意味は絕對に厭はれ呪はれる事である。眞似と云ふ事はそれが假令どんな意味の深い事柄でゝも自己を沒した空虛な且淺薄なものである。況や服裝、動作

のはしを眞似る如きは女性である事を讃美し誇りとする醒めたる婦人に於てはあり得べからざる事である。こんな事を今更らしくお斷わりなさるだけ私は西川女史の自覺と云ふ意味をお疑ひするのである。

次に「男子に反抗したりする」に就ては西川女史は現在の我國の男子の壓制力を餘り輕く見過ぎてはゐまいか。自覺したる女性は今自己の世界を建設しつゝある筈だ。建設しようと努めつゝある筈だ。男子から奪略されてゐた女性の世界を取りかへさうと努めつゝある筈だ。醒めたる女性は無意味に反抗のための反抗をしてゐるのではない。自己の世界を取返すために必然に男性と戰はなければならなくなつたのである。戰かはずして平和に取返す事が出來れば敢て戰を開きはしない。然し事情は平和に解決を結ぶ事は殆ど不可能であるから必然に爭鬪するやうになるのである。反抗とも見えるのである。爭鬪しないで反抗しないで、女の世界を取返せる、女性の世界を開拓してゆかれるならば、男性が女性に對してそれ程寛大であつたら女性も更めて何を要求しよう。爭鬪も反抗も奪れてゐたものを取返すまでの間である事は云ふまでもない。此點に於ても西川女史は、女性の自覺を輕く簡單に見過てゐはしまいか。から云ふやうな妥協の考へで果して女史の云ふ「自己の人格を尊重し、各自の個性を發揮する」ことが出來やうか？。

「精神上の開發に向け、天賦の性質を發揮し」天賦の性質と云ふ意味は解釋の仕方によりて變な風にもとれればとれやうが大體筆者の意のある處を忖度して個人々々に與へられたる天分と見て「自己を利し、」自己を發展させよと云ふ意味にとれば御尤もである。然し、「社會に善き感化を及ぼし、」或は「人の世話でもしたが好い」と云ふに至つては、女史の切にとかれる自覺も世間へのための善人君子になることを第一の或はそれまででなくとも大目的としてゐられるやうに思へる。

若しこゝに醒めたる人、醒めたる婦人があつて、自己の生を充實させやうと努力し、自己の生きんとするために自己をあくまでも大きくして行かうとする婦人にとつて世間や他人が何程有難いものであらう。自覺したる人は自己のために生きる以外に何の意味も價値も見出す餘裕はあるまい。自己をはなれて他人のためを計らうとするのは自己の空虛になつてゐる時で自覺したる人の最も恐れ厭ふ所のものである。

西川女史は其二に於ても他人のために社會のために指導者とならうとしないのは無智の人々を墮落せしむる助力をしつゝあると云つて差支ないと強て社會を善い方へ導く義務があるやうに云つてゐるが、夫では只古い孔孟の仁人君子の道を說いてゐるので何も自己に醒めた人の新らしく考へた道ではない。から云ふ說なら今更ら西川女史の筆をかりなくても遠い二千年も前から云ひふるした道德である。婦人が服裝に綺羅を飾るのを單に罪惡視するのは餘り單純な斷定ではあるまいか。勿論程度問題で盜んでも綺羅を飾るのは極端であるが、自分の力の及ぶ限りに於ての美をかざることは必ずしも罪惡とは云へない。美を慕ふ心は人間の本能の一つで、食慾、性慾、知識慾と同樣に男女共通の慾望である。食慾や性慾や知識慾に人間當然の要求として許してゐながら美慾だけを罪惡と

していやしむと云ふのも舊い東洋の消極道德の不自然な禁慾主義から來たお說だとしか思へない。

又自覺と云ふ事を、讀書し、修養し、知識を增す事それ自身である樣に說いてゐる。然し只讀書したり知識を增したりする事が直に自覺にはならない。自覺と云ふのは第一に自分と云ふものを知る事だ。自分を自分の手につかむ事だ。自己の解剖、自己の內省の努力によつて自分と云ふものをはつきりと自分につかむ事だ。讀書も知識も自己を知るために必要なので、只ぼんやりと讀書してみたつて文字上の知識が增したつてそれだけでは形式だけの物知りと云ふに止まつてしまふ。自覺とは緣の遠い生字引になるだけの事に過ぎない。女史の自覺に對する解釋の誤謬は此點にある。知識が直に自覺だと思つてゐる點にある。だから折角の演說會を開く事も、雜誌を出す事も、眞に自己の內心の止みがたき要求によつてすると云ふのではなく、「容易で且善い事だ」位の簡單な理由の外に意味のないつまらないものになつてしまふのである。

女史が演說をするに就ても演說をする事それ自身が有意味の事だと思つてゐられるのは次の文を見ても解る。

「婦人の演說を奇とするな」の中に、「女義太夫あり、女浪花節ありても、何んにも非難しないのに、女の演說ばかり非難さるゝとは可笑しい。(中略)だから婦人に話すとか婦人を導くとか云ふ爲めには是非女自らが演說することが必要なことだらうと思ふ。」演說の目的が既に外面的な他人を導くとか、婦人と話すと云ふ單純な目的である。其上女浪花節と演說とを比較するに至つては淺薄な考へと云ふより滑稽と云つた方が好い。それもさうあらう、女史自身の演說の目的は「ツマリ井戸端會議を少し秩序ある、研究的のものにした」と云ふのだから。

斯う云ふ幼稚な頭腦、斯う云ふ單純な思想であるから結婚論に於ても「結婚の一大要件は愛情の有無にあり」と云ひながら「一旦結婚した男女が」愛がさめた曉「離緣したりするのは、何方の爲めにも決して幸福ではあるまい」から無理にもがまんするやうに說いてゐる。

こんな矛盾な說もつまり口に自覺を云ひ、筆に新生活を說いても、其根柢に於て、其根柢の思想に於て女史自身がまだ眞の新らしい生活に入つてゐないので舊い思想にわづらはされてゐるからである。然らざれば一旦結婚したから愛はさめても一緒にゐなければならないの、愛のさめた冷い生活をおし通して行くのが離緣するより幸福だとは云へない筈である。女史は又思想の統一を缺いてゐる。其四十四頁に於て黑岩淚香氏の說を反駁して「戀愛なしに結婚せよの、義務で結婚せよのと、誰れから云はれてもそんな事は出來ませぬ」と明らかに斷言しながら、結婚後は愛情が消滅しても離緣するのは幸福でないと思つてゐるのがそれである。さうして又一度眞に相愛した男女の戀愛は終生變る事がないと考へてゐるのも人間の心理の時々刻々に動搖してゐることを御存じない幼稚なお考へである。

愛が永久不變なものと信じたのは昔のロマンチックの詩人が夢みてゐた空想である。人生中最も純粹の感情の表現たる戀愛でさへも、刹那刹

那に消長するのを如何ともし難い。そこに現代人の懸の淋しみがあるのである。

要するに西川女史は、舊思想に深く囚れてゐるために女性と云ふものに一般的の觀察しかできない。だから只大づかみに精神の向上を云つたり、高尙な趣味とか云つたりするけれど惜しい哉文字の羅列に止まつて無内容な空論になつてしまつた譯である。女史は又自己に對して省察が足りない。他人の事は世話をやくけれど自己にはあまり忠實でない。何故なれば女史は御自身の生活に不足を感じてゐられない。女史は御自身の生活を幸福だと滿足してゐるらしい。もつと自己を解剖し、もつと自己を考へたら、自己と云ふものをどん底までさぐつてみたらさう容易に滿足してはゐられまい。不安なしにはゐられまい。さうして後始めて眞の自己が目醒めてくるのである。眞の人生をも理解する事が出來るのである。さうして眞の自覺をするのである。それまでは西川女史はまだ眞に目醒めた婦人(ひと)とは云はれない。

然し板状に於て種々の缺點はあるとしても、兎に角新生活を愛し、新生活に入らんとするお考と新人の心理を理解しようと勉めてゐる事だけは認(みと)めて上げて好いと思ふ。

第二編の筆者木村駒子女史は、西川女史の幼稚な思想ながらも女性の立場より女性を論じた眞面目な態度に比べて甚だしい不眞面目なものである。新らしき婦人をとくべき主意の新眞婦人會の主稱者の一人としてあまり主意にそなはない言論をしてゐる。名を婦人問題にかりて實は自家の觀自在宗の廣告と云つたら少し語弊があるかもしれないがまあそれに近い觀自在宗の稱道をしてゐるのだと云つて差支はない。「現代婦人の特長」を讀んでも婦人を主として論じたのではなく、只觀自在宗を修識する上には女性は「神祕的研究者として、之を發現するに適當なる觀念に富んでをります」と女性に結びつけたゞけで他に女性に直接關係があるとは見受けられないし論じてもない。さうして木村女史は合理不合理にかまはず、藝術をも婦人の自覺をも觀自在宗に都合よく結びつけてしまはうとしてゐる。だから「人生最後の要求なる宗教の形式を藝術に借らんとするのは近代の傾向である」と云ふやうに藝術を宗教のための藝術と思ひ遊びをするのである。それだからこそ「朦朧杜撰の文字を羅列して何等人生の主觀なく自然派と稱しデカダンと叫ぶ遊食の逸民、別名所謂文學青盟」など、子供のだゝのやうな辻褄の合はない罵倒をするのである。木村女史は藝術を宗教のための藝術だと誤解してゐるから、文藝に對して無理解なのも別に怪しむには足りない。

次に最も滑稽なのは「神祕家の内的生活」の中にある「私の内的生活」としなかつた理由である。「私にはあまり多くの家がある。宗教家としての私、藝術家としての私、或は妻としての私、母としての私、友としての私」私は此一文を讀んだ時失笑を禁じ得なかつた。私は木村女史が正氣でこんな事を云つてゐるとは思はれないからこれに就ては何もいふまい。

最後は神祕家として自ら任じてゐる女史自身の觀自在宗の信仰を說いたもので新らしい女の行くべき道に關係のない事だから這般はしたが批

許はしない。

忌憚なく云へば、木村女史は只一個の觀自在宗の最も熱心なる信者で一種の空想家で精神の正鵠を失つてゐる婦人だと思ふ。勿論新らしい婦人でもなければ、人生に對して深い洞察の目を持つてゐるのでもない。まして文藝のどんな物だかを理解するだけの素養はない。眞に只一個の觀自在狂だと思ふ。

次に宮崎光子女史の「女性と人類」「女性と社會」「女性と夫婦」「女性と藝術」「女性と道德」「女性と宗教」の條々を拜讀した。

「女性と人類」に於て「婦人が今日まで經濟上の獨立をしなかつたり、男子に從屬したりしてゐたのは、ベエベル等の考ふる樣なそんな專橫壓迫から來たものではない」と云つて「男子が女子に對する深厚なる同情は」つまり「女子は其可愛いゝ子供を產んだり、育てたりして居るから、從つて女子を大事にするのだ」と丁度雞の雌が卵を產むから人間が雞の世話をしてやつたり、滋養になる肉を供給するから豚を飼つて愛してやると同樣に解釋してゐる。夫婦の愛情を雞や豚が人間に愛されたり保護を受けたりすると同じにして少しも怪しまない。それが眞の夫婦の愛だと云つてゐるのである。愚論も此に行くと淺薄を通り越して無智だと云ひたくなる。今日の時代にいくら知識の低い婦人でもまさか可愛い子供を產んでやるから男子が自分を可愛がつて與れるんだと云ふ事を信じて喜こんで結婚するやうな無智な婦人は宮崎女史を措いてあまり多くあるまい。思想に於て舊式な平凡な西川女史でさへ夫婦の愛は絕對無條件に相互直接の戀愛を基礎としてゐるではないか。婦人が今日まで經濟上に獨立しなかつたり、男子に從屬しなかつたのは「男子が女子に對する深厚なる同情の結果」とは餘り男子を有難く解釋し過ぎてゐる。然も見當違の解釋である。遠い外國の例を引く迄もなく近く例を我國にとつて歷史を開いてみたら解ることである。なぜ家族制度が起つたか。家族制度は云ふまでもなく婦人のために起つた制度ではない。血統保存のために婦人を犧牲にするために起つた制度なのである。だから婦人が子供を產まなければ「三年添うて子なきを去る」と云ふ不姙の妻を離緣する不文律まで出來たのではないか。然らざれば血統保存のために公々然として妾を蓄へて當然と思つてゐた時代もあつたのは家族制度の婦人を侮辱し道具あつかひした證據ではないか。然し其當時すら假令男子が妻に對して絕對專王のやうな位置にあつたとは云つても、まさかに子供を通して妻を愛してやるのを眞の夫婦の愛だとは思つてゐなかつたに違ひない。

木村駒子女史は男子に征服される事を望むのが眞の戀愛だと云つてゐた。これも犧牲的奴隷的屈從的の古い型の戀愛觀であるが、光子女史のはまだそれより一層低い道具的家畜的愛情を以て滿足してゐる戀愛觀である。

由來光子女史は自家宗教から得來つた僅少の知識を唯一の信條とし、それに舊思想舊道德を鵜のみにした舊い頭腦の單純な人であるから冷靜に是非を辨ずるだけの判斷力が乏しい。此の筆法で政治論をするから、婦人が政治家になれば「決して內閣の更迭を見ない」とか、「新聞社の燒

打事件などはなかつたらう」とか、「山本伯をして入黨せしめ、政黨內閣を聲明せしめ、非難の打ちどころのない立派な政黨內閣を組織せしめたいものだ」とか、「世界の平和問題も婦人が政治社會に入る事が出來たらば一擧にして決する事が出來る」とかお目出度いのんきな論をする事が出來るのである。勿論婦人として、政治に加入したり、進で政治家になるのは私としても希望してゐる。さう云ふ時代を待ち受けてゐる事は光子女史と同感である。と、云つてそれが直に憲政有終の美が擧げられるとさう簡單に斷定するのは早見である。すべて原因結果の關係と云ふものはさう單純に見るべきものぢやあない。婦人參政權獲得は、婦人問題の解決を早め、或は社會制度の缺陷を補ふ事が出來ると云ふなら誰しも異論はないが、それに依つて戰爭の廢止から、軍備の撤廢まで一擧にして決行出來るとするのは淺薄な子供じみた考へである。

又「女性と夫婦」に於て「一夫一婦の結合を認めた上に經濟上の保證を設けるが最も適當なる解決である」迄は至極妥當な說であるけれど「家庭を認めては、婦人の經濟獨立が實際出來ないにしても」は光子女史の獨斷であらう。出來ない筈はないと私は信じてゐるから「經濟の問題のために夫婦の人倫を破壞する譯には參らぬ」と云ふ光子女史の心配も何の意味もなさない。（中略）「そんな事をして迄も生きて居なければならぬ必要が何處にあるか」も無用無意味の文字である。

光子女史の說はいつでも斯う云つた筆法で見當違から見當違ひへそれて行くのである。獨斷から獨斷を生んで勝手に斷定を下すのである。だから物の本末を顚倒してゐる。生きんとするから經濟問題も起るのである。夫婦の關係も起るのである。よし夫婦の關係を破壞する事があつたつて必ずしも生きてゐる必要がないとは云へないではないか。それこそ獸なら知らず人間としては只子供を産むより外に意味ある仕事がないとは云へないではないか。

光子女史は自由戀愛を犬や猫のする事だと云つてゐられるが、これも女史自ら解釋した例の見當違ひのお說である。自由戀愛と云ふのは光子女史の獨りできめてゐるやうな選擇眼のない性慾滿足を唯一の目的とした相手かまはずの戀とは違ふのである。金力、情實、利害の打算をぬきにした自覺ある戀愛をさすのである。相手の人格も知らずに仲人の口に一身を委ねて結婚するやうな無智な態度とは違ふのである。光子女史は結婚に對しても舊い仲人結婚を頑迷にも理想にしてゐるだけ、舊い道德に囚はれた人なのである。さうして又光子女史は「子供に愛情のない奴獸のやうな奴」と云つてゐるが獸は決して子供を可愛がらないと決つたものではない。子を愛する事は性食の慾と同樣に動物の本能なのである獅子や熊の樣な猛獸でも、犬や猫でも子を愛する事は共通である。諺にも虎の子のやうに大事にすると云つてゐるではないか。親猫や親犬が自分の食を減じても子に與へたり他に奪はれやうとすれば死を以て守ることは光子女史と雖見聞した事があるであらう。何も子を愛するのは人間獨得の情ではない。して二言目には獸のやうな奴とか獸慾的自由戀愛だとか極めて不愼謹な言葉を使つたり、獸といふものを人間と格段に下つ

ものゝやうに卑しめるが、犬猫と雖も動物である。人間と雖も動物の一類にはちがひない。いくら人間が高等であつても動物共通の性慾や食慾のある以上動物に關係のないものとは云へない。さう云ふ光子女史も人といふ動物ではないか。動物の本能たる性慾も食慾ももつてゐられるに違ひない。動物と云はれるのがいやだつたらそれこそ死んで土になるより外に途はない。從て動物本能として子供を愛することも人間らしい特長として誇るべき筋のものではない。

結局光子女史の根本の誤解は人間を動物以外のものだと慢心してゐる處にある。

藝術觀に至つては殊に甚だしい。一々擧げるもわづらはしいから二三の例を上げて如何に無理解だか意味も解せずに海外の文壇を知つた樣に裝つてゐるをお目にかけよう。

「さればこの偉大なる人間的精神には、到底勃發せずには止むものではあない。フリードリー、ニーチェは超人を標榜して現代の弱者を罵倒し侮辱して餘力がなかつた。」ニーチェの超人説は決して光子女史の云つてゐるやうな舊道徳を讃美したり自由戀愛を獸の戀愛だと罵倒したり侮辱したんではない。光子女史がかう云ふ意味にとつて賛成するならば今迄の論と撞着する。然らされば知識の足りない處から意味をとり違へてゐるのだらう。ニーチェの超人説は一切の善惡を排し歴史を無視し習慣道徳に超然たるものが强者であると同時にそれが善であると説いたのである。平凡なる約束を以てなれる道徳、宗教、夫婦、家族、社會を以て野蠻の族たりと云つてゐるのではないか。

當惟說の最なるものは「イブセンやツルゲーネフに至つて自然主義はその結局を告げたのである」である。私はかう云ふ無理解な人と文藝を論ずる勇氣はない。

「女性と道徳」では「新らしい生活は道徳を守つて行く處から生ずるものだ。而も舊道徳を一心に實踐して行く處に始めて新道徳もそこに發見されるものだ」と書いてある。舊い道徳を捨てないで新らしい道徳が實行出來ると云ふのだ。何と云ふ不合理な説だらう。

要するに光子女史には舊思想舊宗教舊道徳を振りかざすより外に冷靜に是非を區別し判斷する能力がないのだらう。だから自由戀愛と云へば直に肉の解放だと思つたり、自然主義と云へば放埒な行をすることだと思つたり、道徳と云へば一定不變のものだと云ふやうな輕率淺薄な斷定を下すのである。

これは光子女史に限らず他の西川木村兩女史にも通じての缺點であるが、何れも自己に對して省察が足りない。何れも眞の自己と云ふものを知つてゐない事である。即ち眞の自覺をしてしてゐない事である。新眞婦人と名のりながら舊道徳や舊習慣や舊思想に囚はれて古人の説を模倣してゐるだけで、自分一個の内心から出た新らしい思想も新らしい觀察もなく、只徒に泰西文壇の名士の名をつらねて見當違ひの藝術論をして、幼稚な子供じみた虛榮心を滿足させてゐるに過ぎないのである。(完)

青鞜社を論ず

宮崎光子

青鞜社の批評をして貰ひたいとの御賴みでありましたが、批評といふよりも、私は少々非難をして見たいと思ひます。

一口に申しませうなら、青鞜社の空氣の中には、世の所謂不良少女と云つた樣な氣分が含まれて居ることであります、內務省から發賣禁止を受けるといふ事も、何か主義とか主張とかの上からならば兎も角ですが風俗壞亂といふ獸的表象の爲とあつては、淫賣婦が警察に拘引されたり出齒龜が檢擧されたりするのと同じ譯でありまして、不良少年や不良少女の仲間と云はれても、申譯があるまいと思ひます、それを不思議と思ふなら、文字に書くことを止めて、一つそれを繪に描いて見たら直に分りませうと思ひます、忽ち一幅の春畫が表はれるに相違ありませぬ。青鞜社は高等不良少女の一團であると、世の中から目せらるゝのも已むを得ないと思ひます。

世が進歩して參りますると、風致上の機關が行屆いてまゐりまして、感化院なども精神病院の一部となりまして（監獄も勿論一種の病院となりますが）、倫理道德の觀念に缺乏した不具者や、色情狂のやうな者は之を適當な方法で以て善導感化する時代が、遠からず來るであらうと信じて居ます、それが今の處何等の機關も出來て居りませぬから、まことに殘念な次第であります。

青鞜社の連中が、五色の酒を呷つたり、煙草をふかしたり、吉原などへ押上つたりする事は、夙うから耳にしては居ましたが、それも何か新らしい生活を見出さうとの眞面目な希求から出た、一時の若い考への誤謬かと思つて居ました、それでありますから本年の青鞜新年號にも、請はるゝまゝ一文を草して寄稿した事もありました。

青鞜社の人々に逢つたら、誤謬を解いて上げようと思つて居ました、その中に二月でありましたか、青年會館で講演會が開かれました、その狀況を目撃するに至りまして、始めてあの連中の主張と氣分が解りまして、あれほどまで根柢があつたかと、驚き且つ怖れざるを得なかつたのでありました。

岩野某、馬場某等が、陣頭に立つて半獸主義や本能主義を振廻はし、若い〳〵青年男女の前に鼓吹するに至つては、また青鞜社同人が、人もあらうに斯んな半獸者を選擇して、御師匠樣に講釋を聽かうと云ふに至つては、何うして默する事が出來ませう。

更にまた斯んな獸的開放、肉の開放論を謹聽して居た八百有餘（青年會館にて）の青年男女を見るにつけ、人道の上から一刻も猶豫はならぬと、新眞婦人會を起しました次第であります。

あんな半獸者を引つ張り出して來て而も御師匠樣にする青鞜社同人の了見が、既に宿痾膏肓に入つたものであります、それもあんな半獸者を放逐して了つて阿部次郎氏や生田長江氏などを先生に、眞面目に勉强す

お氣になつたなら、それは屹度何等かの結果をもたらすであらうと思はれますが、あの半獣者を捧戴してやつて行く限りは、濟度し難いものであります。

あの半獣者を放逐する事が出來ないで、反て生田長江氏の退社を見るに至つたのは、それが半獣の氣分と青鞜の氣分が一致して居る處でありまして、如何とも致し方ない氣の毒な譯であります。

刹那哲學などゝやつて居るやうですが、刹那と云ふものに哲學があらう筈はありませぬ、哲學と云ふものは統一的のもの、恒久的のもので、刹那を超越した觀念が則ち哲學を組織するのであります、刹那哲學などとは二三歳の小供の片言（かたこと）と同じもので、概念を形成したものではありませぬ、短い長いものとか、冷たい熱いものとか云ふのと同じ事でありまして、思想の表現ではないのであります。

それでありますから、刹那哲學が若しあるとしたならば、それは思想をする人間の中にはないものです、犬や猫のやうな獣類は、天地開闢以來、幾萬年間一日の如くに、今猶現に刹那哲學を實行して居るのであります、獣類は刹那の外には何等の生活もないものです、目前の刹那〱が獣類の生活であります、それで半獣者の哲學としては、刹那哲學は相應した哲學でありますけれど、思想をする人間の社會に於ては、哲學と云ふ意味を成すものではありませぬ。

斯んな淺薄なものを聽聞して、自分達は氣分の生活でありますから、その時々の氣分次第で酒も呑みますし、吉原へも押掛けますと云つて居る人もあるさうですが、まことに御氣毒な大事であります。

近頃青鞜社の同人は、自分等の青鞜社は迫害を受けて居るなど云ふ人もあるさうですが、それは飛んだ心得違ひでありませう、人道に背いたものが痛い目に逢ふのは當然でありませう、花やしきの狒々を見たやうな象徴で以て、風俗壞亂を書き立てたり、主張したりするからには色々な目に逢ふのも已むを得ないでありますまいか、捕縛せられた泥棒が、自分は迫害に逢つたと云うたなら、誰かこれを笑はぬものがありませう。迫害を經驗するには途が違ひます、方向が全く違ふのであります。

昔し耶蘇基督が十字架に釘付けられました時に、その左に泥棒が釘付けられ、右には惡黨が釘付けられました、つまり十字架が三本立てられました。この三柱の中で眞の迫害と云ふのは基督ばかりでありました、他の二人は相當した刑罰を受けたまでの事でありました。

善のために苦められるのが迫害であります、惡のために苦められるのは刑罰であります。

ノラとマグダに就いて

松井すま子

私が『人形の家』と言ふ脚本を知つたのは、協會へ這入つてから島村先生の『近代劇』のお講義を伺つた最初の時でした。

其頃私は、語學の稽古を初めたばかりの時でしたから、脚本としての面白味よりも英文を讀むと言ふ方が主になつて了つて、夫に一週に二時間と言ふ斷片的な時間に、區切れ〳〵に伺つたせゐか、隨分ノラの性格に付いてもいろ〳〵伺つた筈でしたが、其割合に頭に殘りませんでした。從つて、何う言ふ柄の人が此ノラに適ふか、何んな性格の人が此役に扮したら成功するか、そんな事は考へても見ませんでした。夫が翌年の一月號の早稻田文學に島村先生の譯が全部出ました時、初めてノラと言ふ役のいゝ役な事、むづかしさうな事、自分ももう十年も勉强したら下手ながらも稽古して見る事が出來るだらうかなどゝ思つて見ました。そして折々は內所でソツと讀んで見る事などもありました、けれども「ノラなんか讀んだつて出來るつもりか。」などと周圍から言はれはしないかと、そんな事を氣にしたものですから、思ひ切つて稽古して見る事も出來ませんでした。

其年の七月、土肥先生の監督で、『ヘッダガブラア』を飜案で內見試演にされた事が有つて、其次にノラをするとか言ふ噂が專らでした。とても自分には出來ないまでも人樣のでも見る事が出來ればと、私はどんなにか喜びましたらう。けれども其話は何時かお流れになつて、翌年の卒業公演にはハムレツトを公演する事にきまり、上山さんは王妃、私はオフイリヤ、AさんIさんのお二人の內、どちらか劇中妃と定まり、其方の稽古に掛りました處、AさんIさんが大變ひまだと言ふ處から、別に生徒間で『人形の家』を硏究して見る事になり、Iさんのノラ、Aさんのリンデン夫人、林長三郎さんのヘルマーなどで、よく私が稽古を見に行くと何時も序幕の處を稽古して居られたのをおぼえて居ます。長い前から自分が望んで居たノラの稽古を、やつと今見る事になつたにも係らず其時の私は稽古にあまり興味を持たなかつたものと見えて、幕あきにつぶやく樣に、鼻唄を唄ひながら、戸を開けて入いつていらつしやる、Iさんのノラの、日本服を着た肉付きのいゝ姿と、耳へペンをはさんで笑ひながら出て入らした、大阪辯の林さんの顏などが目に殘つてるばかりでした。やつぱり私は一方オフイリヤの稽古に夢中になつて居たものと見えます。夫に皆さんもあまり氣を入れてなさらなかつたのでせう。何時の間にやら立消えになつて了ひました。

翌年の五月、帝劇でハムレツトの公演をも漸く無事に濟むと、六月を一月休んで、七月大阪で公演する事に定つた頃は、上山さん御夫婦は、九月の協會の舞臺開きには、ヘツダを私演するのだと言つて居られました。夫から大阪公演をすまして歸京して、二三日經つてから協會からの召集に參りますと、私演場の普請中で、鋸の音や金槌の音のやかましいせまい舞臺の上座に置かれた座ぶとんに、兩監督を左右にしてお着きになつた坪內先生からのお話しで、九月の舞臺開きには、島村先生の監督で『人形の家』を上場する事、其役割は二三日後の本讀みの時監督者から發表される事、猶秋の公演にはオセロと決定した事、其役割は東儀先生のオセロ、土肥先生のイヤゴ、加藤さんのケヤシオ、廣田さんのエミリヤ私のデズデモーナなどゝ言ふ事でした。が『人形の家』の役割の、まだ發表され

ないのが私にはどんなに氣になつたでせう！　そして皆さんが『ノラは貴女だから一生懸命やらなくちやいけない』などゝ被仰るのを聞くと、私は夢ぢやないかと思ひました。

其晩はいろ〳〵な心持がごつちやになつて眠れませんでした、そしてやつと眠つたと思ふと何だか譯の分らない芝居の夢を見てうなされました。ハツとして目が覺めるとまた此の譯の分らない夢が氣になつて何かの前兆ぢやないかと心配したり、其二三日の間の氣持と言ふものは有りませんでした。いよ〳〵其日になると、女の方では二期生の廣田さんが見えて、研究所では大工の根たを打つ音が硝子戸にひゞいて恐しい騒ぎなので、坪内先生の前のお宅のおざしきで本讀みをする事になり、島村先生中村先生が、少し離れた上座にお坐りになり、私と廣田さんとは暑いのに一生懸命くつ着いて、隅の方へ小さく坐つて讀みはじめました。そして彼のクログスタツドの對話の時など、東儀先生の落着拂つた金貸し振りに、私はほんとに口惜しくなつて、思はず乘り出して讀んで居ますと、邊りはシンとして、聞いて居る人たちの内所話しの聲もしばらくやんで居ました。やつと第一幕が濟むと中村先生は、あのまじめなお顔おひげの邊りへ、二本指にはさんだ卷たばこのお手を少しふるはせながら『クログスタツドの場は確かに芝居になつたね』と仰りながら笑つていらつしやいました。

夫れから間もなく私演場が出來上る頃には、朝の八時頃から十一時頃までの朝涼の間を、一日おきの稽古の度に『思ひ切つて小娘のつもりでと言ふ御注意を何度繰り返された事でせう！　そして斯うなるともう、ノラが自覺して最愛の夫や子供を振り捨てゝ出て行くのに就いてのいゝ惡いなどは考へて見るひまもなく、只々舞臺上の事ばかり考へて居ました。やつと演じ終せますとあちらでもこちらでも婦人問題がやかましく起り、ノラの家出に就いての樣々の議論が見えました。で私も色々考へ直して見ましたが、其當時はやつぱり、自分の行く道を切開くためとは言へ、三人の子供の愛を犧牲にすると言ふ事は、何うも同感が出來にくうございました。けれども夫かと言つて、其子供の愛に引かされて、ヘルマーの言に從つてあのまゝ止まつて居ながら自分を教育すると言ふ事が何う言ふ結果になつたらうかと、夫も疑問でした。

けれども今の私は、悲しい事ながらノラの心持ちに同感せずには居られなくなりました。子の愛に引かされる上は自分を犧牲にしなければなりませんし、自分を生かすためには子供の愛とても斷然犧牲にしなければならなかつたらうと思ひます、何故なればあの時のノラの自覺はほんの第一歩なので、更に進んで、暗い冷たい世間に幾度かつまづいたり、さまよつたりした後の自覺でなければ、ほんたうの強い〳〵自覺とは言はれません。又斯うした強い自覺でなければ『人形の家』を打ちこはして『人間の家』に造りかへる事は出來ないと思ひます。元來が人形の家に在つて人形妻になつて居る方が、責任もなく苦しみもない、從つてつまづく愛も先づ少い、樂な道なのですから、根柢の小さい自覺などなら何時か此方へ引込まれて了つて知らず〳〵此内に又元の無自覺の女に返らない

とも限りますまい。またまろきりつ無自覺にならない樣に、ヘルスー自身からも教育したとしても、夫は花なら室咲と同じ樣に、雨にも霜にも負けない强い花とは大變な相違が有ります。

マグダの方は之と違つて、世の中で一番神聖な者は藝術で有るが、子供は夫以上に神聖で有ると言ふ處が、一寸聞けばノラと反對の事を言ふ樣では有るけれども、マグダはノラと違つて、世の中の荒い波風にもまれながら獨立して來て、自覺の程度などもノラの出發點位ゐのとはまるで違つた、根紙のある强い〳〵自覺なので有つて、藝術と子供の神聖を說く場合でも、自分は一步上に居ての事だから、ノラが獨立を宣言して其ために子供の愛を犧牲にしたのとはまるて立場が違ふと思ひます。

マグダの事についてはまだ言ひたい事も有りますが今度は之だけに致しておきます。

ちらしがき

京子

朝寢

奥の下座敷を濟して、折衷の寢室を拵へてから、毎朝、次の化粧室の扉を、遠慮のないお母さんが、特別に遠慮なく、割れさうに、どん〳〵叩いて、起しにではなく、叱り散らしに來る、其音で夢もうつゝも覺めてしまふ私は、桃太郎に岩の戶を叩かれた、鬼の樣な氣持がしてならない、親といふものは、怎うして斯う子供に大袈裟なのだらう、左う思つても矢張り、少し情合の少ない事を云はれると、誰よりも一番お母さんが恐くつてしようがない、まだ十一二で、小學校に行つてた頃、何だかでイヤといふ程小言を云はれた事まで、一々思出してしまふ、さればとて世界に二人とない仲の好い友達があつても、親と離れて其人と住はうとは思はぬ、それどころか、親が死んだら私も死んぢまふ、と私はつく〴〵さう思つてる、お嫁に行つたりお嫁になつてる人は別だけれども、私のやうなものは親の年を勘定しながら、自分の將來の方針も定め、仕事も進行さしてゆかなければならない、私位の年の女がかうして中ぶらりんの境遇になつてると、世間からも迷つて居ると云はれ、自分自らも心の迷ひを人に洩す事があるけれども、私はいつでも何か少し混入つて考へる必要が起ると、親の年を錘にして自分の思つて居る望みや、仕事や道樂や、眞面目も不眞面目も、十把一とからげにして秤りにかけて見る。そのかはり私のやうな者は其錘が無くなつた日には、とても無事に一人步きは出來ない事になる、私の母は感冒でもひいて、少し悲いところがあると、なに死んでも當分は化けて來て上げるよ。と道化たことを眞面目に云つて居る、けれども私はあの靈魂不滅なんて云ふことは、噓の噓の、噓八だと思ふ。

去年の今頃

丁度去年の今時分、私はある新聞社のために方々を旅行して避暑地めぐりの、紀行文をものして居た、其最後の日は新橋のお貞さんが、無理やりに結つて呉れた、柄にもない意氣な銀杏返しを、氣にしながら葉山へ行くと丁度村井さんの別荘から出るところを、林董伯に遠目に藝者と間違へられて、とんだ笑ひのもとゝなつたことがあつた、その折の快活な福々しい伯が、先頃からの重態の上に、不慮のことよりその痛ましい病體の片足を切斷されると聞いて、あまりのことに涙も出ず身悚ひがした。自分の崇拜する人に附けるいろ／＼な美い形容詞は今の私には、自分の思ふ通りの言葉で云ひ現はすことが出來ない、私はたゞ、林伯を自分の能く知つて居る世の中の人の中で、聖人と英雄と神樣と江戸ッ子と混和した立派な、さうして温い優しい方だと思つて、心のたけ御全癒の日を祈つて居る。

それにつけて思出す葉山の夏は、私の前の生涯の美くしい思出の一節だつたと思ふ、青い／＼海の上に漂つて居た眞紅の帆のヨット、其中に若い戀を語り合つて居た二人が、怖ろしい沖の夕汐に歸りはを失つて闇夜の海に悶え明し、果てはその家々の人のために果敢ない隔ての關を置かれ、別れ／＼になつた悲しい戀物語を目のあたりに見聞きしたのも葉山だし、田舍源氏の光君と、あのしほらしい夕顔が、雨にそぼれて忍んで來さうな、廣い古寺を借りて、帝劇の最初の女優達やその八ケ釜しやの監督さん達と一緒に、我儘な賑やかな夏を送つたのも葉山だつた、今こそ大人らしくもなり、女優といふ觀念が誰を見ても充ち充ちて居るけれども、其時分はまだ初々しく、此樣な處に居ても、稽古だけはビシビシと火の出るやうに汗みどろになつてしながら、誰も彼も子供じみて居た中とり分けてお師匠の水木さんに何か云はれると直ぐ涙もろく泣いた弱蟲の千枝子さんや、毎日英語會話の本を持つたまゝ晝寢をして了ふ陽氣な律子さん、顔や姿には似合はず一番角のとれない、理窟屋の浪子さん、何があつても泰然として笑ひもせず、怒りもしないが戀ごとの話となると、別人の樣に勇氣の出る、村田かく子さん、此人がまだ卒業前の或時、矢張り葉山のさる方の別荘で、即席喜劇をやつた輕妙さや、折から遊びに來た、菊五郎を向ふに廻して、悪びれずに白石噺を演つた時の度胸の好さも此處の思出の一ッだ。

氣の弱い引込思案の私は何のはづみか、それとも何の因果か、其時分の氣風とは裏表の嘩まち／＼な此樣な茶屋の、帳場に坐るやうになつた。女中達の義太夫だの常盤津の稽古に半日は惱まされながら、見たくもない魚河岸の相場を見たり、お約束のお客の料理の出物を考へたり、藝者の心配をしたり、その相の手には藝者のひろめに玄關へ駈け出すやら、夜の幕があけば直更らさうでなくてもたわいもない用の數の多さ、なつかしい新聞一枚滿足に思ひ通り讀みおふせる日もないし、半衿のかけ替への外、好きな縫物の針を持つこともない廻り燈籠の姉さんみたやうな身の上になつてしまつた。

あこがれのなやみ

私は、あの淸十郞の樣な男に眞から心から、命も義理も投出して惚れて見たい、私は憧憬の心の迷ひかもしれないけれども、今、現在まのあたり一人の淸十郞を知つて居る、私がお夏の樣にうつくしく生れた女なら、お夏の樣に熱い心の女なら、私はたとへ一時でも、一日でも、一年でも心おくれずにその淸十郞に命のありたけ、惚れて了はうもの、その男のためには若い美くしい女が二人まで、果敢ない狂はしい死をしたといふこと、恐ろしい事と思ふ、今の世に幻のやうな事と思ふ、けれどもその遣瀨ない心の悶えに打負けて命まで捨てた、いぢらしい女二人をさへ心には泣いても、よそに見捨てたといふ男の心にともすれば私の胸は引寄せられる、でも其人には美くしい妻もあればいとしい子もある、思ひつめれば私は私で外しがたい義理といふ、强い繩に身も心も縛られて戀も情もよそに見て世の中に働かなければならない身に生れたことを、嬉しくも思ふ、私は自分で自分の心にゆるして、胸に思ふばかりは人並よりも或時は惡いことも思ひ、亦或時は人並より美いことも思ふ、一時でも、半時でも、わざと氣狂ひになつて、其間だけは、世間も人も我もなく自分の思つて惡いことでも勝手に思ふのを、唯一の今の私の心の慰めとして居る。

私は果敢ないことゝ思ひながらも、お夏の好んだやうな寂しい派手な衣裳を拵へて一人で眺めたりする。あさましいとは思ひながら、とゞかぬ想ひにあこがれそめると身も心も、何時となしおとろへてたれ籠めた小さい部屋の内に溜息ばかりついて日を送つてしまふ。私は此厄介なあこがれ病が治まると、何時でも何處かの温泉宿へ駈落者になつて十日か半月宿りたくなる、昔戀しい横笛の庵といふを見てからは一所不定の旅から旅にさすらひゆくやうな、尼僧の生活もして見たくなつた。

惚け賃

何時のまにやら女中達の手ずさみに直徑一尺もあらうといふ大きな桐の空箱に『のろけ箱』と命名したものが帳場の傍に備へられ、また『惚れて通帳』といふ一雙紙も出來上つた。座興の惚けは一株十錢といふ均一にて公然と衆人の前に、浮氣本惚れ、岡惚れの別なく惚けることを官許にしたわけにてお客樣の蟲の起らぬ妙藥、つかへを癒す第一の奇法だと云ふこと、何分にも惚けといふもの唯茶噺では聞く身の毒なり、また話すにも眞面目な顏では改まつて云ふも可笑しく、左のきかぬ身ではしらふの氣違ひと厚かましくも出られないもの故、さういふ破目になつては惚けとて心に籠つては一命にも及ぼすかもしれぬ故、人助けかたがた慈善心を以て、建立しましたと、頓狂な女中の一人がわざわざ、帳場へ出頭して私の小言に前除をしたのも昨日今日と思ふ中、早一個月近く過ぎぬ、此設備が出來てより今まで氣も附かなかつた小さなことも眼にとまつて人目を忍んだ寫眞入れの番やら、帶留やら、永襦袢の模樣にも半衿にも見えがくれの惚けの多いこと、何につけ女の心の弱さ、やさしさを身にしみて感じる事ばかり、ことに可笑しいことは二十を過ぎた世馴れ人馴れた、藝者たちが大抵な保養より五圓や十圓ならば、思ふさま、ありつ

たけ惚けさして貰ひたいと、十人の中八人までは、結びとめもされぬ、うたかたの泡沫のやうな、若い日の樂みを心やりの身の多いこと、女の胸には全く鬼は住まない。

合せ鏡

二年ばかりAさんはもう日本にばかり居續けた、或榮職につながれて日本の紳士としてあらゆる人々から形式ばつた尊敬を以て扱はれた、Aさんは一日增しに淋しい物思ひ勝の人になつた、彼人の本當の仕事は米國にある、ポートランドの靑々した廣い山野はAさんの第二の故鄕で、此處には相愛の若い夫人が愛兒を育てながら、多くの百姓を召使つて、農作物や牧畜や美くしい花畑の監督をして良人の歸る日を千秋の思ひで待暮して居る、Aさんは綺麗な靑い山の腹に建つて居る其白い家の窓から、夢の様な眼で折々はてしない大空を見て居る、若い金髮の人をいとしい限りに思つて居る、官位も名譽も打捨てゝ此秋には限りある若き日の樂みを求めに、Aさんはポートランドに歸つて行くことになつた、彼人は此二年の間に世捨人になる決心をしたのであらうと思ふ、私は此人達の話を聞いて、何だか強い甘い花の香に醉つたやうな心持になつて了つた。

何時でもさう思ふが、私のお師匠さんは、詰らないことに妙な癖で、三味線を彈く合間々々に、屹度不格好に肥つてふくらんだ胸をトンと突いて、脫衣紋をする、肥つてゝも萎びれた皮膚の脊中のお灸が其度にはあーをする。私には氣がしれない、一緒に往來を步いて居ると、能く辻中で昔ながらの『孃ちやん!』を今日でも改正しないで、私を呼とめる。何かと思ふと怎ういふものか、だぶ〳〵に締めてる腰帶が、すつぽりお尻を辷つて足の處へ落ちて了つてる、スコッチをアッチコッチといつたり、不潔を不經濟と間違へたりして、まだ六十には間がある年で居て何となく氣が脫けたやうに、おど〳〵して居る、けれども此人にも三十年前には、江戸娘の眞に血を湧した強い戀があつた、古い衣裳屋の愛娘で氣まゝに育つた意地の強い娘ざかりの師匠は、尾上某といふ其頃の似顏畫に忠臣藏の由良之助や五代目そつくらの、お祭佐七の三枚錦繪で、浮氣な女達に騷がれた、其若い役者と熱烈な、戀に落ちて無理な夫婦に生活の苦を味ひつくした揚句が藝をたつきに淋しい老を一人生きてゆくやうな味氣ない淋しい今の身となつて了つた、清い強い美はしい戀の哀には、淋しい滑稽とあさましい悲哀がある、男も女も、人は皆つまらないと思ふ。けれども若い日の自分に樂しかつた、戀も情愛も去つて、親もなく夫もなく子もなく、總て自分を世の中の人として立たせる力が無くなつても、藝術ばかりは人を捨てないものだと思ふ、いくら貧弱な藝術であらうが荒んだ藝術であらうが、人は一日々々おとろへながらも、その天地に微笑むで暮してゆけるのだもの。

女として觀たる婦人問題

日向きむ

婦人問題ことに新らしい女に就ては此頃急に世間がやかましくいふ様になりました。而して私の様なものにも意見をいへとかどう思ふとか云ふ人が大分あります。兎に角私たちも同性の問題がさう氣にとめられて來たとすれば、何とも思はれぬよりは、忘られて居るよりは（そんな事は決してありうべきことではないが）よろこばなければならないのでせう。けれど私は世の人の正直な僞らぬ心に問うて見たい。それは果して眞面目に厳粛に最慎重の態度をもつて私達同性の爲に、社會の爲に、研究し解決しようとして居る人が幾人あるでせう。私達は常に素直で居たい、天眞爛漫で居たい。自ら傷ける様な猜疑心や狐の様な心の目を持ちたくない。けれども悲い哉。好奇心、政策、利用、などの文字が何とはなく胸に浮んで來る爲に、本氣になつて論じたくない様な心持にもなるのです。

そんな、人の顔色によつて我の態度の定まる様な相對的な考を持つ事が最早すでにいけないのですけれど、それは矢張ごく微妙な生きてゐる人生の事實の一部なのでせう。

私自身にはこの新らしい女といふ名が力あり眞理あり生命ある内容にふさはしいものとは思はれないので、云つても聞いてもあまり厳粛な感が呼び起されません。丁度ショオのかいた脚本を讀んだ後の様な氣がして（實際深刻な問題を取扱かつてゐるにしても）一種輕々しい馬鹿にされた様な面白くない或るものを同性共有のやさしい而も神聖な權威の上に感じるのです。それは嘗つてアメリカあたりにもニューウマンと稱して男装の婦人等が男子に一歩づゝ後れてはそのあとをやつきとなつて追つて行つたといふ例など見る様に聞いた印象や、新らしいとは未だ古くならぬ事、未だ古くならぬとはやがて古くなるといふ詞の様に拵へられるのから「順ぐりにあとのつかへる木戸口やまづ先様はお粹りの御代」といふ自然淘汰のはかない相がまざまざと目の前に輕薄の上ぬりをする様で、一定不變なるものが侮辱される様な腹立しさをおぼえるのです。

私は未だ徹底しない事を正直にいひあらはしてゐる自稱新らしい女に就いて多く云はうとは思はない。又それ丈の修養もなければ才學も持つてゐない。けれど私は私として婦人の使命といふ事に就ては思ふ事も多く、感じた事も少くはありません。彼の平塚氏の理想とするといふ太陽の輝く眞正の白色は七色の差別を統一した處のものといふ事を忘れたくない、絶對と差別の意義を私達がもつと研究し悟るところがあるならば、私達はたしかにもつと幸福になると思ひます。そこに使命も天職も明かに示されて來ませうし、我といふものに就ても、もつともつと深く知る事が出來て悠々たる生活に入る第一の門がひらかれるのではあるまいかと思ひます。

あゝ新舊を超越した永遠の郷の眞の女性の立姿を畫にして詩にして宗敎にして、生きた社會に生み出して心ゆくまで活躍させて見たい。この

貧人生の早瀬の水が足もとに渦まいて押し流さうとするたゞなかにふみとゞまつて、いまはしい、いとはしいしかもなか〳〵力づよい肉と血の戰ひを、やさしい白い腕ひとつで切抜けてゆく樣な女性、勇敢といふ字を濃淡美くしいお家流の筆でかながきにした樣な女性、私はさういふ人がほしい。否もし出來る事ならばその淡い影法師にでも自分がなつて見たいとねがふ。世に姦ましい婦人問題は群る追手のあしもとをくゞつて彼の山こえてにげてゆく白兎。私達は靜かに人の中に埋れて目逃がさずにつかまへて、動かさずにしかととらへて袖に抱いて終はなければならない。而して歩みののろい龜さんに決して不覺をとらぬ樣敎へはぐゝんでゆかなければならない。

　私達は權利を外に叫ぶ前に、まづ義務と責任を内にかへりみなければならない。私達は男子といふ向三軒兩隣の厄介になる前に、水いらずの女同士で三人よれば出るといふ文殊の智慧をしぼらなければならない。といつても決して男を疎外するのではありません。かへつて親しく思ふからです。何故ならば一人の男は必ず一人の妹の兄か、姉の弟か、妻の夫か、處女の戀人か、なにでなくとも母の子である事だけは確實だからなのです。私達は母といふものを私たちの中から出してゐるといふ特權に對する課税としても今すこし男といふものを熱心に研究しなければならない。博いゆたかな同情と、尊敬と眞摯と、愛心を以つて徹底的に、男自身さへ知らないで過ぎやうとするその靈の幽かな幽かな要求の聲まで聞きとる位に努めなければならないと思ひます。何の爲にといへば、たゞ愛の爲にです。

　愛はすべての複雜と矛盾を解いてひとつに結ぶ德の帶です。恩がへしと復讐と一時に出來るのは愛のはたらきです。我を殺して我を生かすのも愛です。我をひくゝして我を高くするのも愛です。私達は絕對の愛を知る事によつて昔つてはゆめにも知らなかつた一大王國が自分の物となるのです。生命の門が音もなくひらかれるのです。大白牛車も心のまゝに馳かせて何處へなりとも逍る事が出來るのです。そこに眞の自由があり開放があり平和があり歡喜があるのです。而してそこには私達の不斷の祈禱に、創造に不適當な物はひとつもない。一杯に充實した心靈の眼はいかなる瑣事にもいひしらぬ興味と意義と生命そのものを發見せずには置かないからなのです。人生の目的は人生そのものである樣に私達の天職も使命も日常平凡の出來事のうちにかくされ、漸く積みあげられてゆくのであらうと思ひます。明日といふ雪の高嶺は今日といふ水に溶けて昨日河に流れてしまふ。私達は概念ばかりの哲學では宗敎では最早到底滿足出來ない。美はしい足と手で、神と共に働いてその日その日を充實させてゆく事さへ出來るならば、昨日を呪ふ事もなければ明日におびやかされるわけもないと思ひます。

　見えるものは見えないものゝ象徴です。顯現です。朽ちるものは朽ちないものに復活され、移されるのです。女性はすべての生命の母です。私は世にも光榮ある女性といふものゝ一人として造られた事を神に感謝すると同時に、數ならぬ身には負ひかれる責任を恐ろしい程に感じます。

而してこの信仰と希望と愛心はよしどんな事が起つて來ても、いつまでもいつまでもわがものとして持つてゐたいと祈つて居ます。

私の女優生活と其周圍

山川浦路

女優の生活には見方に因て、そこに誰しも辿つて行かねばならぬ二つの途が有る樣に思ひます。一つは藝術に沒頭した結果所謂る「中性」の人となり女の任務をも忘れ樣とする傾向と、一方女としての實生活を出來得る限り損ぜられずに藝術に携はつて行かうとする傾向とであります。「中性」たれと云ふ叫び即ち普通の女の樣に男や家庭に捕へられるなと云ふ叫びは女優を理想的に仕上げ樣とする監督者や世間の要求でありまして其要求通りに出來上つたら藝術家として是程結構な事はございません、然し女優は一面女でムいますから目下の社界の約束上弱い女としての生活はどうしてもさけられるものではムいません、其處に藝術と實生活との痛ましい矛盾と爭鬪とが絶えず附纏つて、女優生活を蝕んで行かうとするのでございます。松井須磨子さんも此岐路に立つて惱まれた事と思ひます。さうして此二つは果して永久の不調和でせうか何うでせう。私は玆に自分を土臺にして少し此問題を考へて見度いと思ひます。

私の女優に成りました動機は、私の主人が早稻田大學在學中から演劇を以て畢世の事業とし度いと言ふ考を持つて居りましたから、自然と其感化を受けて私も藝術に憧れる樣になり終には夫の事業を助けて夫に同化する事が私の義務であると考へました。どうか徹底して夫の犠牲になりたい。と斯う私は考へました。要するに主人の爲めに藝術に携はることになつたのが私の動機でございます。即ち私にあつては主人と云ふ實生活が主でムいまして藝術は從でムいます。ですから今の所謂新らしい御婦人達からは思想の陳い話にならない權威のない女だと嗤はれもしませうがお嗤ひ下さる向からは甘んじて其お嗤ひを頂戴致しませう。然し私とても新らしい婦人界の思潮と沒交渉に生きてゐたくはございません。出來得る限り傾聽し對比した上で、女としての使命をより深く考へて見度く存じます、即自覺的の立場から、私は斯ういふ風に生きて行くのが正當な婦人の道だと信じて居るのでございます。

斯う云ふ樣に家庭の女であると同時に舞臺の女である私が、其間の矛盾や撞着を何う切拔けて行くか。今のところ私位此問題を痛切に身に引受けてゐるものはありますまい。其意味に於て私は此問題を解決する爲めの試金石とも成つて居ります、而して私は今、此兩樣の生活を遣つて居てさまでの困難を感じないといふ事を斷言したいと存じます。結婚をした者が女優として舞臺に立つて行くには色々の點から見て支障を伴ふやうに思はれて居ますが、私共にあつてはお互が藝術を自分の生命として、誠實に、一生懸命にそれに向つて居りまする以上、幸な事には大した支障もなく、そしてお互に其人格を深く信じ合つて居りまする以上、

女優生活を離めるか夫婦關係を絕つかと言ふ樣な忌はしい岐路に出會す事も御座いません。然し若しお互が信じ合つて居ないとすれば、いかにも故障の多い出來難い事業である事は事實でせう。今のところ貧しい生活を致して居りますが、此調子で眞面目にさへ遣つて行けばいづれは充實した生活の出來る時が有る樣に信じて居ります。

今申しました樣な次第で、私はいよ〳〵女優生活に入らうと思ひまして、文藝協會に入學する事になりましたが何と言つても集つてお出の方が皆吾々の尊敬する先生達ですし、一體の空氣が嚴肅でございましたから、吾々も熱心に其道を勵むことが出來ました。が學者や先生方の集合だけに、何とも言へぬ重苦しい空氣が漂つてゐて、時には息の詰る樣な苦しい思ひのしたことも御座います。主人にしろ私にしろ協會にあつては別々の俳優で御座いますから吾々の夫婦關係を强ひて認めて貰ふ譯にも參りません、むしろ夫等を犧牲にして迄も純粹に藝術の爲めに働かせようとする要求や誘導に遣つて胸を苦しめたこともしば〳〵ムりますが其れは單に吾々夫婦のみでなく、其當時の總ての夫婦者がさうであつた樣に見受けました。然し私には如何しても夫と云ふものを考へる事なしに遣つて行く事が出來ません。夫の爲に犧牲の生活に入つた私は夫を本位として何ごとをも考へ度いと存して居ります、こんな舊式な考を持つて居りますからこそ、藝も進まず人氣も無いのだと散々お嗤ひ下さいまし。又女優の實生活と舞臺上との關係について考へて見ませうならば女優として舞臺の上に働いてゆくのに、何も其人の實生活が新らしい女でなければならぬと云ふ理由はございますまい。彼の人はお俠だからヘッダの樣な役を遣らせたらさぞ嵌まるだらう等と被仰る方もありまして、御自分でも左樣思ふ御婦人が有る樣ですが、それは甚しい誤りで、實生活は實生活で永久に芝居ではありません、芝居は技藝で模する所に生命があるのだと存じます、背景にしたところが、山を表すに繪具で以て描いたり等せずに本當の岩を舞臺に持出したら眞に迫るだらう等と考へることと其愚や同一であらうと思ひます。要するに自分の扮する役を理解する力と、之に同化し演出する力とさへあれば、如何なる難役でも演じ能ると云ふことはありますまい。地で行くといふとは樂なことでもありますが、餘りはめたことでもございますまい、個性をクリエートする所に藝術の眞價があるのではございますまいか。殊に演劇の樣な綜合藝術におきましては、各自てんでんに自分の意志のまゝに動いては到底一つの芝居をまとめる事は出來ません。要するに吾々は一つの劇を作上げる爲めに唯理解力の有る人形、正當な批判を有つた從順な人形として働いて居れば宜しいのだと存じます。

ですから私共の協會の女優に對する註文は、第一性格、第二境遇、第三頭腦、第四容姿、といふ順でございますが容姿は其素質を好むので、素人見の美人を選ぶわけではございません。音曲等の素養は素より有る方が優つては居りますが、それほど重大な條件に數へては居りません。只其外に今申した長者の心に從つて其命を遵奉するといふ要求が大切なのでございます、實際服從といふ事程綜合藝術に從ふ者にとつて大事な條

件は有るまいと存じます。

私が文藝協會を去つて帝國劇場へ勤める事になりました時に、あゝいふ學者方の集合から純然たる營利會社へ移るのですから、素よりそのつもりでは居りましたが餘りに内部の懸はなれてゐるのに驚きました、中には芝居が始まつても自分の持役の名と臺詞位しか知らずにゐて甚しきは作者の名前なをもわきまへず勿論其作の精神等を傳へる人もなし傳へて貰ひたいとも思はず、せいぜいの所で其芝居が喜劇であるとか或は悲劇だとか言ふ事しか知らない方もあるらしう御座います。ですから人樣が女優の墮落するのをお責めなさつても内部に入つて見て居りますと責めるよりも氣の毒に思ふ位なのでムいます。別に確とした意思や見識があつてやつてゐる人が少い上に、物質上の壓迫は周圍からヒシ〳〵と攻めて參りますし、何うにも斯うにも動きが取れなくなつて知らず〳〵段々と其渦卷の中に卷込まれて了ふのだらうと存じます。

又中には吾々の忌憚する喧噪華美な生活を最初から好んで女優になつた方もあるだらうと存じます、ですから日常の樂屋の暮しが只華な事や無責任な外交的な會話の連續で實に喧噪を極めて居ります、然し中には物事が分つて殊勝に勵んで居る人もムいます、又中には斯う云ふ風な華かな生活の裏に寂寞を極めた遣る瀨ない心に苦しんで居る人もありませう。過渡期の女優中には斯く樣々な心や氣分を持つた人が集つて居るのですから一概に兎角の評を下す事は出來ません。

私共の方でも及ばずながら主人と一所に大勢の女優をお世話致して居りますが、只一所に藝術に携つて行くといふのみでなく、出來ない迄も父母と成り姉兄となつて少しでも其人の人格の向上する樣に心懸けて居ります。かう云ふ樣にして吾々は吾々の信ずる所に向つて進んでさへ行けば他から何と云はれても少しも意に介するに足りないと存じます。

こんな貧しい吾々の團體でも眞面目に信ずる所に向つて進んで行きますから長い間には御同情をも得て劇道に盡し得る事と信じて居ります。

新橋藝妓中の新しい女と舊い女

花月女將

此節新しい女とか何とかいふことが喧しくなつて來たやうですが、一體此新しい女は何處から初まつて來たものでせうね。妾はつい先達もさう言つて笑つたのですが、これは束髮から初まつたものでは御座いますまいか。妾どもに致しましても丸髷に結つてゐる心持と、束髮にしてゐる心持とでは全然心持が違つてまゐりますもの。鳥渡そこまでまゐるにしてからが包物一つ手に提げて行く譯にはまゐりません。從つてお供を連れて行かねばならぬことになり、道の横側をうつ向いて通るといふことになるのですが、これが束髮であつてみると何の雜作も無く、そこからそこへ自分で用が足せるものですから、從つて今日のやうに新しい女が澤山殖えて來たのでは御座い

ますまいか。成程新橋の藝妓の中にも随分新しい女や新しがつた女が御座います。ですけれど新しい女はどんなものでせうね。妾どもは頭腦が舊い故か一向に感心致しません。何と云つても古いものに限るやうで御座いますよ。例へて言へば、椽側に拭き込んで何處から何處までも掃除の行屆いた古い家が良いか、坪三十圓ぐらゐで普請した新しい家が良いかと言へば私どもは古い家を採ります。尤も舊い物は何でも彼でも良いかといふに、さうは限りません。舊い物の中にも良い物もあれば不良い物も御座いますし、新しい物の中にも無論良い處は御座いませうから一概には中上げられませんけれど、何非といふとなしに時代を經來つたものには假作りの安普請の及びも附かない良い處のあるもので御座います。新しい新しいと言つて新しいのを自慢にしてゐる人もあるやうですが、いくら新しい疊だつて叩けば塵埃が出ますから餘り洩け出さない方が宜しう御座いませうよ。

新橋の藝妓衆の中での新しい女といへば、中には女學校を卒業した人もあり、多少とも學問の有る、それこそ吾々のやうな無學や無識な者とは較べ物にならないやうな人も御座いますが、それならばそのやうに學問知識のお有りになる方が何故に藝妓なんかにお成りになつたかと言つて遣り度う御座いますよ。學問知識の有る方なら、何も好んで藝妓風情に成らなくたつて立派に世の中を渡つて行け相なものぢや御座いませんか。それが藝妓に成るといふのは、浮はついた生活をしたいとか、男の口から甘い言葉を掛けられたいとかいふやうな動機のそも／＼が已に墮落ちや御座いますまいかね。勿論境遇の爲めにさう成つた人も有りませうが、其境遇にも因り鬼で、昔の人が藝妓にでも成らねばならぬやうな場合はもうそれこそせつぱ詰つて何うにも斯うにも遣り切れないといふやうな羽目に陷つての上で御座います。今の新しい藝妓などにも境遇でさうなつた人も御座いませうが、それは例へば一寸の物なら一分ぐらゐが境遇の爲めで、あとの九分は自分の望みからなのですから、同じく境遇と言つても一口には論ぜられません。

そんな風ですから、多少學問が有つたにしても中途から此社會に這入つて來た者では到底も第一流となつて賣出すとは出來ません。第二流第三流の處が多う御座います。それもその筈で、小さい時分から僅かな給金で抱へられて年期奉公を勤めて來て、それこそ姐さん達の御機嫌から格子戸の拭き掃除までさせられて、三味線持つては打たれたり突つ衝かれたり、寒稽古だといつては寒さに顫へながら叱られて、やつと通して來たのですもの、其苦勞と言つたら並大抵ではありません。今新橋での第一流の姐さんに數へられてる人達はみんなさうした苦勞を積んで來たので、どうせ幼い時からお酌に出てゐたのですから學問といつては有らう筈が御座いませんけれど、永年此社會に育つてゐて、どんな豪い方にも交際つてゐるだけに經驗と申しますか生きた學問と申しますか、どんな方の前へ出ても、紳士なら紳士、商人なら商人で、お客様相應にお對手に成つてゆく手際は到底も若い妓の及びもつかぬ處で御座います。總て何に依らず第一流として立てられるには矢張り第一流だけの資格を持

つてゐます。第一流の資格といふと先づ顏です。顏なんか何うでもいゝと言ふ人もありますがそれは嘘です、顏容が相當に見好くなければなりませんし、それに藝です。藝も出來顏も相當に美くつてゐて何故彼の妓は賣出さないだらうと思つて居ると、氣が利かないとか恰好でないとかいふ缺點のあるのが御座います。何にでもさうですが頭腦が善くないと困ります。顏と藝と頭腦と此三拍子が揃つて始めて一流に成れるのですからそんなに澤山一流が出ろ譯は無論御座いません。

その代り今新橋で第一流の姐さん達に成ると私どもは始終感服してをります。あすこまで來るには一通りや二通りの苦勞ではないと思ひまして、決して藝妓だなどと思つて輕卒な取扱ひは致しません。立派な藝術家です。さう思ふものですから自然尊敬するやうになるですよ。お客樣の中には「何だお茶屋の女將が藝妓を捉へて姐さんといふ奴があるか」などと被仰る方も御座いますし。「萬果姐さんなぞ言はずに呼捨てにして下さい」と言ふ藝妓衆も有りますから、「はい／＼さう言ひますよ」と言つてゐても、心で尊敬してゐるものですから、つい口が辷つて「何々姐さん」と言つて了つて「また姐さんだつて」と言つて笑はれることが御座いますが、私にはどうしても「何々さん」と言つて退けることが出來ないので御座います。一寸顏が踏めるからと言つて、中途から飛び込んで來た藝も何も出來ない藝妓衆と同じやうに取扱ふのは氣の毒ですよ。第一自分が藝妓に成つた以上は四十に成らうと五十に成らうと一生藝妓として立つて行くといふ心懸が已に感心ではありませんか。大抵の者ならチヨイトいゝ口でもあつたら直ぐと話に乘つて了まふ處ですが、側目を振らずに遣つて行くのですもの。そこへ行けば今の新しい藝妓などが到底も足元へも寄れたものでは御座いません。妾は何處までも舊い女黨なのですからどうぞその積りで……。

新眞婦人會の內面觀察

鐵拳禪

（一）新しい女の分野

婦人界縱斷の好機！　斯う云ふ考へは、ふと物好きな人の胸中に浮んだ。大正維新の政界が二大政黨の對立を夢みて騷いでゐる際に、婦人界を縱斷して其一を保たうと云ふ策士的の考へは、時に取つての妙案たるを失はなかつた。其の物好きな人は誰あらう、豫言者宮崎虎之助てあつた。

又一面には、宮崎をして茲に至らしめた動機があつた。夫れは云ふ迄もなく、青鞜社主催の演說會て岩野泡鳴に喰つて掛つて、目的を達し得なかつた一件てある。宮崎が衷心から憤慨しての所業てあつたか、賣名のための芝居てあつたか、一時疑問とされたが、彼れは屹度青鞜社に對抗するやうな會を組織するに違ひないと、消息通は云つてゐた。其後一個月も經たない間に、果して新眞婦人會が生れた。

發起人は宮崎光子を筆頭とし、木村駒子、西川文子、伊藤朝子と云ふ顏觸て、婦人界に餘り名の知られてない人々てあつた。青鞜社に對して一種の對照を感じたのは、彼の社の發起人は獨身者のみてあつたが、是れは何れも亭主持と云ふことてあつた。即ち光子は豫言者の動物神、駒子は觀自在宗祖の細君、文子は社會主義者の妻、朝子は無我愛の女房て、亭主の尻押如何に由つては、社會に一波瀾を起しさうにも思はれた。朝子だけは、世の誤解を恐れたものか、到頭尻込みして發起人から脫退したが、三人は非常な意氣組て名乘をあげた。

其の背後にあつて、始終聲を掛けたのは、勿論豫言者宮崎てあつた。彼れは一旦斯うと思へば、熱狂する

ほど熱心にやる質て、新眞婦人會趣意書も自分で書けば、諸方面の運動も自分てやつた。噂の提灯持をしたと云へば語弊はあるが、彼れは婦人關係の通信社にも屢〻足を運び、チラシなども配つて歩いた。他の二人も女房を吹聽するに於て人後に落ちない方だが、宮崎ほどの興味と熱心とを持つて居なかつた。要するに、新眞婦人會は、宮崎の熱心から産れたと云つて可いのだ。

亭主の後援によつて出來た婦人會！　これが問題の新眞婦人會だ。一は藝術的氣分に活き、一は宗教的色彩を帯びてゐるのは、注意すべき特質である。けれども、婦人界を縱斷して、藝術派と宗教派の二大分野を劃すと見るのは、ちと早計であらう。

（二）　新眞生活の主唱者

新眞婦人會が、青鞜社に對抗して起つたことは、其の趣意書でもわかる。新しい女の青鞜社は反家庭主義だとか、虚無思想だとか、放縱だとか、肉の開放を叫んでゐるとか、種々な方面から種々な非難を受けて、新眞婦人會は同じ新しい女で立つにしても、さうした非難を避けたいと云ふので、『…新しい思想の中に、善いものと惡いものとがあります。私たちは最も善い思想、健全な思想ばかりを採つて行かうと存じます。』と穩健に表白してゐる。文部省邊で云ひさうな句調て、新思想を善惡の差別觀から見て、消極的に穩健に表白してゐる。さうして、だん〳〵豫言者の說敎調になつてゐるが、歸する所『新しい眞の生活を營みたい』と云ふにあるのだ。然らば其の新眞生活とはどんなものかと云ふに、『無限の潜在力を、どこまでも發揮しようと努力』する婦人の生活を指すのである。是れは不思議にも青鞜社の平塚明子が云うた『私の眞の自由解放とは…潜める天才と、偉大なる潜在能力を十二分に發揮させることに外ならぬ』の一節に似通つてゐる。更に『尊い眞な活きた者の力は、知識にも、能力にも、精神にも、信念にも、どれほど深い大きいものでありませうか。まことに無限の潛在力と信じます』と說いてあるのは、平塚の云つたことに下手な註釋を

加へたやうて、甚だ感服しない。唯『天才』の語を用ゐず、『信念』に重きを置いたのが特色とすれば夫れまでだが、實際特に『新眞』と標榜するやうな點を認めない。

どうも此の趣意書は、發起人の心とぴたりと合つてないやうな氣がする。他に書いて貰つた手翰に署名したやうもので、本當の氣分が出て居ないと思ふ。青鞜社のは平塚が起草したのだらうが、彼女をとり卷いてゐる若い女の氣分が能く出てゐる。新眞婦人會のは、新しい女らしいにほひが些ともない。起草者が豫言者宮崎であつたので、其の臭味ばかり出たのでは無いかと思ふ。が、光子だけは亭主の信仰に融和した婦人であるから、之を以て金科玉條と信ずるに相違ない。

此の趣意書を見た眼で、彼等の合著『新しい女の行くべき道』を讀んで見ると、一種異様な感がする。銘銘に勝手な熱を吹いてゐるが、光子のは全然虎之助の筆に成つたらしく、文子のは前半は自分の筆であらうが、後半は光二郎の書いたのでは無いかと思はれる。駒子のは全部自分の書いのだが、亭主の思想で物を云つてゐるやうな氣がする。善解すれば、三人が三人とも、其の亭主と同思想で、殆んど其の差異を發見することが出來ない。

光子の『女性の解決』は、政治、藝術、道德、宗敎の諸方面から論じてゐるが、詮ずる所其の趣意書の通り『心靈上の自覺の上から、女性としての婦人問題を解決しようとする』にある。して、彼女はちよいと政界に筆鋒を向け、『憲政有終の實を擧げるやうに仕様とするには、一に專ら婦人に參政權を與ふるに有り』と突つ込んでゐる處から見ると、さうした運動の必要も認めてゐるやうだ。

文子の所說で注目すべきは、『結婚論』と『婦人の自由』の二篇だ。此の人のは光子の書物から得た知識で堂々と論破してゐるとは違ひ、自分の經驗の上に築いた所說である。外國に行はれる積富後の結婚を排して、『物質上安樂に暮せる樣になり、且虛榮心を滿足させられたからとて何が幸福であらう。何と云つても青

の戀は花やかである。うれしいものである、なつかしいものである、終生忘れられぬものである。それを愛する人の爲めに蓄財するのだからとて、又其の長い年月の間も衷心から戀を離れて居ぬからと云つても、中老大老に成る迄も黃金を貯める爲めにのみ、勢力を費して居てどうして人生の樂しみが得られよう」と宛然思出を語る抒情詩の趣がある。さうして、更に進んで『戀の爲めには、飢ゑても凍えてもかまはぬ程の熱烈と、勇氣とがあつて欲しい。』と、耳朶までも熱してゐる。其の『飢ゑても凍えてもかはぬ』と云ふ所に、此の女の熱烈な性格が見えて面白い。又『婦人の自由』を說いては、『物質的には女子は男子を働かせて征服して居るが、精神的には女子は壓迫せられて居ると云つてもよいと思ふ。婦人の位置を今日の如く低くしたのには婦人自らにも大に責任がある」と憤慨し、『婦人の人格を高め、位置を高め、他人から束縛がましい感じを加へさせる餘地のない樣に改めねばならぬ」と叫んでゐる。光子のが大道演說であるならば、此の人は新しい女の處世訓であらう。

駒子は年齡が一番若いだけ、云ふ事も若々しく、文章にも新し味があるが、思想にまとまりがついてないやうだ。男の手傳つたのと、女自身で書いたのと、是れほど違ふものかと思はれた。駒子は『現代婦人の修極に達するまでの階段として虛榮、煩悶、奔放、自覺を經て、新に修養、奮鬪を超越して、遂に觀自在境に達するのが其の特長であらう。』と、周圍の實例を引いて、自己發展の徑路を語つてゐる。『なぜ本人に肉迫して眞の價値を定めないのでせう』とか、『產後一息の氣持』とか、奇拔な修辭を眞面目に用ゐ、遂に婦人の自覺の一段に進んで、『眞に自覺した女は、女性の本能を覺知して、男子から征服されることを望んで居ります、自分を征服し得る男でなければ、夫とすることは出來ないのであります」と云つてゐる。其の『自分を征服し得る男』の語を聞くと、夫の秀雄が精力が盛んで、勝氣で、肝癪持なことを思はずには居られない。ちやうど二人を竝べて置いて、話を聽くやうな氣分がする。

三人の云つてる事が、其の間にだいぶ距離があるやうだが、三人が三人とも結婚の謳歌者である。放縱な戀愛や、非自然の獨身を認めないやうだ。光子は『夫婦は倫理の基礎である、宇宙自然の面目である。若しも夫婦を無視したならば、人間的生活は同時に消滅するものである』とか、『男性は男性として、女性は女性として、男女兩性一體として、男女一體の上に經濟の獨立を求めるのは、今後の新なる生活上の解決であらう』と云つてゐるし、文子は『自分は飽迄結婚の要件としては、第一愛情の有無、第二趣味、理想の一致を主張せざるを得ぬ。而して此の二要件を標準として、本人に其の配偶者を選擇せしむべきものである』とか、『男女問題は戀愛が中心であるから、私はそんなに理想的の人を冷かに求めるよりも、熱烈なる戀によつて、胸に畫いた理想に聖化され、戀の焰で燒き盡し、鑄型に入れて理想化され、其男子の爲す凡てが善く見える丈に引力ある男子を要求する』と云つてゐるし、駒子は『戀愛によつて錬磨せられた自覺でなければ、女の自覺は虛僞であらうと思ひます。女の原動力となるは戀愛であるからです。舊き敎へでは自然の性を矯めて女の自覺を妨げた爲め、自覺した女は心中或は自殺するより外に解脫の道はなかつたのでありませう。戀愛の圓滿な解決、これが自己を發揮する上に於てなさねばならぬことであります』と云つて居る。光子は『信念』の主張者で、後の二人者は『戀愛』の鼓吹者であるのも面白いが、文子の『人生の樂しみ』に憧れてゐるに、駒子は『神祕家の內的生活』に興味をもつて居るなども、ちよつと變つてゐる。

(三) 赤裸々の三女性

靑鞜社は東京の女が中心になつてゐるが、新眞婦人會の發起人は九州の女である。戀の人駒子は熊本の女、光子は柳川の產、文子も亦熊本に淺からぬ緣のある婦人だ。東京の女は、さつぱりした心意氣で、情もあり淚もあり、妙に藝術の趣味を解してゐる。九州の女は熱烈で戀に燃え易く、『神祕的傾向をもつてゐる。殊にも熊本の女がさうした傾向が甚しく、千里眼とか、動

物神とか、觀自在とか云つた風の婦人が出て來る。東京のが先天的に藝術の女性であるならば、熊本のが心靈の女性であらう。

光子は一體が沈默で、淋しい女であるが、演壇に立てば、手を振り體を動して熱辯を揮ふ。其の態度が餘りに異樣なので笑殺の標的となるが、熱烈火を吐くやうな痛切な所は確かにある。彼女の斯くまでに、辯舌の鍊磨されたのは、豫言者宮崎と共に數年間布敎演說をやつたからである。彼女は十八歲の時分に始めて豫言者の著書を讀んで、若き靈の火が搔き立てられた。宮崎が郷里を去つて名古屋に來た時に、其の戀しさに堪へかねて單身郷里を飛び出し、名古屋まで跡を逐うて來た。そこで中年の靈と少女の靈とは一つに融け合つて、美しく燃えた。夫れから笈摺を負うた豫言者と動物神とは、人が袖引き笑ふのに頓著せず、到る所に道を說いた。食ふや食はずの境遇に遭つても、豫言者を信じて疑はなかつた。彼女はちよつと普通學を修めただけて、誇るべき學歷はもつてゐないが、あれ程になつたのは宮崎の感化だ。

光子の徑路は單純だが、文子の內的生活は多少の曲折を經てゐる。彼女は京都高等女學校の出身で、三十六年に上京した。早稻田に學んでゐた、若い社會主義者の松岡荒村と熱烈な戀をして、主義の爲めに終生を捧げようと誓つた。けれども、荒村は慌しく散る花のやうに、此の世を逝つて了つた。彼女は泣いた。墓場の土の棺の上に咽び落つる時、彼女は身も世もあらぬ思で、倶に埋つて死にたいと泣いた。『夫れ程に松岡を思ふなら、なぜ貴女は松岡の志を繼がうとせられないか。玆に死んだ積りで、主義の上に活きて働いたら何うであらう。夫れが松岡に報ゆる所以てはあるまいか』と友人等が說き諭したので、死を思ひ止まつた。其の人が、半箇年の後には西川と一緒になつて居た。彼女は熱烈な、自由な戀の前には、『社會の感情や壓迫を恐れて躊躇する』女ではなかつた。

駒子の半生は、最も波瀾に富んでゐる。幼時ちんこ芝居の列に加はつて、此地から彼地へと渡つて步いた。

さうした漂泊者にこき使はれた、奴隷の境遇から救はれて、ポンプ屋の養女となり、始めて小學程度の敎育を受ける事が出來た。後、漢學塾やら敎會やらの敎育を受け、熊本女學校の生徒となつた。其の時は、もう淡い戀を知つてゐた。彼女をとりまいてゐる人々からは、結婚を强制されて、逃げ隱れた事も一二度はあつた。して居るうちに、人の噂を聞いて京都の同志社にゐる秀雄を胸に描く女となつた。二十の歲に上京して青山學院に入つたが、其の時は秀雄は米國にゐた。男の歸朝すると間もなく熱い戀仲となり、周圍の若い群を押しのけて戀の勝利を得た。斯う云ふ數奇な運命に掀飜されて來た駒子は、戀を得てから更に藝術に向はうとして第一回の帝劇女優募集に應じた。當選はしたが、お腹の都合で見合はせる事になつた。夫れより專ら神秘硏究の方面に進み、腕に木綿を突き刺しては、感に入つてるから痛くも何でも無い杯と云つて、世間を騒がしてゐた。

駒子は人樣とは、一風も二風も變つた女だ。快活な氣性だが、勝氣で、何人にも屈伏しないと云つた所がある。熱烈な戀をする詩的一面は、多少文子に似てゐるが、神經の動き方が違つてゐる。文子は內心は燃えて居ても、表面は冷かに靜かである。常識的に、仕事をきちん〳〵とやつて行く。駒子はどんな場合でも、性格を僞る事が出來ない、燃えれば燃えたなりに焔を揚げる。敏感な神經と、戀愛ばかりで出來た女のやうに思はれないでもない。光子は、駒子のやうな憧憬がないが、一種の信念をもつてゐる。豫言者を離れても、異彩を放ち得るか何うかは疑問だ。

（四） 會員の作品其他

新眞婦人會の事業としては、既に二回の婦人雄辯會を開き、月刊雜誌『新眞婦人』を三號まで出してゐる。雄辯會は靑鞜社にも劣らぬ人氣を集中しようとの自負を以て、婦人だけで開いた。男の力は借りないと云つても、黑幕には宮崎がゐて、開會する迄には、其の方針やら準備やらに參畫したのは云ふ迄もない。唯婦人だけでやるとの意味は、靑鞜社のやうに、友人や亭主に演說を手傳つて貰はないとのことであつた。其の第一回は三月十六日に神田の和强樂堂で、傍聽料をとつて開いた。男七分女三分の傍聽者で、身動きも取れな

い程であつたと云ふから、非常に盛會であつたに違ひない。發起の黑幕に物好きな男が居れば、傍聽者にも物好きな男がゐる。聽きに行つたと云はずに、見て來たと云ふ手合が多かつた。斯う云ふ浮氣な、輕薄な傍聽者の前で、新しい試みをやるのだから、流石の新眞婦人も第二回目の會に泣かされたのも、無理のない話だ。雄辯會と銘を打つただけ、青鞜の女性よりは演說がうまかつた。文子の皮肉、光子の熱狂、駒子の憧憬、其の辯舌にも、態度にも、其の性格を現はしてゐた。外に中島俊子、古山慶子と云ふ無名の雄辯婦人もゐた。

『新眞婦人』は、『青鞜』に比べると、至つて貧弱なものだ。雄辯の方ではひけを取らないが、月刊雜誌は段違ひである。外形の薄ぺらなやうに、內容も亦潤澤がない。光彩がない。論說は流石に大人びて居るが、創作は幼稚なもので、まだ修業期中のものだ。每號小說を書いてゐる鳥林あぐりは、日向欣子の匿名だが、奥樣藝としては可なりの出來だ。西の國の作物のにほひも嗅いで居るから、勉强一つでものになるかも知れぬ。月郊の『魔の曲』に醉うて、著者に會ひたい／＼など云つて居るのは罪がないが、あゝした作物の愛讀者では、現代とちと掛け離れて居るやうに思はれる。小口みち子の歌は、竹柏園臭味の作が多く、膚淺で、詩の要素に乏しい。六月號所載のでは『恥かしき事の餘りに多ければ囚屋(ひとや)つくらむ蟲のやうに』『人の母生みし子なれど己れをばかぐや姬ともおもひてあれば』の二首は、比較的よい方だが洗鍊が足りない。駒子の文章も洗鍊が足りないが、何處かに魔力があり、新し味がある。自身は小說のヒロインに適つて居るが、外郭だけを見てゐる樣な質だから、創作家には向くまい。亭主の觀自在に同化して、『永劫に若い女性』の誇をもつてゐるが幸福であらう。

文子は何と云つても事務家である。雜誌の編輯もやり、廣告もとつて步く。此頃は少し白粉氣が出て、若やかな笑もするが、常識的に活動してゐる。彼女が會計、編輯の全權を握つてゐて、他の容喙を容さないので、內部に不平がないでもない。さう發展もしまいが、青鞜社のやうに龜裂を來すやうな事もなからう。創造は光子で、守成は文子——さうして、全權は文子の手中に歸したなどは妙な現象だ。此の邊が、『青鞜』の最後まで平塚明子で立つて行くのと、大に趣を異にする。

淪落の群に見る「新しい女」

東京朝日新聞記者　松崎天民

昨年、中央公論誌上に「淪落の女」を連載した當時より、これを單行本として出版した現今に至るまで、僕は面識のない婦人から二十餘通の手紙を受けた。こゝに掲ぐるは、淪落の群に落ちて、憂き月日を送つて居るらしい女の手紙數通を其の中から拔いて、それに多少の取捨鹽梅をしたものである。「淪落の女」の中でも、手紙を書き得るだけの文學を有つて居る女には、それ相應の主張もあれば煩悶もあり。讀んで行く間に無限の意味あるを覺える。

上　男の罪を呪ふ其の聲を聞け

あなた樣は、未だほんとの女の心持と云ふものを、御存じてないかも知れません。こんな田舍て酌婦をして居ても、酌婦には酌婦だけの人間を見る眼と云ふものがあります。一圓二圓の小金て何すからと云つて、さう馬鹿にしたものてはありません。

妾は何事も運だと思つて、眼をつぶつてあきらめて居ます。妾は今年二十四て、この家ては第一番の美人に數へられて居ますが、自分ては美人だとも不美人だとも思つては居ません。たゞ、いろ／＼の男を相手にして、お酒をいたゞいては、へゞれけて、デレスケの男を手玉に取つて、笑つたり唄つたりして淋しい田舍の小料理屋を賑はして居るのてす。

前借は六十圓、逃げようと思へば、何てもないのてすけれど、女將（おかみ）が好い人だから辛抱して居ます。

それにおそのちやん〳〵と重寶がられて、村長でも收入役でも、折々巡回して來る郡書記でも、妾を藝妓扱ひにしてくれますから、思つたよりはのんきです。行末は何うなることやら、そんな事など考へる暇がなく、毎日〳〵面白可笑しいお座敷で笑つて過すのが、妾の定つた運とやら云ふのでせう。「淪落の女」と云ふ小說みたいなもの拜見しましたが、妾なども、淪落のりんりきちん、珍無類の女かも知れません。

これでも高等女學校の三年まで、えび茶の袴をはいて、赤いリボンを朝風にヒラヒラヒーラヒラと、愉快な月日を送つた何の何助の三番娘です。父が性の惡い藝妓に關り合つて、家倉を無くしてから、母は發狂して死にますし、父は行方がわからなくなつしまふ。小說にも能くある樣に、家の落ち目に何とやら、妾を嫁と云ふ厭な男も有りましたが、妾は死んでも人の妻にならぬと決心しました。男なんか云ふ者は、女の前で威張り散らしても、女から見れば賴りの無い相談相手にならない自分勝手の動物です。生意氣にそんな考へを起さずに、お嫁に行つてさへ居れば、今頃は可愛い坊やを生んで、幸福なる家庭とやらに微笑んで居られたでせうが、今は最う何事も天なり命なりとあきらめて暮して居ます。

世にありとあらゆる男の中で、妾が最も信じ最も敬ひ最も尊い人としたのは、一人しかない父でした。其の父が藝妓の色香におぼれ初めてから、母は明け暮れ泣きの淚で暮して居ました。未だ十七八の若い妾に何事も知らせまいとて、母は何氣ない風をして居ましたけれど、妾は何も彼も知りました。父がお酒に醉ばらつて、夜遲く十二時、一時頃歸りますと、何時でもきつと判で押した樣に、夫婦喧嘩が初りました。父が母を撲る、蹴る、母が聲を立ぬ樣にして咽び泣く、妾は寢た振りをして蒲團をかぶつて居ま

すけれど、何時も母の貰ひ泣きをして居ました。妾の第一番に好きな男の父、妾の誰よりも信じた父がさう云ふ風て、母が苦勞の淚を每夜の樣に見ましたから、妾はツク〴〵男と云ふものが厭になりました。折角お嫁に參りましても、父の樣な良人のために、母の樣な苦しみをするかと思うと、思つただけでも身ぶるひがしました。男は强いけれど、信じてならぬ者だと云ふ事が、妾の心の底に深く刻まれました。澤山の嫁入口を厭がつて、女の獨立し得られる樣な仕事を求めるため、東京へ出て參りましたのも、全く右の樣な原因があつたからです。

妾の樣な境涯に落ちた女は、能く口癖のやうに、「男には最う懲り〳〵した、一生男なんか信用するものか」とか「男ほど賴りにならぬ者はない、妾は好きな男のために、こんな達磨なんかに墮落したのだから、今度は厭な男を散々いぢめてやる」などゝ申します。十人が十人、百人が百人、皆さうでもありますまいが、停車場へ小一里もあらうと云ふこんな片田舍に、流れ〳〵て小料理屋の酌婦となつた女には、大概同じやうな男の苦い經驗があります。世間のあらゆる女は、生れた時は皆いたいけの赤ン坊て、行末のわからない「運」の玉を授けられて、這へば立て、立てば步めて女に成長したのですが、その「運」の玉には、赤い色もあれば黑い色もある、綠、紫、黃、と色どりが違つて居ました。妾のやうな身分に落ちた女は、何んな色の「運の玉」を授けられたのか、思へば神樣も恨めしい、父母も怨めしい、この世界が皆うらめしい。

家庭の不幸とか、他人の誘惑とか、天性の淫奔とか云つてしまへば、何てもない事てすけれど、妾達

が斯うして墮落した罪の大半は、世間の男と云ふ者が惡いからです。あなた樣は妾達の同情者で、大分御研究にもなつて居る樣子ですが、何うか此上とも眞面目に「淪落の女」と云ふものを見て下さい。妾は最うお酒で其の日〳〵を過す莫連者ですけれど、これでも血もあれば涙もあります。お客樣の絶えた午後三時頃には、二階の欄干にもたれて、あの山あの川、遠くへ行く汽車の音を聞いて、咽び泣く事も度々あります。

妾の居る家には、お里、お花、お絹、それにこのお園と四人居ます。十七八から二十八九まで、丸髷、銀杏返し、高髷、ハイカラと髮形が違ふやうに、四人の上には、四人別々の悲しい痛ましい小說があります。それを妾は、あなた樣に讀んでいたゞきたいのです。

先づ妾の身の上から申上げませう。

妾の父は好人物でしたけれど、酒と女とが其の生涯にたゝりました。母はもとより溫順な內氣な人でしたが、派手好きな陽氣な父と、地味な內氣な母とは、何うしても氣が合ひません。妾が生れて成長して小學校へ通ひ初めた頃、家は商賣に失敗して、だん〳〵左り前になりました。父が大酒を飮んだり、變な家へ出入して、怪しい女に關り合ふ樣になつたのは、其頃からだと後で聞きました。

それでも母がしつかり者でしたから、不如意勝にも一家は食ふに困るやうな事なく、妾は何事も知ら

ずに××町にある高等女學校に三年まで通學しました。この三年の春秋は、妾の一生涯に又と無い幸福な月日とも云ふのでせう、妾は學問の慾に眼がくらんで、行末の夢ばかり見て暮して居ました。家はいよいよ窮迫して、親族一同からは見放される、生れ故郷の土地には信用がなくなる、果は一升のお米さへ自由ならぬ其の日暮しになつた時、妾は初めて浮世の風と云ふものを知りました。母が泣いていろ／＼と話をしてくれました時、妾は娘心にも決心して「お嫁なんかには參りません、妾は一人で何とか立行くやうに、これから苦勞します」と泣きながら答へました。

父のために苦勞した母の涙、妾はそれでも父を憎む心は少しも起らず、たゞ母が氣の毒で／＼、妾の身で役に立つ事ならば、死んでも宜いとまで決心しました。夢さら／＼父を憎い怨めしいとは思はず、何事も運だとはあきらめましても、それでも父を通して見た男と云ふものが、厭で憎くて恐ろしくて、何うして遣らうかと思ひ惑いました。世間の女は自分の好きな男の薄情から、初めて男を見る眼を開きますが、妾は一人しかない父に依つて、男を見る心を養ひました。世の常の女よりは不幸で、その經驗が地味で眞面目であつただけに、妾の男を見る眼には、動きの取れない深さがあります。落魄れましても昔が昔ですから、妾のためにも家のためにも、運の向く樣な嫁入口があつたのを捨て、一人で東京へ出ましたのも、妾には無理のない事だと思ひます。東京へ出て、然るべき奉公口を求めて、妾は妾自身の好い「運の玉」を握らうと思つたのが、今から思へば向ふ見ずの生意氣な、娘に不似合な大冒險でした。

東京へ出て、惡い桂庵に欺されて、小料理屋の酌婦に住み込んでから、一月か二月經たぬ間に、父の

行方不明と母の狂死とを一度に知りました。二人の姉も一人は死んで、殘る一人は九州の方へ嫁入つて居る悲しさ、其の時ばかりは身も世もなく泣き續けました。土饅頭になつた母の墓前にぬかづいて、妾は聲を上げて泣きましたが、いくら泣いても泣いても妾の心は慰められません。「お母さん、あなたに苦勞をかけたお父さんの仇討は、妾が代つて世間の男にいたします」たゞそれだけを云つて、妾は逃げる樣に村を出て再び東京へ參りました時、妾の居る家の者は、妾が三四日の間に、見違へるほど陽氣になつたと云つて驚きました。深く決心して、東京へ出たのですもの、其の時の妾は最う昨日の妾ではない。何んな厭な男にも、厭な顔一つ見せず、自分から持掛ける樣にして、浮いた浮いたの月日を送りました。其の三年の間を日記に書けば、小說家でも講談師でもびツくりする樣な面白い長い物語になります。

東京で二十二の春を迎へた夏、妾は房州の宿屋兼料理屋に雇はれて、流れ渡りの身の上になりました。避暑客の浴衣に秋風の立ち初めた頃、群馬縣へ渡つて、前橋で赤城颪の冬を知りましたが、それからは最う銅山の足尾にも行く、織物の足利にも行く、お芋の川越にも行く、海の小田原にも行くと云ふ風で、流れ〲て二十四歲の今、この町に落ち着きました。二十四と云へば、妾等の仲間では誂へ向の嫁ぎ盛りだと云つて、女將にも朋輩にもお客にも、又と無い者のやうに重寶がられますが、妾自身ではぼつ〲心細くなり初めました。斯うして三十になり四十になる間には、惡い病毒を受けて髮の毛が脫け、人にも世にも全く捨てられてしまふのかと思ふと、全く心細くなつて泣きたくなる事もあります。

世間の人は妾達を見ると、淫奔で好き好んでこんな事をして居る者のやうに申しますが、妾達が斯ん

な身の上になるのは、いろ／＼な事情があるためて、さう一概に申して貰ひますまい。妾の樣な女でも父が亂行をせず、母の苦勞が身に沁まなかつたなら、こんな身の上にも落ちず、今頃は子供二人ぐらゐの母になつて、一ツ身二ツ身の浴衣でも縫つて居ませうものを、思へば惡い「運の玉」を握つたものてはありませんか。

それても妾には一つの慰藉があります。誰の厄介にもならず、一人て稼いて一人て食つて、氣隨氣儘の朝湯日化粧、「淪落の女」と賤しめられましても、一月に三四十圓から五六十圓を稼いて、郡役所の書記さんなどよりは、エライ暮しをして居ます。ハイカラお園は判任官相當の稼をして居るのてす。

最う行末の事などは考へない方が宜しい。お酒を飲んて酔つて唄つて、死んだら誰かゞ墓場へ持つて行つて、燒いて灰にしてくれませう。

可哀相なのは、高髷のお里と云ふ女てす。

この家ては一番齢若の十九歳て、小學校を卒業しただけすが、なか／＼の文學者てす。生れは濱松在だと云ひますが、三歳の秋から繼母の手に育てられたと云ふのに、少しもひがみ根性など持たず、貧しからぬ家に成長したらしい娘々しい所があります。

小說が好き、新體詩が好き、女學世界などにも投書して、二三度及第したことがある程の女てすから、

考へはなか〳〵なせて居ます。何でも東京へ行きさへすれば、下田歌子女史にもなれるし、森律子さんにもなれるし、長谷川時雨さんにもなれると思つて、東京の空ばかり見て暮して居たさうです。お父さんと云ふのは郡役所の雇か何かを勤め、お母さんは家で荒物屋を營んで居たさうですが、繼母ですから憂い事も澤山あつたでせう。一昨年の秋「東京へ行つて、身を立てます」との置手紙をして、一人で上京したさうでした。

お金は十五六圓持つて居たさうですが、新橋の宿屋に泊つて居る間に、七八圓は五六日の間に無くなつて了つたさうです。別に美人と云ふ程ではありませんが、色白の丸顏で愛嬌がありますから、宿の番頭は親切らしく、奉公するなら料理屋の女中に限ると勸めたさうです。好い衣服を着て紅白粉で暮せて、それで月に貰ひが三四十圓ばかりはあつて、何の位好いか知れないと云はれたさうですが、お里は笑つて好い加減の挨拶をしたと云ひます。そして新聞の夕刊に出て居る廣告に氣を付けて、身の落着け所を考へて居る内、「看護婦見習生募集」と云ふ文字に眼を着けました。若い女の一人で歩く道の中に、「看護婦」は淸く氣高く美しいもの丶樣に、お里の心を波立せました。保證人は宿屋の女將に賴んで、兎に角淺草の×××病院に住込んだのが、東京へ來てから二十日目の恐しく風の吹く晩だつたさうです。

見習看護婦の一年間は、實に厭で苦しかつたさうですが、それでもお里は例の白い服を着て、廊下の拭掃除から便所の掃除などをしたさうです。六ケ月も經てば治療室附か、病室附に割付けられて、勤務が、段々看護婦らしくなるさうですが、若い女に對する誘惑の手は、若い醫師、藥局生、事務員などの

仲間にもあれば、病人の中にもあります。女も最う妙齡(としごろ)になつて、男と云ふものを謎ても解くやうな態度て眺める時てすから、餘程しづかりして居ないと、變な事になつてしまひます。小學校の頃から小說が好きて、人情に就ては人並優れた好奇心を持つて居たお里てすもの、誘惑に掛つては堪りません。何ても胃病か何かて內科の二等室に入院して居た學生と、初めて色戀の沙汰に落ちたと云ひます。妾ても經驗のある事てすが、初めて戀を知つた女の心ほど、弱くてもろくて痛々しいものはありません。

學生は退院する、評判は立つ、病院は解雇される、お里の身の上にも雨風が起りました。早稻田鶴卷町に其の學生の下宿屋を訪ねて、一時は一所に暮したさうてすが、學生の身分て女一人を養ふことは出來ません。それに男の心は秋の空より定めない本文通り、他に情婦が出來て、お里を出て行けがしに待遇ふやうになりました。彼是して居る內に、その下宿に出入する支那留學生の妾と懇意になつて、お里は男の誰彼を選ばず、弄ばれて食はねばならぬ境涯に陷りました。男と云ふものを知らぬ昔ならば、未だ明るい世間へ出られたてせうが、一度、戀の甘い酒を味はつたら、世に女ほど弱いもろいものはありません。二十歲前のお里の若い心も、初戀の學生に捨られた怨恨に燃えて、男を見る態度と云ふものが、段々自暴(やけ)氣味になりました。月日て云へば一年足らずの短い間てすけれど、お里は東京市內の暗い家を此處から其處へと流れ渡つた末、とう／＼今の家へ落着いたのてす。普通の女が二十五六歲までの間に經驗する事を、お里は僅一年の間に知り盡したさうてすが、それても高髷に結つた姿には、浮世の苦勞を知らぬ若い娘の生々(うい／＼)しさが見えます。

妾は一人しかない父に依つて、男と云ふ者に愛憎を盡かしましたが、お里は初戀の學生に依つて男の薄情を知つたのてす。今ては最う派手な衣服を着て、三日目位には髮を結つて、紅白粉を付けて座敷へ出るのが、何よりも面白いさうて、四人の中ても、お里が一番はしやいて居ます。何ても女優になるのが目的ださうて、松井須磨子、初瀨浪子、河村菊枝、森律子など云ふ連中へ、大氣焰を書いて送つたさうてすが、須磨子さんと菊枝さんから返事が來たと云つて、皆に見せびらかして居ました。お嫁なんか行くのは罪だから、一生涯花やかに暮したい。それには女優が一番好いと云ふかと思ふと、三十になつたら身の上を小說に書いて、世間をアッと驚かしたいなどゝ云つて居ます「淪落の女」の大變な愛讀者て、一度ても好いから天民さんのお顏が見たいと、毎日の樣に申して居ます。

近頃世間て八釜しい新しい女とは、何ても恐しく學問のあるお方ばかりださうてすが、お里さんも妾等の仲間ては、新しい女かも知れません。何を云つても、齡が齡てすから、未だほんとの苦勞の味が判らず、六かしい漢語を使つて、村の學者達を驚かしては、一人て嬉しがつて笑つてばかり居ります。こんな女の行末も、あなたの人生何とやらの材料になることだと思ひます。

銀杏返しのお花は、仲間中ての豪傑てす。

齡は二十六て、背のスラリとした色の白い、面長の淋しい恰好てすが、それてなか〳〵の古狐て、酸

いも甘いも知り盡した中年増てす。亭主を四人持つて、子供を三人生んだと云ひますが、生え際もさう薄くはなつて居らず、藝妓にしたら意氣向の女の方てせう。

　多くの男に其の肌を荒された女や、子供を三人も生んだ女は、顔の色が氣味惡く蒼白かつたり、齡よりは老けて見えるものてすが、お花ちやんには物凄いばかりの色氣と云ふものがあります。だとお酒をいたゞくと無暗に氣が荒くなつて、お客樣の惡口を云つて氣を惡くさせるかと思ふと、別れた亭主の事を云ひ出したり、里子に遣つた子供の事を話し出して、泣いて暴れる事があるので困ります。花ちやんの身に爲つて見れば、無理も無い事てせうが、妾達は折々介抱させられるので、日頃から豪傑〳〵と敬遠して居ます。

　四人の中ての大酒家て、醉ふと唄ても絃てもます〳〵冴えて來て、聞いて居ても惚れ惚れするやうになります。「お前の唄ふ歌は、何時も昔ののろ氣ばかりだ」と能くお客が申しますが、全く花ちやんは醉つて來ると、法界節てもラッパ節ても、磯節ても浪花節くづしても、哀れッぽい歌ばかりを唄ひます。別れた男を慕ふ遣る瀬ない心、子供戀しさの切ない思を、何氣ない振して唄ひますが、人前ては醉つて居ても、心の中ては泣いて居るのてせう。大酒飲みの男を亭主に持つて、酒ては散々苦勞して來たから、酒の香を嗅ぐのも厭だと云つて居た人が、今ては五合飲んても一升飲んても平氣なもので、世の中に酒ほど美味いものは無いと笑ふ樣になりました。花ちやんは酒に醉つて居ると、古狐の豪傑てすが、素面て居る時には何時も悄氣て、始終何か考へて居る樣な、一種風變りの女です。

微醉(ほろゑひ)になつた時、花ちやんは相手の誰彼に構はず、能く自分の身の上話をします。四人持つた亭主の中で、一番目はお人好しの野呂間、二番目は男振が好く、三番目は稼ぎ人て、四人目は大酒飲みてあつたさうですが、斯うして別れて了つた今、思ひ起すのは男振や稼ぎ者でなく、一番最初の野呂間だと云ひました。妾の様な氣性の女は、四人目の大酒飲みが好きな筈だのに、何うした譯かお人好しの野呂間が折々の夢枕に立つて、忘れ様と思つても忘れられないと云つては、さめ〴〵と泣く様な事もあります、前の亭主よりも好い男、先の男よりも好い亭主を持てば持つほど、思ひ起されるのは最初の男だ。少し位の氣に食はぬ事があつても、一番初の男は大切にするものだよと思ひ込て話す事もあります。今では花ちやんのお說教が又初つたと云つて、皆て笑つて居ますけれど、考へて見れば、花ちやんも氣の毒な憫れな女です。

それに子供三人の事を話し初めると、妾達は何と云つて宜いのか、全く手古摺つてしまひます。野呂間の子が兄と妹で二人、稼ぎ人の子が弟て一人、八歲と六歲と四歲だと云ひますから、皆お母さんの膝が戀しいいたいけ盛り、花ちやんが思ひ出しては泣くのも、全く無理が無いと思ひます。亭主の事を話す時は、未だ左様でもありませんが、子供の身の上を話し初めますと、何時も淚をハラ〳〵こぼしながら「なぜ子供なんか生んだんてせう」と云つて泣きます。そして夕餐の竈の煙が立ちのぼる頃、近所の子供の泣き聲が聞えますと「あー坊やが泣いて居る」と云つて、お化粧最中も構はず飛出して、裏の竹藪の方へ行く事も度々あります。妾達の仲間からは豪傑と云はれ、お客の前では大酒を飲んで、好い聲で奈

良丸くづしを唄ふ花ちやんにも、こんな眞面目な心持があるのかと思ふと、貰ひ泣きするほどに哀れを覺えます。三人の中で何の子が一番可愛いのと尋ねますと、男の子は何とかして大きくならうが、女の子の六歳になるのが、可愛くて可愛くて仕様がないと云つては、「這へば立て、立てば歩めの親心……サノサ」と低聲で唄つて、ソッと襦袢の片袖で眼を拭く様な事も度々あります。

手紙一本ろくに書けない女ですけれど、ほんとの苦勞をして來たゞけに、何となくしつかりして居ます。大酒を飲んで豪傑になつた時には、時折憎いと思ふほど困ることがありますけれど、しんみりとして子供の事を話し出されますと、まるで人間が變つた様になります。こんな片田舍の曖昧な小料理屋で、女中か酌婦か娼妓か藝妓か、素性のわからない月日を送つて居る女にも、別れた子供を慕ふ人間の眞心はあります。毎日毎夜、お客の前で僞して居る事は暗くても、別れた亭主を思ふ妻の心、別れた子供を慕ふ母の心には、人間の明るい光が大びらにかゞやいて居ます。

「別れた子ゆゑに、暗路を辿る、母の心の遣る瀨なや」とは文學者のお里が作つた都々逸です。花ちやんはそれを毎夜のやうに唄つては、醉ぱらツて泣いて、相變らず妾達を困らせて居ります。

花ちやんはお酒が無いと死ぬより他に行く道の無い氣の毒な女です。

丸髷のお絹は、二十九ですけれど、平凡な女です。

丸々と肥つた男の好きさうな、脂肪の多い大きな身體をして居るだけて、お絹さんには何處と云つて一つも取柄がありません。新聞も讀めないし、字も書けないし、たゞ其の肥つた身體を、いろ〳〵な男の前に投げ出すだけが、お絹さんの毎日毎晩の仕事です。

誰に何と云はれても、何をされても、ニヤニヤと笑つてばかし居て、人が面白いと云へば可笑しがる、人が悲しいと云へば泣き顔になる、世の中には實に重寶な人間もあつたものです。亭主を持つて、世帶の苦勞をした事もあれば、然るべき東京の屋敷へ奉公して居たこともあるさうですが、昔の事なんかケロリと忘れてしまつて、此の家の酌婦に生れて來た儘の女の樣に見えます。花ちやんが「お絹さんは苦勞が無くて好いね」と云ひますと「クヨ〳〵思つたつて、駄目なこッたよ」と答へて、お絹さんはニヤニヤと笑ふのが常です。

お絹さんの樣な女は、ギヤッと生れた時から、悟と云ふものを開いて居たのでせう。苦勞をしても、苦勞の味と云ふものを知らずに、ケロリとして此の月日が送れるのは、何のくらゐ幸福であるか知れません。過ぎ來し方を思ふでもなく、行末の事を考へるでもなく、たゞ其の日〳〵と夢現の間に過しながら、ニヤニヤ笑つて居られるのは、ほんとに羨ましいと思ひます。お花さんなんかは、何時も苦しんだり泣いたりしながら、僅に酒の醉に依つて、笑顏をして居るのですが、其處になるとお絹さんは悟つたものです。女と云ふものは何うしたつて、男に闘つては駄目なもんだ、自分たちが斯うして居るのも、運だから仕方が無いと高を括つて了つて、平氣で居られるから暢氣なものです。女も三十に手が届いて

は、最う衰へ行く一方ですのに、お絹さんは能くあ平氣の平左で居られたものです。

淪落の何とやらになりましても、自分の境涯が幸福か不幸かも知らず、世間並の女の様に心得て、何の考へもなく暮して居る所に、お絹さんの面白い所があるのです。過る日の雨の晩、珍しくお客の無い徒然に、皆て身の上話をしたり、世間話をしたりして、賑かに陽氣に笑つた時、お里さんは大變な議論を初めて、新しい女の説明を致しました。その時もお花さんは、「妾だつて其の新しい女とやらの中に入れるよ」と云つて、皆を笑はせましたが、お絹さんは大變な驚き方で、馬鹿に感心して了ひました。そして「難かしい横文字などが讀めるから、女だてら餘計な苦勞をしなくてはならないのさ。女に字なんか少しも入用はない、たゞ身體さへ丈夫であつたら、男に振られる様な事はないよ」と云つて、一人で合點してすまして居ました。お絹さんには何を話しても、それを正面に受け入れる事さへ出來ないのですから、大に厄介ぢやありませんか。

これで四人の身の上や人柄は、大概おわかりになつたと思ひます。妾等の居る家は、停車場へ小一里もある田舎の小さな町ですけれど、山を背にして川を前にした好い景色の町です。橋もあれば森もあり、林もあれば丘もあつて、春でも夏でも秋でも、景色だけは結構だと思つて居ますが、冬時分は寒くて閉口してしまひます。相手にする男と云つては、町や村の若い衆を初め旅商人が主ですが、それでも時折は洋服を着た紳士らしい人を相手にして、徹夜のお酒盛をする事もあります。東京から六七時間で着く所ですから、何も彼も東京の悪い所だけが影響して、田舎の百姓でも田舎の人間らしくないのが、厭にな

つてしまひます。お里、お花、お絹、お園と云ふ四人の女は、考へこそ夫れぞれ違ひますけれど、毎日同じ様な事をして、同じ家で泣いたり笑つたりして居ます。妾なんかは何も彼もあきらめたと云ひながら、それでも淋しい夕暮などには、越し方の事が思ひ出されて、堪らなくなつてしまひます。こんな所でこんな事をして、だん／＼齢を老つてしまふのかと思ふと、行末に何の望もない様で、死んだ方がましだと思ふ事もあります。

暢氣なお絹だけは別物ですが、他の三人はめい／＼に理由は違つても、兎に角男と云ふ奴を、恨みもし呪ひもして居ます。あなた様などが御覧になりましたら、男の弄び物になつて居ると思し召しかも知れませんが、實は妾達の方が男をおもちやにして居るのです。そしてめい／＼が男から受けた仇を、一生涯の仕事にして、仕返しして遣らうと思つて居るのです。妾達の仲間は無學な女の寄合ですけれど、男の仕打が餘りですと、今に風變りの新しい女などが出て、何んな事をするか知れません。御用心、御用心、御用心………。

天民さんと云ふ方は、何んな方か知らないのに、長いつまらない手紙を書いて、何とも失禮いたしました。若し此の邊に御旅行でしたら、晝御飯でも召し上りに寄つて下さいまし。お里さんと二人で、お待遇（もてなし）をして、大酒を飲んで、酔つた所をお目にかけませう。

妾達の行末も見て居て下さるやうに、お願ひいたして置きます。

下　男の癡を笑ふ其の聲を聞け

天民樣、未だお目にかゝりませんが、妾は中央公論にお書きになりますものや、朝日新聞に出ます面白い續物を、常に樂んで拜見致して居ます、黒田つねと申す不束者で御座います。殊に御本になりました「淪落の女」は、繰り返し拜見しまして、妾も身につまされました。一度しみ〲御目にかゝつて、いろいろとお話も承りたく、妾よりも種々と申上げたいのですが、籠の中の鳥同樣の身の上なれば、それも思ふに任せず、失禮をかへり見ず文して申し上げます。

私は唯今、早稻田鶴卷町の×××と申す小料理屋にて、「淪落の女」と同じ樣な境涯に泣いて居る世にも不幸な女で御座います。齡二十三、長野縣の生れにて、高等女學校を卒業した身の上でありながら、唯今の樣な身分に墮落したので御座います。何うして墮落したか、其の徑路は別に申上げるまでもなく、あなた樣の御推察に任せます。東京へ參りましたのは三年前、最初は女醫學校へ入學の目的で御座いましたが、實父が或る事件に連坐して、入獄しました爲め、一家は突然深い谷底へ落ちて、何うする事も出來なくなりました。妾は妾一人だけ、何とかして生活して行かねばならぬ身の上となつて、其の當時は東しようか西しようかと、それは〲人知れぬ苦勞に悶えもし、苦しみもし泣きもしましたが、好い運は、妾一人を取殘して通り過ぎました。

人樣のやうな美しい容貌を有つて居れば、容色で立ち行かれる職業、女優か藝妓になりたいと存じま

したが、妾にはそれだけの勇氣が御座いませんでした。それにそんな方面へ入る知識と云つては、學校で唱歌と體操を習ひ覺えたのみですから、初めからあきらめてしまひました。女の職業は段々廣くなつて、才分と勇氣とさへあれば、世間の女がして居る位の事は、妾にも出來ぬことは無いと思ひましたが、廣い東京に人は多くても、妾の知人は一人もなく、途方に暮れて了ひました。そんな時に勇氣を出して婦人雜誌で有名な女流の名家でも歷訪いたし、下女にでも置いて下さいと懇願したならば、或は好い途に向つたかも知れませんが、妾には其の勇氣もなくて、たゞ泣いてばかり日を送りました。若い女に魔がさすのは、そんな時だと見えまして、妾は一生の浮ぶか沈むかの大事を前に控へて居ながら、或る大學生と戀に落ちました。妾が唯今の樣な身分になりましたのは、遠く其の時から萌したのですけれど、妾はその男も怨まず、妾自身も悔ず、短い夢とのみあきらめて、それからは別に淚を流しませんでした。

女一人の生活でも、いざとなれば容易な事では御座いません。たゞ三度〳〵の御飯を頂くと云つてしまへば、何でも無い事の樣ですけれど、其の御飯をいたゞくと云ふことが、實に大問題だと思ひました。電話交換手になつても、看護婦になつても、或は女中奉公を致しましても、妾一人の餬口位は何でも無いでせうが、私は生活の道を地味な方面へ求めず、花やかな陽氣な賑かな側ばかりを見て居たものですから、とう〳〵鶴卷町の小料理屋なんかで、白粉垢の附いた半襟を着ねばならぬ、世にも賤な哀れな自分に墮落しました。けれども決して好い事とは思はず、面白い商賣とも思はず、反つてこんなにまでして御飯を食べねばならぬのなら、食べない方が氣樂で好いとまで思ふ樣になりました。御飯を頂くと云ふ

事の意味を正當に理解しなかつた爲めに、飛んだ身の上になつて了ひました。

人間は御飯を食べるよりも、もつと高等な目的の下に、働かねばならぬと云ふことが、此の頃になつて漸く判りました。殊に女は生活と云ふ事よりも、もつと大切な貞操のために、戰はねばならぬものだと云ふ事をしみ〴〵と自覺いたしました。女に若し大切なものがあるなら、それは唯一の貞操である、と氣がつきましても、妾の身の上には最う何の權威もありません。妾は妾自身で、生活の爲に貞操を破つたと云ふ事に、誰でも同意同感を表してくれさうな理窟を付けて、それで僅に慰めねばならぬほどの、淺間しい身の上になつた事を「女大學」の前に恥しいと存じます。

こんな事を申上げましても、妾は決して自暴自棄して居るのでもなく、煩悶懊惱して居るのでもありません。妾はたゞあなた樣に、女は何處までも弱い者であるが、然し御飯を頂くためには、貞操までも犧牲にするだけの、强さがあると云ふ一事を、能く承知して頂ければ結構なので御座います。女がいろいろな原因のために墮落するのを、あなた樣は弱いとのみ御覽の樣ですが、弱いのみで何うして貞操までも投げ出す事が出來ませう。女には男の知らない强い何ものかがある事を、お考へ下さる樣に、これが妾の第一のお願なので御座います。

面白くもなし、悲しくもなし、妾はたゞ女の强さを持つて、いろ〳〵の男に接して居ます。男の見た「淪落の女」は、哀れなものかも知れませんが、女自身は案外に平氣かも知れません。反つて男の群を征服でもする樣な戰の積で、此の商賣を樂しく遣つて居る者があるかも知れません。

この世の中は、男と女の戰爭では御座いませんか。

妾は無學な女ですけれど、男や女に就いては種々の事を考へて居ます。妾はそれを「淪落の女」の作者にお話して、一所に研究して頂きたいと存じます。こんな事を申上げますと、生意氣な女だとお蔑視かも知れませんが、何うか妾の申します事にも、一面の理窟はあると思し召して、同情を寄せて下さいまし。他の方十人に聞いて頂くよりも、天民樣お一人を相手にする方が妾は本望なので御座います。

妾の只今居ます家には、妾の他に二三人の白首が、毎日出たり入つたりして居ますが、皆申し合せたやうにのんきなものでして、誰一人としてクヨ〳〵思つて居る者は御座いません。尤も未だ浮々世の苦勞を知らぬ十八九から、二十一二までの女達ですから、無理も無いと思ひますが、それにしても誰も彼も平氣なものでして、殆ど男なんかは眼中に置いて居ないやうな樣子が見えます。これが男のために散々苦勞した揚句の果か、男の弱點を知り盡した女達なら、別に不思議でも何でも御座いませんが、娘から一足飛に私娼の群に落ちた若い女が、男を男と思はず、恐れず、恥ぢず、平然として相手になつて居るのですもの、妾は其の人達の「强さ」に、先づ驚いてしまひました。

同じ强さでも向ふ見ずの强さ、何事も考へない强さには、何の意味も有りますまいが、然し言葉を變へて申せば、其の强さは男に對する戰士の强さで御座います。殊に妾はいろ〳〵考へました末、こんな身

分に零落したつて、メソ〱泣いてばかり居ては詰らない、何時までも弱い女として、男の向ふに廻つて居ては大變な損だと思ひ付きました。妾達の中には、御飯を頂いて生活すると云ふ意味だけではなく、性來かうした身分に落魄する様に、育てられた女もありませうが、然し妾だけは、其の〱日の御飯を食べる爲めなればこそ、斯んな境涯にも安じて居れ、生活を放れては、人間の事凡てが無意味だと思ふ様になりました。あなた様のやうな同情深い方があつて、妾達私娼の群を闇路に咲く「白粉の花」だとか暗きより暗きに行く「論落の女」だとか、如何にも風情のある小説的の名をつけて下さいましたけれど、妾達だつて男と同じ人間である以上、妾達のして居る事も、立派な一つの職業かと存じます。

餘り立派とは申されずとも、斯うして毎日御飯を頂いて行かれる以上は、職業の一つに違ひないと存じます。入り代り立ち代り來る男の色餓饑を相手にして、お酌をしたり、歌を唄つたり、時には枕席に侍したりして、それでお金を儲けます以上は、兎に角一つの職業に相違無いと存じます。職業として公に存在する事を、法律とやらは禁止して居ましても、妾達の仲間は都會にも田舍にも、有餘るほどウヨウヨして居ます。公にても祕密にても妾達の存在して居ます事が、無意味で無い限りは、妾達も何時まで泣いて居たつて仕方が御座いません。男を相手の商業取引なら、此方も其の覺悟をして、お客の口車に乘つたり、深切ごかしに欺されぬやう、しつかりと用意をして、めい〱の立場を守らねばならぬと存じます。男に敗けないだけの强味を有つて、人生の戰ひの中でも、最も悲慘(みじめ)だと云はれる日夜の戰鬪に優勝者にならねばなりません。昔から大切なものだと敎へられて來た貞操を資本にして、その貴い貞

操を犧牲にしての職業ですもの、人一倍の强味を有つて、男の亡者に應對せねばなりません。男の力を信じ、男の涙を信じ、男の言葉を賴つて、武裝を解きでもしたら、それこそ大變な憂き目を見ます。妾は妾自身の境涯を斯う考へて、男に向つての戰場に立つても、常に戰士たる覺悟を忘れた事は御座いません。

變な議論めいた事を云ふ馬鹿な女だと、お蔑視かも知れませんが、妾の斯う申します言葉の中に、千萬無量の涙があるか何うか、それはあなた樣の御賢察にお任せ致します。この頃は「新しい女」とやらが出て、女に就ての問題が、八釜しくなつたさうですが、新しい女は女子大學の卒業生や、小說家の女房や、宗敎家の妻や、女文士などに限つたものでは御座いますまい。あなたの仰有る「淪落の女」の群にも、學問がなく自覺が無いために、演說したり書いたりする者はありませんが、新しい女と見ても宜い樣な白首は、當節柄二人や三人では無いと存じます。妾達は長い間馬鹿にされたり、抑へ付けられたり、暗い所へ押籠められたりして居ますから、私娼の群が何んな考へを持つて居るかと、容易に世間に判りませんけれど、人一倍進んだ奇拔な思想とやらを抱いて居る女も、十人二十人の中に必ず一人は有ると存じます。弱くとも、脆くとも、女も人間の仲間であると云ふ事を、何うかお考へ下さいまし。

女を一階級下の人間扱にしながら、男は女あるが爲めに生きて居られると云ふ事を忘れて居ます。この世に女が居なかつたならば、男は何んなに淋しいか、そんな事も男は考へて居ないのでせうか。此の世界に女が一人も居なかつたならば、男は何うして立行かれるか、そんな事も考へて居ますまい。さう思

ふと妾は男の前に立つて、勝利の歌を唄つて遣りたい。女天下の讃美歌を唄つて遣りたいと思ひます。新しい女の運動が起つて、男に對する宣戰の布告をした時代ですもの、「淪落の女」の妾達にも、だん〴〵強味が増して來た樣で御座います。

妾達の相手になる男を標本にして、世間の男を一概に彼是と申しますのは、甚だ失禮と存じますが、要するに男は野獸で御座います。學問のある人でも無い人でも、女の前に出ては、最う男としての資格を半分以上失つた動物です。男が女の無い世界に住めないやうに、女も亦男の居ない天地へ行つて、男を離れて男を嘲ける事が出來ないのが、一つの殘念で御座います。

男と女と別けて申しました所で、所詮は此の二人が寄つてこそ、人間と云ふ者が世にあるのでは御座いませんか。お互に人間として生れた以上は、男が貴くて女が賤しいと云ふ理窟は、神樣の前でも通らないと存じます。その人間の一人の女が、淪落を商賣にして暮して居るのに、何もさう馬鹿にしたり、厄介者扱ひにしたり、不正な者の樣に蔑視まなくても宜いと存じます。明るい世間へ出ては、口や筆で馬鹿にしながら、暗くなると蠅の樣に群がつて來て、面白い夢の一つも見ようと云ふ、男の圖々しさにも驚いて了ひます。「淪落の女」なんかをお書きになつて、空涙にしろ妾達のために泣て下さる天民樣は、それでも未だ男の中でも、脈の好い方だと存じて居ます。

戰場へ出た戰士の覺悟て、いろ〳〵の男に接して見ますと、男ほど拔け目の多い自惚の强い、いけ圖〻しい、厭な者は御座いません。それゝ妾達の身の上に、心から同情しての言葉や態度なら、かぶとの紐を解いても宜いのてすが、心の底ては女を馬鹿にして、一枚下目に見て、弄び物扱ひにしながら、口や樣子だけて程の好い事を云つて、唾を流すのてすもの、あれては物の云へない淸水燒の京人形でも、男の自由にはなりますまい。妾の家に來るお客は早稻田の下宿に居る學生が七分で、時には會社員ゝ舞込めば、土方の親分らしい刺靑ゝ舞込む、男の癖に飯が食へないて困つて居る樣な、襟垢の附いた袷衣の男なども、犬に吠えられて戶惑ひした樣な顏て參ります。妾達はそれ等の亡者や色餓鬼を相手にして、飮んだり唄つたりして日を送つて居るのてすから、時には厭になつて泣きたくなる事もありますが、戰場て淚は戰士の恥辱とやら、空世辭の二つ三つゝ安賣して、大抵征服して了ふので御座います。

男の方は能く女ほど厄介な者はないとの仰せてすが、妾は世に男ほど厄介な者は無いと申したくなります。淫賣だとか何とか云つて、馬鹿にしきつて居ながら、いざとなると哀訴嘆願と云ふ態度てすもの、時折はそんな男の面を思ふ存分撲つて、女の强さを見せて遣りたいと思ふ樣な事ゝ御座います。妾達ても未だ若い女の中てすもの、世間の男が美しい女を好むやうに、男らしい男を好くのは當然てすが、この頃は最う馴れてしまつて、何んな樣子の好い男の顏を見ても、何んな醜男の樣子を見ても、何とも心を動かさなくなりました。老人てあらうが、若い人てあらうが、男に二つは無いのてすもの、一視同仁とやらに待遇つて、せい〳〵懷中の輕くなる樣に持かけて居ます。廣い世間には妾達の樣な女が、何の位

男に欺され、男に苛責れ、男に泣かされて居るか知れません。妾はそれを思ふと、最う男が憎くて〳〵堪らず、それ等の女達に代つて、男に對する仇討をせねば、氣が納まらなくなつてしまひました。妾が何んな男でも構はず同じ様に待遇つて、浮いて騒いで唄つて居るのは、見も知りもしない多くの女達に代つて、男への復讐をして居るとも申されます。鶴巻町で「ハイカラお常」とか「女辯士」とか云へば、直ぐあの×××に居る庇髪のお常かと云はれる程に、妾は有名になつて居るさうで御座いますが、貞操を賣つての報酬としては、餘りに安い評判では有りますまいか。

未だ若い女ですもの、時にはいろ〳〵な事を考へて、涙を流す事もありますけれど、強い者に涙は禁物と、何時も自分で自分を叱つて、今日まで强がりを續けて居ます。數多い男の中には、妾の商賣氣を本心だと自惚れて、妾にして遣るとか、借金を返してやるとか、帝劇へ行かうとか、お召を買つて遣らうとか、いろ〳〵の事を申しますけれど、妾は少しも頓着致しません。その中の一人を選んで、身を託してしまつたなら、案外好い運が向いて來て、何時までも斯んな家で、巡査さんの靴の音にビク〳〵して居なくても宜いのですが、妾は何う云ふ譯か、男と云ふ者を信ずる事が出來なくなりました。生優しい男の涙ぐらゐで何うして妾の武装を解く事が出來ませう、五百一千の紙幣を積んだ位で、何うして妾の心を買ふことが出來ませう。妾は最う「淪落の女」で結構、高い貴い資本を下して、得る所は早衰と病毒の此の二つだけでも、妾は當分、男への惡戰苦闘を續けませう。

淸淨無垢であつた黒田つねを、誰がこんなにしたのでせう、淸淨無垢であつた常子の心を、誰がこん

なにしたのでせう。親から貰つた名前の外に、「ハイカラ」と云ひ「女辯士」と云ふ第二の名前を、誰がつけて呉れたのでせう。妾はそんな事を思ふと、最う泣くよりは腹が立つて、杯を噛み割りたい樣な氣持になります。自暴自棄でも何でもありません、妾の申します事には、妾一人だけの道理が御座います。この道理は、少くとも妾にだけは通用いたしませう。

自分勝手な亂暴な事ばかり申上げて、失禮の段は幾重にもお詫を申し上げます、弱い脆い哀れな「淪落の女」が、大變な氣焰を吐いてしまつて、お憎しみを增した事と存じます。

最う妾の事は申し上げません、男の惡口も大抵にして切上げます。武裝を解けば妾も女の身の悲しさ、幾ら强がつても、淋しさ心細さに、泣きたい樣な氣持になる事も珍らしくは御座いません。これと申しますのも男を遠くの方へ離して眺め、男と女の間に起るいろ〳〵な感情の親しさを、强て殺して居る爲めかも知れません。男と女の間に生ずる自然の感情を、强て抑へ付けてまで萎して行かねばならぬ妾は、不幸な女かも知れません。

然し只今の妾は武裝の儘で、今まで步いて來た道を行くより外に、何うする事も出來ない身の上で御座います。鶴卷町が十二階下になるか、濱町、蠣殼町になる事はあつても、妾の步く道は一つしか御座いません。其の一つの道も何處まで續いて居る事やら、何處まで步いたら、何處へ着ける事やら、そん

な事は少しも判つて居ません。女で申しましたら最後のどん底にある道ですもの、この上恐しい陷し穴もありますまいし、邪魔になる石塊も轉んでは居ますまい。盲目滅法に歩いても、驅け足で急いでも、何の心配も無い道の方が、結局のん氣で好いかも知れません。のん氣でなくとも、妾だけは氣樂にクヨクヨ思はずに、其の一筋の道を辿る積で御座います。

そんな量見を起さずに、ほんとの道の方へ歸れと仰せがあつても、最う本道の方は不安心になりました。世間の五月蠅い本道を、素知らぬ顏して通る心配よりは、世間に捨られた邪道を歩く方が、何の位のん氣で好いか知れません。そんな事を云はずに、信ずべき戀人に頼つては何うかと仰有つても、最う男には懲り〳〵しました。虛僞と掛引の多い戀の綱に縋るよりは、其の日〳〵の仇枕、戀もなく愛もない腕にすがる方が、何の位氣樂で好いか知れません。そんな考へを起さずに、人妻になつた方が幸福だと意見されても、妾の身體は家庭の人となる樣な重寶な性に生れて居ません。世話女房になつて貧苦に窶れて、子供ばかり生むよりは、紅白粉の若粧りて、お酒と唄とで死ぬる方が、何の位花やかで好いか知れません。自覺もせず反省もせず、女の通る晴やかな門を避けて、暗い所から暗い所へと辿り辿つて死ぬる方が、結局、意味の深い女の一生かも知れません。

妾の申しました事は、生噛りの生意氣な事ですけれど、妾達と同じ境涯に居る多くの女の中にも、妾と同じ樣な考へを有つて、道連になつて居る人が澤山あると思ひます。男の癡態を嘲り笑ひながら、反つて罵しられ惘れまれて、何時まで經つても戰爭の勝敗が定まらず、敵も味方も墓場へ入つてしまふの

が妾達の運命とやらて、また妾達に接近した男の運命かとも思ひます。そんな事を考へますと、何だか先が見え透いた樣て、斯うして生きて行くのさへ、意味の無い事の樣に思へますが、反つてそれが意味の深い生涯かも知れません。性慾とやらを職業の一つにして、それて御飯を頂くと云ふ事は、神樣の前にも罪深い事だと申しますが、然し數ある女の仕事の中て、多くの人が落ちて來るのは、たゞこの道ばかりてす。妻になつて子を生むのが、第一の正しい道てしたら、これは第二の邪な道かも知れません。第一の道と第二の道と其の距離は非常に遠い樣てすけれど、歩けば垣一重の隣同士、それにお互は手を握つて語り合ふことも出來ず、たゞ燒場の門を通つてから、初めて一所になるのてす。妾は最う何うなつても宜い、妾に定められた第二の道を歩いて、行ける所まて行つて見るのが、生涯の仕事て御座います。

取止の無い事ばかり申しましたが、妾は此の手紙をあなた樣が御覽遊ばして「淪落の女」の中にもいろいろと考へて居る女が居ることを、御承知下さりさへすればそれて本望て御座います。身を捨ばちの連中は、困るほど有りますけれど、多少なりと種々の事を考へて、考へた通りに實行して居る一人として、何うか此の「女辯士」を認めて下さいまし。彼是と自分合點の理窟を付けなくとも、澤山な男の肌に荒み切つた女の感情は、到底正しい方へ囘復するものては御座いません。一度こんな境涯に落ちた女が、色香の衰へぬ間に浮かぶ事が出來ないのは、日夜の耽溺とやらが習慣になつたのてす。けれども妾には、前申した通りの主張てあつて、それて此のまゝ同じ道を歩かうとするのてす。私は未だ男のために荒み切るほど稼ぎ人ては御座いません。

何處かで何時かは、お目にかゝりたいと存じて居ます。其の時だけは武裝を解いて、生れた儘の「黑田つね」になつて、いろ〱とお話を申上げたいと存じます。「淪落の女」を拜見しました處、餘りあなた樣が妾達を、可哀相な者の樣に御覽てすから、ツイ理窟を云ひたくなりました。逢つて御覽遊ばせ、あなた樣には矢張り不憫な女に見えるか知れませんが、これでも「女辯士」は淪落の女の中でも、一種の新しい女を以て任じて居るので御座います。



人物評論

平塚明子論

'WOMAN, ALL-TOO-WOMAN.'



佐藤春夫

どうも私には他(ひと)の惡口を言ひたがる惡い癖があつて困る。それに近頃は蟲の居どころが惡い。どうかするとこの文章なぞも何げよく書いたつもりで案外失禮なことを言ふかも知れない。元來、私は眞向から他をほめる事は、平氣て惡口を言

ふことよりもも一層下品なことだと思つて居る。實際、今の世の中では平氣で他の惡口をつくやうな惡黨の存在するわけがない。して見ると私などは大のグッド・ネエチュア――いやいつそベスト・ネエチュアとでも云ふのであらう。だから正直な可愛いゝ男だと思つて復讐などゝ言ふ近代的な怖ろしいことは偏に御免しを願ひたい。これは豫め平塚さんに言ふのだ。

平塚さんのことに就いては、別段何もむつかしいことを考へたこともない。强ひてむつかしい事を言へといはれゝば、何だつて世の中では斯う喧ましく平塚さんを論ずるのだらう、年頃の娘の嫁入口を搜すのでもあるまいに、何も急いで騷ぐこともなからうぢやないか、と云ふやうな事でも言ふより外はない。だから勢、つまらない話をでも書かなければならないことになる。それも無用な私事ばかりなのだからお忙しい方は題だけて要領を得ていたゞきたい。これは讀者の方に豫めお斷りをして置く。

私の平塚さんを識つたのは未だ極く新らしい事である。去年の九月初めてあつたらう、ある夜、當時茅が崎に居られた生田長江先生が東京へちよいと來てまた歸られる時、私も從いて茅が崎へ遊びに行つた。丁度その車のなかで、矢張茅が崎の紅吉さんを訪れるといふ平塚さんに初めてお目にかゝつた。汽車のなかでは平塚さんがビールを買つてくだすつて、三人でそれを少しづゝ飲んだ。平塚さんは先生に何かしきりと私にはわからない話をしかけて居られた。ちよつと個性を帶びた聲だなど思ひながら、私はひとり平塚さんの持つて居られた何かの雜誌を借りて讀んで居た。その時の平塚さんの話が例の「燕」のことだつたとは大分後で思ひ當つた。翌朝、平塚さんは保持(白雨)さんと紅吉さんとの三人連れて先生のところへ來られた。「一葉論」を書きたいと思ふんだが何か參考になるやうな事でもあるまいかと言ふやうな話もあつて、平塚さんはしきりに一葉のつまらない事を言つて居られた。先生は男では一葉嫌ひの人は少ない女にはあるやうだ與謝野さんの奥さんも嫌ひだと言つて居られたと言つた、それ

からまた先生はマダム・ドスタイルの話かなんかをされたと思ふ。私は平塚さんの一葉に對する非難の一端を聞きながら、この人は自分の主張を見せることに忙しくつて、落ついて他を顧るほどの餘裕が未だ出來て居ないんぢやないか、ほんたうの批評の興味はとうかすると未だ理らないんぢやあるまいかなど丶も考へた。斯うして私は平塚さんと御近づきになつた。それから後——その以前もさうてはあつたが——いろ〳〵な機會ていろ〳〵な人々から、平塚さんの噂を聞く機が大分多かつた。殊に森田草平さんからは「朋子」の話をよく聞いたものだ、その都度私は「明子」の話をした。又は私からよく「明子」の話をしたものだ、その都度彼は「朋子」の話をした。

平塚さんを識つたのはこの通り新らしい事だが、見たのはもう可なり古くなる。それは丁度、私が高等學校の入學試驗を受けた年だから四年前だ。六月初めてあつたと思ふ、その頃本郷に居た私は、駿河臺に居られた與謝野寛先生のところへ歌の原稿をもつて行くつもりて、お茶の水橋を渡りかけると丁度向ふからその日の雲のやうな色——妙に曇つた日てあつたが——の袴をつけて、一種の姿勢を保つたまゝ私などよりもつと男らしく堂々と歩いて來る女の人があつた。ふと直觀的に「この人ぢやないかしら、平塚明子といふのは」と何げなく思つたからよく見て置いた、假面のやうな感じの顏をして居た。その後、生田長江先生のところて話の序に先日の人のことを話すると、「さうかも知れない、直ぐ眼につく人だから」と云はれた、「ほんたうに然うだつたかしら」と言ふと「どんな顏でした」と同席の平塚さんを見たことのある人が尋ねた。私の心の中てきつと然うだと獨りて決めて仕舞つて、「煤煙」の文句をそのまゝ「一度見れば忘れられない顏てした、然うして一度見れば澤山な顏てした」と笑ひながら戲談て答へた。その後も度々白山の附近などてこの人を見かけた。その時分の平塚さんは今よりも反つて地味な風をして居られたと思ふ。

茅が崎以後、ちよいちよい方々て御目にかゝるが、

ゆつくり話をしたことは滅多にない。たゞ一度、土曜劇場の晝興行の時、紅吉さんと二人連れて來て居られたのに落ち合つた。それて東洋軒て夕食を御馳走になつたが、その時偶〻私の仲間の誰彼がそこに四五人居てその四五人をも加へて大勢てパウリスタへ行つてコーヒをのんて、それからまた鴻の巣へ行つた。何ても、う歸るといふ御二人を皆て無理に誘うたのてあつた。鴻の巣ては私共の仲間て飲む者は少しばかり酒を呼んだ。女の御二人はちつとも飲まれなかつた。その時平塚さんは「私は今夜は飲みません。私は御酒をのむとほんたうに人が好くなつて何ても他のいふことを肯くやうになるんてす」と何てもに力を入れて言はれた。私は「さうてすか」と返事をした。何だか三面記者のやうなことを書くやうて自分乍ら不快てあるが筆の勢て書いて仕舞つたから消さないて置く。然し私は平塚さんのこの時の言葉を一場の戲言だと思つて居る。何故かと云へば平塚さんは禪の修養も積んて居られるさうてあるし、また非常に意志を尊重せらるる模樣てあるから、言ふまでもなく「新らしい女」としての眞價もまたこゝにあるのてあらうから。

トルストイの兩性論をそのまゝ信じたいと努力して居る私は、婦人問題に關しては他の何人にも劣らない位ゐ熱心な興味を持つて居る者てはあるが、所謂「新らしい女」よりも「古い女」が好きなのてある。「もの理り」をわきまへた上に「ものゝ哀れ」を感ずるやうな女性は私の熱愛するところてある。「ものゝ理窟」を知る丈けよりは「ものゝ哀れ」を感ずる丈の方がまだしも私は好きてある。私は近代人にも似合はず貞潔なぞといふことを有難いものと思つて居る——勿論これは別段平塚さんとは交渉のないことだが序だから言ふのだ——「マリアの傳説は因るところ無きに非ず、貞潔なる婦人は世を救ふことあるべし」といふトルストイの言葉を少なくとも詩の句としてもいゝ句と思ひ、また昔パウロがコリント人に書き贈つた「哥林多前書」の第七章をいゝ詩だと思つて愛誦して居るのてある。筆が岐路をゆきたがるが兎に角「新しい女」に對しては私は

あまり同情のない方である。だか斯う言ふのを氣の利いたジャアナリストなどの言ひ草と同じだと思はれるのも心外だから、その爲めにもう一言を添へて置くが、「新らしい女」を非難する世間の「新らしい男」共は果して自分がどれだけ「新らしい男」に成つて居るかを先づ省みなければなるまい。

さて其後、私は平塚さんに對してはいろ〳〵と興味を持つともなしに興味を持たなければならぬやうな立場にあつた。然うして第一に平塚さんは非常な策士だといふことをも知つた。またその策たるや極めて「女性的」なものであることをも知つた。また時には巧に禪機を弄して氣の弱い者を喝すことがお好きなことをも知つた。平塚さんは御自分に對する最も痛快な批評をした人のことなどをあの人はほんたうに氣持ちのいい人だなぞと仰しやる。眉に唾を要する寛仁である。要するにすべてが實に「女性的」である。この「女性的」といふのはオットウ・ワイニンゲルに依るのである。此事に就ては今一々事實を上げることを憚るけれども、漫然と人を傷けるのでないことは私の十分に責任を負ふところである。世間では隨分と男性的な人のやうに考へても居るやうであるけれども、それは多分あの姿勢からでも斷定したか、さもなくば底には底のある流のパラドクィシカルな態度に眼がくらんでの淺薄者流の短見である。

平塚さんは私のことをあんなに才を弄んで一體どうするつもりだらうと評せられたとか聞く。私への評語は敢て有難く頂戴するとして、平塚さんはこんなに世を弄んで一體どうする御つもりだらう。

私は今の世の中では、おづおづしながらすることなら何をしたつて咎めるわけにはいかないと思ふ、たとひそれが泥棒であつても。だがあたり前だと言はないばかりの顔をして居れば電車のなかで二人分の席をしめて居るだけのことでも嚴しく咎め立てしなければならないと思つて居るのだ。

われ乍ら大分旺んに書くやうだが、さては此奴をかしいぞなどと紙背に徹するやうな御判段は先づ御免て

ある、それよりはその鋭さの眼光でもつて「らいてう」を御覧になつたがよろしからう。然し平塚さんの筆と頭とは、私と雖も輕んずるものではない、若し幽閑女史にしてこの筆とこの頭とがあるならば、彼女は十年前に既に「新らしい女」の急先鋒になつて居たらうに思ふ。「圓窓より」をも讀んで批評をしたいのであるが、手もとにないから殘念ながら出來ない。たゞこの間、本屋の店頭でちよつと開いて見たら「かのメズメル氏の發明に係つて、全世界を風靡したメズメリジムは」と云つた風な文句があつたやうだつた、別に方々にあるわけでもあるまいが、中學三年生がナポレオンの偉大を書く時のやうな修辭法は、文章の末技ではあるが面白くない。わが兄フリイドリツヒ・ニイチェは「思想の改善」と題して曰く、「文章を改善するは、やがて思想を改善するものなり。また此外に出でざるなり。――立所に此を容れざる者は、竟に説得すべからず」と。

平塚さんのやうな地位に居られる方は、どんな小さなことにでもよく意を注がれて、氣まぐれな行爲なぞの一層すくなからんことを、お近づきのある一人として、また婦人問題に興味を持つ者の一人として希望したいのである。聞く、昔は一語を誤つたばかりに五百生野狐身に墮ちた人もあつたと。言ふまでもなく、時代をほんたうに動かすものは主義や主張ではなく人格である、思想には新舊の區別もあるが人格には別にその區別を問かない――強ひて結論めいたことを書かなければ義理がすまないなら、こんな平凡な保守的な言葉を繰り返して、敢て擱筆の便を得んがために、無用な一語を平塚さんに呈しようか。

――演説會などであんな可愛い〻聲を出さなくつてもよろしからうから、その代りにあなたの膝と膝とが三十度位な角度になる坐り方、あれは極く普通に改正なすつたがおよろいでせう、あれが別に新らしい思潮と密接な關係もなささうぢやありませんか。それとも矢張り「男に對する反抗」で習俗打破の一端なんですかね。

* * * * *

（大分忌憚なく書いて仕舞つた。私だつて平塚さんの豪いところも認めては居る、「兎に角エライもんですね、女にしては」などと勞はつて猾くコンディセンドた態度で書いていゝなら書きもする。然しそんな風な書き方よりもこの方が、一般の女性に對しては勿論、平塚さんに對しても禮に適つたものと信じて居る。ただもう少し騎士的慇懃(ギアラントリイ)に書きたかつたけれども、それは材料の方で拒んだのだから致し方がない。筆者追白）

△私の知つてゐる平塚さん

西村陽吉

―月―日。

私の前に顔の輪廓の小さくて鮮やかな、言葉の調子の柔らかい、ものごしのしとやかな人が現れた。それが平塚さんだ。私の頭にはそのとき「煤煙」に描れた事實及び「煤煙」を通して私の腦裏に形造られてゐる一個の女性のぼんやりした影像が、一種の緊張した豫想を作つてゐたが、急に實在の平塚さんに依つて收縮して了つた、そして今まで描いてゐた豫想と一寸かけはなれた氣分をうけとつた。しかし須臾にして漸次にある連鎖を見出すやうになつた。卓子を中央に、鉢植の松の枝越しに、平塚さんと對座して私ら四五人は晝飯を食べた。それは茅ヶ崎の病院の一室であつた。

食後、私らは海岸へ出てみた。風の强い薄曇りの日であつた。砂原へ寢ころんで海の方を見たり、振り返つて山の方を見たりした。歸途私の前を歩いてゆく袴をはいた平塚さんの整つた後姿、腰にさげてゐる卷煙草入、駒下駄、白足袋、――それらをうしろから見た。そしてなぜかそれが私を近づきがたいある寂しさに誘致した。

―月―日。

閒窓の室に平塚さんと對座して、かれこれ二時間餘も話した。それは暑い日で、絶間なく汗が腋の下に流れた。話が途切れると靜かな平塚さんの呼吸の中に私

の呼吸が紛れこんでゆくやうであつた。私は呼吸をひそめてぢつと沈默した。どこか寂しい氣分のある人だと思つた。鼻のあたりや口のあたりを見つめてゐると、なんとなく老成した優しみが溢れてゐた。若い人に見るやうな不熟な色はなかつた。

—月—日。

なんの話だつたか今はよく覺えてゐない。

平塚さんは大變感傷的な氣分になつてゐたらしい。折々涙が瞼ににじみ出た。それを手巾で拭つては話しつゞけた。その調子や聲のなんといふ優しいことだつたらう！　聽く人は私と、靑鞜社のKさんと、A氏とであつた。折々自分の今の氣持を笑ふやうに笑顏をしては眼をしばたゝいて私の方を見た、そして話しつゞけた。私は女らしさの多分にある人だと思つた。額が赤くほてつてゐた。

—月—日。

私は自分の理解しがたい氣持を平塚さんに訴へた。いろ〳〵質問などをした。平塚さんはよく私の言ふことを聞いてくれた。それはかうぢやありませんかといふ風に私の氣分を呑込むやうにしてくれては批判してた。私は平塚さんを前へ置くと自分の思つてゐることや苦んでゐることをなにもかも言つて了ひたいやうな氣がした。平塚さんの持つてゐる世界と私の抱いてゐる世界——、私はそこからいろんなものを學んだ。私はいまも平塚さんに刺戟されてゐる。

—月—日。

手術してからまだ間もない頃であつた。私は寢臺の上に仰臥してゐた。その日平塚さんとYさんとが私の病室に尋ねてきてくれた。頓興な顏をした首振人形がその日のおみやげであつた。二人は椅子に腰を下ろして、埃及藝術の話から何かのついでに俳句の話になつた。新傾向句、虚子によつて代表される現在の句界、その日は二時間あまりも俳話に暮らして別れた。平塚

さんは古い句作の中から記憶にある句を書いて示されたが、平塚さんの狙つてゐる句境といふものは抒情的のものでなく、よほど禪味の勝つたものであつたと覺えてゐる。

一月一日。

出版の用で平塚さんの讀書に行つてゐる寺へお訪ねしたことがある。その室は寺の一番奥まつた稍々古びた十疊位の室で、廻廊があり、すたれた庭に面してゐた。庭には草が思ふさま茂つて、棕梠が黄色い粉つぼい花をつけてゐた。池には藻が浮き、池畔の柳は長く水面にまでその鬱陶しい枝を垂れてゐた。人氣の少しもないやうな室であつた。庭も荒れたまゝ何年も手を入れずに抛擲してあるやうであつた。

「ね、いゝ處でせう。」

平塚さんは私を顧みて言つた。

經机の前に端坐して、オイケンの著書をひろげて讀んで居た。町の物音はこゝまでは少しも聞えて來なかつた。

一月一日。

「……全身全靈をあげてそのものになりきつて了ふといふことが一番人を偉大にさせます。同化するといふことは大變な修養です。(假面をかぶるのではないから。)さうなつたとき、あなたが曾て矛盾するやうに考へた色々のことが、何の矛盾もないことだつたと氣付くかも分りません。……」

さう平塚さんの手紙に書いてあつた。

(七月三日夜、東雲堂にて)

△平塚さん

田村俊子

ある日、染井の墓地をある女二三人して歩いてゐると、其の中の一人の平塚さんが立ち止つて自分の咽喉を撫でながら、

「××さんがね。平塚さんの顎から上に男性的なところがあるつて云つたの。」

然う云つて仰向いて自分の咽喉佛をいぢつてゐる。

成る程、女にしては大き過ぎるのどぼとけだと思ひながら、ひよいと見ると平塚さんの顎に髭がある。

それから顔を突き出して仔細に點檢すると、中々長くつて濃い。普通の生毛とは違つてゐる。

女に顎髭のあるものはない。鼻の下には髭の形狀らしく濃い毛が少しは密生する人もあるけれども、顎にこれだけの長い髭らしい一と塊りの毛を生えさせてる人はちよいと見ない。これて傍へよつて勘定を初めたら三十本を數へてもまだ數へ切れない。肝腎の當人はくすぐつたくつて我慢がしきれないと云つて、くすくす笑ふので、顎が動いて兎てもその先きを勘定が出來ないからやめてしまつた。

平塚さんに就いて私が發見したとはこれだけてす。

こんな事を書いてると赤城から葉書が來た。

夕ぐれの沼に面した山裾の水楢と白樺の林の奥てもうこれ以上の沈默に堪へないといつたやうにクワ、クワ、クワと鋭く叫んては一しきりボッケー、ボッケーと「ボ」の音に異樣に强いアクセントをつけておどけ者のやうに鳴く閑古鳥は過去の日本のわる悟りした人を思はせます。とぼけたり、ふざけたりして自分の心の奧底の淋しさをまぎらしてゐる人のやうなのてす。

七月一日　赤城にて

らいてう

この葉書のおもてには、植物の皮が貼りつけてある。白樺の幹を剝いだのかも知れない。

△平塚明子君

馬場孤蝶

他人を判斷することは難いことだ。特に私どものやうな自分のことばかりしきや考へ無い者に取つて、親しく無い他人を評するのは難いことだ。

私は、平塚明子君を善くは知つて居無い。同君の名を知つてから、言葉を交へた數は、十回有るか無いだと思ふ。それから同君の著作に就ても、未だ熟讀の機會を得無い。要するに、平塚君を評するだけの材料を持つて居無いのだ。

尤も、間接に傳聞したことは少々あるし、又平塚君に關係のある事件に就て――頼まれもせぬのに――餘計な奔走を爲たことはあるのだが、さういふことは、こゝでは一切云ひ度く無い。

何れほど拙いものでも責めて小說の形だけでもして居るものゝなかでなら知らず、唯の噂話の取り次ぎでは、所謂る六號記者のしわざと同じにならうと思ふので、これはやめる。

さうすると、何も云ふことが無くなつたやうなものだが、しかし、一言や二言位ならば何か云へぬことも無からう。

平塚君は、對談をすると、如何にも氣の利いた、さッぱりした、それて居て、何處かに愛嬌のある、心持の好い婦人だ。

然かし、一度大勢のなかで、默まつて目禮だけをされたことがあつたが、その時は、何うも餘まり身體の構などが極まり過ぎて、返つて感が好くなかつたやうに覺えて居る。

平塚君は、人格ある婦人の一人だ――これは日本現代の婦人のなかでは、稀なことであつて、多とし無ければならぬ。

數年前、彼の有名な事件が起つた直ぐ後の、平塚君の言は、沈着や、論理を少々缺いて居る所があるやうで、私などには、了解し兼ねた所があつたが、近頃の平塚君には、餘程沈着な所が加はり、常識の力が次第に明に表はれて來たやうに認められるのは、甚だ結構なことだと思ふ。

平塚君は情緒的文學者になるべき人では無いやうに思はれる。所謂る耽美派の人ではあるまい。――勿論、これは、比較的の言葉なんだが。

今の所では、平塚君の文章から云つても、少々レト

リーダが勝ち過ぎて居るやうに思はれる。今一奮發せられて、もつとマテリヤストの立脚地に就て見られたら、何んなものであらう。しかし、これは、私自身の所好を人に強ひることに當るかも知れ無い。

禪學は、平塚君を、同君の今の思想上の位地へつれて來て呉れたかも知れ無いが、私の見る所では、近來は、禪學を脫却しかけて居らるゝやうに見える。尤も、それが、禪學の進步といふものかも知れ無いが、それならば、その禪學とやらを今一層進步させて、所謂る禪學の臭味を全然擲ち去らるゝやう、希望に堪へ無い。

平塚君等の創設にかゝる婦人ばかりの文學團體青鞜社は、我國では唯一の團體であつて、甚だ有意義な事業なのだ。諸君の主張には、その根柢に於て、動かし難い理がある。これに向つて、理解無き嘲笑を加ふる者、これに向つて、無法なる妨害を加ふる者――よしそれは如何なる名義を有する者であつても――その愚は笑ふに堪へたることであるのは勿論だが、さういふ嘲笑あり、妨害あり、壓制があるやうになつて來て、はじめて、諸君の事業が眞劍の事業になり得るのだ。即ち、斯ういふ愚物上下に滿つる世なればこそ、諸君の事業の必要がます／＼あるわけなのだ。

『世間から鎗襖を造くられ、その切尖を擬んで立つやうになつて、人は身がしまるのだ』とは、泉鏡花君の言葉である。社會から敵意を持つて待たるゝとか、有司に寒心せしめるとかいふことは、何人に取つても面目だ。が、しかし、それは、誰でもが持ち得べき好運では無い。のみならず、それまでになるには、多大の犧牲を拂はなければならない。平塚君は――同君自身の知覺からは知らず――外部的には、既往に於て犧牲を拂つた人だ。青鞜社の他の諸君も、既往に於て、それぞれの度合に於て、多少の犧牲を拂はれたことであらうと思はれるが、若しさうで無いとするも、今後に於て、犧牲を拂はせられる機會は多からうと思はれる。諸君が社會から敵視せられゝばせられるほど、諸君が犧牲を拂へば拂ふほど、諸君の人格はだん／＼完成に近づくのだ。諸君はます／＼奮勵して、從來の人道、

從來の思想に出つて罵打たれた道を離れて進んて、まことの人となられんことを、希望に堪へ無い。

平塚君は、嘗て同君の身に取つて記念すべき或る夕に於て、『わがCanse（コオズ）の爲（た）めに』と書き遺（のこ）したことがある。青鞜社の諸君が――平塚君は勿論のこと――更に深刻な意義に於て、再び『コオズの爲めに』殉ぜられる日の來たらんことを、私どもは、刮目して待つて居る。

△自分は迷つて居ます

與謝野晶子

自分は今日人樣の中へ進んて出て平塚明子さんを批評することを望まない。

在來の習慣が八方から睨んて居る中て、女が現代の人物を批評するのは非常にしにくい。褒める場合は必ずしもさうてないが、反對の場合には何時ても、何んだ、女の癖に生意氣だと罵られる。男よりも數倍憎まれることの嫌ひな、又憎まれては男よりも數倍の手傷を受けねばならぬ弱味のある女は、勢ひ知らぬ顔をしたり謙遜を裝ふたりして口を噤むことになる。

又殊に其れが女同志の人物評てある場合には、一概に女の淺はかな羨望や嫉妬から相手に難癖を附けるのだとして、相手からも第三者からも憎まれる。少しても思慮のある女に取つては其れも厭なことてある。勢ひ又口を噤むことになる。

いゝ子になつて居たい人間の多い中にも、殊に女は凡てにいゝ子になつて居たい。勿論自分も其女の一人てある。

併し自分が平塚さんを批評しようと望まない理由はそんな普通の矯飾や臆病からてはない。同じ女同志の批評ても、平塚さんなら何んな事を云つても憎惡の念が先に立つ女ては無いらしく自分は感じて居る。そんな點に遠慮の要らない人のやうてある。女子文壇社の河井さんから前の月に平塚さんの批評を賴まれた時にお答へして置いた通り、平塚さんを批評するのに精確

な材料を有つて居ないと云ふことが自分の躊躇する理由てす。

自分が平塚さんの顔を知り合ふ程度の交際を得たのは可成り舊い。馬場先生、生田さん、森田さんの三人と自分との首唱て九段下の教會て文學好きの婦人を集めて講演を毎週に開いた時からてある。其講演會の名の金葉會も生田さんに勸められて自分が附けたのてあつた。同じ頃自分等の仲間の雜誌てある「明星」に平塚さんの歌や文章が生田さんの取次て出たこともあつた。其れから一年程經つて講師だつた森田さんと聽講生だつた平塚さんとの名高い事件が起つた時、其事を宅の隣に住んて居られた生田さんが第一に知られたのて、生田さんと良人とが相談して二人を捜しに生田さんが出立されることになつた。その一週間程は自分の千駄ヶ谷の宅が二人の爲に心配する先輩や友人達の集合所になつて居て、同時に何んても與謝野の處へ行けば眞相が解ると云つた風に、森田さんの親友達が氣を利かして、成るべく平塚さんのお宅や夏目先生のお宅へ迷惑を掛けないやうにと云ふ考から、新聞記者を一切自分の宅て牽制するやうにして居たこともあつた。

其後生田さんの後援て青鞜社が出來て雜誌が出ることになつた時、生田さんが宅へお出てになつて、自分にも毎號何か書いて欲しいと云ふ平塚さんの言葉を傳へられた。其用て平塚さん自身が來て下すつたこともあつた。其頃既に世間ては新しい女の出現を要求する議論を書く人もあり、兎に角名だけは「新婦人」と云ふ雜誌も出て居たが、一方て森田さんの事件から平塚さんは或意味ての新しい女と云ふ感じを世人に與へて居た。新しい女と云ふ名がいろんな意味て盛に人の口に上る樣になつたのは確かに平塚さん達が雜誌を出された後の現象だと思ひます。自分は其時毎號詩を載せて頂きませうとお約束をしました。

其頃から自分は「圓窓より」に集められた樣な平塚さんの筆になつた物は大抵注意して讀むことになつた。文章の巧い女は外にもあるが、平塚さん丈の理性の勝つた頭腦を有つて平塚さん丈の大膽な發言をする女は

唯だ平塚さん丈だと思つて敬服しました。その論旨は歐洲の思想に通じた男子側の學者から見れば勿論大して新しい創意のある譯でもないでせう、又どれも研究中の發言ですから次第に矛盾した點なども目に附くでせうが、女同志の間から見れば日本の女性の發言として其思想の新しいことは拒まれない。其れに平塚さんの文章には力がある。男子側の學者の文章に比ぶれば其力と云ふものも何でもない程のものであるが、併し女の文章として女同志を警醒する力は却て男子側の議論よりも強くこたへるのであつた。之は女同志と云ふ親しみも手傳ひ、又平塚さんの取扱はれる問題が女同志の上に適切であつて、現代の女の內心に其れとなく鬱屈して居る思想を平塚さんが代つて述べられた樣な點で引附けられもしたでせうが、兎に角平塚さんの文章には他の女を威壓して掛る力が其の表面に躍つて居た。他から威壓せられることの嫌ひな自分は平塚さんの其表面的な力に多少の反感を持ちながらも、矢張りその力に引かれて其筆になつた物を讀んで居た。段々讀んで居ると、正直な處、平塚さんの論旨は何かしら外國物の種本を鵜呑にして勝手に吐出された樣な氣がしてならない。自分は其れに就いて大ぶ慊らなくなつて來た。

平塚さんと自分とは以上述べた樣に世間並な交際である。まだ一度も平塚さんとお話をしんみりとした事すらない程である。其れてあの方の批評をするなら書かれた物だけで批評する外はない。そんな批評ならわざわざ自分がしなくても、既に他の人が同情のある批評をし盡して居る。平塚さんの筆になつたものは近く「圓窓より」の發賣禁止に由つて却て一層よく世の人に理解せられた樣である。其點に於て平塚さんは社會的に決して不幸な人ではない。

自分の今の心持では平塚さんの議論を透して平塚さんを知るのでなく、平塚さんの實際生活を知つて後に平塚さんの議論を顧みたい。議論も實際生活の一部に違ひないが、果して實際生活と融和した議論であるか何うか。先覺者の議論はいつも實際生活より先に立つ

て居るから大抵の場合矛盾して居るやうてある。自分はどんな具合に矛盾して居るかと云ふとが知りたい。また其矛盾は内から來て居るのか、外から來て居るのか、其れも知りたい。

議論は議論として丈ても尊いには違ひないが、其尊いのは寶石商の棚にある寶石のやうなものてあつて、其眞實の價値は人の指に挿まれた上のことてある。矛盾は已むを得ない場合だけに許されるが、避けらるべき矛盾を避けないて、わざわざ議論と實際生活とを破綻させることは眞の先覺者のしない事てある。凡人の自分等ても成るべく理想を實際化したいと努力して居る。そして現在の境遇を少しても理想に近く改造して行く努力に人知れぬ苦闘も勇みもある。其れが平塚さんの場合ては何うてあるかと云ふことを知つて、自分は其處から批評を書くなら書きたい。平塚さんの議論が解つて見れば、更に其實行を見たいのてある。

自分は平塚さんの實際生活に就いて直接に知る所の無い反對に、間接に噂話は聞き過ぎる程聞いて居る。お約束した瀧田さんへの言譯に其れに就いて有つて居る感想を少し許り書き添へませう。

自分の聞いた澤山の噂話の中から自分の採用するのは、平塚さんに最も接近して、膝と膝と常に差向ひになる計りてなく、魂と魂との呼吸を聞き合ふ平塚さんの先覺てあり、後援てある人や、平塚さんを女主人公として長篇小説をお書きになつた人や、また其人々を繞つて居る人々やが、自分に向つて直接に語られた話の範圍だけてある。

初めの頃自分が其人々から聞いたのは、平塚さんは久しく座禪をして居る人だと云ふ事てあつた。座禪と云ふものは其經驗のない自分に取つて遠い別世界の事てある。謎てある。座禪が解らねば平塚さんが解らないなら、永久自分は平塚さんの全的生活を理解せずに仕舞ふてあらうと思つた。

其頃に平塚さんは清淨な處女てあると聞いた。自分は其れが嬉しかつた。曾て或雜誌て述べた様に、自分の戀愛觀も貞操觀も處女の純潔と云ふことが基礎にな

つて居る。之は自分一人の感情で萬人には通じない事かも知りませんが、自分は今でもさう信じて居る。自分の考では肉は靈の象徵であつて、肉を汚すことは靈の汚れを證明することである。自分には斯う云ふ自重が自發的に内在して居る。そして戀愛と云ふ唯一の交響樂が靈と靈との間に始つて、肉と肉もまた相許される。其れは肉を汚すのでなくて、樂器を役立たせるのである。靈と靈とが纏れ合つて更に新しい生活を創作する象徵詩が戀愛と肉との關係である。こんな清敎徒の信仰のやうな戀愛觀、貞操觀を以て居る自分に取つて、平塚さんが娘時代の貞操の亂れた日本の氣風の中に、處女の貞操を自重しながら、女子の解放や戀愛の權威を論ぜられたりするのが嬉しかつた。平塚さんの學問より、座禪より、議論より、何よりも處女の純潔を守つて居られると云ふ操持の堅剛なのに敬意を拂つて居た。

所が去年の正月、平塚さんを女主人として長篇小說を書いた人の口から直接聞いたのは、あの女は處女でないと云ふことであつた。自分は美くしい夢を蹴破られた氣がした。外の人が云つたのなら自分は一笑に附したに違ひない、又平塚さんびいきの自分は屹度其人を憎んだに違ひない。併し平塚さんが處女であるか無いかは平塚さんに聞くのも此人から聞くのも全く同じである關係の御當人が直接に語られた事である。自分は其時から平塚さんの議論に對する心持が一變して仕舞つた。

其後自分は歐洲へ行つて、短い旅行の間に英佛の若い娘、殊に高等敎育を受けた若い娘、其れから女權論者などの品行に就いて成るべく其實際を知らうと勉めた。そして歐洲の旅行で自分の藝術は動搖したが、貞操觀は少しも動搖させられる事が無かつた。婦人が解放されて獨立すれば貞操も餘計に侮辱を受けずに獨立せられるものであることを知つた。

巴里に居る間、自分は日本の新聞に平塚さん達が遊里へ行つたと云ふ記事があるのを見て、自分は早速「其れは例の新聞記者の捏造でせう、厭な噂を立てますね」

と云つた意味の手紙を平塚さんへ出す原稿に添へて書いた。立派な家庭の教育ある娘にそんなだらしのない行ひは無い筈だと、一概に新聞の記事が腹立たしかつたのであつた。

其れから日本へ歸つて來たら、前に述べた平塚さんに最も親しい先輩で且つ後援者である人や、其人の弟子に當る人で自分の友人である青年の人などから、青鞜社の平塚さん達が五色の酒をカッフエで飮んだと新聞で書かれた事や、遊里へ行つたことも、ほんの醉興で遣つたのだと云ふ様な事を聞いた。そして自分は五色の酒は歐洲の女が昔から飮むものである。其れを飮んだと云つて騷ぐ日本人も可笑しいが、さう云ふ眼界の狹い日本人を相手にして主義の宣傳をしようとする若い女が、人の目に立つ場所でそんな酒を飮んだり、いくら醉興にせよ、わざわざ吉原あたりへ出掛けなくても好さ相なものである、低級な男子でも人の前で顏を赤める様な事をなぜわざわざ若い娘さんがするのであらうと思つた。

其後自分は頻々として耳にしたことは誠に書くに忍びざる事ばかりである。平塚さんの眞實の全的生活を知りたいと思ふ自分は、其中の一二を露骨に書いて平塚さんの說明を求めてもよい。

某海岸の避暑地で平塚さんの關係した男のこと。

某酒亭で平塚さんが靑鞜社の忘年會のあつた夜に關係した男のこと。

細い事は省いて是丈の事を書いて置く。斯う書いて居る中にも、自分には其れが皆噓のやうでならない。是非とも噓でなくてはならない氣がする。併し是等の戰慄すべき事柄は「まことしやか」でなく、「まこと」として私は聞いたのである。

之に對して自分はまだ半信半疑である。之を以て自分は決して平塚さんの人柄を批評しようとするのでありません。平塚さんに就いて斯う云ふ噂が平塚さんの最も親近な人々の間にもあると云ふ事實は之を公にした方がいゝでせう。どうか之が噓であつて欲しい。噓だとすれば、かつて平塚さんの最も親善な友と認めら

れて居た尾竹紅吉さんは平塚さんを貰らうとされたのであらうか。避暑地のことも、忘年會のことも皆紅吉さんが目撃した人として話が喧傳されて居るからです。此樣な忌はしい噂が自分の耳に入る程であるから、其れを平塚さんが耳にせられない事もない筈である。若し噓ならば自尊心のお强い平塚さんが先づ第一に其れを辯駁せられ相なものである。

若しまたそれが事實であるなら、平塚さん程の大膽な女がなぜ其れを臆病らしく秘密にされるのか。青鞜へ書かれるものに有りの儘の事實が現れ相なものである。從來の無敎育な娘がした樣なふしだらを行ひ、女の貞操を二三にして平氣で居られるなら、其れは思想の墮落であり肉の解放である。議論のみが如何に新しくても其行爲は最も古い女である。實生活を基礎とした議論、實生活を改造して行く努力の伴ふ議論、其れでなくては虛僞の議論、價値のない議論である。議論は益〻上へ向いて、實際生活は益〻下へ向くと云ふのは自分のなつかしい平塚さんとしてはあり得ない事のやうである。

どれが眞實ですか。自分は迷つて居ます。自分は之を思ふと涙がにじんで來る。飽迄平塚さんをそんな女として考へたくないのですから。

△平塚女史

岩野泡鳴

平塚女史に關しては、文章世界記者の依賴に依り、その六月號に多少詳しい紹介をして置いたが、こゝにも僕の考へは、極簡單にだが、述べて置きます。僕は婦人の自覺運動は社會がこれを助長してやるべきものだと云ふ立ち場に立つてゐるから、機さへあらば辯護の位置に立つてゐますから。

平凡な婦人があまりに鼻につき過ぎた現今の社會だから、ちよツと違つたことをしても、婦人でありさへすれば珍らしがつてゐるのも尤もだが、あんまり珍らしがり過ぎる傾きがありはしないだらうか？　これは

僕が先づこの答案を書く前に一應讀者諸君に注意して置きたい。

それから、社會が――殊に新聞社會が――こと更らに何でもないことを、かう云ふ婦人達に關して報道して置いて、それをわれから鬼の首でも取つたやうに大切な而も唯一の批評若しくは非難の材料にしてゐるやうだ。その一つの證據は、新聞記者としても高等な方の菊地幽芳氏の如き人までが、かう云ふことを云つてゐる――「新らしい女は、社會の反抗と云ふほどに深刻な意味の反對ではなく、只冷笑を受けて、眞面目な人に齒されぬ傾がある……なぜと云へば、彼等は思想の上の新らしい女ではなく、行爲の上の新らしい女であるから。」

これを實際に照り合はせて考へて見給へ。新聞の誇張的記事を根據にした以外に、何等の內察もない言であることが分らう。青鞜一派――と云つても、責任者は三四人しかないが――の現狀は、思想の上でこそ多少の仕事をしてゐるが、行爲上にまで進むところへはまだ行つてゐないのである。菊地氏の云つてることは何をさしてゐるか分つてゐるが、その所謂行爲上の注意を引いた若い一名の婦人は、それが爲めに、今は、仲間を遠慮して同社から退いてしまつたほどだ。

そんなことはこの場合どうでもいゝとして、婦人の自覺が必要なのは分り切つてる以上、おそかれ早かれ、その運動が初まるにはきまつてゐる。それを平塚女史は、まだ早過ぎたかも知れないが、代表して立つたのである、女史自身では、行爲どころか、運動と云はれるのさへまだ遠慮してゐるやうだ。

女子大學の家政科を出た人だが、とてもあの科を出ただけでは持てない讀書力も思索力もあるやうです。女史が青鞜で譯出してゐるエレンケイの婦人論には多少間違ひがあつたと方々で注意してゐますが、あれが本になる時は、その間違ひを訂正するだけの雅量も忠實もないやうな人ではないでせう。頻りに研究してゐるやうです。

かの女の書いたものがこれまでの婦人から見ればず

ッとしッかりしてゐるので、隨分方々で讀めました。今回もそのことを云ふ人が別にまだあらうと思ひますから、僕は今かの女の缺點と見える方を云つて見ませう。それもまだ一家を成した人のやうに見てかれこれ云はれる時機にはまだ達してゐないと思はれるのでありますが――

會つて見ると、その聲までが極しとやかな婦人だが、書いたもので見ると、なかなか熱があるのが分りますが、その熱があり來たりの佛敎思想に捕はれてゐるやうなのが第一の缺點です。婦人の自覺と云ふやうな事を主張するのは、わが國に於ては、新らしい事ですが、その自覺を結局は佛敎（若しくは同女史以外の社中の或者のやうに耶蘇敎）へ持つて行つてしまふのでは、その結果は決して新しいものとは云へないのです。

それからかの女の觀察には矢張り舊式な抽象癖がつきまとつてゐる。これも佛敎的空理の影響だらうが、以後これを遮さけるやうにしなければ、いつまでも眞に新らしい人生觀や社會觀には達し得られまい。わが國の低い知識の婦人間には新らしいと云へても、新らしい時代の思想に添ふわけには行かなくなるだらう。

さうかと云つて、かの新眞婦人會など云つて實は舊い思想ばかり並べ立てたり煮え切らないことを云つたりしてゐるよりは、かの女の決心的態度の方が婦人の覺醒を促す上には、無論、尊いものであらうと思ふ。

△作物とは違つた人

尾島菊子

私は平塚明子さんと云ふ方には、まだ二度しかお目にかゝつて居りません。最初に會つた平塚さんは、聲のやさしい、態度の落着いた、物言ひの圓滑な方で細い眉と涼しい眸との間に、何處までも負けぬ氣の張りを見せてゐる、一寸女丈夫――とても云ひさうな型の方に見えましたが、二度目に會つた平塚さんは、前とはずつと碎けて、調子もすつかり世間慣れてゐました。殊に其時は大分酩酊してゐらしつたので、私など

にいろ〳〵と子供らしい無邪氣なことを云つて甘えたりなんかして、心から懷かしい姉さんにても久し振りて出會したやうに、私の體を確りと抱きすくめて、ぐん〳〵私の胸に顏を埋めていつまでも離れまいとなさる樣子などは、ほんとにまだやつと十二三の可愛らしい孃さんのやうにも思はれました。

けれど、醉つてゐない時の平塚さんの步きぶりを橫から見ると、どうしても男性的のところがありますね。

作物を通して想像した其作家と、直接に會つて見た其作家とは、いつもひどく喰ひちがつたところがあつて、或意味の失望を感じさせるものですが、平塚さんに於いても全く書かれたものから想像したのと、會つて見た時の印象とは、隨分違ふやうです。併しこれはさう云つた惡い意味で云ふのではありません。あの奔放自在な筆鋒から推したら、どんな人だらうと思はれるが、會つて見れば實際普通の優しい女であると云ふ事なのです。

私は平塚さんと云ふ方に、或一種の同情を持つてゐる一人ですが、今後相思の結婚でもされて、其上の平塚さんの思想なり感情なり飾りつ氣なく公にされるのを伺ひたいと思つて居ります。

△私の見たる平塚明子氏

岩野清

平塚明子氏は現在私の友人であります。尤も近く度度接するやうになつたのは昨年の十月大阪から歸京してからの事ですから、まだ一年にはなりません。が、兎に角短い中にしては打明け話もしましたし久しい前からの友人にも劣らぬ程、お互に知り合つてゐると思つてゐます。ですから今平塚明子論をするのは少し早すぎると思つてゐます。何故ならまだ書いた書物と云つてもさう澤山ありませんし、今やう〳〵個人として社會に認められ始めたばかりの時なので、平塚氏として完成してしまつたのでもないのですから、現在に於て價値を定める事も當を得てゐないと考へますから。

然し未成品にしても將來必ず傑出した女性になると云ふ事に就ては私は信じて斷言します。明子氏は自分の知識や頭腦は禪から來たものではないと思つてゐられるらしいし、又禪を學んだと云ふことも避けてゐるらしいが兎に角思想や頭腦を練るのに禪が好い素養を成したのは否定出來ない事實だと思ひます。然し又一方にはそれが明子氏の思想の上に少しく害を殘してゐる事も私は信じてゐます。例へば自己の最も擴大の極致を無我の境地にありと說くのもさうです、祈禱の極精神集注の極無念無想の境地に立つて尙且自己があると思つてゐられるのもさうです。自己を忘れて何物が殘るでせう。私は意識をはなれ自己を忘却した世界を信ずることが出來ない。これは或は私が、私の說が間違つてゐるのかもしれません。私が實在の外に、意識のある世界の外には何物をも信じない現實論者である立場から見たからかもしれません。然し何れにしても平塚明子氏は現代の日本婦人中秀でた人には間違ひないこれだけ思索力に富んだ人は少ない。これだけ理路の通つた統一した議論を書く人も少ない。

ソラに對する觀察を見ても、マクダに對する觀察を見ても並々ならぬ理解力と特長ある明子氏の個性を充分に窺ふことが出來ます。

さうして大抵の婦人ならあの位の知識を持つてゐれば直に安心して努力も研究もしなくなるのですが、明子氏にはそれがない。絕えず研究と努力とを續けてたゆまない。隨分意志の鞏固な何物も動かす事の出來ない信念を持つてゐますが、友人などに對しては謙遜で傲慢らしいと思はれる態度が少しもないのは私の敬服してゐる所です。

明子氏はあまり群集の中を好まれない。どちらかと云へは靜座して讀書するか、靜かな郊外などを散步したりするのが好きらしい。斯う云ふ所も私は矢張り禪から來たものだと思つてゐますが若い婦人として多くない上品な趣味だと思ひます。

さうして自分を內省する心と他人を容れる雅量とが修養をなして下女はしたに對しても相當な人格を認め

た取扱ひをしてゐます。何か自分に對して意にみたない事があつても、「あの人はあゝ云つた性格の人だからあゝするのだ」と客觀的に理解してやると云つた風なのです。

森田草平氏との事があつて以來世間から折々品行に就て誤解を受けてゐるやうです。然しあれだけ自尊心の強い、理智に勝つた人ですからさう矢鱈に自分を投げ出すやうな輕はずみをする譯もありません。しろと頼まれたつて出來る人ではありますまい。只時々の遊戲衝動から一寸からかつて見る程度の輕い冗談位は云ふかもしれません。然し本氣になつて戀をしようとするのには明子氏自身として冷靜になりすぎたてせう。同時に又戀に對して考へる閑もない程知識の充實に熱注してゐるらしく見えます。

昔は隨分直情徑行だつた樣ですが、雜誌を出すやうになつてから、色々の方面の人に交際した結果普通の知人に向つては可成相手の氣を兼ねたり、遠慮したりして處世的の態度を取るやうに見えます。勿論自己をまげると云ふのではありませんが、好い意味に世間なれたと云つて好いてせう。

明子氏は金錢に對して淡白です。其結果計算の方はどうも不得手で何日も損をしたり、收支償なはない事が多いやうです。明子氏自身としては一個の私經濟などに頭を使ふよりは勢力をそんな事に消耗させるのは大きな自分と云ふものから見て惜しいと思つてゐるのでせう。

かう云つた明子氏を世間一般の婦人に對する目で見たり評したりするのは、明子氏自身も迷惑であらうし、眞の明子氏を理解した仕方でもありますまい。

△禪に於ける平塚明子

兩忘庵にて　後藤宗碩

平塚明子が禪を初めたのは確か明治三十八年の秋頃であつたと思ふ。當時明子は女子大學の英文科かに居つたのであるが、學友の木村まさ子といふ人に連れら

れて兩忘庵へやつて來たのである。其頃は女子大學からやつて來るものが五六人ばかりもあつたが、明子が別に他の人よりも際立つて居つたといふやうな事はなかつた。禪をやつたといつても詰り、兩忘會に出て、月に五日ばかりある節心をやり、そして宗活老師の前に出て、參禪をしたに過ぎないのであるから、もとより專門に禪を修めた人などゝは比べ物にならない。極端に惡口をいへば矢張り一種の野狐禪といつてよいかも知れない。尤も私も宗活師に隨つて翌三十九年の八月に渡米したので、明子が兩忘庵へ來たのは一年足らずの短い間であり、其後は淺草の海禪寺で、興津清見寺の坂上眞淨老師について參禪したさうであるから、兩忘庵を出てから或は大いなる修業を積まれたかも知れない、が私の處に居つた頃には大した事がなかつたといふのが事實である。

　私の處へ來た頃には何等目立つた事もなかつたが、只何となく新らしがつてゐたのは事實である。何か餘興のやうなことをやつても新らしがつてゐたやうである。それから私が只一つ記憶して居ることは、當時私は文科の哲學科に居つたので、私に向て、何かよい哲學雜誌を選擇して呉れといつた事がある。其時私は明子に向て、哲學をやるよりも味噌摺でも稽古しなさい。殊に哲學をやるに雜誌などを讀むのは第一間違つて居る。雜誌學問てどうして哲學など出來るかといつた事がある。私の覺えて居るのは此れ位のものである。私の處を出てからの修業の深淺は知らないが、世間て禪學令孃だとか何とかいつても、禪の造詣は知れたものと思ふ。

△自叙傳を讀んで平塚さんに至る

尾竹紅吉

いゝにしろ、わるいにしろ、人一人をあらたまつて評をすると云ふことは隨分責任のある、そしてむつかしいものです。

かりに此の場合の平塚さんにしても、私達友人が集

つな場所では隨分忘れずにいつてもなにかしら話しあふ所謂問題の人なんです。

その問題の人、平塚さんを、さてあらたまつて個人として對する場合、そして評すると云ふことは、かつて友人同志で話しあつた樣にどうしてもうまく出てこない。ことに私は平塚さんとは可成り接近したことのある人間であつたゞけ、又一部の人たちにそのことを認められてゐるだけに、なかなかことがむつかしいのです。

どうしても人を評するには直接ぶつかつてその人の生活にまで立入つてゐたり、なにかしら一部の關係を結んだと云ふやうな人には出來るものぢやありません。

といつて私が平塚さんのことに對して全くかくことを有つてゐないかといつて、決してさうぢやないんです。

平塚さんに對して隨分いろんな問題を結びつけてゐるそれだけに知つてゐることも多いんですし、又私だけ我儘な解釋をつけながら知つてゐることも有るんです。けれどその知つてゐると云ふことも平塚さんのあらはれた知識や位置や調子ぢやないんです。かつての日常生活の一部だとか、感情に於ける平塚さんだとか家來に對する平塚さんだとか、又平塚さんの一部の趣味や興味を指してゐるんです。

とにかく平塚さんの評とか明子論とか云ふことは私として後日にはつきり發表する場合が來るだらうとも思ひますし、そして又こゝでは他の方々がさうした評だとか論をなさることゝ思ひますから私はかつて私の幼稚な頭に幾度か寫つたことのある、そして今も尙よく覺えてゐることとだけをあらあら申します。

人を評すると云ふことは、私にとつての大責任ですから私は先づあたりさはらずに平塚さんをほめておきたいと思ひます。

私が一番最初平塚さんを知つたのは草平氏の自叙傳を讀んだ時なんです。その時私は隨分、樣々の好奇心を自叙傳を通して平塚さんの上に描いてをりました。そ

してどうも不思議なすばらしい人だとも考へ、恐ろしい人のやうにも考へ、女として最も冷つこい意地の惡い人のやうにも思つてをりました、結局私は平塚さんはすぐ解釋の出來る人でさうして普通の人より感情の高い人であると決めました、そして讀み終つた日などは、すぐにでも東京に出て面會して私の解釋がどうだか見きはめたいとまで好奇心を一ぱいもつてをりました。

私はその時まだ平塚さんがそんなに世間を騷がしてたえらい人だと知りませず、平塚さんの創作にしろ、仕事にしろ一度も接してゐなかつたので自然社會上の位置だとかそんなものは全々頭には入つてゐなかつたんです。

只自叙傳といふ舶來種の喜劇の主人公として私は最も好奇の眼を出來るたけみはつてゐたまでゞす。

それからまもなく東京にロダンの展覧會を見に來たとき平塚さんに初めてお目にかゝつたのです、丁度二月の十八日でした。

平塚さんの門の前に連れてこられたその時、私は右の手に自叙傳でも持つて一々讀んでゐるかのやうに、舞臺監督のやうな心持で私はそら芝居が始るのだと云ふ風で門をあけました。それから私が平塚さんに逢つて歸へるまで自叙傳のことが芝居のせりふのやうに耳につきまはつてゐました。

なんのことはない自叙傳を脚本に仕組むだやうでした。

そのせゐで平塚さんとの對面の印象は間違ひを多く得たかも知れません。

とにかく私は、なつかしい人でそしてえらい人だと思ひました、何故えらい人だと思つたかと云ふのは、平塚さんに逢つたとき、私は今死後の生活と云ふことを考へてゐると話されたのです。とにかく大阪のやうなところにくすぼつてゐた私が不意にかうした立派な言葉を聞かされたと云ふことは、幼稚なそして現在の生活に對して、まだなんの意識も理解も有つてゐなかつたその時分の私には、只感心して驚くより外なかつ

たのです。この話は今でも平塚さんとの一つ話になつてゐます。話が違ひますがその時私が大阪に戻つて兩親にそのはなしをして、どうぞ私も女子大學にでも入れて下さい、とてもこのまゝぢやあゝした立派な言葉が覺えられませんからといつたことが有る。私は、時時その自分のいつた言葉を思ひ出して吹き出すことが度々である。

それから一年もすぎた今日になつてゐるけれど死後の生活はおろか現在の生活にすら悶えてゐる。さうしてみると平塚さんは餘程、超越した、卓越したえらい人に相違がないんですね。

私が再び上京してから、私と平塚さんはよく逢ふやうになつたんです。私が自叙傳をよんだときに握つてしまつた好奇心をどうにかしてはつきりしてしまひたいと云ふ私の行爲は、又いつの間にか平塚さんからもいぶかしい不思議な奴だなあ、どんな奴かと云ふそこに起きてくる自然の好奇心がいつの間にか、かち合つて、さうした中から、いつの間にか眞實が生れそして私と平塚さんは、一歩ふみ込んだ場所に愛と云ふものを結びつけて立つてゐるやうになつたのです、それからあら〳〵一年間弱、私は平塚さんに對してなつかしい、と云ふ感情より外、持つことが出來ないやうになつた爲に、私は平塚さんを本當に局外者となつて、即ち第三者となつて觀察したり知ると云ふ機會を失してしまつた理なんです。

この頃では少し離れてゐますから比較的第三者の位置で平塚さんを見ることが出來ましたから、そのことも一所にして書いて見ようと思ひます。

勿論これからは、きれ〳〵のあたりさはらずのことばかりです、ちつとは僞も交へなければならないのとほゞ同じ意味でかきます。

平塚さんは、今本當の目方より少しふやされて量りにかけられてゐる樣です。

分銅の間違ひか、それとも量る人の間違ひか、それとも本人の量衣が、少し普通のより重いのを着てゐるかに違ひはないんでせうが、とにかく價格よりずつと

ずつと高く品物が賣れてゐるやうです。勿論それをあたりまへのやうにして賣つてゐる人も暢氣ですが、それを又平氣て、ねぎりもせず買つてゐる人たちのお芽出度さ加減にも驚きますね。

このことは平塚さんともちよつと話したことが有りましたつけ、平塚さんもあんまり世間や周圍の人達が本當の仕事もせぬうちからこんなにお祭り騷ぎをやつて困つて了ふといつてゐました。そしてうるさいから少し何處かに靜かに隱遁して自分の本當の仕事を時がくる迄したいと。私は勿論さうですともと答へました。本當にこんな風な容子ぢや平塚さんは勿論のこと迷惑ですが、なんにも知らない人達も隨分可哀想なわけですからね。

けれど、これらは要するに少し實際に觸れたかのやうな問題ですから極端にも話せますけど、實際、今少し、本の數も讀み怠つたり、あそびすぎたり、わからずやの女達や、女學校にゐたりする人達のまだまだ多い今の世の女性のなかでは、なんといつても全く平塚さんは、旗色鮮明です。

人と云ふもの、性と云ふもの、自然と云ふものに平塚さんとしては全く接觸は勿論、理解も有つてゐらつしやる。彼等、ざつくばらんの女性感情にのみ支配されてゐる女性よりは、比較するだけ、失禮かも知れないが長じてゐられる。

このことは、好嫌はさておき、世の學者達が認めてゐる。引いて一部の教育者も見てゐる筈です。

所謂、頭腦明晰なんですね、森鷗外先生のかつて平塚さんを評して八面玲瓏の云々とありましたが、私は八面か何面かそれまでは知りませんが、とにかく、はつきりした頭は使ひ方で度々見出すことが出來ると思ひます。

私はこんな方面のことはかかない筈だつたんですが、人が賞讚することはやつぱり私も賞讚しなければいけないやうに思はれましたので。話が又はづれました。

平塚さんは世間に紹介されてゐる點と大變に相違のあることは、勿論之も私だけの考へですが世間で人の

言ふ、平塚さんが男性的の人だらうと云ふことです。これは、全然相違してゐます。勿論、平塚さんの仕事の方はそれでいゝんです、けれど日常の平塚さんに接すればだれでもその、優しい、軟かな調子に一驚しませう。

平塚さんは白鳩を飼つてゐられます。御自分の室の前の縁にいつも靜かに置かれてあります。

一體ものを飼ふと云ふことは、なかなか出來るものぢやないんです、いくら女だといつても、草花を育てたり、小鳥を飼つたりすることは容易なことぢや出來ません。

私は、平塚さんによつてさうした優しいことを見出し得ることを他のだれが飼ふよりも美くしゝ嬉しく思つてをります。

いつかも、さうでした去年の秋でした、庭に紅いふようの花が一ぱい咲いてゐる時分に、平塚さんのその鳩は病氣になつて眼を片方つぶつてをりました。平塚さんは毎日毎日いろんな藥のことを考へたり手術法を考へたり、それは〳〵心配をしてゐられました。そしてその鳩を綿に包んで自分の室のなかに入れておいたりして、私はそんなことを見たりしてゐるだけに全く平塚さんは眞から優しい心持の女性であると思つてをりました。今でもさう信じてをります。

鳩の兒が出來たときでも、毎日巣をのぞき込むで、時々はしごをかけたりなんか大騷ぎで遊びにいつた私なんか、かはる〳〵卵の安否を心配したものでした。

こんなことは全く平塚さんを知らない人達にとつては最も耳新らしいことだらうと思ひます。

それから年下のものに接しては、いつもそりや優しかつたのです。そして年下の者の行爲に對しては、或る程度までの責任を有つことを決して辭す樣な人ぢや有りません。

やはり大將株は家來に對してはさうあらねばならぬでせうね。

私は平塚さんに對して悲喜交々の感があるそれだけに、だん〳〵かうして平塚さんのことを書たり、考へ

たりしますと、やつぱり惡いことより、なつかしい好い思ひ出が出るのはあたりまへてせう。

平塚さんは、私達よりどんなにか感情强くあつたてせう。私はかつての私と平塚さんの間の感情や行爲を思ひ出しますと、とてもこの原稿がかけません。平塚さんは、私達より、どれだけか淚もろかつたてせう。私はあらゆる我儘をしてゐたゞけ平塚さんを困らせたものてす。今考へると全くお氣毒てす。

以上の感情家てあつただけ、又容易に早く理性の人となり得た方てした。けれど私は、平塚さんは決して理性の人とは言ひ切れない。むしろ私は激しい感情家だとは云ひ切れますが。

けれど、それだけに平塚さんはえらい人なんてせう。私達以上の感情をもつてゐられ乍ら又感情家の相添へない理性の人を含有して平然となられると云ふことは全く私達のやうな女性にとつては心得ておかねばならぬことてせう。

平塚さんは又一般の女より、ずつと〳〵勉强家てす、女と比較するのは惡いんてすが、男は女より勉强家てすから其勉强家に比べて云ふと少しいけませんから。三十日のうち、いつも勉强してゐられるやうてす。

この頃はエレンケイてお多忙てせうが私の知つてゐました頃は、どんなときても、なんと言ふことなく讀書にふけつてゐられたやうてす。

とにかく話を聞けば合點することばかりてすし、理窟や議論に於ても、全くらしいことの多いんてすから、やつぱりざらある人達の群からは、選ばれて立つてゐる女性と私は思ひます。

平塚さんの人格や、行動に對しては、所謂この頃どこやら人達のよく口にせられてゐる俗衆の噂やざれごとのなかに交つてよく聞もしますが、そんなことはどうてもいゝてせう。

平塚さんの周圍の人達は樣々てす。私は只平塚さんは人を使ふことが下手なやうに考へられる。そんなことは世間的のことて卑まれるかも知れないが、けれど大きな仕事をせんとする以上は、或る程度までは良好な家來をもつことが必要てす。平塚さんにはすばしこい參謀官の必要が私には有るだらうと信ずる。

今、平塚さんの最も近い周圍に家來としてベストをつくした人達が一人てもゐたら、平塚さんはもつと上手に今より以上に眞價に立てゐらしたかも知れない。不幸か幸か平塚さんは今、いゝ家來があまりないや

うてす。家來兼世話女房の格の人がゐないやうです。

私は平塚さんにい丶家來の三四人、早く出來ることを祈つてをります。

しかしこの頃平塚さんの口眞似をした、平塚さんの趣味や性格や思想を眞似して、やれ大自然にぶつかるとかなんとか云ふ人が出來たらしいやうですが隨分馬鹿げた暇人てすね。

なんだかばら／＼になりましたが、私はこれより以上かくことを好みません。後日又あらためて申上げる時も有りませう。

人を評すると云ふことは、かうしたかき方に於てさへ、なか／＼、遠慮をする、そして苦しいものですね。

まだ平塚さんの華やかな物語りやなんかはか丶さずに耳にはしますが、そんなことは別段縁起の悪いことても、又腹の立つことてもなく、只さうしたとの次から次ぎ現れるとに對して羨ましい位の程度でおきます。

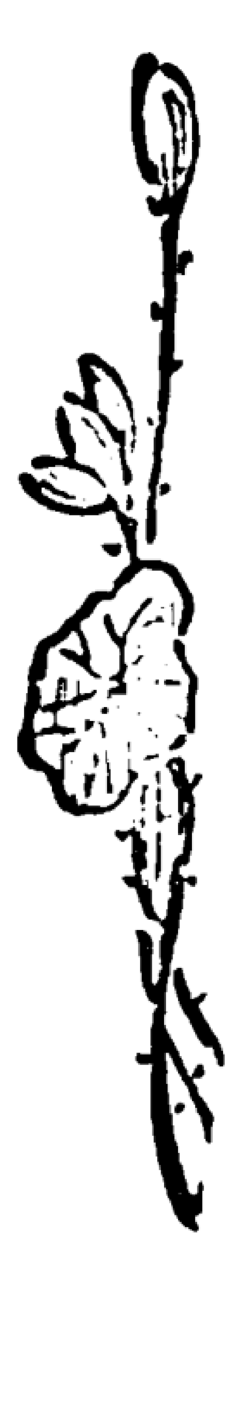
人を多く愛せるだけ愛し、そして人にも多く愛せられると云ふことは平塚さんから、かつて伺つたことてすし、そして、若者を愛しても、それが世間ありふれた戀だの騒ぎだのと云ふのぢやなく、平塚さんに愛されたものは十二分にその天賦な天才を見出してもらつて、その利用法を考へられて、決して青年期をあやまらせるのぢやないと云ふことも伺つてゐましたから、私はかへつていろんな天才を作り出して頂くことを、人類同志としても悦び合ひたいと思ふ位ゐです。これは少し皮肉のやうですが全くさうなんです。

色彩の强い話はとかく人を羨やましがらせますね、そしてその羨やみがいろんな噂を作りますからね。けれどこんな連中に限つて小さきもの、憐れなものとても云ふんてせう。

只私はこれ以上かくと云ふことを妙に束縛されもし又壓迫されもしてゐるやうです。

この記事はかへつて平塚さんの今の位置なり、名譽なりを傷けたかも知れませんが、しかしその邊のことはどうぞしかるべく御許し下さい。

私がこの原稿をかくに對して、充分の好意をもつてゐることは、全く實際だと云ふことを信じてゐますから。



婦人の職業研究

職業としての女醫

東京女醫學校長 吉岡彌生

婦人問題に就いて私は常に斯ういふ考を有つてをる者であります。婦人の教育は婦德を根本にして、次に智育を進めることを主眼とせなければならぬ。然るに現在の教育は智育をのみ練磨することに努めて、婦德の養成を怠つてゐはしないであらうか。女子の獨立自營といふことも、それが女子の本分と相距るものであるかの如く思做してをるものもあるやうであるが、果して女子の獨立自營と其本分とは相矛盾するものでせうか。

凡そ家政は女子の職務であります。然しながら家政を掌ることのみが女子の本分ではありません。時勢の進運に伴つて女子も夫によりてのみ衣食するに止らず進んで生活の爲めに其職業を求めなければならぬやうになるのは當然の結果であらうと思ひます。今日に於いても社會の中流以下の階級に位する者は職業として或は田畑を耕し、或は家畜を養ひ、其餘暇を以て家政の任務に當つてをるではありませんか。日本の文明は寧ろ下層社會から進歩したものと言ふ可きでせうか。即ち中流以上の家庭に於いては、妻は只徒らに空々寂寂の生活を營んでをるのを見るのであります。然るに今日婦人の獨立自營といふ事に就いて之を非難せんとするが如きは抑も當を得ない事ではなからうかと思ひます。彼の歐米に於いて唱へらるゝ女權擴張並びに參政權獲得運動などは須らく先づ女子自らの位置を高め

る教育と修養とを積んで、男子の尊敬を受けるやうに力めなければならぬ。精神的修養も無論必要ではあるが、人間が物を喰つて生きてゐる以上物質的生活をも決して忽諸にしてはならぬと思ひます。一家經營の能力を有ち、生産力を身に養つておきさへすれば、夫の變節とか收賂とかの忌はしき行爲をも防ぐことが出來る。宜しく今後の女子は身に生産力を養つて海外に發展することを志すべきであらうと思ひます。

茲に亦女子の獨立自營といふことと家政殊に育兒とは矛盾するものゝやうに一般考へられてゐることでありますが、決してさういふことはありません。寧ろ却つて社會と接觸する機會が多い爲めに自ら見聞を廣くし眼界を大きくして、個々の業務に就いて親しく手を下す事が出來ないとしても、中樞的に働いて行く事が出來て、結果は却つて見るべきものがあらうと思ひます。

只茲に一つの男子の方に對する註文としては、從來の如く女子を機械視し物質視することを廢めて貰ひたいことであります。お給仕もさせるは着物を着るにも手傳はせるといふやうな今迄の習慣を改めて、妻の地位を一歩高く認めて頂き度いことであります。特に育兒に至つては非常に良好な結果を導くのであります。母たる人が相當の生産的能力を有してゐる事を子供が認めたならば、是れまでのやうに子が母親を馬鹿にするといふやうな事はなく、愛と共に尊敬の念慮を以て相對するに至り、從つて母の威嚴は增して子供を教育するに都合の良い結果になるのであります。

偖然らば女の職業として醫者を選ぶとして、家政とは何ういふ關係を持つてあらうか。是も些かも矛盾する所は無いのであります。何故ならば今日家政學と稱する所のものは、重に醫學であります。室内光線から煮沸の事、及び育兒等生理に衞生に總ては醫學の範圍に屬する所のものであります。夫にしても醫者たる妻に家政を任せておく事は此上も無い安心を得られる譯であらうと思ひます。

然らば更に進んで女子の醫者そのものは如何といふ

に、患者は其容體を訴へるに心易く且つ緻密に訴へる事が出來る。殊に子供はおばさんに對するやうな心持て、いゝ、おべゞを脱いて、ポン／＼を見せもする。さういふ長所があるのみてはなく、細菌學や醫化學の研究に至つても綿密に倦まずして成遂げる事に於いて女子は男子に劣らないと信じます。殊に女子は手先が器用てある。今日の場合世人の最も女醫に要求する所は産婦人科に小兒科てありますが、世間ては婦人科の患者が女醫に診察を受ける事は却つて厭ふ傾向が有ると噂さするやうてすが、それは花柳界の女にても限る事てせうか、私どもては無論さういふ傾向は認めません。矢張り今の場合は最も婦人科向きに適當してゐるやうに思はれます。或は又時に女は感情的てあつて到底も冷靜な態度て外科の手術を爲す事は出來ないだらうと言はれる方もありますが、事實は全く反對てあります。私は女は果して感情家てあらうかといふ事を疑ひます。決して患者を見て感情に惱んだり、血を見て驚いたりするやうな事は決してありません。唯其缺點としては、男子と違つて年頃になれば結婚をせねばならぬ事てあります。少し良い口てもあれば結婚の方に走つて了つて、それが爲めには學術の研究を半途て廢して了ふやうな事になります。てないまても男子と違つて色んな煩瑣な業務の爲めに追はれて研學を妨げられる事てあります。若し確固な意志を有つた女子に相當の時間を與へて勉學せしめたならば、技術のみてなく學問としての醫學の方面に於いても今後男子に劣らぬ成績を擧げ得るものと私は信じてをるのてあります。

都下の女記者

紅蓮洞

女の新しい職業か新しい女の職業か

女優より前に、女の新しい職業に女記者といふが出來た。尤も女優の方はぐつと以前から女役者といふものがあつたが、此の女記者の方には全然(まるつきり)昔から其の氣のするものも無かつた。全く女の新しい職業だ。さう

いふ職業だから、其の女記者なるものゝ人物は、果して世の新しい女であるか何うか分らないまでも、確にそれがにほひだけはして居る。

此の新しい女といふ言葉が、眞面目にもいはれ、又冷笑の意味にも使はれて、判然と分つて居らぬときに其のにほひだけして居るなどゝいふは全く曖昧朦朧の話であるが、此の新しい女といふを善意に解釋する人は其方から此のにほひといふを認めてよし、さうてなく惡意の側から認めるなら亦さう認めても差支ない。此のにほひには善い香もあれば惡い臭もある。確然何ういふ句であるといふことが出來ないから唯ぼんやりとにほひがするといふだけに止めて置くが、それだけ亦此の女記者には、同じ頭腦を使ふ職業にせよ、教育家の方にある棚橋さんや三輪田さんの樣な老婦人は見えない。何れも若い人達だ。婦人畫報記者といふ名刺を持つて歩く女の中に矢吹鶴子といふ大年增があるが、大方其の人が其れの年長者てあらう。とにかく、女記者といふは女の新しい職業てあると共に新しい女の職業てあるといふても宜い。

大ざつぱに僕の都下に於ける女記者觀をいうてしまへば先づこんなものてある。

やはり舊い女だ

かういふ女が何處の新聞社にも一人か二人かが抱へられてあり、雜誌の方ては何處てもとまては行かないが、大抵の婦人雜誌には此の女記者といふが附いて居る。委しく統計を取つて見たとは無いが、恐らくは三四十人はあるだらう。男の方ていふと此記者なるものは、其の品位からいふても一から十まてあり、其の執る仕事に於ても種々雜多てあるが、此の女記者なるものは新聞に於ても雜誌に於ても何等の違ひはない。品位からいうても、何れも所謂訪問記者なる部類に屬すべきもので、其の擔任の業務は婦人家庭に屬することてある。男の方の樣に言論で一世を指導しようの社會の機微を穿つて報じようとするものは殆んど無い。編輯長若くは主筆のいひつくるまゝに大家だか名家だか知らないが、直にお座なりの名論卓說らしきものを

吐き得る人の許に行つて、其れを筆記し其れを紙上に載せるだけである。新しい女の職業であるからといふて、自己の主張や意見をいはうとするのではない。自己のそれ等とは違ふが違ふまいが、それ等のことには頓着ない。何でも原稿になつてしまへばそれで宜いのである。何時ぞや、帝劇の女優劇で藝妓が嘘言を吐かねばおまんまが喰べられないのかと歎いたところがあつたが、眞實、此の女記者といふのも、心の裏では泣いて居るか、それとも心から嬉しがつてやつて居るのか分らないが、とにかく、其の職を行つて居るところを見ると、此の藝妓の部類で藝妓が新しい女であると、いはれない以上は此の男の主筆なら編輯なりのいふがまゝに動く女記者はやはり舊い女である。現に其の新しい女の標本といはるゝ「青鞜」の中野初子の如きは、其の自己等の主張とは遠くかけ離れた思想の漲ぎつて居る、いはゞ舊思想に傾いて居る婦人雜誌の訪問記者を、足袋縫の内職よりは割が宜いといふてやつたこともある。

除外例もある

何物にも除外例がある通り、此れにも除外例はある。「婦人の友」の羽仁もと子の如きは、假令、其の裏には良人が居るにせよ、自ら其の雜誌の主宰となつて采配を振つて自己の意見を世の家庭に普及せしめようとして居る。其の抱ける思想は所謂世の新しい女連から見ると舊いかは知らぬが、其のやつて行く仕事の上からいへば、女記者中の異數といふて宜からう。猶一層飛び離れたものになると、所謂世の新しい女連に反抗して立つた「新眞婦人」の西川光子の如きがある。同志を糾合して、女の爲に氣焔を揚げて居るなどは、其の親戚になつて居る與謝野鐵幹が、嘗て同志と共に一團體を造つて雜誌「明星」を發行した時の概がある樣に見える。其の主張や人物はともかく、女として活動せるかういふ女記者も一人や二人は居る。猶も一層烈しいのになると、今は築地の料理屋の女將ではあるが、時事新報の記者であつた下山京子の如きは、大阪在勤中に、神戸邊で料理屋の女中となつてまでも浮世觀察を

やつたものもある。これは恐らくは變裝女記者の元祖て、猶もそれを猛烈に極端にまてやつたものてあらう。其の後ちよい／＼變裝女記者的の仕事をする女もあるやうに聞いては居るが、それ程のことが實際にないところを見れば、女記者はやはり訪問記者の一部てあると見ても差支無からう。

文藝好きから

訪問記者であるとてさう馬鹿には出來ない。假令、先方がお座なりに名論卓説らしきものを吐くにしても、速記者とは違つてそれを聞き分け了解するだけの能力がなければならぬと共に、それを文章に綴ることが出來なくてはならない。まんざらの無教育者ては無論のこと、並一通の女學校出ては勤まらない仕事だ。それかあらぬか、此の都下の女記者には、女子大學校の出身者が多い。然し此等の出身者にしろ、又他の者にしたところて、敢て女優の樣に、それが養成所といふがあつてそれから出て來た譯てない。さりとて男の樣に、在學中から既に後來の社會の木鐸を以て自ら任じて、それからなつた譯てもない。大抵の女記者は學校時代に於てよく文藝といふものを嗜んだものてある。始めは他人の作物や何かを讀んて嗜んて居たものが、何時の間にか自分もやつて見たくなる。此處まては何事にもある嗜好心理の原則通りてはあるが、女といふものは虛榮心の强い者てある。晶子が何うの一葉が何うてあつたなど新聞や雜誌などてわい／＼囃し立てらるゝと、此の虛榮心はむら／＼と上つて來る。唯さへ嗜好があつて自らもやつて見たくなつて居る處に此の虛榮心が手傳つて來る。ます／＼上つて來る。そこへ文藝といふものは文章といふものと全く離れざるものてあるから、勢ひ文章の練磨といふことは自と出來てくる。用だけのことが辨ずれば宜いとあきらめをつけて居る他の者よりは巧妙くなるには違ひない。そこて、自ら得たところがある樣な氣がする。といふたとて、綠雨がいうた通り、天才は犬ころが何時も天ぷらやの屋臺の下にころがつて居るとは違つて、唯文章が書けるといふだけの處には居らない。さうかうし

て居る中に、新しい女のにほひのするだけに、一と通りの常識はあり、其の文章が綴り得るところから、傳手を求めて女記者となつてしまふのである。つまり、女記者は閨秀作家たらんとして成り得ざる者の仕事である。

閨秀作家候補者

實に女記者は閨秀作家に成り得ない者の仕事である。然し成り得ないというたとて成り損ねといふ譯ではない。唯成り得ないだけで、今後成り得る者あるかも知れない。或意味からいふと閨秀作家の卵子であるというて宜いかも知れぬ。それになるまでの生活費若くはそれが幾分の補助にもといふ譯で行つて居る人が少くはない樣である。自分が働いて得た金錢であるからといふてもあらう。此等の連中は他の女學生達とは違つて、よく帝劇や有樂座などで新しい芝居のある時、ぞろ〳〵手々引合て廊下を歩いて居るのを見受るが大方藝術的氣分でも養つてゞも居るのだらう。然し今までの處、此の女記者は、初めは其等の抱負少くともそれ位の氣位があつても、やはり女である。それまでに至らない中に、良緣か惡緣か知らないが大抵嫁いでしまつて、母なり妻なりになつてしまつた。中には時事新報の大澤豐子、萬朝報の服部桂子の樣に、十年一日の如く、女記者といふ職分を守つて作家にもならず、母にも妻にもならないものもあるが、大體は初めが作家自稱候補者後には唯の人の妻なり母である。尾島菊子の如く、自作の雜錄を書いても、其の署名を許されなかつた女記者から、夫持たずに閨秀作家扱ひされる今日に至つた者は至つて稀である。萬朝報に居た河越輝子などは何うやら作家扱にされかゝつたが、今は名も聞えなくなつてしまつた。退社後生活難から狂人となつたといふ噂もあつたが、それさへ、いふものも無くなつてしまつた。

女には嫌はれ男に好かる

聞くところによれば、此の女記者の始まりといふは報知新聞で、今でも勤めて居るが磯村春子を採用したのが起りであるさうだが、今では前にもいふ通り各新

聞社にはこれが無くてならない様になり、婦人雑誌もそれに倣うてこれを必要として居るが、多分、其の理由は女のことだから、女のことや家庭の記事を擔任させるに適して居るとてもいふのだらう。併し局に當つて居る人の話には、さういふ點からは必要は認めない。何にしろ文部大臣の奥田がいうた通り、大根や菜葉を喰つてる者に西洋料理の講釋をするといふ様な家事科を教はり、加之、獨身の若い身そらて、眞に家庭の何たるかヾ了解して居らないものが、何て世に向うてそれ等のことを報道するの資格があらう。唯男よりは幾分か餘計に家庭内の言葉を知つて居る位が勝してあると。これは或は極言したのてあらうが、他から見ると、婦人を訪問させるには男より女の方がよささうて、男ばかり相手にせず女をも相手にしなければならぬ世てあるから、此の女記者なるものヽ長所も此處にある様に思へるが實際はさうてないらしい。女の坐つて居る店には女客の入り難いと同じ様に、訪問を受くる婦人に取つて此の女記者は迷惑に感じて居る。來られてくだらない婦女的の觀察をやらるゝよりは却て男のさつぱりとした方が善いといふ話てある。かく、女記者は婦人の受けは惡いが、男には却て歡迎さるゝ。嘗て、山崎千代子といふ今の日々、元の毎日電報の女記者が新渡戸稲造を訪ねた時、心よく會つてもくれ、又話もしてくれた末、共に外出して晩餐の御馳走までしてくれたさうだが、男の訪問數多しといへど、これだけの待遇を受けたものは何處にもあるまいといふ話だ。門前拂ひを喰はせざるに會つて話してくれるのが關の山だ。女記者には女といふ弱者の强が存して居るから滅多に男から門前拂を喰はせらるゝことは無い。

浮名は女優と同然

新しい女といふ語は未だ彼地のサフラゼットの様には世俗には聞こえぬが、又その意味は何うても少くも變つた女位には聞こえる。此の女記者も新しいにほひのするだけ、他の新しい女の女優や閨秀作家と同じ様に、いろ〳〵の浮名が立てらるゝ。眞に浮名かまた實際かよく其邊のとを確めたとは無いが、それともいろ

いろの噂や何かの種になる。容貌が少しても醜といふことを離れるゝ猶更だ。何うせ男の大勢わい〳〵やつてる中で働く仕事である。萬緑叢中紅一點とは實に此の女記者のことだ。よく此の女記者の書いたものゝ中に、初めて記者となるの記などゝいふを見ると、自らを狼群の中に投ぜられた羊であるかの感じがしたなどとあるが、其の羊が進化論の原則を外れて狼化してしまふのか、それとも狼の毛色の好さゝうなのを見付けたのか長い間には此の狼と羊とが一所になつた話も少くはない。又社長といふ大狼の權威におぢてしまつたのか、それに喰はれたといふ浮名まで流したものもある。もと〳〵文藝好きといふからなつたもの、其の文藝といふを尊重するから延いては其の文藝家をも尊重し、婦人の節操を無視するを以て有名な一小文藝家と關係したを自ら誇りに振れ歩いた女記者もあつたさうな。とにかく此の女記者には世間にばつとゝまでもなくも、少くとも其れが知人間にはいろ〳〵の噂を立てられるものが多い。こんなこと、あんなことを書いて居た日には、眞に日も足らない譯で、餘り話も綺麗でないから、こゝには止しにするが、若し社會にその必要ありとしても眞の女記者の現はるゝは前途遼遠だらう。

收入

終りに此の女記者が得る收入のことをいうてけりをつけよう、自ら主宰となり又經營し居るものは格別、雇はれ女記者の收入は何んなものかといふに、一般に他の學問あるといふ女の職業、女教員などに比較すると甚だ少ない。高等女學校の教諭などの方が遙に宜い。いや、高等女學校の教諭に比べられる方は餘程宜い方で、小學校の訓導にすら及ばないものもある。そして此れ等すら、抱へられて月給といふものに有りついて居るものゝ話て、雜誌社などになると其の社の記者たる名刺を持つて歩かせるも、其の書いた原稿紙の枚數によつて拂ふところもある。かういふところになるともなく新聞社の樣に、毎日出勤しなければならぬといふこともない代りに、その仕事も少なく得るところの收入も

極めて少ない。なか〳〵生活を支ふるなどは思ひも寄らぬことだ。それだのに何故、そんな割の悪いことをして居るかといふに、學校は卒業したもの丶、都會生活に慣れた身體である。田舍に歸るのは嫌である。それに新しい女といふ空氣が身の廻りに漲つて居るからである。

こんな風に入れ代り立ち代り東京には女記者といふが少ないながらも、うよついて居るのである。此の外、女記者が女と侮られて僅の事の行き違ひから、女子教育家たる老婦人から猛烈なるげんのみを喰せられたこと、又學校出の新しい女記者が雜誌社から白粉錢にも足らぬ金錢を貰つて、生れて初めて自分で得た金錢といふのが嬉しさに、活動寫眞の貴賓席に入つたなど丶いふ逸話めいたものも、なか〳〵あるが、餘り長くなるから此の邊で止しにする。

女店員の現在と將來

三越呉服店庶務課長　笠原健一

私の店で女店員を使ひ初めましたのは、今から十四五年も以前の事で、其時はまだ二三人の女子を試驗的に使つてみたに過ぎなかつたものですから、仕事も、仕立物の檢査とか電話の應接とかいふやうな至つて簡單な事務を執らせてゐたのでした。ところが其後女子職業學校長の紹介で、學校の卒業生を使つてみて呉れないかといふお話がありましたので、三人の同校卒業生を傭入れることにして、半襟、帶揚げ、羽織の紐とか、櫛簪とかいふやうな小物を取扱はせることにしましたが、それが抑も販賣部に女を傭ひ入れることにした初まりでした。其後此等女店員の成績が比較的良好だつたものですから、今度は公に募集して一時に二十四五人の女子を傭入れましたが、それも今より約十年も以前の事でした。其等の女子にどんな仕事をさせた

かといふと、初めはお茶の給仕、御客の接待等をやらせ、引續き計算事務を遣らせたり、手紙の整理をさせたり、或は品物を御渡しする所や、食堂附、茶室附、寫眞部、美術部、又は模樣室附といふやうなものに試みて居りますが、結果が宜しいので、現今では追々女子を增員して六七十名の女を使用してをります。

大體以上のやうな成行で、女店員の數が次第に增加してまゐりますにつれて、女店員中に相當の資格のある年輩の人を選んで監督の役を遣らせてをります。何しろ女店員の多くは若い年頃の事であり、お客に接する仕事に馴れて居る人は少ないものですから、執務の事以外に行儀、服裝といふ樣な事にも充分監督をしないと、店の風紀や體面上に非難が起らないとも限りません。ですから私方の規則としては第一に服裝(みなり)ですが、是れは必ず綿服に限ることにして、絹物を着て來たり華美な風をする事を堅く禁じてゐます。それから第二に化粧を用ゐない事ですが、眞白に白粉を付けて化粧をした者は何となく下品に見えて不可ません。それから髮は束髮といふ事にして一切油を用ゐてはならない事にしてをります。これは臭氣を避ける爲めで、要するに服裝容姿共に清潔を旨として、人に不快の感を起させないことを努めてをるつもりで御座います。

次に男女の取締りですが、是れも若い男と女とが一所になつて仕事を爲るのですから、萬一にも間違ひの無いやうに相當の注意を要する事と思ひます。私の店では、店に居る間は事務上の用事の外一切男店員と談話を交換する事を禁じてをります。さうして歸りにも男と女とが一時に込み合つて出口を出るのは見苦しいものですから、第一號の鈴で先きに女を歸らせて、十五分經つてから第二號の鈴で男子を歸すことにしてをります。即ち内部からも外部からも取締を怠らないやうにしてをります。

今日のところ女店員の成績は概して良い方です。がまだ純商賣向きとして呉服の販賣方には女を一人も使つてはをりません。是れは素人考へには一寸不思議なやうで、婦人だから男子よりも寧ろ適當ではないかと

いふ風に考へられますが、呉服を取扱ふには非常な素養が必要であつて、男子の店員にしても十三四歳から十年以上も其經驗を積んだものでないと務まりません。いくら婦人でも其一種の教育と訓練とを受けない者には、呉服物の品質、模様、色合の意匠、流行、又は織染、刺繍、裁縫の事まで、僅かの月日で決して委しく解るものではありません。少くとも現在の社會狀態では之を婦人に望むことが出來ません。といふのはどうしても女は年頃に成ると結婚をする爲めに店を退いて了ふのが多いのです。即ち一身の都合上出替りの多いといふ事は女店員使用の上に非常な缺陷だらうと思ひます。私の店では何時までも永く勤續する事を望んで居るのですが、或る所によると女店員を一種の傭兵のつもりで、一時の間に合はせに使つて、不要な時には解雇して了ふやうな方針を採つてゐる所もあるさうですが、是れも一概に無理とは申されません。

玆に女店員の短所を擧げてみますと、多くは頭腦を要する仕事が出來ない。素養のいる事が出來ぬ。人の上に立つて澤山の部下を指圖して働かせることが出來ぬ。いくら忙しい時でも男女混淆で居殘り夜業を爲せる等の事も出來ない、年頃になれば結婚をする。結婚すると出産とか又は家庭の用務に囚はれて次第に缺勤が多くなるといふやうな短所を有つてをります。その代り萬事丁寧柔順で、上長の命に克く服從し、つまらない――と言つては語弊があるが――謂はゞ無趣味な仕事をも甘んじて成遂げる點や、比較的緻密に深切に事を運んでゆく所などは女の長所として數へることが出來ると思ひます。

要するに私方の經驗に依りますと、今日までの女店員といふものは確に或點までは成功したものと言つて可からうと思ひます。只是れ以上女子が何處まで其力を發揮し、何處まで發展し何處まで成功するか。それは疑問ですが。然し非常に教育のある、素養のある人を用ゆる場合は格別、今日の處普通販賣店で使傭する女子に向つて、より多くを望むは無理だらうと思ひます。

女教師

東京市教育課長　戸野周二郎

「婦人の職業」所謂良妻賢母としての職務は天職である。これは職業とはいふ事は出來ない、只天職を盡すだけのものである、殊に良妻は對象として夫を、賢母は對象として子を認めんければならぬ、獨立したる職業とは益〻以て言ふべからずてある、婦人の天職以外に獨立したる職業を有する事の可否は、甚複雜にして容易に決し難き問題てある、けれども、實際の事實は多くの獨立したる職業を婦人に提供して居るのてある、何人が提供したのてあらうか、社會より外に之を提供するものはない筈てある、しかしこれを受くると否とは婦人の任意といはねばならぬ、社會よりの提供殊に職業上の提供は主として實益上よりくるものてある、經濟上よりくるものてある、多くの職業が今日、婦人に提供せられてあるとすれば婦人は今日に於ける社會の職業上少なからざる要素となりて其の實益上其の經濟に貢獻する所甚だ大なるものありと謂はねばならぬ、もし婦人にして職業に就く事を肯ぜざるに於いては經濟上一大恐慌を來たすべき職業が少くとも三四に下らぬてあらう。如何なる職業と雖も、婦人の爲めに枉げて與へられたるものは一もないと僕は斷言したいと思ふ、生存競爭は利益の爭奪を意味する以上此の間に立ちて枉げて職業を婦人に與ふる程、社會は寛大てない筈てある、個人にはさる同情家も少なからぬてあらう、然かし社會はしかく溫情なものてはないのてある、されば今日、婦人の從事せる有ゆる職業は、孰も社會の要求に應じて婦人が之を承諾したに過ぎないと謂はねばならぬ、乃社會が婦人を聘用して各種の職業を提供したのてある、此の職業が婦人に適する、彼の職業が婦人に適しないといふ事は男女の生理上の相違より來たもの丶外は（此も大に研究を要する事項てあると思ふけれ共）詮索する必要がないかの如くに僕に感ぜらる丶のてある。職業は孰の職業も神聖てある。（勿

論合理なる意味に於いて）各自の事情より打算して各種の職業に從事する是亦神聖たるを失はない。然らば孰れの職業を選ぶも、正當合理の職業なる限り、共に婦人に適當したる職業に相違ない。一方には社會の要求あり、他方には各自の異なる特殊の事情あり、此の二者の一致したる場合に於いて、玆に或特定の婦人が或特定の職業に從事するのであるが故に、僕は今一度繰返へして言ひたい、如何なる職業が婦人に適するかといふ事は如何なる職業が男子に適するかといふ問題と同樣に解釋したいのである。但念として斷つて置くが、婦人は凡て良妻賢母たるべき天職をもつて居るのてある、此の重大なる天職を盡す事は婦人に取りて最必要なる事柄てあつて、又何等他の職業を顧みるに暇あらんやといひたい事は固よりてある。されども社會の要求と、各自の事情とによりて、此の重大なる天職の傍、もしくは此の天職を離れて、專心に或職業に從事する場合に於いて又其の適否を論ずるの要なしとはなければならぬ。

然りと雖も職業に就くと就かざるとは勿論婦人の隨意てある。經濟上、實益上、婦人より就職の拒絕に遭ひて、社會は困難する事も勿論あるてあらう、しかし社會は之を咎める權利はない、强請する事は固より出來ぬ筈てある、只玆に是非とも、婦人の肯んぜざるべからざるしかして否まれては國家社會が存立の基礎を危くすと謂ふべき職業が一つあると思ふのてある、換言すれば婦人が第二の天職として必ず從事すべき業務が一つあると思ふのてある。何ぞや、女敎員是也。

女敎員は何故に女事務員、女子勞働者、女實業家、女子藝術者、女文學家其他巾幗者流の職業に就事するものと趣を異にするてあらうか。

凡そ敎員は國家の官吏てある、くはしく謂はゞ官吏に准じたる國家の機關てある事は今更言ふ迄もない。しかし官吏なるものは公法上の契約によりて就職するものなりといふ法理の正しき以上、敎員亦此の範圍に屬して就職を强要する譯には行かぬ、已に强要する事が出來ぬとすれば就職の如何は固より自由意志に屬す

る、自由意志の任意に其職を選び得る事は、女教員も亦女子にして他の職業に從事するものと毫も選ぶ所はない。然らば則ち女教員が獨り女子の職業として其選を異にする所以のもの果して何處にあるてあらうか。

詮じつむれば女子の職業として必ず何人か教員たらざるべからざる事は矢張り其の天賦に因由するのてある、一言すれば女子に伴ふ副貳的の天職てある。

試みに思へ、子女の教育は女子を除外して成立するものてはない、學校教育、殊に國民教育並に其以前の保育事業は女子と離れて爲し得るてあらうか、獨り國民教育のみならず其以上の教育に於ても學問、技術、乃至職業(女教員たる職業は此限りに非ず)を授くる專門學校はいざしらず苟も人としての女子を教育する高等女學校等に於いて、女教員を要求せざる事を得るてあらうか、女子師範學校の如きは勿論言ふ迄もなき事てある、然らば則ち多くの女子の職業中高等女學校以下(職業教育としては、女子高等師範學校以下)の學校に於いて必然的要素、これなくば其の目的を達し得べからざる重要なる機關として要求せらる女教員程存在の價値の顯著なるものがあり得るてあらうか、僕は其の之れ無き事を明言して憚らないのてある。經濟上必要なりとはいへ、女の職工は男子を以て代へ得るのてある、實益上重寶なりとはいへ電話の交換手は男子を以て之に充つるを許さゞる理由はない、其他の職業亦概此類てある以上、其適否は敢て論ずるを須たず女教員こそは女子の職業として國家も社會も將た個人も公認したるものと謂ふべきてある。

而して女教員の現狀は如何てあるか、日本全國に就いては暫く措き、又國民教育以外に關してはこれを他日に讓り、玆には東京市小學教員の概況を擧げて公論記者足下に對する答案となさうと思ふ。

東京市内の公立小學校に於いて未だ奏任待遇の女教員はないが判任官たる女教員は次第〳〵に増しつゝある、即ち、最近五年間の調査に據るに明治四十一年には判任待遇の女教員が七百二十人なるに對し四十二年には八百九人となり、三年には九百人となり、四年には

九百四十人、五年には九百四十四人となつて居る、四年より五年への增し方は甚少いがこれは、直ちに解釋することは困難である、只事實をお知らせする迄である。

一體本市小學校敎員の總數は遂に三千を超過して居る、しかして男女敎員の割合は男六十七人に對して女三十三の約二分の一である、其癖、生徒の數は男女殆ど平均して居る、此の割合の當否はまだ〳〵研究して見なければならぬ、しかし需要供給の關係が如此現象を示して居る事は事實である、又最近の調査に據れば男敎員の本職に由つてのみ得る最高報酬（副貳的の收入は之を省く）月額百八圓なるに對し女敎員は四十五圓である（副貳的の收入は省之）男敎員最低收入は十六圓なるに對し女敎員は十四圓である（孰も副貳的收入は省きて）男敎員の月俸平均は卅一圓なるに對し女敎員のは廿二圓强である、其在職年月は男子の四十一年五箇月なるに對し女子のは三十三年四箇月である、男子の最短一箇月なるに對し女子は二箇月である、イヤ此の比較は無意味であつた、しかし現在男敎員の平均奉職年數は十一年强なるに對し女敎員のは八年强である。女敎員の國家社會に貢獻する所亦甚だ大なりと謂はねばならぬ、しかして以上掲げたる統計は之を意味を付すれば敢て乾燥なる數字の序列とは言ひ難きものがあるであらう。けれども餘り長くなつては御退屈故餘は讀者諸君の判斷に任かして此處にて筆を擱かう。

予は予の娘(又は孫娘)に如何なる女たらんことを希望するか

此問題に對する三十名士の意見は、次に揭ぐる如き本社よりの問に答へられたるもの也。こゝに謹んで返書を賜はりたる諸名士に其御厚意を謝す。

謹啓。時下益々御清榮奉慶賀候。扨近來婦人問題に對する論議なかなかに夥しく、一方に「新らしき女」といひ、「新賢妻良母主義」といひ、「婦人の經濟的獨立」といひ「婦人の解放」といふものあれば、他方に之に反對して駁擊を加ふるあり。異說紛々として適歸する所なき狀態に有之候を憂ひ、來る七月十五日を以て「中央公論」臨時增刊として「婦人問題號」を發刊し、此問題に對する正當なる解決を下したきものと計畫いたし居り候が、凡そ問題は己れ自身の問題として考へ候程親切にして周到なる意見は有之まじく、彼の婦人問題の如きも、一度び己れの娘(又は孫娘)の將來と聯關して考慮致し候時は、娘(又は孫娘)を有せぬ人が無責任に言論を弄するとは甚だ其趣を異にするものあらんと存じ申候。

夫れ思想問題には國境なし。歐米列强の人の心臟を鼓動せしめつゝある問題は直ちに我邦人の脈搏にも響應するの有樣に有之候へば、彼に昨日ありしことは我之を今日に見、彼の今日味ひつゝあることは明日又我之を嘗むるの覺悟なきを得ざることゝ考へ申候。さすれば從來穩健を以て聞えたる英國に於て彼の婦人參政權論者を出しゝが如き頗る殷鑑に値すべく、單に舊きが故のみを以て之を尙び、又徒らに新らしきが故のみを以て之を喜ぶが如き頑陋なる保守と輕躁なる急進と、共に妥當の見と稱し難かるべく、世の子女を有するもの總て此問題につい て懊惱致し居ることゝ存じ候へば、今茲に『予は予の娘(又は孫娘)に對して如何なる女たらんことを希望するか』といふ題に對する貴下の穩健卓拔なる御返答を得、之によつて世の女子敎育に對する惑を解くの途を與へたく存じ候につき、御多忙の處甚だ恐縮に御座候へ共、來る七月五日までに何卒御高見御寄送の榮に預りたく伏して懇願仕り候。

○男子に對抗し得るだけの婦人たらんと

安部磯雄

夫が外に在りて働き妻が内に在りて働くのは一の分業であつて、其生産者たる點に於て夫婦何れも異なる所はない。妻の働きは貨幣といふ形式に於てこそ現はれね、其を金錢に見積つたならば決して少ないものてはない。されば結婚生活は共同生活であつて、決して妻が夫に養はれて居るといふが如き間違つた考を許すべき筈てない。然し女は男に養はるゝものてあるといふ迷信が尚ほ廣く世に行はれて居る今日に於ては、婦人は已むなく自己の威嚴を維持するために經濟的獨立の途を講ぜねばならぬ。別言すれば結婚生活を爲さずとも、相當の生活費を得るだけの資格を養ふ必要がある。余は此意味に於て余の娘を教育したく思ふ。

余は余の息子が教育上受け得るだけのあらゆる便宜と特權とを娘にも與ふる積りてある。教育といふが如き恩典はなるべく各人平等に與ふべきものて、余は此點に於て男女の間に區別を設くることを好まない。

余は余の娘が如何なる困難にも貧苦にも忍耐すべきこと、結婚生活が吾人の取るべき常道てあること、其夫の爲には如何なるものをも喜んて犧牲に供すべきことを教ふる積りてある。然し同時に娘の人格に對して侮辱を加ふるが如き男子には決して屈從してならぬことを教へたい。此凛たる態度を採らしむるに必要てあるから、余は余の娘に高尚なる教育も與へたい。職業的教育も與へたいのてある。

勿論教育の目的は個人的能力を充分に發達せしむるにあるので、男子に對抗せしむるといふことを主眼とすべきてない。然し婦人の教育を盛にすれば、其結果は自ら男子の横暴を拒ぐといふことになる。余は此偶然の結果をも考へて娘を教育して居る。

國際關係を比喩に引用するのは穩當てないかも知れぬが、娘に充分なる教育を施すのは恰も軍備を充實せしむる樣なものだ。軍備の充實は必ずしも戰爭を目的

とするのではない。却て平和が眞の目的であるかも知れぬ。婦人の高等教育も一種の平和的武裝であつて、結婚生活にとりては非常に幸福なることであらうと思ふ。

概括して言へば余は余の娘が平和の婦人であり從順の妻であらんことを望む。然し男子の横暴なる行爲に對して飽くまでも屈從せよとは勸めない。從順にも限りがある。婦人の威嚴をも蹂躙せられて尙ほ從順であるのは全く奴隷的屈從である。余は余の娘が此の如き卑屈なる婦人たることを好まない。

○姉は女教師、妹は女義太夫

青柳有美

予に二人の娘あり。予は、その未だ生れざるに當りては、生るゝほどの娘を悉く藝者たらしめん事を欲したりき。然れども、その生れて漸く生長するを見るに及んでは、何れも其容貌に於て藝者たる資格無き醜婦、或は準醜婦なるを思ひ、今や全く是等二人の娘をして藝者たらしめんとするの念を撤するに至れり。

而して、長女は之を郷里の縣立師範學校に入學せしめ卒業の後、更に高等女子師範學校に入らしめ、更に文部省の留學生にでもして貰らひ、高等女子師範學校の教師にでもなりて貰ひたき所存なり。必ずしも結婚せしめんとする意無し。是非にと想ふ男にてもあるに至らば、結婚するも亦當人の自由なり。次女は長女に比し、容貌稍ゝ昴り、且つ體格强健なるを以て、當代第一人の女義太夫たるに至らん事を希望しつゝあり。たゞ、普通教育と淨瑠璃教育とを如何にして幼時より平行に併せ施すを得べきかに就き苦心す。既に女義太夫となれる上は、假令男子と私通關係を生ぜりとて之を責めざるも、結婚若くは男子と同棲するに至らざらん事を望む。長女次女何れに於ても、多少生意氣なハイカラな女になりて貰ひたし。グータラの意氣地無しは平に御免なり。智慧がありて少々は薄情にても氣輕に且つ機敏に、萬事に早く氣が着きて敏捷に振舞ひ、

眼から鼻に拔けるやうな賢き女になりて貰ひたし。ノロマな頓馬は、如何に人情に厚しとて平に御免なり。何よりも燒餅根性とヒガミ根性との無き女になりて貰ひたし。情夫或は良人を持つに至らば、如何に情夫或は良人が浮氣せりとて、これを氣に懸けず、鼻のサキにて輕くフフーンと笑ひ、戯談の一つ二つも言ひ、揶揄するまでの度胸を持ちて欲しきものなり。趣味偏局せず、有らゆる學術、技藝、職業に趣味ある女になりて貰ひたし。如何程、一藝に達したりとて我が職業若くは情夫、良人の職業、若くは或る一事物以外に趣味の同情なき偏屈な女になりて貰ひたく無し。宗教に凝る女には無論なりて貰ひ度無し。僕は自覺せりとやらいふ女は大嫌ひなるも、娘が自覺とやらなせる女となるは勝手次第なり。娘の意志は常に父たる僕の意志なるべければ也。

○武士的精神に新らしき知識

大町桂月

我娘を如何なる女となさむとするかとの御問に對し、卑見申上候。

小生思ふに、女の生命は、愛に候。年少くしては親に從ひ、長じては夫に從ひ、老いては子に從ふとて、女子の三從と申すこと有之候が、三從と云はゞ云はるれど、實は三愛に候。少くしては、親を愛して、之にすがり申す也。長じては、夫を愛して、之にすがり申す也。老いては、子にすがれど、息子は嫁に取られて、孫にすがるやうになり申す也。譬ふれば朝顔の花、すがるものなくては、立ち行かざる也。新しき女なり、自覺せりなどと申しても、それは、ほんの紅顔未だあせざる間にて、顔の皺が白粉でも隱せぬやうになりて、すがる所の無き女は、如何に綺羅を飾りても、心中の眞の平和は得られざるべし。人の運を大別すれば、初運、中運、晩運の三種あり。父母にすがる間が初運也。

この際、父が死したり、繼母にかゝつたり、家が貧に過ぐるなどは、初運の惡きもの也。されど、初運が善過ぎて、氣隨氣儘に育てば、却つて中運が惡くなることあるべし。初運は善かれ、惡しかれ、直ちに過ぎ去る。譬ふれば、昨日食ひたる牡丹餅の味、今日から見れば、まるで夢なり。中運は夫の如何に依る。うれしいこともある代りに、苦しいこともあるものなり。金が無ければ無いて苦しく、金があれば有るて苦し。この際、決して他を羨むべからず。他所目には氣樂さうに見えても、實際に立ち入りて見れば、誰にも苦勞はあるものなり。中運の間は可成長けれども、これも過ぎて仕舞へば、まるで夢也。孫にすがるに至りて、始めて晩運となる。この際、子の有無良否、孫の有無良否が、女に取りては、大問題也。金の有無は、問題にならず、教育や、學や、藝やに由りて其日を過すとも、子孫なくては、心が寂しかるべし。男は晩節が大事也。女は晩運が大事也。今の處、我家貧なれども、人並の教育は施すを得べく、我娘の初運は惡き方に非ず。嫁するに至りては、夫たる者が心だに賴もしき人ならば、金に不足するも仕方なし。不遇たるも仕方なし。中運好ければ結構なれど、惡くとも、之に堪へて、どうか、晩運をよくしたきものと存申候。それにつけても、身體の壯健なることが肝腎也。妻として、母として、家庭の主宰者として、人並の力量を有せねばなり申さず。ひと通りの常識ありて、夫の精神と趣味とを解し、虛榮に馳せずして經濟を善くし、夫をして内顧の憂なきやうにしたきものに候。適否を考へて、それ相當の内職をすれば出來るくらゐの素養あるが宜しと存申候。女を大別すれば、おとなしき女と利かぬ氣の女との二種あり。おとなしき女は利かぬ氣の男に配して陰陽相補ひ、利かぬ氣の女はおとなしき男に配して陰陽相補ふものに候。二者いづれにても可也、唯おとなしきは善けれど、ぐずては不可也。利かぬ氣も善けれど、あばずれては不可也。要するに常識の如何に在り。娘の性質如何にもよれど、學問よりは藝能、藝能よりは心がけ、おとなしくして、而かもしつかりしたる女に致

したく候。困難に屆せざるやうに育てたく候。如何に生活難の世の中とても、いやしく、さもしく、不人情なる女には致したく無し。氣の利くは善けれど、餘り神經が尖りては、家庭の幸福は得られず、本人も苦しかるべし。愚癡っぽく、いつも不平だら〳〵ては、家庭の空氣を腐らせ申候。分る處は分りて、大體は樂天的なるこそよけれ。譬へて見れば、梅や桃の實、外面は柔かなれども、中に堅き核あるがよし。葡萄の如く、ぶや〳〵ては閉口也。さればとて、栗の毬の如く、がりがりしては、あたりが迷惑千萬也。ひつくるめて申せば、舊來の武士の娘の精神に、新しき知識を加へて、世間と竝行して、家を治め、子を育て、心身の勞を辭せずして、いつも樂天的に活動すれば、中運も善かるべく、晩運も善かるべきかと存申候。

○反撥力あらんこと

文學博士　姉崎正治

拜啓。婦人問題に關しての御照會簡單に御答へ申上候。

境遇の順逆位置の高下に係らず婦人（のみならず男子も）反撥力のあることを希望致候小生は日本の在來幷に現今婦人の淑德といふ理想には順の方のみを見て逆に處するの力なきを憾とする者に候はねかへりといふ一語が惡き意味にのみ用ゐらるゝが如き社會は婦人の健全なる發達を杜絕する者と信じ候反撥力は順に處して有爲の資となり逆に處して抵抗の力と爲るべく此さへあれば大丈夫に候小生は二人の娘の父として娘に望む所はこの第一義に候反撥力の根柢は即信愛望の德にて候。

「患難にあるを誇とす、そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずるを知ればなり、抑も希望あれば恥なし、そは我等に賜はりたる靈を以て

神の愛我等の心に注がるればなり』

男女共に使徒バウロが此の言の如くあらまほしく希ひ候。

○最舊式の女大學主義を施さん

楚人冠

御尋の件に關し小生の申さんとする所は極めて簡單に有之候、小生若し幸にして娘を有し又不幸にして孫娘を有し居り候はば之に對しては、全部在來の最舊式の女大學主義三從主義賢母良妻主義の教育を施さんと存じ申候。

凡そ字を學ぶ者は先づ眞より始めて行より草に終るを法とす、如何ならん草書ずきなりとて、初より草を學ぶ者候ひなんや、眞體に依りて先づ形を整ふるを知らば、其上行になり、草と崩れんことは銘々のハタラキと申すものにて候、女子教育の眞諦亦斯の如し、二千五百年以來一應形を整へ來りし今の在來の教育は眞體也、之が先づ何よりも前に女子に施しおくに非ずんば、日本の女とは如何やうの者なるべきかを知らしめんこと難し、之を知りたる上にてこそ、之れがイヤならば、行體にも草體にも勝手に崩れて然るべけれ、夫は銘々のハタラキと申すものに候ふ、新しき女といへば必ず眞先に出て來る平塚明子女史とても、元を洗へば古い〳〵達磨の弟子なりし由に候はずや、ほぼ察すべくと存じ候。

有體にいへば小生は小生の娘に對して如何なる女たらんことをも希望せず、小生の多少は文字と若干の女にふさはしき技藝とをだに仕込まば、其の以上は一切女の個性に一任すべしと存じ居り候、親父が時勢の推移をも考へずして、自己の私見を基として己と同型の人間に仕なさんとするが如きは以ての外のひが事也、夫れ親父といふはさう〳〵えらい者に非ず、親父が其子を角力取に仕立てんとしても子供の體格が弱くばせんなき事なり、親父が其子を新しきものにせんとしたればとて、其子が自ら古きに傾く者ならば何として見

ようもあるべからざる事亦之に同じ、人間同じ兄弟に同じ家に同じ父母に育てられながらも體格氣質好尙皆異なるが常なり、毒にも藥にもならぬ限りの敎育ならばこそひとしなみにも施し得れ、その以上の事は銘々の勝手に任すべし、親父なんどの出しやばるべき所ならんや、況や親父よりも古きぢゝいの如きに於てをや。

　此の問題に關し小生の言はんと欲する所尙夥しく有之候、併しながら折角申上げたりとて此の書面は恐らくは、愚にして凡なる「諸名士」のお座なり「高見」と共に列べられて、六號活字に印刷せられて、中央公論の頁ふさげに用ゐらるゝに過ぎざるべし、それが馬鹿馬鹿しさに遺憾ながら此に一先づ筆を擱き申候。

○しとやかに女らしく

笹川臨風

　余は女の自覺に對して同情を寄す、余が娘はしとやかに女らしく育てんことを期待す、但し何等かの場合には獨立し得る氣慨心と力とを養ひ置かんをつとむ。

　余が希望は平凡にして、余が敎育も亦平凡なり。

○希望數ヶ條

精華學校長　寺田勇吉

拜啓。

　予は予の娘に對して左の如き女たらんとを希望す。

　健全なる身體、圓滿なる品性及快活なる精神を有し、能く一家を經營し、子供を完全に敎育し得る女たらしめん事を希望す。

○何事も娘の好むまゝに

文學博士　谷本富

　自分が大學時代の同窓は多く年頃の娘を持ち、尙ほ早きは孫さへ擧げたるもあれども、自分は第一より第三までの子を嬰兒の儘に喪ひ、それより第四第五第六

と引續き皆男子にて、第七番が漸く女の子の而かも今年僅に六歳にて未就學なれば、前途遼遠にて實はまだ何とも定めず。否兄なる男子等はやがて中學校の卒業間近きもあれど、それさへ孰れもまざ確と極めたる志望はあらず。自分平素の教育方針は萬事萬端飽迄も例の自學輔導主義に則り、本人の爲す儘に任せて、兩親は僅に折々消極的干渉を加ふることあるに過ぎず。是れは學説として夙に熱心唱導するのみならず、實際にも可成遵奉して怠らざる次第なれば、別に急き立てゝ忙てるにも及ばずと思へり。されば此の小女子の將來の身の振り方などは多く介意せず、只管健全無病に成長して天壽を全うし、折角享けて生れたる天賦の才能を十分に發達させて、世の物笑ひとならず、其の向ふ處に於てベストたるを得ば則ち可なりと信ずるのみ。

今回御發問に際し試に小女に向ひ「お前は大きく成つたら何に成るか」と尋ねたれば「お母さんに成る」と答へたり。若し三つ子の魂百迄にて矢張り婦女子の常道の通り(拙著「女子教育」に詳論し置けり)嫁して人妻となり人の母とならんとするならば、何卒良妻たれ賢母たれかしと望むめり。勿論此に所謂良妻賢母は世間普通の良妻賢母にあらず、其の事は右の「女子教育」幷に近刊の家庭教育論(「洋行土産談」第四篇)中に述べ置きたる通りなり。併し親の慾目かは知らねども、天分才多く生付きたる樣にも見ゆれば、古の紫清兩媛は暫く措き、今の下田女史などにも打超えて男優りの令名を轟せ、天晴れ第二十世紀東洋隨一の女流として歐米の巾幗社會までも鳴渡らさせたく竊に願はざるにもあらず。若し藝術に堪能ならば音樂家、畫家も好む儘にせよ。更に一歩を轉じては女醫となり女辯護士となり醫學博士となり法學博士となるも太だ妙ならん。女優も强ち惡ろしとは思はず、佛蘭西のサラベルナール英吉利のテリー兩老女史の如き者に成らば恥づべき所なきのみかは却つて大なる譽あるべし。萬一女壯士となりて日本最初の女子參政運動家となり、嬌舌を日比谷原頭に弄して人權を說き自由を叫び憲法を論ずるありとも、適に吾が子なりと喜びてこそすれ悲みはすまじ。嗚

呼是れやがて自分の女子教育論なり。何事も自然に順ひ時勢に應じて着々進歩せんことをのみ切望して已まざるなり。豈に漫に危辯を逞くせんとするものならんや。若し强ひて己の欲せざる所を言へとならば、夫の虛榮一點張りの貴婦人とか謂ふもの、さては頑冥固陋の某々女教育家流など兩極端とも嫌やく。

○百人中の一人の女を無視する勿れ

田川大吉郎

婦人の經濟的獨立は、僕も之を主張しつゝある一人てある、婦人の解放は、僕は多年之を唱へて居る、賢妻良母主義といふ、賢良の二字に對しては、天下一人も不足を曰ふものは有るまい、去り乍ら僕は、女は嫁することをのみ思うて學問すべき者ては無い、女の百人の九十九人は勿論嫁するてあらうが、その一人は嫁せぬかも知れぬ、その嫁せない原因は、病氣のためもあらうが、貧のためもある、學問の乏しいためもあれば容色を氣にするためもある、而して夫らしい夫を看出し得ないためも無くてはならぬし、將た、學問のために、理想のために、その信ずる計畫、目的、事業のために、獨身を便とし、必要とし、それを悲しまざるよりも、それを樂むの境涯と意氣とも無くてはあぬ、僕は女は如何にしても嫁すべきものだ、嫁しさへすれば、即ち皆幸福てあるとは想ひ得ない、此點に於て、僕は世間の所謂賢妻良母主義には甘從し得ないて、而して新らしい女といふ主張にも、雜多の意義はあらうけれど、舊習に囚はれざる、個性の獨立自由を主義とする思想には、相當の敬意を拂はねばならぬと、常々思ふて居る者てある。

例へば日本に來て居る外國婦人の中には、資産なきにあらず、容色なきにあらず、學問なきにあらざるも、尙、日本人を愛し、日本人を敎化し、日本人を慰安し、日本人を向上せしめん至大の目的を抱いて、或は疾病の者を見舞ひ、或は肺病の徒を音づれ、或は鰥寡孤獨

の人を憐み、或は青年の男女に親しみ、身を以て道に殉じて老の將に至らんとするを忘れて居る未嫁の婦人が少くない、僕はその人達の噂を聞き、その音容に接することに、中心から非常の敬意を拂つて居る、それだけ僕は、此の如き未婚の婦人の、日本人に起らないとを不足に思うて居る、多分、社會が進歩すれば、進歩する程、此の如き氣風、理想の婦人が、更に輩出することに爲るてあらう、實際、人のため我身を沒する生活は、人生の最も美くしく、又最も健氣なる生活の一種てある、僕は、人の生活の最高なる見本の中に、必らず此一種の生活あるべしと信じ、之あることを有益と信じ、必要と信じて居る一人てあるだけ、此樣な心がけを鼓吹することをも竊に喜ぶ者の一人てある、それだけ所謂賢妻良母主義のみに歸依し得ぬ節がある。

僕の娘が如何樣に育ちつゝあるかは、別の問題てある、子供は必らずしも親の思ひ求むる樣には育たない、僕は、新しき女を求むる方てある、然し乍ら僕の期待する新らしき女はふ轉婆自墮落の謂ては無い。

○御尋ねに對しては

嚴谷小波

美しくて、愛嬌があつて、悧巧て、元氣て、勇氣があつて、見識があつて、學問があつて、趣味もあつて、親切て、勉强て、それて身體の丈夫な事を希望します。

○一に天道樣次第

木下尙江

父母が其の子女に對して何等か「希望」を描くと云ふことが即ち蹉躓の第一歩なりと確信する我等夫婦は一に天道樣次第に御座候。

○わたしの女の子に對して

與謝野晶子

お手紙を拜見した瞬間、「娘又は孫娘に對して」とあ

る御質問にぎよつと致しました。そんな質問を受ける程のお婆さんに見られて居るのかと驚いたのです。

　自分には七歳を頭にして四人の女の子がある。併し自分の心ではまだ其れを娘と云ふ言葉で現はすべきものとは少しも思つて居ない。外の子供に比べて髪の毛の長い、赤や紫の色のある着物を着る子供だと位に思つて居る。彼等を自分の娘だとはつきり意識して考へる頃には、もう恐らく自分は世に居ない人間になつて居るであらう。實際何だか自分の健康はもう幾年も保たれないやうな氣がして居るのである。

　さてお尋ねに就いてお答へ致します。自分は以前から子供を教育するのに男女の差別を全く立てゝ居りません。四人の男の子と四人の女の子とある中で、現に二人の男の子と二人の女の子とが小學へ通つて居るのですが、自分は平生彼等に對して同じやうに小學の學課が修められるやうにと祈つて居ります。其上の事はまだ考へた事が無かつたのですが、お尋ねを受けて唯今初めて考へて見ると、小學を卒へて呉れたら乾度世間並に一方を中學へ、一方を高等女學校へ入れるでせう。其等の學校を卒業する迄自分が生きて居ると云ふ自信はありませんが、若し生きて居たら、そして兩親の手元で學資を出すことが出來たら、自分は當人達の好きずきな學問なり、職業なりを更に修め得る樣にして遣りたいと思ひます。もう其頃は兩親が差出口をせずとも、家庭と學校と社會とから得た知識で、當人達自身に一生の方針を決めることが出來ませう。兩親はそれを寛大に助成する位置に立てば好からうと思ふのです。

　其れで自分は「何んな女になれよ」と云ふ註文は少しも無い。男の子も女の子も一樣に能ふ丈自分の力を增大しながら、其れを成る丈都合よく用ゐて活動することの出來る運命と境遇とを、彼等自身に切り開いて行く人間になつて欲しいと思ふ計りです。

　自分は子供等に世間並で云ふ安樂な一生を送るやうにとは思はない。兩親が現に嘗めて居る苦痛よりもつと劇しい苦痛に遭つてもよいから、自分の力一ぱい働

目も振らずに活動して、小い人格なら小い人格丈にほんとうの自分に適した新しい生活を作り出し、若くは作り出さうと躍進する人間であつて欲しい。

考へて見ましたが、今の所ではこれだけの事しか申されません。他日自分の子供等を青年とか娘とか云ふ言葉で考へねばならぬ時期が來たら、其時にはもつと細かな注文が出るかも知れませんけれど、今から「何んな男になれ、何んな女になれ」とは考へかねます。十年の後には何んな新しい男が現れ、何んな新しい女が出るか、進化の劇しい世の中に全く其れは豫測致されない事ですもの。

若し强ひて注文するなら、將來の最も新しい人間の中に居て、最も力强い人間であつて欲しいと云ふのですが、人には天分がある、運命や境遇は自力で改造せられるとしても、改造する丈の自力が天分に無ければ一概にそんな事は望まれない。

唯だ何處迄行つて已むかは知らないけれど、自分の力一ぱい自分の躍進を眞面目に堅實に努める人間であつて欲しいと云ふのが、平凡な自分の言ひ得る平凡な考です。以上。

○非干渉主義

志賀重昂

拜復。

小生に於ては平生より男女共に年頃となれば自然に道理を辨へるものなることを確信致候に付自分の子女に對しては非干渉主義を執り居り候間隨て御申越の問題の如きは小生の腦中に皆無に御座候。

右有の儘に御返事まで申上候。拜具。

○他人の「私有財産」たるを願はず

上司小劍

私にも女の兒が一人ありますけれど、まだ「娘」といふほどのものでもありませんし、また「如何なる女た

らんこと」をも別に希望してはゐません。實は自分のことばかりを考へるのに忙しくて、他人(自分の兒も)のことに考へ及ぶ暇もないのですが、御質問の書狀を前に置いて、次の室で若い母に水蜜桃をねだつてゐる「娘」の聲を聞きながら、ちッと彼女の將來を考へると、先づ私と彼女との關係を十分自由にし、「父」としてよりも、友人として長く交つて行きたいと思ひます。私の郷里では女の兒を有つてゐるものに對する惡口として、「他人の嬶を養つてる」といふ言葉がありますが、「他人の femme」になるのはよいとして、「他人の私有財産」にはなつて貰ひたくないと思つてゐます。「自個と自個の全ての周圍とを眞に了解し、自覺した人」になつて貰へば結構ですが、しかし、母に水蜜桃をねだつてゐるオチャッピイが、そんなナマイキなことを考へるほどの年頃になる時、私は一體幾歳になるのかと思ふと、慄然とします。一人前に發育した女をば自分の兒だと言はなければならぬやうな年まで、私は長生きをしやしないであらうと思ひます。……矢張り私は自分のことばかり考へてゐるのでした。

○他に嫁するに差支なきやう

文學博士　村上專精

御尋問之趣き唯成長後他に嫁するに差支なき人となし度といふにあり他は敢て申述る必要なかるべく候。匆々。

○妾の兩息の妻

鳩山春子

拜復。只今書類片付致し候而貴書拜見仕候處昨五日迄に御返事可致旨御認め有之既に時期遲れ居誠に不本意に存候。

實は過日來非常に多忙を極め候折柄不思缺禮仕候。

御申越の儀は頗る興味ある問題に有之元より一言にして意を盡し難く諸の點より熟考を要し候事と存じ候

間何れ他日御面之晤機もあらば其節委細可致開陳候。

今日は爲念申譯旁一言申陳候劇作などの所謂新しき女ノラ、マグダ、ヘッタ、ガブリアル、などの類は取るに足らぬ一片の好奇心を滿足さする迄のものと存じ候加之ならず彼の劇は頭腦の鍛錬せられざる我國婦人に取りては寧ろ有害と存候。

尙我國家庭の問題として夫なる人が熱誠職務に努力致し候留守に妻が若き男子と自由に交際し戀愛主義を以て進退致し居候時は夫たる人は早晩自分の職務に努力する事の馬鹿々々し敷を感じ可申果ては結婚する男子の數を減じ可申候。

歐米諸國既に此弊に苦しみ居候を認め申候。

幸ひに私共家庭に於ては兩息の妻は何れも貞操を重じ誠實に勤勉に而も興味を以て夫の主義に同化し自覺しながら而も從順に又獻身的に夫を內助する精神を以て家政を整理し常に向上進歩せんとて修養を怠らず子女敎育の方法をも眞面目に硏究し適當に之を敎導し居申候。

此模範に依て孫女も敎育致し候ば將來幸福なる家庭を作る次代の國民と爲り得るかと考へ申候へば中等社會の人はまづ此邊にて滿足するの得策なるを覺え申候。

尙生存競爭激烈にして生活難を極め到底結婚し得ざる疑ある人々の爲めには更に御話可致候。

右は御質問に對し的切なる答とは考へ不申候得共考の出つるまに／＼認め候間不惡御取捨被下度希上候。

匆々敬具。

○淸福なる人生を享樂し得ることを

小山鼎浦

貴翰拜見。所謂婦人問題を己れ自身の問題として考へたならば、親切にして周到なる見解を得んとの御希望は、僕の全然同感を表する處であります。

單刀直入、僕自身の意嚮を述べませう、僕は僕の娘がエライ女になる事を期待しては居ません、一風變つ

た女になる事は猶更です。僕が唯一最大の希望は、只彼女が心身共に健全な發達を遂げて、清福なる人生を享樂し得るやうにと云ふ丈けです。併し斯く言つた丈けては餘りに平凡陳套で、僕の思ふ所を盡さぬ憾みもあるから、少しく註脚を加へませう。

現代の日本婦人は、決して心身兩面の健全な發達を遂げては居ないと思ひます、少くとも健全な發達を遂ぐべく最善の道を盡しては居ないと思ひます。健康は言ふ迄もなく人生の基礎、子供を出來る丈け達者であらせたい、と云ふ願ひに於ては親の心は皆一つてせう。併し果して最善の道を盡して居るか何うかに至つては、幾多反省の餘地があります。

健康問題は暫く措き、心の方面を見れば、僕は精神的生活の貧弱を以て、日本婦人最大の缺點と信じます。僕は僕の娘に出來得る限り健全にして豐富なる精神的生活を享樂させ度いと思つて居ます。而して僕は日本に於ける婦人問題の最大要點、中心生命は、全く玆に在りと信じて居ります。此の要點を離れて、婦人問題を論ずるは、全く無意義とは言はんが、現代日本に在りては、要するに閑葛藤に過ぎません。

僕の所謂精神的生活とは何を意味する乎、平たく言へば信仰と智識です。現代の日本には靈魂（ソール）を有たぬと思はれる女性が澤山あります。智性（マインド）を有たぬ者さへ決して少くは無いのです。最も學者の中には、信仰と智識は衝突するなど考へて居る人々もあるけれど、僕は斷じて首肯が出來ません。健全な人生は、信仰と智識との融和し充實したる精神生活を、根本の生命とせねばならぬ、す可き筈であると僕は信じます。

僕は僕の娘に生命の根本を與へたい、精神生活を得させたい、夫故に僕は先づ第一に宗敎的信念を彼女に吹き入れたいと思ひ、第二にインテレクチユアル、カルチユアを與へてやりたいと思ひます。宗敎的信念と言つても、僕は特に基督敎的信仰を欽仰する一人てあります。若し基督敎の清い、け高い、而して强い信念と情操とを娘の心に吹き込み得たならば、夫れは親としての最大恩惠を彼女に與へ得たものと僕には信ぜら

れます。僕等の如き貧乏者が娘に與へ得る最大最高の遺産は、此の信念一つてす。さりながら親の欲する處必ずしも子が好むとは言へません、娘は生長の後に於て、快く此の唯一の遺産を受け入れて呉れぬかも知れない、家庭の難問題は往々信仰の相異から來ます、之は何うすれば善いものか、僕は此點に於ても飽くまて自由主義者てありたい、僕は決して僕自らの信仰其儘を娘に受け容れさせようとは思ひません、眞實を言へば、信念は吹き込む可き者ては無くして、全く喚び起す可き者てあります。僕は自ら最高精神の表現と信ずる基督教的信念を通して、娘の心の中に何等か崇高堅實な精神的自覺、宗教的信念を喚び起し之を發展進歩させ得れば足りるのてあります。此の自覺と信念とは人生の航海に於ける彼女の最も安全な方舟てあり羅針盤てありませう。吹く風の順と逆とを問はず、彼女は之によつて最善の意味に於ける人生を享樂し得る事と信じます。

宗教的信念を根幹と見れば、智的教養(インテレクチユアル、カルチユア)は確かに人生の華實てあります、僕は娘をして此の華實を悦樂させ度い、悦樂し得る丈の素養と境遇とを與へたい者と思つて居ます。之れは毛頭娘を女學者にする考からてはありません、只全き人間としての資格を得させ度い爲めてあります。現代の日本婦人は相應立派な主婦的教養をエンジヨイして居ます、社交的教養をもエンジヨイして居ます、併し道徳的教養に至つては、封建時代に於ける武士の家庭に比して必ずしも優秀とは言ひ難く、宗教的教養に至つては、歐洲文明國の夫れと比較にならない程貧弱空乏ですが、インテレリチユアルカルチユアも之れと平行して憐れむ可き狀態に在ります。社會の中流以上に於てすら最大多數の日本婦人は、果して一般文化の進歩と幾何の交渉を有つて居るか。哲學、科學、文藝、政治等を貫通する精神的潮流を彼等はいかばかり理解し悦樂し創造しつゝあるか。僕は同胞姉妹の爲そゞろに涙を催さゞるを得ないのてす。啻に同胞姉妹の爲めその智的生活の貧弱を悲しむ許りてなく、彼等の伴侶たる男性の爲めに亦氣の毒の感無

き能はずてあります。婦人に智的教養が無い、從つて男子の生活と事業とに對する理解も同情も助力も至つて淺薄ならざるを得ない、現代日本に於ける男子の寂寞は、こゝに最も深く根ざして居ますまいか。僕は日本に無數の小なるマダム・キュリ現はれ、ミセス・シドニー・ウエッブ現はれずんば、日本の文明は永しへに片輪に終ると信じます。日本の家庭は眞に幸福なる能はずと信じます。日本紳士の不品行は容易に修まらぬかと危ぶみます。藝者風情がいつまでも社交界の女王然たる權威を持つことと嘆かれます。二十世紀の今日、女子の高等教育を無用有害なりなど云ふ頑冥愚昧の政治家教育家は、疑もなく日本文明の悪む可き勁敵です。女學生も男學生と席を列べて大學の講座に出席するやうな時代が、一日も早く來なければなりません。先月法科大學の講義室て哲學會の公開講演があつて、田中王堂さんは功利の人基督を論じ、三宅雪嶺さんは、ベルグソンの哲學を概評されましたが、あの日の聽衆三分の一は、女學生諸君てした。僕は竊かに意を强うします、日本の女子も仲々智的要求が旺盛てあるらしい、只今日の家庭狀態と教育制度とが、彼等の要求を充實してやらないのてす。吾々は自由教育の恩惠を此の氣の毒な姉妹に與へねばなりません、是れは女子に對する救濟てあると同時に、男性に對する救濟てあります。女子の智的進歩は同時に男性を偏見と寂寞と不品行とから救濟する事になります。

僕の言ふ處は一般的に過ぎたかも知れません、併し斯樣な宗教的智的の教養を與へさへすれば、春光の下に若草の育つ如く、小供は自然とその特質を發展して來ませう。僕は娘の個性を重んじたいと思つて居ます。一般的教養は要するに其個性を出來る丈け圓滿に發達させやうとする希望から湧いて出るのてす。御質問の「如何なる女」になるかは僕の豫知し得る處てはありません、「斯う云ふ女」になれかしと思ひ煩つた處て、畢竟徒勞に終りますまいか。一般的教養の中に個性の發達をさへ努めてやつたら、成り得べき最善の女になりはしますまいか。僕は斯うなれとは强ゐません、只成るや

うになれ、個性を最善の程度まで開發せよと希望する丈けです。

思はず長くなりました、最後にもう一言。僕は娘の爲めに謀つてインテレクチュアル・カルチュアを非常に重んずるのです、けれども僕は彼女が獨身生活を送る事を斷じて希望は致しません。獨身生活は男子に在つても女子に在つても、等しく半人生活で、全き人の生活ではありません。夫れは何人も好んで選ぶ者では無く、多くは外部の境遇から餘儀なくせらるゝ者と思ひます。イプセンのノラは何故に家出をしたか、彼女の良人が良人らしくなかつた爲めではありませんか。ズーデルマンのマグダは何故に舞臺生活を送るに至つたか、彼女の戀人が彼女を裏切つたからではありませんか。ショーのヸヸーは何故に獨身の事務家となつて居るか、彼女の母親が如何なる職業の人なるかを思へば、理由は極めて明白です。獨身生活の背景には、必ず何等か不運な不健全な個人的若くは社會的境遇が存在して居ます。僕は斯樣な境遇に娘の在る事を願ひません。只彼女が幸にして物質的には貧賤でも、精神的には豐富にして、道德的には善良なる家庭の女主人公となつて、良人と共に子女と共に、純潔清福の生涯をエンジョイせん事を希望します。僕は良人と共に子女と共にと言ひましたが、必ずしも單に良人の爲め子女の爲めとは申しません。僕の確信に於ては、家庭は愛の根本法を基礎とする小立憲國である可きものと思ひます。夫も妻も子供も夫れ〲獨立の人格であります、獨立の人格として互に相敬し相愛し、最高理想に向つて各々其身を獻ず可き者と信じます。妻が良人や子供の犧牲になる可き筈といふのは、決して徹底した言ひ現はしではありません、最高理想に身を獻ずればこそ始めて、犧牲の價値があるのです。如何なる良人と雖、自己自身の爲めに妻子を犧牲とする權能がないのです、あると思ふのは僕から見れば古代思想の糟粕を啜つて居るからです。專制君主國の殘夢に醉うて居るからです。兎も角今後の良妻賢母は、自分自身の精神生活をエンジョイしつゝ、その人格の光を以て家庭に照臨する

クキンで無ければなりますまい。女子の人格を度外視して、良妻賢母を云々するは、全然無意義です。ソールの無い、インテレクトの無い、あつても働かせる事の出來ない人間が、何うして良妻賢母になれませうか。なれるとすれば一大不思議ですが、それは確かにアナクロニズムで、二十世紀の世界では之を鈍妻愚母と稱すべき筈でせう。女子本有の能力と美性とを自由に發揮せしめて、傳襲の束縛から脫離さするのは、現代の要求であり又使命であります。新しき日本の女子は、いつまでも無智の壓制に堪へ得べき者でもなく、堪へしむ可きでもありません。單に新しき日本の女子と言はない、新しき日本の男子は、決して精神生活の目の開けぬ舊式の女性を相手として、文明の生活を營む譯には行きません。本來僕は單に女子丈けを本位として、婦人問題を考へやうとは思ひません、男と女とは相互補助によつて始めて幸福を完うし得べき筈であります婦人問題を婦人本位にのみ考へるのは婦人の味方らしく見えて實は却つて婦人を賊する者です、僕は人生全體を本位として人婦問題を考へたい、考へねばならんと思ひます。貴問に對して適切な返答では無いが、思ふが儘を草々不宣。（七月六日）

○私の希望

村井貞之助

品格識見兼備の賢夫の妻となり愛嬌溢るゝ許りの兒女の母たらん事を希望す。

○内妨せざる妻たれ

文學博士　建部遯吾

拙兒文子（今は尋常四年）は內助の妻たらむよりも內妨せざる妻たらむやう育て上げたし。

○信念を吹込むが肝腎

沼波瓊音

誠に現時に適切なる好き問題と存じ候。小生は「新」

「舊」と云語は唯時間の上に就ての意味のみあるものと信じ候。この語に時間以外の意味をもあるやうに思ふが今日の多數の人の大なる誤解と存候。「新しくなりたい」斯う云ふ志を持ち、斯う云ふ志を遂げたる者は、暫くたてば必ず「舊く」なる者に候。「新しき女」たらむたらむとあせる者、又すでになつた積りて居る者は、軈て「舊き女」になる運命のものに候。予の娘は、「舊き女」たるを守らむとする女にしたくなく、又「新しき女」たらむと勉むる女にしたくなく候。「新」「舊」そのやうなことを更に念頭に置かざる女にしたく候。「流行の女」たらしめずして、「不易の女」たらしめたく候。

「不易の女」とは如何。「シッカリした女」のことにて候。コマ〳〵した複雜な目前の事の處理判斷等を考へる前に、先づ「信念」を有たせたきものに候。一體この「信念」は學校で吹込んで呉れる筈なれど、當分學校はかう云ふ事は斷じて爲得ざるらしく候。故にそれは小生自らが吹込む覺悟にて候。既に「信念」を有たば、學校の教育がどのやうなものであらうとも、それにて「我」を養ふを得るものに候。「信念」を有たば、我の爲さゞるべからざる道を知り、よくこれを踏行くものに候。決して一つの道をのみ進み行くの謂にあらず、「道」の文字の示す如く、西へ行くべき時は西へ通ずる道を行き、東へ行くべき時は東へ通ずる道を行くことに候。夫を持つべき時來らば夫を持ち、夫を持つべからざる時代には夫を持たず、いづれの場合にも煩悶も後悔もなく、母とならば自ら母たるべき道を行き、祖母とならば自ら祖母たるべき道を行くことに候。一切の方法方針を言ふ前に、「信念」を吹込むべく候。さすれば一切の方法方針、臨機應變豁達自在に候。女の「信念」とは何ぞ、宇宙とは如何なるもの、人間とは如何なるもの、女とは如何なるもの、これを會得したる其の會得を小生は指し候。

最も自我を確立する「妻」は最も「夫」に順ひ最も「夫」を助くる「妻」にて候。然かならざるべからざる理にて候。理のみに非ず、實際に候。所謂我を張りて夫を妨ぐる妻の如きは、外形に反して實は自我を確立せざる

女にて候。

婦人參政權論者の如きは、あまりに淺薄なるものに候。人の如何、女の如何を一寸考ふれば、こんなクダラぬことを言ひ行ふ筈は無く候。「月經」たゞこの一事にても其誤なる事を云得ることに候。女子は月經の爲に肉體も精神も變調するものに候。これが毎月あるものに候。月經の來潮に伴ひて生活に波動ある「女子」なるもの、いかて安全に參政するを得むや。

又男子は性交不性交は任意なり。一生性交せざるも、男子は肉體上も精神上も害なし。女子は必ず性交せざるべからざるものなり。或年齢に達して性交せざる時は肉體上にも精神上にも害を受くるものなり。是れ實にヘドレー、オイレンブルグ、其他幾多の醫が綿密なる研究の結果に候。既に女子は性交せざるべからず。されば姙娠あり、分娩あり、哺乳のことあり候。日々外に出て、一定の勤務を爲すと云ふ男子同樣の生活は、到底女子の實行し得ざることに候。

實行し得ざる事を實行せむとして、背理の結果として痛苦するは、達觀せざる故に候。達觀すること即ち「信念を有つ事」に候。「信念を有つ女」は、女の爲すべき事を喜んで爲し行く女に候。緊張充實而して歡喜の一生をおくる女に候。是れ「常に新しき女」に候。かやうな女に仕立て上げむと小生は存居候。

○ひゝな祭

日南學人

子を念ふ親のこゝろを人問はゞ
　飛々な祭に在りとこたへ舞

○私の一人娘

小杉天外

纒つた希望はない、まだ高等女學校の三年生てあるから、精神的發育の傾向も不明てある。文藝が好きらしいから、それも宜からうと思うて居る、併し所謂婦

人文藝家となつて、男性と競爭するとか、社會的地位を得るとか、青い酒を飮んで懷中手をして寫眞を取るとか云ふやうな事はさせまいと思ふ。家庭の主婦となり、良妻賢母となつて、餘裕があらば文藝もやるべしてある、萬一境遇の激變に遇ふたならば、他に依らずして自活するの技藝として、詩なり小説なり作るべしてある、詰り我が文藝家となるを許すのは、溺れた時の準備に水泳を學ばしむる位の考で許すのである。余は所謂新しい女の言説に接するを喜ぶ、けれども我が娘をば決して新しき女たらしめまいと誓つてゐる、彼等新しき女とならずとも、充實した眞生活が出來ると信ずるからてある。

○時代に適當なる賢妻良母

下田次郎

小生は小生の娘に對して成人の曉希望する所は左の如くに候、而してこの希望は又一般の若き婦人に對して持する所に有之候。

生活する時代に適當なる良妻賢母慈姑となり、國家社會に對して應分の貢獻をなし、自己としての內的生活を成るべく豐富に營ましむること

○善良なるクリスチヤン

山室軍平

拜復小生に四女有之候へ共何れも皆幼少にして、其長女さへ今年漸く尋常小學を卒へ、女子學院に入學したる位の事に有之未だ其將來が海の者とも山の者とも分り兼候、而も若し父としての望を申上候得者

(一)彼等を善良なるクリスチヤンたらしめ度候。

(二)神と人との爲め、殊に茅屋の民の爲に働く者たらしめ度候。

(三)相成るべくば救世軍士官として其終生を獻げしめ度候。

○娘自身の望むまゝ

河上肇

親の希望する娘と云へば、雇主の希望する職工と云ふと同じにて、其によつて、仰の如く「世ノ女子教育ニ對スル惑ヲ解クノ途」が與へらるゝか否か、小生は疑問と致候。小生は娘等に知識を與へ、彼等自身が斯く〳〵の女たらんことを希望すといふまゝに發達せしめ度存候。

○勝手次第に爲するが良い

水戸中學校長　菊池謙二郎

女は人の妻となり人の母となることを豫想せねばならぬ、妻たり母たるものは第一に家を重んぜねばならぬ、家の爲に自己を犧牲にするといふ覺悟が最も必要である、この精神を根本として思想行爲を割り出す女を自分は希望する。尤も自分の娘は當年四歲であるが此奴將來亭主を持つことは眞平御免である、一生獨身て氣儘氣樂に暮らしたいといふ事ならば、男だてらに飛ぶも跳ねるも背くも喋舌るも勝手次第に爲すが良いと考へて居る。

○修正せる古き女にて結構

後藤宙外

我輩にして若し娘あらば、娘時代には父母兄妹親戚友人などに對して、溫く美くしき情操を有する素直なるものにてあれかしと思ふ。そして快活て、無邪氣て骨惜みせずに立働き、境遇に應じて足るを知り、現在に滿足しながらも常に新運命を開くべく努力することを怠らぬ氣風に養成したい。嫁して夫の家に入りては貞淑溫順にして家族に愛せられ、よく其の家の爲めに最善の力を盡くすものにてあらせたし。要するに献身的美德ある女たれと願ふ。特に其の家の祖先の恩を忘れざる心掛を第一と致させたし。祖先崇拜の念盛んな

れば、家名を傷くるが如き失策は少くなし。随つて舅姑には孝たるべく、夫には忠實なるべし。もし此の以外に新味を加ふるの必要ありとするも、そは知識の上の問題にて極めて枝葉の事なれば云はず。所謂新しき女などになることは決して其當人の幸福とはならざれば我が豎の娘は決して新しき女には成らせたくなし。寧ろ修正せる古き女、又は琢磨せる昔の女にて結構なりと思ふ。

○型に囚はれぬやう

羽仁もと子

私は子供を育てるのに、知らず〳〵の間に、いろいろの型を持ち出して、それに子供をあてはめやうとしてゐはしないかといふことを、常に何よりも恐れて居ります。

女の子は從順にして、縁談があつたなら、その中のよさゝうな所に嫁くものであるとして、これを育てるのも一種の型でありませう。兎角男子の我儘をする今の世の中では、その我儘な男子に壓迫されてゐないやうな女でなければないとして育てるといふのも、また矢張一種の型で御座います。

私は唯どうしたなら、モット〳〵充分に子供等を了解し、子供等が十二分にその天分を發揮するために、どういふ手助けを必要としてゐるのであるかを知りたいと思つてゐます。さうしてその必要に叶ふ丈けの努力をしたいものだと希つてゐます。

さうして子供等が、何の型にも囚はれず、めい〳〵にその心の働きによつて——自己の生活を見出し、自己の工夫によつてその生活を經營し完成して行くことの出來るものになつて欲しいと思つて居ります。

○私の娘に對する希望

内ヶ崎作三郎

私に滿一年一ヶ月の女の兒があります。今は至つて健康ですが、恙なく成長するや否やは私は判斷することは出來ません。しかし無事息災で娘時代に達することゝ考へます、否さうする樣にしむけなければならぬ

と考へます。

私の子であればとて娘も矢張り個性を有してゐますから一から十迄娘が私の希望を入るか、もしくは從ふかは問題であります。しかし私は親として希望を懐くことは差支ないことゝ存じます。

第一、私は娘を丈夫な婦人に育てたいと思ひます。出來うべくんば身長ものびてあれ、肉付きもよくあれ。血色も鮮かなれ。要するに美は調和したる健康の表現でなければなりません。私は娘に婦人に相應する運動を奬勵しませう。年頃になつたなら長刀などもよいでせう。歌詞がよければ日本の舞踊のごとき必ずしも排斥すべきものでありますまい。禮儀作法を極端に勵行して娘の健康を害するやうな時は或程度迄は之を犧牲にすることを辭しませぬ。水泳は是非稽古させたいものです。

第二、婦人には婦人の心理があります。男は男、女は女です。私は男女兩尊主義でありますが、それは男は何處までも完全なる男、女は何處までも完全なる女となれといふ理想です。女らしい男と男らしい女は餘り感服しません。それは自然の理法に逆行するからです。私は娘に感情生活の圓滿に發達せんことを要求します。それで學齡に達すれば學校にやらねばなりませんが、女子の感情を無視せざる教育を施こす小學校はあるや否や私は今の所存じません。日本音樂なり、西洋音樂なり、さづけたいと存じます。宗教的感情を養ひたいと思ひます。宗教の知識や議論でありません。自然に對し宇宙に對する畏敬の念です。動物に對する慈悲心も養ひたいと思ひます。況んや人類に對してをやです。

第三、智育についでは娘の頭腦と相談しなければなりません。極めて平凡なそれならば高等女學校で結構です。非凡な頭腦であつたなら（私の娘ですからそんなことは無いと思ひますが）最高の學府まで送りたいと存じます。その頃までには文部省も奮發して官立女子大學を建設しませう。少くとも京都大學は澤柳總長時代に於て婦人の入學を許しませう。東北大學で先例を開いたる同總長に私は多大の信頼を有するものであります。娘の教育は一方に於てはリベラルエヂケーシヨンですが同時に萬一の時には自活して行ける丈の職業教育をもして置きたいと存じます。無職業の未亡人の地位ほど不安なものはありません。

一 第四、娘は相當の監督の下に男子と交際せしめ男子

の長所も短所も見拔く丈の見識を具へさせたいと存じます。小才子の甘言に欺かるゝことない程迄の態度を養成せしめたいと存じます。性の教育も必要です。それは彼女の母の任務でせう。

第五、見合結婚や寫眞結婚は娘にはさせたくありません。無論兩親は有力なる助言者とならなければなりませんが、娘の嫌ふ男子へは嫁にやりたくはありません。娘の夫たるべき人は健康と品性と實力と理想とに於て娘と相應した人でなければならぬと思ひます。いくら秀才でも道樂者は眞平御免です。又娘と宗教上の信仰を共にする人であつて欲しい。

第六、文藝を好むも科學を好むも娘の勝手です。しかし世界名婦の傳記はすゝめて讀ましたいと存じます日本名婦傳はいふ迄もなく、歐洲ではモニカ、マーセラス、ジョンアンダーク、エリザベス・フライ、フロレンス・ナイチンゲール、メリー・カーペンター、ハンナー・モーア、ヘーリエット・マーチーノー、ウイーラード、サラ・ウエスレー、エリザベス・ブラウニング、等の傳記は必ず讀ませたいと存じます。

第七、趣味として生花などはやらせますが、從來の流儀に超越してあまり自然をひねくらぬ風をやらせたいと思ひます。

第八、娘は私の宗教に同情をよせ、出來うべくんば更にそれを進歩せしむるために努力せんことを希望します。

○相當の學識と從順の性

法學博士男爵　阪谷芳郎

日本は二千五百年來家族制度の邦なり家族制度の下に在る婦人の心得は善く舅姑に事へて夫を輔け以て家政整頓の任に當るが第一なり然れども無學無識にては今日の時勢に適せず是れ學校教育の必要ある所以なり尤も夫及舅姑たるもの婦を見ること奴婢の如くなるは誤れり主婦としての尊敬は充分に拂はざるべからず要するに予は予の娘又は孫娘に對して相當の學識を具備し而して從順の性を失はず一家の經濟と教育とを擔當し一家族の繁榮を保持するの資格を保たしめんことを希望す。

文學博士 芳賀矢一著

新式辭典

内容見本無代進呈――製本完美

假名順にのみ排列せるは從來の辭典なり本書は先づ其排列法に一機軸を出せり平易なる口語文の解釋饒多なる諺、成句の臚列、亦皆辭典界の一時期を劃する所以に非ざるはなし。假名によりても引くべく、漢字によりても引くべく、眞正なる讀書の字典、作文の伴侶、通常の國語辭典と漢字辭典とを兼ねたる新式の字書也。一本を購ひて、數冊に値する辭典なり。

教育者及び實業家等の齊しく注意せられん事を望む

語數……九萬五千言
格言成句……六千五百餘語
正價貳圓四拾錢
送料内地十六錢朝清四十錢臺樺卅五錢

東京日本橋
大倉書店
振替東京一二三八

本邦英語辭書界に絶えて其比を見ず必ずや中學生の寶典たらん

星野久成編纂

中等英和辭典

本書は英學に素養深き編者が多年教鞭を採りて得たる經驗に徴して渾身の熱誠を以て編纂したるものにして、現時中等教科書として採用せられつゝある各種のリダーは勿論世界有數の英書は悉く參考涉獵して苟も中等程度の學生に必須なる單語熟語成句は隠なく蒐集して餘すなく、譯語の採擇に最も意を用ひ的確剴切に其意義を表出せんとして有ゆる努力を惜まず殊に各語に關聯して文法的解釋を施し且つ毎語に用例を施して以てコンポジションに便せんとしたり

洋裝新形千四百頁
正價九十錢 郵稅八錢

(中付二の二)



百日紅の蔭

尾島菊子

「まるで女護島へ行つたやうですね。」

湯槽の中で女達はよくさう云ひ／＼して笑つた。子、といふものを持たぬ女や、産後などの肥立のわるい女や、凡そ女として誰でもすこしは惱まされぬもののない陰鬱な疾病に苦しんでゐる女や、さういつた蒼い顏の女ばかりが大勢集つてゐる其溫泉場には、男の客といふのが全く數へるほどしかゐなかつた。たま／＼洋服など着込んで、都會人らしい容姿をした人が出掛けて來ても、それは大抵體の弱い細君や子供達を其溫泉場に送り迎へするために出て來るのに過ぎなかつた。だから來てもホンの一晩――長くて二晩も泊るくらゐのものであつた。

さうして普通の溫泉場なら屹度幾組か見受ける筈の老人達の姿が、不思議と其處の溫泉場では見出さなかつた。一つは汽車からあとの道路が難澁なためであつたかも知れない。

年からいへば中年の、充分に爛熟しきつた艶やゝかな肌膚を持つてゐる女盛りの女ばかりが、其の溫泉場の通常客であつた。肥つた女よりも痩せた女、色白の丸顏よりも、面長の淺黒な、頸脚の美しい、殊雨などの降る日蛇の目をさして通るにふさはしい――女として只ながめるに好い女――と云つた型の女が多かつた。そして三軒の旅館から廊下づたひに行かれるやうになつてゐる中央の大きな共同湯からは、始終もや〳〵と白い湯氣が立のぼつて、さういふ型の女の柔かい肌を滑つて來る一種の甘い芳香のたゞよふ濕つぽい空氣が、室々の隅から隅まで流れ込んで、其處等中を媚めかしく這ひ終はつてゐた。西と東に聳え立つた山と山との溪間の流れに沿うて、濃い綠色の中に息をついてゐる三軒の旅館の一廓を繞つて、女――といふなめらかなものをはぐゝむ溫泉のあたゝかいかをりが、朦朧と四邊を包んでゐるのである。

女が多いだけに子供の群も多かつた。一人で五六人の子供をつれて來てゐるやうな人は、全く子供の養生が目的であつたから、毎日子供達と一緒に瀧に行つたり、釣に出てたりして、暢氣に夏の日を暮してゐた。

禿山の下の川の緣に建つてゐる茅葺屋根の凉しさうな離れ座敷に、いゝ、むく〳〵した眞白の狆を一疋連れたばかりて、春からかけて夏を送る、着物の着附の上手な、歩き振りなどに何處か仇つぽいところを仄

めかせる年增の女もあつた。

「もう三年も此溫泉に逗留して居りますよ。」

と自慢らしく云ふ、田舍の大盡の內儀さん、と云つた格の、あまり品位のない四十ぐらゐの女もあつた。

さうかと思ふと、たまには珍らしく若夫婦でやつて來て、二三週間も滯在してゐるのがあつた。そんなのは無論此溫泉へ來たら、どんな不姙症でも屹度子供が出來ると云はれてゐる、昔からの舊い傳說を眞面目に信用して來た人に違ひなかつた。

「好い御夫婦ですね。あんなにして二人で逗留してゐらしつたら、すぐに出來ますよ。」

男の客が少ないだけによく目立つところから、若い夫婦づれは絕えず室々の話材に上つてゐた。

「今年お出でになつた奧樣は、來年は屹度お出でになりません。」

新しい客さへ見ると、按摩がさう云つてにや〳〵した。それは今年此湯へ入浴つた者は、すぐ姙娠してゐるから、來年の今頃は子供が出來てゐて旅などは出來ないと云ふ意味であつた。それほど著るしい效驗のある事を土地の人々が信じきつてゐるのである。

藤子は最初良人と二人で出掛けて來て、二週間ばかり一緒に暮した。

「忙しい體をかうやつて、暇を缺いて來てゐるのだから、それを諒として精々養生しなけりや不可ない

よ。」

散歩の折に良人が藤子の身を庇護つて、これが皆子供を生むための準備であるかのやうに云つた時など、藤子は何となく擽つたい心持になつて濟まない氣がした。

『子を生まない女は殆んど生存の意味がないね。』

藤子の良人は平素さう云ひ〳〵した。藤子はどうかすると、さうした良人の極端な意見に反感を持つて、とき〴〵思想上の衝突をしたらしいが、妻として子を生まない自分にも、僅にまだ果しきれない責任のある事を知つてゐた。けれども子のあるなしに依つて、女の一生を是非されるのが情なかつた。女の一生は人の妻となつて子を生むに止まる、といふそんな單純なものではない、それ以上にもつと何か大きな意味があるに違ひない、と思つてゐた。さうして世間の人達が、よく子供を家庭の玩具のやうにして取扱つてゐるのを見ると、自分達は決してそんな不心得はしない、などゝ力んでゐた。さうして幼さない時分には散々ちやほやした子でも、成長して結婚でもするやうになると、親の方から妙に懸隔をつけて、白眼で見るやうになつたりするのが淺猿しく思へてならなかつた。

併し、人として種族の保存を計るのは當然の道であることを、最も因襲的に說き出す良人の諄々しい議論には、もう飽き〳〵してしまつて、徒に反抗する勇氣もなかつた。自分も矢張り一度は「子」といふものが生んで見たかつたから。

『二週間や三週間溫泉に入浴つて、すぐ子供が出來るくらゐなら、世の中に子のない女がない筈ぢや

ありませんかねえ。」

パチンと鞄の錠をおろして、藤子は良人の顔を見上げた時に、なんとなく白けた心持になつて、心の底から頼りない思ひが沁みひろがつて來たのであつた。

「誰だつて出來るやうに心掛ければ出來るのさ。不攝生をするからいけないんだ。」

良人は何處までも眞面目であつた。

「それに子がないと云ふ事は、強ち女ばかりの責任ぢやありませんもの。男が病氣などしてゐたら矢張り出來ないんですつて。」

「そんな事は、俺は聞く必要がない。」

結婚前の良人の操行に、多少疑はしい處もあつたが、良人はそれほど自分自身を信じてゐるならば、と藤子は自分一人の責にされるのを悔しいと思ふ事よりも、別な意味の或心強さを感じてゐた。さうして、二人はしんみりと晩餐を濟ましたあとなど、別段新しい話題もないので、思ひ〳〵に勝手な思想を辿つてゐる頃、ふと良人が寢ころんで淋しさうに天井の節穴をながめたりすると、何だか二人を結びつけてゐる愛の連鎖が、だん〳〵弛んでゆくやうな氣がされてならなかつた。お互の愛と愛とを絡み合はせた上を、もうひとつ確りと括つてくれる他の力がほしかつた。

藤子は出來ないものを無理に拵へようとして、今更かうやつて夫婦して溫泉に來てゐると云ふ事が、時々恥かしくなつたりした。

暑い日がつゞいた。藤子は此頃の日の長さに、もう旅館の生活には倦み果てゝゐた。良人が歸京つてから獨りぼつちて、毎日座敷の中をあちこちと枕を持つて轉がり廻つてゐたが、少し午睡をしようにも隣室にゐる病人の赤ん坊が、のべつぐづつてゐるので、どうしても落着いて眠る事が出來なかつた。夜は夜て十二時すぎからそろ〱泣きはじめるから、いつでも睡眠不足の腫れぼつたい眼瞼を擦り〱起きねばならなかつた。

藤子は又良人に手紙を書いた。もうこれだけ養生したらよからうと思ふから歸りたいと云ふのてあつた。かうしてゐても人の體を預つてゐるやうて、兎角落ついた氣分にはなれないのである。

下へ降りて、旅館から緣側つゞきになつてゐる隣家の荒物屋の店にゆくと、其處に郵便取扱ひの小さな窓が開いてゐた。そこて切手を貼つて投函すると、もう其日の用事を果してしまつたやうな飽氣ない心持になつて、重い足を引摺りながら、西の側の二階の隅になつてゐる自分の室に戻つた。

所在なげに椅子を引張つて緣側へ顏を出すと、川の中へ押被さるやうに手をひろげてゐる大きな百日紅の花が、又しても眼を遮つた。毒々しい血汐を盛つたあくどい其花瓣が、枝から枝に行き渡つて、やんちやな女の兒が着物の前をはだけて地團駄踏んでゞもゐるかのやうに、思ひ切つて一杯に咲き亂れてゐるのてある。

冷々とした、骨の髓までもとほりさうなつめたい風が、綠の山から吹き下して來ると、花の精をこめ

た多くの小枝が怯えたやうな微な顫動を持つた。やがて眞紅い花びらが篩ひ落されるやうにホロ〳〵と水の上にこぼれて、すなほな波紋を描き、線をつくりながら下手へと流れていつた。

空が曇つて來ると、百日紅の花がいよ〳〵荒んで見えた。黑ずんだ、其暗紅色の花びらが、厚化粧をした年增女の痘痕顏でもつき出されたやうに、無暗に惡感を誘つて、ところ〴〵黑血の滲む紫色の斑點をさへ見出されるのであつた。

藤子は神經的に不快な色だと思つて、いつまでも眸を据ゑて、ぢつと花びらの落ちるのをながめてゐた。見て居れば見てゐるほど、花の精がだん〳〵自分の心に接觸して來て、あの花も自分も同じ中年の儚ない情調に抱擁されて、おなじ頽廢した淋しい氣分を心ゆくばかり味ひつゝ生きてゐるやうな氣がして堪らなかつた。藤子はいつか追憶の眼を閉ぢて、靜かに思ひを嚙みしめてゐた。

銅のやうな色をした裸體の子供等が五六人、笹舟に乘つてわい〳〵騷いて來た。日が薄りと照つて、彼方の森から斜めに仄された午後の光線が一筋、キラ〳〵と黃色い光りを漲らして、楓樹の木蔭の水の上に眩しい輝きを落してゐた。

後から又一艘、前のを追駈けるやうにして漕いで來た。其中には猿股一つになつた大きな男もゐた。子供等は代る〳〵舳先に立つて、ざぶり、ざぶりと川の中へ飛び込んだ。

底の透いて見える碧い水をとほして上から見下ろすと、巧みに泳ぎ得る子供等の熟練した手足の運動

が、丸で蛸坊主としか見えなかつた。

初めに來た舟てはあんまり乾燥いて、到頭舟を轉覆してしまつた。すると一人、一番威勢の好い子供が素早く舟底へ這ひあがつて、これ見よがしに大股を開けて、腰のあたりに兩手をかまひながら突立つて見せた、皆は泳ぎ〳〵其子供を押倒さうとして、一生懸命に舟を搖振りはじめた。

「確りやれやれ、オーイ。」

突然隣りの室から若い男がぬつと顏を出して、面白さうに囃し立てた。

「うゝん。」

其拍子に、昨夜徹宵むづかつてゐた例の赤ん坊が、お母さんに抱かれて小さな食指を舟の方にさしながら、何か譯の分らぬ事を云ひ〳〵、一緒になつて川の中を覗いた。舟底に突立つた子供は、まだ容易に倒れさうにもなかつた。

看病疲れのした若いお母さんは、髮を櫛卷にしたまんま、共に病人のやうな弱々しい眼色をして、つんと尖つた鼻の上に時々淋しさうな微笑の影を漂はせながら、やつと子供の對手をしてゐる。荒い息づかひが窶れた肩の上に著るしく波を打つてゐた。

薇子は此赤ん坊を見ると、急に自分の體內の一部分に、自分に似た小さな姿をとゞめて、怖れわなゝきながら絶えず母體から傳はる神經の微妙なゆるぎにも驚異の瞳を睜つてゐる、我小さなものに對する愛慾の心を無慘に虐げられるやうな氣がした。そして此溫泉へ來てから、碌々睡眠すらも取れないのは、

全く此見る影もなく衰れに萎び果てた小さな人の所爲であることを思ふと、あの柔かな產毛のもや〳〵と生えてゐる頭をピッシやり擲つてやりたくなるほど、氣分が焦ついたりした。さう思ふとあとから又長い間病みつゞけてゐる其兒の慘目な生存を心から憐れまずにはゐられなかつた。

赤ん坊はいつか川舟に飽きて、ちらと藤子の方に險しい眸を向けたが、すぐ眉の間を蹙めてむづかりはじめた。さも其小さな病軀を持倦んでゐるかのやうに、痩せ細つた身をくの字に曲げて、うゝん、ううんと呻くのであつた。酸漿のやうな愛らしい唇が色もなく薄紫に滲んで、歪めた口尻から水晶のやうなさく〳〵した涎が、下顎からかけて首筋に流れ込んで行つた。

若いお母さんはもう精も根も盡きたと云ふ風に、力のない聲で、

『ほうら、御覧なちやい、お舟があつておもちろいてちよ、正ちやんも乘せてあげまちよかねえ。』

などゝ云ひ〳〵、ともすれば膝の上から自然に滑り落ちさうになる小さな人を、重さうに引摺りあげた。

正ちやんは俄に大きな聲を絞り出して泣き立てた。そして兩手に掴んでゐたビスケットとボールを其處等中へ自暴に打撒けた。お乳もいや、お菓子もいや、お舟さんも入らない、乳母やも入らない、早く此小さな肉體を蝕む病の手から助けてくれと救ひを求めるかのやうにヒイ〳〵泣くのであつた。かうした纖弱な身を產み落した母親を怨むやうに聞える赤ん坊の傷々しい泣聲が、藤子の耳を劈いて頻りと或る恐怖を齎らした。

藤子はしみ〴〵赤ん坊をながめた。あんな弱い子供を産む位なら、産まない方がどんなにいゝか知れないと思つた。そしてあの兒の父親といふ人の平素の性行――と云つたやうなものと、毎日顏を附合はしてゐるあのお母さんの、血の氣の褪せた元氣のないうら淋しげな姿とを結びつけて、いろ〳〵と想像の絲を綾取つて見ると、其二人の間から産れて來た赤ん坊の落ち凹んだ眼の底に、我生を悼む陰險な呪詛の影が潜みかくれて、小さなものを責め苛んでゐるやうで、堪らなく可憐らしかつた。

赤ん坊はやがて乳母やに抱かれて、火のついたやうに泣き叫びつゝ、廊下をあちこちと搖振られて歩いた。外面に泣きしきる蟬の聲と交つて、正ちやんの惱ましい疾病の發作が、人々の感覺神經を掻き擾るやうに、緊張した透明な鋭い調子を持つて晝間の鈍い寂寞を破つた。室々では皆其聲に刺戟されて、午睡の夢から眼をさました。

「お可哀想でございますね。ほんとにお可哀想でございますね。オヽオ、お悧巧なお坊ちやまでゐらつしやいますこと。今におつきときいきが、おなほりになりますよ。」

廊下で會つた時に、ホンの申譯らしく病兒の頭を撫でゝ、痩せかれた小さな顏を覗いてゆくしほらしい女もあつた。

「あゝあ。あの赤ちやんのお蔭で、又眼を覺まさせられちやつた。」

よつ〳〵云ひながら、不興氣な寢惚面に小皺を寄せて、赤ん坊に横眼をくれたきり、默つて浴室へ浮

ける人の惡さうな女もあつた。

「あゝいやになつちまう！」

若いお母さんは心から情なさゝうにさう云つて、深い溜息を吐いた。そしていつか疊の上に身を投げ出して、しく／＼と泣いてゐた。

山は眼の前に近く兩方から迫つて、椚だの、椨だの、若葉と若葉の茂りかさなつた梢のいたゞきに、白い雲が往つたり來たりしてゐた。

東の側に渡る廊下の端で、今氷屋が來て氷をかきはじめた。子供達が周圍を取卷いて、めい／＼に甘露水だの、蜜柑水だのを飮んでゐた。腫物だらけの子供をつれて横濱から來てゐる肺病の細君が、胸をはだけて乳房をふくませながら、兩足を長々と伸ばして、大儀さうに池の中の鯉をながめてゐた。女中達は間斷なしに梨を運んだり、汚れた器物を下げたりして通つた。

「ねえ、豊さん！　私は全く彼兒に生命を奪られてしまひますよ。」

若いお母さんは涙をふき／＼影の薄い姿を簾の内に引込めていつた。

「まあさう氣を腐らすもんぢやありませんよ。もう少し涼しくでもなつたら追々に快くなるでせうから。」

豊さん、と呼ばれた先刻の若い男はさう云つて、今湯から上つて來た裸體を拭いてゐた。それはあの兒の叔父さんで大學生らしかつた。朝だの夕方だの、よく原書を持つて倶樂部へ行つたり、裏の山の寺

の境内にある大きな銀杏の下へ避けたりしてゐた。そして時々病兒の面倒を見てゐることもあつた。

「でもね、何しろ此地へ來てからだつて、ちつとも快い方ぢやないんですもの。いつそもう全癒らないものなら早く死んでくれた方が、諦めがついてようござんすよ。」

涙ぐんだ眼を膝に落して、ホッと息を吐きながら、

「矢張り私達には子供が備はつてゐないのでせうかね、どうやらかうやら、やつとの事で一人出來たと思へば、生れながらの病人ですものね。」

と淋しさうに百日紅の花をながめた。年をとつてからの初産だから、尚更育ち難いのだらうと、述懐めいた歎息をもらして、又ぢいつと赤ん坊の泣聲の方に耳を傾けた。赤ん坊の乳母と女中に擁されて、階下の縁側をまだ嗚咽り上げ、嗚咽りあげ、振られてゐた。

日の暮れ方になると、三軒の旅館から出て來る客等は、各自に思ひ／＼の浴衣に着かへて、川向ふの廣い庭に集つた。子供達は遊動圓木に乘つたり、ブランコをやつたりして、活潑に遊んでゐた。丸髷だの銀杏返しだの束髪だの、三人五人宛かたまつて立話をしたり、ベンチにほつそりした肩を竝べたりしてゐた。

藤子は一人、川縁の四阿に腰をおろして、皆の遊戯を見物してゐた。誰ともあまり馴染まない藤子は家庭や良人から離れて、かうして獨りてゐる旅の淋しさがしみ／＼沁み込んで來た。そして今朝良人か

ら今月中養生して居れと云つて寄越した手紙の事を思うて、あとまだ一週間ばかりの日をどうして暮さうかと考へた。

大きな石楠花の葉越しに、其處から例の狆を連れて靜かに暮してゐる圍ひ者の室が見えた。洋燈の影から其女の白い浴衣の袖がひらめくのがチラ〱してゐる。其日は丁度東京から旦那と云ふ人が來てゐた。大きな辨慶の浴衣の袂をまく〱しあげて、餉臺の前に胡坐をかきながら猪口を取あげてゐる、額のチラ〱した、鼻の下に短い髭のある肥つた紳士の寛いだ姿が、徒に女達の好奇心をそゝつた。

『お正月から來てゐて、まだ今年中も逗留してゐるんですつてね。よく飽きもしずに、毎日〱あゝやつて遊んでゐられたものですわね。』

こんな淋しい山の中に、殆んど封じ込められたやうにして、一年も姿を隱して居らねばならぬ女の反面には、どんな複雜した情實が閉ぢられてあるか知れない、とそんな事は誰の頭腦にも意識されてあつたが、二人のかうした樂しさうな生活をまのあたり見ては、只浮いた心とのみ、矢張り妬ましさうに皆が云ふのであつた。

倶樂部では今夜も淨瑠璃があると云ふので、洋燈がいくつも點いて、見臺などが飾られてあつた。氣の早い人々は、もう上にあがつて前の方に陣取つてゐた。水車小屋から水の音がだん〱車について來る。

『奥さん、お一人でお退屈でございませう。』

馴々しい笑顔をして、それとなく後へ廻つて來たのは、宿の主人であつた。東京あたりの會社などにもいろ〳〵關係してゐる事を度々話してきかせる、四十近くの髭など立てた立派な男であつた。藤子は時々庭で出會すのであるが、そのたんび何か知ら妙に調子を低くして深切らしい言葉をかけてゆくのであつた。

「牛が子供を生みましてね、そりや可愛いんでございますよ。御覽になりましたか？」

「いゝえ、何處に居りますの？」

「其處から上つた山の上の牛小舍に居ります。御案内いたしませう。入らつしやいまし。」

「でも、もう暗くなりますから、明日に願ひますわ。」

「私が附いて居りますから大丈夫でございますよ。」

主人は四邊の人々を憚るやうにしてさう云つた。其擧動が不思議と藤子に或る警戒を促した。

「さ、入らつしやいまし。」

二三歩行つて振返つた時、藤子は遊動圓木の太い柱につかまつて、ぢつと主人の落着かぬ眼の色を瞶めてゐた。

其處へぞろ〳〵と五六人進んで來た。すると主人は再び顧慮もせず、其儘悄然として姿を隱してしまつた。さも忍び者かなんぞのやうに。

濃い藍汁を吸ひ込んだやうに、空の色が全く沈み果てゝ、夕映が低く地平線に納まると、橋の上など

に動く人々の浴衣姿がくつきりと浮んで見えた。室々にまたゝく灯の光りが俄に潤ひを持つて、しめやかな夜の氣分が、多くの女達にいろ／＼と美しいローマンスを織り出させるのである。

あらい成田屋格子の浴衣を着て、額から汗を流しながら、「酒屋」を語つてゐた木挽の常さんの太い音聲が、いつとなく倶樂部にやんで、室々のさゞめきもピツタリと止まつた頃から、正ちやんは悩ましげに泣きつゞけた。乳母やも起きた、女中も起きた、豊さんも起きた。總がゝりて只管宥めすかしてゐるが、到底納まりさうもない。ます／＼聲を絞つてヒイ／＼云つた。附添の人達は傍への遠慮も次第に疎になつて、苦しさ紛れに夜中でもなんでも高調子で騒ぎ廻るやうになつた。若いお母さんは癇癪らしい尖々した聲て、自暴に叱つたりする。正ちやんは餘計に泣いた。そしてよく咳をした。痰を吐き出すだけの精力がないので、どうかすると呼吸の根がつまつたやうな狀態を示したりする。其都度口を割つて藥をのませる事の困難さは、實際想像以外だらう、と藤子は汗を絞つて寢床の中から壁越しに隣室の樣子をきいてゐた。

若いお母さんは急に消魂しく正ちやんの名を呼んだ。赤ん坊は引附けたらしかつた。それから朝までの混雜と來たら一通りてはなかつた。西の側のお客は皆眼を覺ましてぐづ／＼云ひ出した。

二里の夜道を越えて迎ひに行つた番頭が歸つて、間もなく山駕籠に乘つて來た醫師が、小鳥の足をミルクにても浸してあつたやうな傷々しい手を取つた頃は、人々も再び寢床の上に落着くことが出來た。

赤ん坊は注射のあと蟲の息をして、やがてスヤ／＼と昏睡狀態に陷つていつた。

藤子はそれから眠らずじまひで、曉方にタオルを持つて内湯の方の浴室へ行つた。外は夜露がしつとりと下りて、風が秋の水のやうに冷たく流れてゐた。まだ明けきらぬ空に星がまたゝいて、足元に蟲の聲がやる瀨なげに聞えた。

『今日あたりもう死ぬんぢアあるまいか？』

藤子は湯の中で自分の腹部を撫てゝ見たりしながら、今更姙娠とか出產とかいふ事についてひどく怖氣を持つた。

濡れたタオルをさげて、やがて綠色の薄ぼんやりした庭へ出た時、飛石の上にのつそりと宿の主人が突立つてゐたので、喫驚（びつくり）した。

『や、お早うございます。』と少し慌てゝ、

『今日は奥さん、向ふの室があきますからお引移りになつたら如何でございます。あなたから番頭にさう吩附けて下さいまし。彼處ぢア何しろお困りでございませうから。』

と吃りながらさう云つた。

『でも最うしばらくの事ですから……。』

『あの八角堂でございますよ。あそこならお氣に入りますでせう。それに旦那樣も亦其中お出でになりませうからね。』

仄白い朝空の下に、主人の大きな平顔がくづれて、出來るだけ眼に媚を含んでゐた。それは廊下橋の傍に一棟建つてゐる八角堂であつた。藤子は此地へ來てから風流な面白い室だと思つてよく良人と噂をしてゐたのである。

『あそこなら隣室がないんだし靜かに違ひない。』

主人の暴動が少し腑に落ちかねたが、兎も角もあの八角堂なら、良人も來て悦ぶだらうし、自分も一人でそれまで留渡住んで見たい氣がした。

其日の午後に、藤子は到頭八角堂へ引移つた。

『此室なら奧樣、お靜かでございますよ。あちらぢや何しろあの赤ちやんがアレでございますからね、どなたでも室をかへてくれ、室をかへてくれと仰しやるので困ります。』

女中頭のお松がお世辭らしくそんな事を云つて顎を抑つてゐた。

『でもあの赤ちやんは眞實に可哀想ね。』

藤子は何となく空虚な思ひがあつた。そして差詰め安眠といふ事の外、何も考へてゐなかつた。

室は八角堂、八角堂と云はれてゐるが、よく見ると六角であつた。一方は床、一方は違ひ棚、あとの四方はこまかい棧の障子になつて、其處に緣側がついてゐた。その前から奧の圍ひ者の方へ行く道がついて、其處にずつと石が敷きつめてあつた。路傍には萩だの芒だのがゆら〳〵して、河原に出て洗濯をしてゐる女達の姿なども、坐つてゐて見とほされた。今まで川に泳いでゐた家鴨をふんづかまへて、行

ぎなり絞めつける時の辛辣な小動物の泣聲が聞えたりした。
憑かれものゝやうになつてゐた赤ん坊と離れて、藤子は何となく薄情な事をしたやうで氣が咎めた。そして一棟離れてゐるだけ靜かではあつたが、散歩の人々が始終前を通つてぢろ〱眺めるのが不快で堪らなかつた。昨夜遲くに何處からか飄然と來て倶樂部に泊つてゐる二人の大學生が、向ふ鉢卷で書物に眼を晒してゐながら、ちよこ〱日除の下から覗いたりするのも小煩さかつた。其溫泉場で白粉をつけてゐる女は藤子一人だつたのである。
「御用の時は奧樣、どうぞ此鈴をお鳴らし下さいまし。」
さう云つて渡されたのは、可なり大きなどつしりした鈴であつた。併しそれを振らうものなら、三軒の旅館中に響くほどの消魂しい音が出るので、到底役に立ちさうもなかつた。
「前にゐた方もこれを鳴らしたの？」
「いゝえ、此前には大勢樣でこちらにゐらつしやいましたから。」
藤子は不思議さうに其鈴を取り上げた。さうして矢張り落着のない氣分の午後を暮した。障子を開けると、何處からでも見とほされるので、安心して午睡も出來なかつた。
夕方主人が八角堂の前を通つて、ちらと振り向いたが、其儘默つて過ぎた。
散々ガタピシ云はせて締め難い四方の雨戶をしめて行つてから、藤子は枕元に護身用の鈴をおいて、其夜は割合早く寢床についた。平素冷え性の腰にフランネルなど澤山卷いてゐた。

天井を仰向いて、四方の障子を見まはした時、丁度廻り舞臺にでも寢かされたやうて、眼がぐら〳〵した。

連日の睡眠不足て、藤子はぐつすり寢込んてしまつた。

「奥さん！ 奥さん‼」

それは確に夢てはなかつた、と思つて、藤子はふと眼を開いた。あたりは只寂として、川の流れがゆるやかに聞えてゐた。つい先刻まで圍ひ者の室から旦那のうたふ端唄が、哀れつぽい調子て通つてゐたのを、うつゝ心て聽いてゐたが、幾日か聽き慣らされた此頃の耳には、矢張り赤ん坊の泣聲が聞えるともなく、西の側から重い空氣を突きぬけてかよつて來るやうな氣がしてゐた。

藤子は眞暗の室に一人て寢轉んてゐるのが怖ろしくなつて、堅く身を縮めてゐた。急に良人が戀しくなつたり、家の事が氣になり出したりした。雨戸の外に四つ手の葉に渡る風のそよぎがさら〳〵と鳴つてゐる。

夢だつたらう！

藤子はいつか又スヤ〳〵と眠りに陷つた。

少時して再び眼がさめた。其時も何かの聲音に驚かされたのてあつた。あの赤ん坊に呪はれてゐるやうてあつたり、又雨戸の外に何者かゞ立つて樣子を窺つてゐるやうな氣がしたりして、胸がはげしくド

キドキして來た。

若しかうしてゐる處へ誰か飛び込んで來たら、すぐ此鈴を鳴らすのだ――さう思つて息を殺してゐる。

スイ、スイと緣側を足摺りする人の氣勢がする。藤子の眼にふと夕方運動場で牛小舍へ誘つた宿の主人の顏が活動寫眞のフイルムのやうに暗の中から朦朧と現はれて來た。此間から顏さへ見れば猥らに秋波を送つてゐる、あの好色らしい主人の眼つきなど堪らなく氣味がわるい。

「眞逆、眞逆。」

ひとりでうなづいて、又トロ／＼と眠りかけた。

「奧さん！　奧さん！」

蟲の聲と、川の流れの外、何も聞えない空寂とした庭の中から、又そんな聲が起つた。聞き慣れぬ太くて力のある、變化とも生物とも差別のつかぬ不得要領の聲である。藤子は熱心に耳を傾けた。今頃はあの赤ん坊も泣いてゐるだらう、さう思ふと死んで迷つて來た小さな亡靈の影が映つたりした。

「奧さん！」

此度は耳の根元でハッキリと響いた。藤子は寢床の上に起返つた。外はいつか小雨になつて、青葉にそゝぐさゝやかな音が、何となく精神を鎭めさした。と、コト／＼と二つ三つ指先で輕く雨戸を叩く音がした。藤子は眸をみはつて一方の障子を睨めた。心の怯えがいろ／＼の幻影を形造つて、深夜の或神

祕を探り出さうとするやうに、不可思議な恐慌觀念が湧いて來た。冷たい惡寒がぞつと髮の根元から流れ込んだ。

赤ん坊が息を引取つて、自分の胸に魂を投げ込みに來たやうにも思はれる。併し反響がなかつた故か、間もなくヒチャ〳〵と草履で小刻みに走り去る氣勢がして、それきり其夜は何事もなかつた。

翌くる日一日、藤子は昨夜の奇怪な音響を氣にしてゐた。そしてお松に命じて晩から誰か泊りに來るやうに頼んでおいた。

晝の中主人は幾度も庭を歩いてゐたが、決して近寄らなかつた。

その夜は遲くまて、圍ひ者の室に旦那がお得意の淸元を彈いてゐたので、人々はぞろ〳〵と出かけて來て、入角堂の前から木の蔭などに蹲踞んで聽いてゐた。藤子は寢際に鳥渡緣側へ出て見ると、其處の躑躅の蔭からぬつと黑い着物の男が現はれて、輕く頭を一つ下げた。

『奥さん、散歩でもなさいませんか?』

それは宿の主人てあつた。藤子には何氣なく主人の足元を見た。主人は冷飯草履を穿いてゐた。

『もう寢みますから。』

素氣もなく云つた。

『まだ早うございますよ。今からお寢みになつちや暑くていけません。まあ入らつしやいまし。面白い

話がございます。」

打解けた口の利きやうをして後先を見廻した。

「どんなお話ですか？　こゝで伺ひませうよ。」

「こゝは人が通つていけません。」

其處へ女中が廊下橋を渡つて來る音がした。すると主人は慌てゝ又躑躅の蔭に身を潜めた。

藤子は赫とした、人が通つては出來ない話など、主人から聽く必要がないと思つて、自分の美しい情操と、ツイと毒のある針の尖で突つかれたやうな侮辱を感じた。

やがて藤子はピッシャリ雨戸を締めて、むつとする室の中へ這入つた。

間もなく泊りに來たお里婆さんが、蒲團を運んで來て、開けてくれと云つた。

「どうもね、私此室（このへや）氣味がわるくて爲方がないのよ。」

藤子はそつと雨戸を開けた。冷たい風がスッと流れ込む。

「はいゝゝゝ、何あに今夜からは私がついて居りますから大丈夫でございます。」

お里婆さんは終ひ湯から上りたての熱（ほて）り臭い體をして、切なさゝうな息使ひをしながら蒲團を伸べてゐた。

「お寢みなさいませ。」

やがて消えるやうに黒いものゝ姿が平つたくなつた。しばらくするとお里婆さんは獨り言ふやうに詠

歎的な調子で、茲の温泉の效能などを說いてゐたが、それにつゞいて自分は何十年とか勤續めてゐるといふ話をして、しまひに宿の主人の事をぼつ〱語り出した。

今のお内儀さんは三度目で、元は矢張り此地へ湯治に來てゐたお客で、何でも軍人の未亡人だとか云ふ話から、大層金持だつたから其金で今は何處にか牛乳屋をしてゐる事などを、問はず語りに喋舌つてゐた。一言一言の言葉の裏には許し難き主人のさま〲な罪惡の影が閃めいてゐた。

藤子は身をおのゝかせて、それからそれと怖ろしい聯想を喚起した。

「では、此宿の主人はあんまり身持の好い人ぢやないのね。」

「お客樣にそんな事を申上げては何ですが、全くそれも性分でござりますからね、どうも爲方がありません。それにあの通り鳥渡男振りも滿更ではないもんでござりますから、つひね、あなた、間違ひが起り易くて困つたもんでござります。はゝゝゝ」

お里婆さんは其跡へ念佛を唱へはじめた。

今夜もそろ〱變な音のする夜だと思ふと、藤子は到底寢つかれるものではなかつた。

庭の中に人々が散じ盡して、後の岩から落ちる瀧の音が際立つて耳につく時分だつた。トロリとまどろんだ淡い眠りから、ハッとしてさめたのである。

「奥さん！　奥さん!!」

果して前夜と同じ呼聲がして、コト〱と叩くのが同じ程度に物靜かな音響を齎らした。

「ねえ、お婆さん、あの音は一體何なの？　昨夜もあんな音がしたのよ。」

それは正しく主人の横行である事を心に確めると、藤子は全く其圖々しさに呆れるとよりも、到底單獨ては片時も逗留すべき場所でない事を知つた。尙第一に、子のない女達が競つて集り來る此溫泉場の空氣が、底の底まで濁つた沼のやうに腐爛した澁柿臭い息に包まれてゐる事について考究しなければならなかつた。藤子はお里婆さんが此場合どういふ態度に出るかを、ぢつと窺つてゐた。

音はしばらくやんだ。

「何でもござりません。」

云つた跡へすぐ、又、

「奥さん！」

と、殆んど聞きとれぬほどの聲で、コトコトと叩いた。

「狐か狸の惡戲てござりませう！　何、なんてもござりません。」

その聲はあまりに間がぬけてゐた。

藤子は枕元の鈴に手をかけて、息を殺してゐる。又コトンと音がした。お里婆さんは舌打を一つすると、むつくりと床の中で頭を擡げた。と、何ともいへぬ調子ッ外れの變な嗄れ聲を出して、ゴヘン、と大きく咳拂ひを一つした。それが丁度何かの暗號であるかの如く、藤子の耳に響いた。

ヒチャヒチャと草履の跫音が、やがてしのびやかに彼方へ去つた。おごそかな靜寂と緊張した沈默とが

つゞいた。

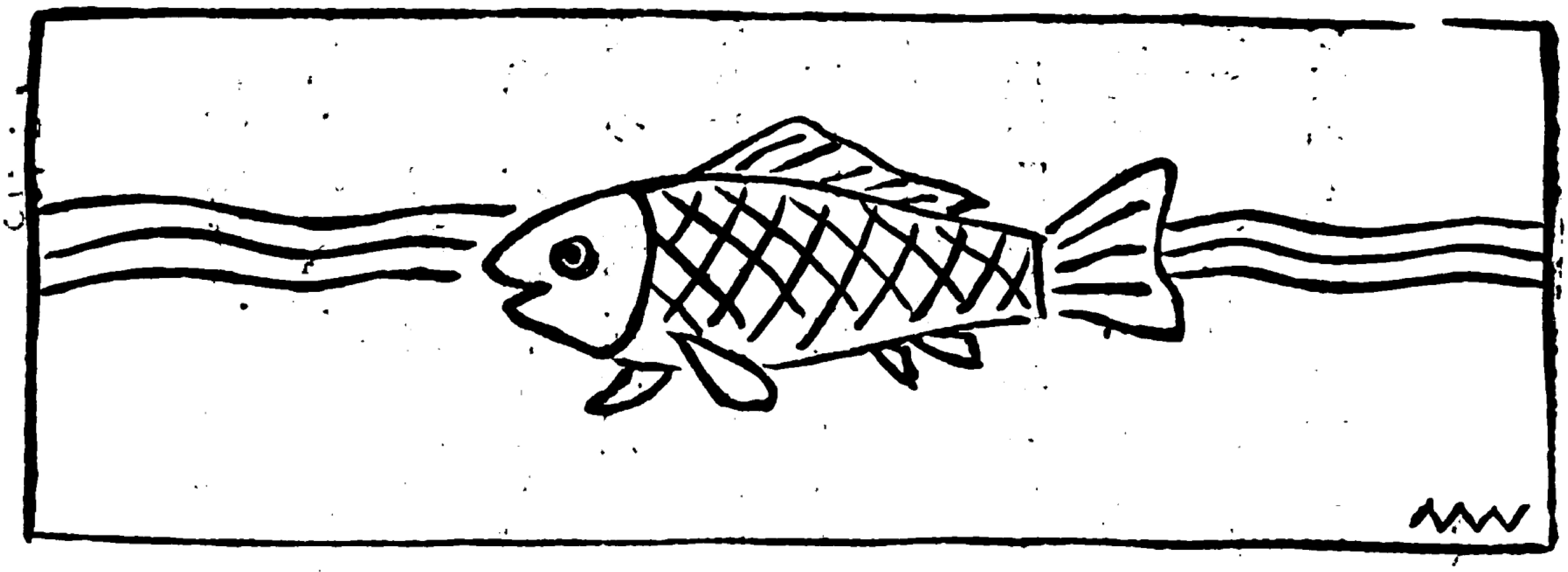
夜が明けると、西の側で赤ん坊が昨夜死んだ話が傳はつてゐた。今日は附添の人達が皆此地を引拂ふといふので、女中達は待ち設けた日が來たやうに威勢よく働いてゐる。八角堂の怪しい音響など無論知る者はなかつた。藤子は只一人、お里(さと)婆さんを訝かしく思つてゐた。

赤ん坊の屍骸よりも一足先に出立するつもりで、藤子は急いで支度をした。お松が來て其唐突を不思議がつたが、別段强ひてどうと訊ねもしなかつた。たゞ此方の思ひなしか、眉の間に一刷毛墨ではいたやうに暗い陰影を漂はせてゐた。

宿を出るまで主人は一度も顏を出さなかつた。其日もホロ／＼と散る色の褪せた百日紅の花に、しとしとと秋のやうな小雨が降つてゐた。

長い間馬車に搖られて、やがて再び汽車に乘りかへてホツトした時、其處にちやんと生物(いきもの)のごとく死んだ兒供を抱いて眼を腫らしてゐる、見るからに哀れな若いお母さんの憔悴した姿を見出した。藤子はバツとして顏色をかへた。白い手巾で顏を掩はれた正ちやんに、注射の後のやうに樂々と膝の上に永眠(ねむ)つてゐる。傍にて其兒の父親らしい人も乘つてゐた。

——(大正二年六月稿)——



日記

田村俊子

△月△日

巣鴨方面へ探しに出た途中でＥに逢つた。Ｅは相變らずセルの袴を穿いて、齒の音のする下駄を穿いてゐた。天氣が好いから堀切へでも遊びに行かうと云つて勸める。その氣になつて、此處まで一所に連れ立つて來た主人と別れる。別れる時主人は少し小使をくれと云ふので、蟇口の底から小さい銀貨を二つ出して渡す。

『遊びに行くのはいゝけれども私は今日はお小使がない』。

『大丈夫。今日は私が大分持つてるから。夕方まで堀切で遊んで、晩は有樂座へ行きませう。その位のお金はある』。

それて二人は巣鴨の停車場から上野まで電車に乘る。Ｈは電車に乘ると腕組みをして何處か男性的の身體の構へをするが癖だが、今日も然うした構へて、毅然とした眉付をして默り込んでゐる。

自分はふと途中で別れた主人の事を思ふ。今日は自分と家を探す爲にわざ〱社を休んだのである。自分と別れてから急に無言になつて一人して貸家を探し歩いてゐる主人の姿を思ふと、妙に淋しくなつて仕方がない。

『處決しなくちやならない』――自分は斯う云ふ考へに苦しみながらも、矢つ張り二人して二人の棲む家を探し廻らなければならないのぢやないか。思ひ切つて今までの自分の生活を引つ繰り返してしまつて、さうして變つた生活の中から再び自分と云ふものを新たに見付け出さなければならないと云ふ突き詰めた思ひに苛まれてゐながら、矢つ張り自分は二人して棲む貸家を探し歩く爲に、磨り減らされた惡るい方の下駄を穿いて出てくるやうな事もしてゐるのである。

嘗て自分の二十二三の時に起つた心の動搖と同じ動搖が、今の自分に再び起つてきてゐるのである。あの時は自分と云ふものが厭になると同時に、直ぐ自分と云ふものを拋り出す事が出來た。思ひ切つて筆を捨てゝしまつて、さうして自分の生活を引つ繰り返してしまふ事が出來た。それは昔の私の生活は今と比べてもつと單純だつたし、私の考へと云ふものが一切についてまだ生若く徹底してゐない時分だつたから、やりかけた事を捨てゝ了ふ事がちつとも臆劫でなかつたのかも知れないが今の私にはそれが出來ない。心の中に烈しい動搖が起つて來てゐながら、その心を安靜の生活の中に强ひて押

し鎭めて浸らしておく苦しさは、まあ何と云つていゝだらう。それよりも、これほど烈しい動搖が私の心に起つてゐながら、私の心はふしぎに倦怠に傾いてゆくのである。何と云ふ恐しい事だらう。私は電車の中て、さつきまで考へてゐた事を繰り返して考へてゐた。電車の中ては二人はちつとも口をきかないてゐる。雷門て電車を下りた時、舊の土曜劇場の俳優の二三人が行き違つて行つた。二人は吾妻橋から船に乘る。切符の賣場て、Hは敷島を一とつ買つた。

Hと連れ立つてゐる時、Hはいつも優しく人に讓歩してるやうな心持を其の表情の上に現してゐる。二人の間に行はれてゆく一とつ〱の事柄に就いて、Hはちつとも自我を出さない。私はいつもHの人に對する態度の上からこの人の好いおほまかな溫味を見付けだす度に、限りない愉快を感じる。船の中てHは禁止になつた自分の著書を其の筋の忌諱に觸れた一文だけを拔いて再發賣する事などを話する。

『もう一年ばかり何も書かないてゐるつもりなの。當分默つてゐやうと思ふの。餘炎の覺めるまては、まあ丁度一年間ぐらゐのものだわね』。

私はこの間Hに逢つた時、Hが文章を書くのにこの頃脫字をしたり假名を拔かしたりすると云つた事を思ひ出した。その時Hは山の奧へても行つて一人て勉强をしたいと云つてゐた。

Hは私等の後にゐる二人の娘をそつと指示して、『あれは姉妹てせう。よく似た橫顏だ』。などゝ云つてる。私は船室の外の船首の方に立つてゐる。外國人の夫婦を眺めてゐた。リオンの服を着てる女は途

中て麥藁の帽子を風に飛ばされた。女はそれを追ふやうに一寸身體をくるりと交はしたけれども、直ぐ男の方を向いて話しつゞけてゐた。この二人はほんとに能く喋舌りつゞけてゐる。私は感心して、時々四角に切り開いた入り口のところからわざ／＼顏を出してこの二人を見たりした。白の半靴を穿いた女の足が私の眼の前に突き出される事が時々ある。女の足の皮膚が薄い靴下の編み目から見え透いてゐるのを私はぢつと見たりしてる。

Ｈが横を向いて土堤の方を見てゐる。この人の鼻はほんとに好い恰好である。希臘の女神の彫刻に見る通りの理想の恰好をしてゐる。私はこの鼻が好きである。Ｈの眼は今日は霑みが少ない。外を歩くせゐかぱきつとしてゐる。皮膚の下から所々血の滲み出てるやうな恐しく赤い顏をしてゐる。矯飾のないその顏付には、戀情的のチャームはちつともないが、いつもの通り、直ぐにも物を摑み挫ぎさうな熱つぽい感情の搖ぎが、迸るやうに其の眼の隈から頰へかけて表はれてゐる。見れば見るほど細い顏である。

二人は鐘ヶ淵で船を乘り換へた。帽子を飛ばされた外國の女は、露出しになつた髮を背つぽい白い手て時々抑へてゐた。乘船してる人々の上に日光が薄赤く色を流してゐる。素で着てる一枚のセルだけてはとても凌ぎきれさうもないほど薄ら寒い。

『又顏を盜まれるかも知れない』。

Ｈは土堤を通る人々を眺めてこんな事を云つてゐる。私もＨと同じ方を眺めてゐたが、何となくあた

りの景色が白けて見えて、私の心は遊びの上に少しも興の乘つてゐない事に氣が付いた。私はどうかして濃やかな情緒の滴りを身にしみる程味はひ度いと思つて、水の中に眼を落したり、兩岸の流れに垂れてる小枝のおもむきを見詰めたりしてゐる。Hとかうして一所にゐる間は、私の心はHの爲に石膏にされるやうな氣がする。これがNなら、もうちつと相手を享樂する事が出來るのである。Nと私の感情が、もうちつとさま〴〵な幻影のうちに藝術の匂ひを帶びて溶け合ふ事が出來るのである。私がNに對するあの一種の親しみもなつかしみも其處からくるのである。私は自分の傍に垂れてゐるHの柔らかな手先を見詰めてゐながら、中々その手を取る氣になれない。あの手を取つても、Hの身體は容易く私の手の内にしなだれて來さうもない。

Hは船の中でゆるやかに煙草を吸つてゐる。さうして、茅ヶ崎で船で遊んだ時、友達のYが船から水に落ちた話などをおもしろさうに爲てゐた。

堀切へくるまでの途中を船でくると云ふ事ばかりが少しの風情で、堀切の菖蒲園は何處も皆綿メリンスの蹴出しのやうな厭味がある。田舍臭く、氣取つてゐていやである。

「蒲田の方が餘つ程いゝ。それに雨の時に行つたから餘計よかつたの」。

Hは八つ橋の上から紫の菖蒲を見渡して云つてる。ぐる〳〵と方々を廻り廻つて休んだりしたが、最後に入つた菖蒲園で私等は正宗の瓶を熱く燗をしてもらつた。それは餘り私が寒くつて仕方がなかつたからである。Hは自分の着てる單衣羽織を私に貸さうなど云つて心配をしてゐる。

其處は泥田の中に建てたやうな掘立小屋の掛茶屋である。向ふの田圃で一人の男が彼方向きになつて水車を廻してゐる。其の向ふに松がある。空は平つたく遠く、曇つた色で塗り潰してゐる。私たちの後には低い障子が入つてゐた。

『燕がね、私のところへ又歸つて來たの』。

とHは云ひ出した。何の事かと思つたら、それは嘗て自分の可愛がつた若人が、又自分の手に歸つて來たと云ふ話なのである。私たちは少し醉つて其處を出た。薄暗になつた土堤を歩いてゆくと、空に細い月がくつきりと出てゐる。立止つて、その月の弦のところあたりに見當を付けて唇を突き出せば、その月がするりと自分の口の中に辷りこんでくる樣な氣がする。私は頻りと仰向いて歩く。自分の力とは思はれないやうな不思議な力が私の身體全體に充滿してゐる。Hは一人で燕の話をしつゞけてゐる。最初燕が飛び込んで來た時、嫉妬で其れを邪魔したKの話や、自分がどれほど其の燕を可愛がつたかと云ふ事などを、

『覺えてゐなくちやいけないわ』。と一々念を押して話をしてゐる。

『あなたにいくら可愛いゝ燕でも、私にはちつとも可愛いくない燕だからおもしろくない』。

私は醉のなかから吹き出してくるやうなおもしろい笑ひが出てきて仕方がなかつた。Hが一生懸命になつて燕と知り合ひになつたその徑路を新聞小説の梗概でも話すやうに話して聞かせてるのが可笑しくつてたまらなかつた。さうして近代劇の會員たちでフアウストを演つた時のあのゴム人形見たいな

顏をした一人の學生に扮した男の顏などを思ひ浮べて、一人で笑つてゐたが、Hはそんな事には構はずに、細い呼くやうな聲で其れから其れへといつまでも話をつゞけてゐる。

もう船がなくなると云ふ呼び聲におどろかされて私等は鐘ヶ淵まで息を切らして走つた。もう眞つ黒になつた河の水が私等の驅けてゆく棧橋際の岸にぴたぴたと流れを嚙ましてゐた。船は最後の出船だつた。Hは室內へ入らずに船尾の外側に腰をかけて煙草をのんでゐる。これから太陽閣へでも行つてお湯へ入らうとHは誘つたけれども私は行きたくもなかつた。

例の通り私はすつかり疲れてしまつて、神經が癡呆のやうにぼんやりしてゐる。何も考へやうともしないで、支へさうな天井の下に身體を屈めて腰をかけたまゝ、私の前にゐる紺がすりの着物を着た男の子が背中に荷物を斜に背負つてるのを氣にして眺めてゐる。船の中の灯りは目前にゐる人々の顏さへはつきりとは分らないほど薄つ暗い。

船から上ると廣小路は灯と人のさゞめきで織るやうである。遲くなつたので二人は公園をぬけて電氣館へ『詩聖ダンテ』を見に行く事にする。私は醉つてる間だけがほんとの自分のやうな氣がするのである。奔放で自由で無我で、それでゐて何方を向いても自分の心と人の心とが共通してゐる。誰の心へでも自分の唇を直ぐに吸ひつけてやり度いやうな放恣な氣分と云つたらないのである。Hに云ふと、Hは頻りに私に燕の代りになれと云つてせがみ初めた。

今の私の感覺は醉ひの中にほんのりと色ざしてゐる戀の中にばかりいつぱいに動いてゐるのである。

私は浮れ心地にはなつてゐるけれども矢つ張りHの感情とは何の交渉もないやうである。私は矢つ張りHの手を取る氣もしないて歩いてゆく。

電氣館の中はいつぱいの人て何所からも映畫を覗く隙もない。Hは眠いと云つて後ノ腰かけに身體をもたせてゐる。壁の高いところにたつた一とつ灯つてる電氣を受けてHの顔には陰がいつぱいにはびこつてゐる。眉毛が殊に濃い。袴の裾をひろげて寄りかゝつてるHの樣子は何う見ても男てある。それてもあの袂の中には打粉おしろいの『撫子』が入つてゐるのてある。私は時々振返つてHを見た。Hはその度に微笑してゐる。二人は直きに其處を出てしまつた。電車に乗つてその途中て私はHに別れた。私はNによく見るあのやぶられたる悲しみとても云ひ度いやうなNの情緒をなつかしく思ひ出しながら車に乗つて家に歸る。

△月△日

この頃頻りに慘死と云ふ事を考へる。がらくたな魂を保全してるこの身體を、粉微塵に叩きつけて了ふやうな死を考へる。Eへ一寸手紙を書く。

今朝は飛行機が飛びましたね。あなたは何處かの原て御覧てしたか。私は宅の二階て見たのてすが、あれを見てゐるうちに泣きたくなりましたよ。私はあれこそ藝術だと思ひましたよ。あの瞬間の感情こそ藝術だと思ひましたよ。死滅を眼前におきながら――何千呎の高さから眞つ逆樣に墜落してゆく自分の姿を眼前に豫想しながら、あらゆる生の緊張をあの瞬間に味ひながら、血を漲ら

して天空を驅けてゆくあの瞬間の感情こそ、もつとも優れた藝術だと思ひましたよ。死滅を眼前におくと云ふ樣な生活を、あゝ一瞬でもいゝから味ひたい。『戀を對象にした藝術はもう過ぎてしまつて、いくら何うしたつてこの美しい藝術はもう私の手には復つてこない。あれこそ私の藝術だ』。私はこんな事を思つてゐると無暗と泣きたくなつたのです。——

私はいつたい何うすればいゝとお思ひです。私は今更、自分の生活を變へるとか新たにするとか云ふ樣な事などは考へてはゐないのです。何でもいゝからもう一度自分のこゝろを赤裸にしてさうして自身の手で其のこゝろを投げだして見たいのです。さうして赤裸になつた自分と云ふものを、もう一度自分の眼で見直さなければならないと思ふのです。

私はもう何も書きたくない。書くことが厭になりました。かうして毎日文字を讀んでゐれば、文字だけの小說は私の筆でも書き上げられる。私の書くものは簪の摘み細工と同じもので、唯小器用な細工品に過ぎない。何で生命のない仕事でせう。私はいや〳〵仕方がないのです、こんな事を爲てゐるのが。

小器用な細工品を机の上で拵へてるよりも、もちつと生命を中心にした生きかたがありさうなものぢやありませんか。私は何もかも捨てちまつて遠いところへ行き度い。この頃は唯それればかりを考へます。私の今の生活は昔と違つて二重にも三重にもなつてゐる。これをすつかり切り外してしまつて、さうして今までの知人たちと少しも交渉のないところへ遠く隱れて了ふことが出來たら。——

私はその内あなたに逢つて、しみ〴〵話さなければならないと思つてます。しばらく逢はないあなたは私の云ふ事を空想だなど、考へるかも知れないが、今の私は空想を云つてる樣な餘裕さへないのですよ。油蟬のやうに一とつところに取り付いて、いつまで出ない聲をぢい〴〵と振り立てる苦しさにはもう堪へられないのです。私は何うかしなくちやならない。何うかしなくちやならないのです。筆を取つて小說を作るばかりが私の藝術の全生命ぢやないでせう。私はもうこんな事は厭になつた。ほんたうにいやになつた。

手紙を書いてるうちにひどく心がからつとしてくる。今日はプランタンでOに逢ふ約束のある日である。

プランタンへ行くと定めた時間よりも二時間ほどおくれてゐた。Oは客のないカフエーのがらんとした室で私を待ちほうけてゐた。

私は今日Oと一所に俳優のSを訪ねるつもりだつたが、いやになつてるのでOに斷つたけれども、先刻から電話がかゝつてきてるからと云つてOは無理に私を連れて出る。

Sの家は芝の新濱町にある。Oは其の道端に印しのついた馬の蹄の跡を見て、『Sさんはもう出勤したんだわ』と云つてゐる。本郷座の幕明きは三時だが今はもう二時を過ぎてゐる。『あの人の居るうちに連れて行かうと思つたのに』Oはそんな事を呟いてゐた。

Sの家にOと兄妹のKの妻君が丁度來合はせてゐた。座敷から品川の海がすつかり見渡す事の出來る

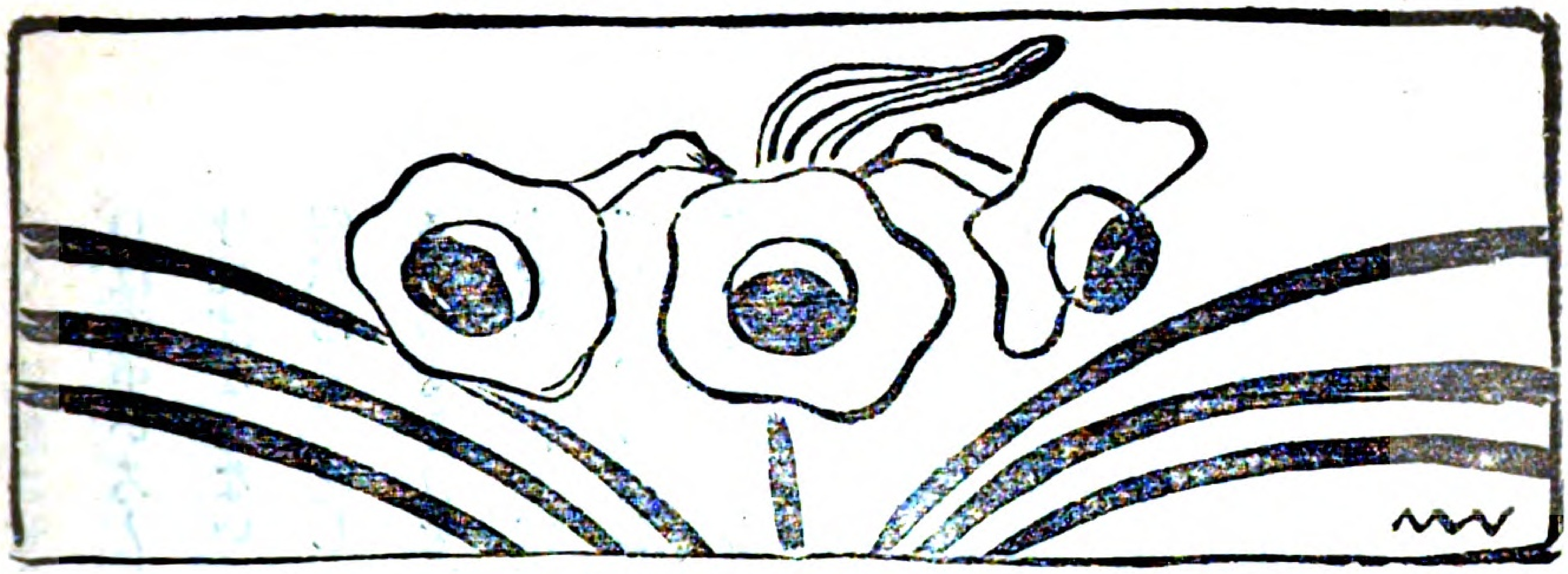
見晴らしの好い座敷である。私はSの家と云ふ事に興味を感じて、いろ〳〵空想しながら一人して座敷々々を廻つて歩く。簞笥の並んでる上に、伯林でうつしたKの寫眞が乘つてゐる。毛がのびて恐しく辛辣な顏をしてゐる。私はKの妻君をその前に招いてからかつてやる。

揚げ餅だの今戸のお煎が出てゐる周圍に皆並んで坐つてゐる。誰れもみな磨きのかゝつた美しい顏をしてゐる。Sの妻君は纎細な筆でかつきりと描いたやうな眼鼻立をしてゐる、濃い眉毛はいつも一の字に剃りつけてある。みんなは、白粉の話や着物の柄の事などを品評し合つてゐる。

自己の問題に觸れる事なしに、かうして一日でも暮らせる人だちが、私には殊に今日はうらやましく思はれて仕方がない。私はみんなと一所に他愛もない冗談を云つたり笑つたりしてる間に、時々何とも云はれぬ淋しさにおそはれる。私はその度に海を見る。さうして又彼方此方と座敷の中を廻り歩いて見る、此家は役者の家らしくない構へだけれども、何處となく役者と云ふもの、起居の上に滿ちてゐる一種のチャームが、室内々々に漂つてゐるやうな氣がして鏡臺の蔭にもなまめかしくなつかしい色が見えて好きである。私はその氣分をよろこびながら二階に上つたり椽に出たり、置物を弄つて見たりした。

Oと二人で四時過ぎに其家を出て新富へ行く。途中の電車の中で二人とも見知り越しの女優に逢ふ。この女優は何處にも專屬してない女優である。一二度何か演つてそれぎりになつてゐる人だが、服裝のけば〳〵しさにOも自分も聲を上げて驚いてしまふ。それが一と目見て女優と云ふ一とつの階級を

直ぐに連想させるやうな服装である。
Oは途中いろ〳〵と經濟の苦しみなどを話してゐる。下女が歸るので明日からは自分が臺所をやらなければならないと云つてそれを苦勞にしてゐる。家庭の用務の雜義な事面倒な事などは、殊に私に理解がゆく。乏しい家庭における下女の爲に、主婦の自分たちは云ひがたい屈辱を受けることが屢〻ある。Oもそれを味つてゐた。二人はそんな事を限りもなく話し合つた。二人とも一方に仕事を持つた妻君が、折々家庭の用向きが面倒になつて堪らなくなると云ふだけに就いての思慮深い話をしあふのである。Oはかうした間も縮緬の服紗に包んだ洋書を讀むでゐる。Oは一生懸命に勉强をするつもりなのである。かうして見てゐると、Oはまだ〳〵これから何か出來さうな人に見える。何か考へる
『私はもう始終あとから〳〵何か追つかけられてるやうな氣がしてちつとも落着かない。なんて事は兎ても出來やしないわ。始終そは〳〵してゐる』。
Oはいつかもこんな事を云つてゐた。Oは才智の勝つた涼しい眼付をしてゐる。Oは溫い玉露のやうな味のある人である。私はこの味が好きなのである。
今日もこんな事で一日過ぎてしまふ。



國の男

水野仙子

　縣保子が下谷の西町に下宿を定めてから、彼れ是れ十日近くになつた。仕事先の根津には此處から三十分もあれば緩つくりなので、今までのやうに慌てゝ朝起きをする必要もなく、熟すやうに目が開いてから起き出して、顏を洗つて身じまひをする。それから御飯を喰べてそろ〳〵出掛けるといふ風て、電車賃の儉約を實行されることも、此處に移つた理由のうちの一つてあつた。

　それは保子が故郷を出てから三年目に數へられる四月である。ほろ〳〵と散る櫻に慄へて遣瀨ない胸を抱き餘したその日頃も、一日〳〵と色增して行く葉櫻の色に鎮められて、土地の落着きと共に少しく心の餘裕を生じて來た。

　夕方の忙しさにも、今は係りあふ體てないところから、わざと遠廻りをした

り、近道を探したりして、違つた道を歸つて來るのが好きであつたが、ふと昔の夜初めて上野に着いた時に、車で通つた街の賑かな印象を想ひ起して、それが何處であつたかを確かめようとする好奇心が湧いた。て毎日心掛けて心覺えのあたりをぐる／＼廻つて見たが、どうも三年前の夜に目に映つたやうな街は見當らない。それがどうやら上野町らしくはあるけれども、さう決めてしまふのにはあまりに今の上野町が見窄しかつた。

或晩、保子はつく／＼獨りで喰べる御飯の不味さを味はひながら、何處からともなく聞えて來る尺八の音に、居堪らないやうな春の夜の氣分をそゝられて、衣紋竹に懸けてあつた羽織を引かけざまに草履を穿いて表に出た。若しもそのまゝ六疊の部屋に蟄(ちつ)平として居ようものなら、障子に映つた自分の影が、髮の毛の搖れたのにさへ大袈裟な表情をして、見る／＼部屋一ぱいの姿となり、ものも言はず後から攫(つか)みかゝるやうな氣がされて、それを逃れたやうな心安さを保子は外に覺えるのであつた。

何處へといふ當てもなくいつも家を出るので、足に委せた氣分は、耳や眼に入る光りと音とにもそれの持つた誘惑を拒まうとはしなかつた。しつとりとした大地に觸れては離れる草履の音が、快よく踵を打つて、褄先あたりに生暖い風を漂はす。ふと保子は、三年前の田舍娘の持つて居た單純な驚きの目が慾(ほ)しくなつて、叶はぬまでもそれを試みようと上野の停車場さして雜閙の中にはひつて行つた。

忙しく働いても、今探すものゝ外には見る事の出來ぬ眼を持つた澤山な人達が、いづれも顏の筋肉を緊張させて、出逢ひ頭に突き當る人々を避けて動き廻つて居る。建物の中に限られた物の響きが谺(こだま)をか

へして、籠つた濁音となつて隅から隅に彈き合つて居る。時間の絶對な權利に脅えて、不安を漲らした群衆の間を縫つて歩いて、保子はやはりつけ馴れた自分のお白粉の匂ひを嗅ぐより外はなかつた。着物の柄にも着こなしにも、少しは都の風俗が窺はれるのが、此上もない滿足でありながら、何か充たない心の空虛は、却て昔の田舍娘が充たして居た。古ぼけた行李一つを蹴込みに置いて、麹町へと運ばれて行く車の上から見た東京は、今でも一つの幻影となつて存在して居る。

保子は場内を一周りすると、車寄せの方から心覺えを辿つて、眞つ直ぐに上野町へとはひつて行つた。狹い道幅に照らし餘した瓦斯の光りが、小急ぎに通る女達の顏を白く美しくして見せて居る。化粧品店の娘の桃割れや、煎餅屋の内儀の櫛卷など、とり〳〵に女の美しさに輕い妬みを覺えながら、軒に吊した古着のかげから冷かしの客を呼びに出た生白い顏の番頭に顏をそむけて、保子はぶら〳〵と取り止めもなく歩いて行つた。夜はさすがに灯の光りに扮飾されて美しいけれども、嘗て皆見して去つた此町はもつと夢のやうであつた筈だ。

通りを出外れようとした右側の二軒目に、ふと見ると裁縫店があつた。硝子戶を嵌めた店先では、四五人の職人が裁板を圍んで、電燈の紐を低く下げて頻りに針を運かして居る。其人達の膝に散れて居る友禪や赤い絹裏が、春の夜には相應しく嬌かしかつたので、何の氣なしに立ち止まつて其微かな搖ぎに見入つて居ると、ふと一番手前の端れに仕上げをして居た男が顏を上げた。と思はず保子は、

「あら！」と言つた。と同時に與の近所に居た男が、上野停車場附近の仕立屋に弟子に行つたといふ話

しの舊い記憶が喚び起つた。

中からは暫く怪訝さうに瞳を凝らして居たが、保子の笑顏が硝子戸近くに寄つて行くと、思ひ出したやうに會釋をして、胡坐のまゝ手近の硝子戸を開けようとしたが、起ち上つて前掛けを叩きながら、裁板を股いで表に出て來た。

『暫くね。』と保子は、職人達がちら／＼胡散臭さうに目を放つて居るのを、輕い微笑で受けながら言つた。

『……』男は暫くして唾を一つ飮んで、

『し、暫く。』と突き出すやうに言つた。

と保子は我にもなくにつとして、

『まあ思ひ掛けなかつたのね、こんな所に居らしたんですか。』と言つてげら／＼笑ひ出した。そして慌てゝそれを紛らすやうに、『ほんとに思ひ掛けなかつたわね、まあ……。』

保子にはすつかり此男に就いて忘れて居たことが可笑しかつた。此男は子供の時から名うての吃りなのであつた。

『い、いつ、こちらに出ていらしたんです？』

『さうね、去年——一昨年よ今てはもう。』

『い、今、ど、どちらに居らつしやるんですか？』

「つい此近所よ。西町なの。遊びにいらつしやいな。」

から言つて保子は、帶の間から鹽瀨の赤い名刺入れを出して、小形な一枚の名刺に下宿の番地を裏書きして渡した。

「晝は毎日出てるけれど、夜なら大抵家に居ますから、いつでも遊びにいらつしやい。」

「おやさよなら。」

「さよなら。」

「ほんとに遊びにいらつしやいなね。」

保子はくるりと踵をかへした。店の者達が變な眼で見て居たのが、可笑しくもあれば片腹痛くもあつたが、あの名刺を見たらさぞ驚くだらうと、得意の微笑を洩しながら歩き出した。無智な人達に、女の雜誌記者といふやうな名が、どんなに縁遠く量り知られぬものに現るてあらうと思ふと、一枚の名刺を手から手に移して覗き合ふ職人達に、友達顏に説明するあの男の、少し足らなさうな顏を想ひ起して莞爾とした。引いてはあの男の口から我儘者扱ひにして居た國の者達に、自分の成功が輪を掛けて吹聽されるとがあるかも知れないと思ふと、餘計に晴々とした氣分になつた。空想は又打算の上にも走つて、手廻り兼ねて居る縫物を、手傳つて貰ふことも出來ようし、その代りにはあの男の心當さない遊び場所ともなつてやらうなどゝ考へた。

保子は新しい一つの遊びを見付けたやうな氣になつて、足が向くまゝに浮々として廣小路の灯の方へ

進んで行つた。

男の名は井上政吉と云つた。保子の生れた家の近所の大工の息子で、二度落第した爲めに保子などより級は二つばかり下だつた。少しおつちよこちよいなだけに、人から小用などを頼まれて喜んで居たものだつた。保子が名刺を與へて來た三日目の夜、政吉は夜業を早仕舞ひして保子の下宿を訪ねた。

保子は丁度湯から歸つたところで、身じまひをしたあとの輕い氣分で政吉をあしらつた。宿では店に駄菓子などを竝べて居るので、そのパン菓子を出して貰つたり、其日の歸りがけに買つて來たバナヽなどを薦めた。

『ね、おあがんなさいよ、遠慮してるの?』と、保子は机に頬杖をついて、政吉が如何にも固くなつて居るのを興ありげに眺めながら言つた。

『いえ、え遠慮なんかしません。』

剃りたての角刈りに幾らか男振りを上げて、銘仙絣の袷の袖から、羽二重絞りの意氣な襦袢の袖などが見える。色は相變らず黒いと思つた。揃つた歯並みの汚いのは、親爺似て煙草が好きな故であらう。

『政ちやんは幾つてしたつけねえ?』

『もう、二十四になりました。』

『さう?』と保子は驚いて、『私より二つ下な筈ぢやなかつたの?』

「いえ、あ、貴女も二十四ですか。」
「さう。それぢや同い年なのね。」
保子は政吉があの時分年を隱して居たのぢやないか知らとふと思つた。同い年と聞くと、男といふ威じが浮いて少しく扱ひ難いやうな氣がする。
「もう何年になるの？　彼處に來てから。」
「四年。ら、ら、來年で年期が明きます。」
「さう。いゝわねえ。そしたら國に歸る積りなの？」
「歸つても、つまらないから、どうしようと思つて、か、か考へてるんですよ。」
「さうね、折角いゝ腕を持つてゝも、あんな田舍に居ちやあ手が落ちてしまふでせうよ。それにお金にもならないでせうしね。もうなんなんでせう、兄弟子株になつたんでせう？」
「えゝ、漸くね、去年からいゝ物の仕上げは、親方か、私がやるんです。」
政吉はたて續けに燻らして居た敷島の灰を、生意氣な手付きで叩いて、
「御免なさい。どうぞす、すわりつけないもんだから……。」と、とう／＼堪らなさうに膝を崩して胡坐に組んだ。と、それを機會にそろ／＼打ち解けて、
「やつちやんは、え豪いんですね。此處に、かうして獨りで居んの？」
「えゝ獨りよ。」と、保子は初めて政吉が落着かなさゝうにして居たのが解せたやうににこ／＼して、

『氣樂よ。』とつけ加へた。

『こ此間の晩ね、だ誰だかちつともわからなかつたんですよ、す、すつかり變つて居るんだもの。』

保子は我意を得たやうに莞爾した。

『お親方がね、誰だつて聞くから、私の、國の人て、これ〳〵だつて、あ、あの名刺を見せたら、そ、そ、女て、豪いんだねつて、感心してましたよ。』

政吉は絶えず口をわく〳〵させながら、睫毛の長いしよぼ〳〵した目て、保子のお白粉の浮きた顔を眺めては、見返されると慌てゝ目を伏せた。

『私はね、す、すつかり字を忘れつちまつてね、手紙なんか書くのにほ、ほんとに困るんですよ。是から少し、を敎へて下さいな。』

『敎しへるなんて、そんなに知つてやしませんよ。だつて政ちやんはあんなに字が上手だつたぢやありませんか。』

『いや、駄目なんてす。四年間針ばかり持つてるんだから、み、みんな忘れつちまつて、お、親方に、政吉此字は何つていふんだいなんて、聞かれても、解らないの。こ高等三年まて行つて、わからないことはなからうなんて、い言はれるけれど、全く忘れつちまつたんですよ。』

『そんなもんてすかねえ。』と保子は欠伸を嚙み殺しながら言つた。此男に伴つて居た期待が、あまりに平凡だつたのに早くも飽きが來た。無智な世界は色のない砂に同じい。都會の複雑な色彩に眩惑した保

子の生活には、猶且つ爛れるやうな色が欲しかつた。たとひどのやうな結果にならうとも、此男と自分との間に血の出るやうな感情の湧く筈はないのである。もぞ〳〵した口付きも、眉が顰むほどまどろかしい。

「政ちやんは今月給なの？」

「年が明くとね、なか〳〵いゝ月給が、貰へるんだけれど、い、今はほんの小使ひなんですよ。」

「さう、どの位？」

「……二圓です。た、足りやしませんよ。かうして、烟草を喫むでせう、それがどうしても、二圓になつちまひますよ。それに……時々は、一杯やりたくなりますからね。」

「ぢや足りないぢやありませんか？」

「そこはやつぱり、如何にかなるもんですよ。內、內職をするんです。あんなところに居ると、自然、馴染みが出來ますからね、政ちやん是一つ縫つて吳れないかとか、やつぱりいろ〳〵ありますよ。一枚縫ふと、銘仙物なら、七八錢は直ぐですからね。」

「へえ、そんなことをしてもいゝもんですか」

「そ、それは、親方だつて、大目に、見て置きますわ。此方だつて、もうこ小僧つ子ぢやありませんからね。」

保子は思はずにたりとした。横だふれに倚りかゝつて居た机の上から、手に當つた燐寸を取つて一つ

しうと擦ると、チロ〳〵した焰が見る間に纖細な白い軸を短くして行く。

「つけてあげませう。」と、こんなことが如何にも面白さうに、政吉が敷島の吸口を捻つて居るのに手を延ばす。

「有難う。」と一吸ひ吸つて煙りを吐き出すと、「此頃、淸元の稽古に行つてるんですよ。」と政吉は得意さうに言つた。

「へえ！」

保子は擽つたい顔をして、又「へえー」と言つた。

「よくそんな隙があるのね。」それは併し、「よく吃りても差支のないものね。」とは、さすがに保子も言へなかつたからて。

「今何をやつてるの？」

「今度、北州をやるんです。」

「さう、いゝわねえ。」と言ひかけて、保子はふと輕い氣分になつた。

「淺草ァ市の戻りにはァ、吉原女郎衆が手毬りつく……。」

「あら！」と政吉は目を丸くした。「やつちやんも習つてるの？」

「いゝえ。」と保子は調戲ひ氣味に薄笑ひして、

「そんな隙があるもんですか。」

「だつて、そ、そんなに知つてるぢやありませんか。」

「聞いてなら知つてるわ。」

保子は少々面倒臭くなつて來た。

「そんなに不粹でもありませんよ。」と輕くから言つて、無遠慮に小さな伸びをした。

それでも政吉は一向暇を告げようとはしなかつた。これから着物なぞはすつかり縫つてやらうと云ふことだの、自分が年期が濟んだあとの、夢のやうな大きな計畫なぞを吃り〳〵話し出して、部屋一ぱいに滿ちた煙草の煙りの中に、いつまでもぐじ〳〵として居た。

保子は湯に入つたあとの甘い疲れから、ふら〳〵となる頭を腕で支へて、いゝ加減な受應へをしながら、ともすれば快い眠りにひき入れられようとして居た。

燃えるやうな躑躅の色から夏の初めは來て不忍の池にぴつたりと浮いた蓮の葉は日増しに大きくなつて行つた。ネルの肌障りが、好いた男の手に觸れるやうな快さを齎して、輕々とした身内に環る血は、皮膚の色にも現はれて來た。

編輯室の机の上に降りかゝる塵に、指の痕がつき出す頃、保子は囚はれた一日から離れて、本郷一帶の空に夕燒けの赤いのを見ながら塒へと歸つて行く。譯もなく先の急がれる日は、朝の出掛に屆いた端書の人を待つ日とか、厭な仕事の間にふと思ひついた人を訪ねる樂しみを持つた夕べであつた。親を離

れ、兄弟とも遠ざかつて獨り住む女の部屋には、夕闇が冷たく漂つて、たゞ譯もなく泣かまほしい氣分を强ひるのである。水氣の溜つた飯櫃の底に殘つた飯を、二つまで盛れば火の徹りすぎた煮魚に早くも口飽きがして、茶の勢ひに搔き流す夕餉も侘びしい。保子が何處へといふ當てもなく、着物などを着替へて表に出るのはこんな時であつた。

政吉は其後も繁々と遊びに來た。縫ひ掛けて放擲つて置いた保子の單衣などを持つて行つて、手際よく縫ひ上げて子僧に屆けさせたりした。夜業をしまつてから出掛けて來るので、保子が寢仕度をして居るところに來合せたこともあつた。保子はそんな時に尠からず迷惑を感じながら、歸れとも言へないので、益々寢間着の儘で對手になつた。政吉の方では段々遠慮がなくなつて、保子が夕冷えにひつかけた羽織の縫ひざまを調べたり、針箱の針が一本となく錆びて居るのを見て、その次には自分達の使ひ針を持つて來て呉れたりした。お召の端切で袋物を縫つてくれる約束もしてある。

保子が近くの氷水屋から苺を取つたり、茶菓子を買つたりすると、眞から氣の毒さうに、

「そんなことをしないで下さい。欲しい時には、自分で買つて來ますから。」と言つた。

それは保子がいつか、月給ではなか〳〵着物まで着ることは出來ないと言つたのから、少しでも自分に關した費を省かうといふ心なのであつた。そして或時は、親方の娘が算術を習ひたいと云ふから、夜の暇にでも敎へて貰ひたいと云ふことや、その方で幾らか足しになるやうに取計らうからなどゝ、眞面目になつて言ひ出した。保子がいくら算術などは出來ないと言つても、そんなことはないと信じて居て、

獨り極めに呑み込んで行つた。

いつからか摩利支天の緣日に行く約束をしてあるが、保子は何氣なく歸つて來る道に、植木の市が立つ其日になると、急に用を拵へて家を開けた。

「やつちやんは、なか〳〵、柄の見立てが、上手だね。あの縞は、み、み、みんな、い、ゝ柄だつて襃めますよ。數寄屋町んのかつて言つてやがる。意氣だものね、柄が。私ね、藝者ね、ひ一人二人、知つてるのがあるんですよ、だもんだから……。」

「ま、お上んなさいな。」

「いや、今日はか歸ります。あのね、十日にね、おおお大掃除があるから、その晩に來ますよ。その前にね、出來たら屆けて、寄越すけれど、い今、少し忙しいの。」

珍しく部屋の緣先に立つてから言つて居たのは、保子が訪問着の必要に迫られて、無理算段して松坂屋から取つた薄物を、店の政吉にまで賴みに行つた次の日であつた。

「濟まないわね、忙しいのに。でも私、よつぽど自分で縫はうと思つたけれど、毎日出なければならないんでせう。だからいつそ商賣人の政ちやんにお願ひしようと思つてね……。あとでどつさりお禮しますよ。」

「お、ゝお禮なんか、要りませんよ、お禮なんか。出來るだけのことはね、力になりたいと、思つてるんだから。」と、如何にも眞面目に言つて、口に手を當てゝ何か考へて居たが、突然、

「昨夜の、着てた浴衣は、よく似合ひますね。素的に若く、見えましたよ。」と言つて、「ぢやさよなら。」と思ひ出したやうに歸つて行つた。

夏に弱い保子には、段々夜だけが待たれる頃となつた。溝板に下駄の音がコト／＼と繁くなつて來ると、庇合ひの薄暗に行水の音が聞え出して、共同水道の水は絶え間なく迸つて居る。その前後から保子の體に生々とした世が甦つて來るのである。ぽこ／＼云ふやうな近所の稽古三味線も煩くなく、上野の山の時の鐘が、物語めいて餘情を誘つて行く。

「白地を着て、團扇を持つて、表の涼み臺に行つて通りを眺めます。すると、後から／＼と人が通る。けれども其うちの一人だつて、私を知つてるやうな顏をして、傍に寄つて來る人もありません。それでも私はなほ、いつまでも／＼、私の知つて居る顏の見えるまで、通りを眺めて縁臺に腰を掛けて居るのです。私は今夜、さういふ失望を繰り返させないやうに、貴方にまでお願ひしようと思ひます。」

かういふ端書を、保子は十日の朝の出掛けに投函した。それは保子が關係して居る雜誌に、カットやコマ繪なぞを書いて居る年若い畫家へてあつた。どうせ政吉の爲めに潰す一夜であるならば、悔いのない時間を費すことによつて滿足したいと思つたのである。

其夕方政吉は仕立物を小僧に屆けさした。そして一時間ばかりの後に立寄る旨を言傳てた。

保子が湯から歸つて見ると、畫家は來て居た。政吉が見えたのは、それから暫くしてからで、木戸の錠の音が勢ひよくしたと思ふ間に、縁先に現れた政吉は、先客があるのを見ると、見る／＼其面てに失

望の色を現した。

『いらつしやい！　さあ政ちやんは此方へいらつしやいな。』と、保子は浮々とした調子で自分の傍の方に政吉を請じた。

畫家には政吉を國の者として紹介し、政吉には畫家を少し豪く思はせるやうな口振りで紹介せた。

磊落な畫家は、政吉などには一向お構ひなしに、さま〴〵な面白いことを話し續けた。政吉は無愛想なお辭儀をすると共に、くるりと背を向けて、机の上に披いてあつた雜誌を、見るのでもなく弄んで居る。其心持をすつかり讀んで居る保子が、時々わざと通俗な話に水を向けるけれども、はき〴〵返事をするでもなく默り込んで居る。其癖二人の會話を一語も聞き洩らすまいとするやうに耳を欹てゝ、竊視するやうな表情を其顏に泛べて居た。

保子はひとりで乾燥いて居た。自分でも氣の付く程ヒステリカルに乾燥いだ。笑ふやうなことが起る度びに、決つて政吉の方に目を遣るけれども、にこりともしない政吉は、硯箱を引きずり出して新聞紙に徒ら書きして居る。あれ程好きな煙草を喫まうともしない。口も付けない番茶が、赤くなつて底の方に滓を沈めて居る。

初め保子は、政吉が諦めて先に歸つて行くものと思つて居たが、一向そんな氣色が見えないので、段段の樣子から、二人の間に就いて疑ひを挿まれて居るのに感づくと、無智な其頭に甚だしい厭はしさを覺えると同時に、可笑しさが意地惡るく手傳つて、さも戀中でゞもあるやうに見せびらかして、揶揄つ

てやりたいやうな氣になつた。

毒氣のない畫家の顔は、九時の聲を聞くと慌てゝ辭し去つた。保子は態とそれを表まで送つて出た。部屋に歸ると政吉は漸く机の傍を離れて、座蒲團の上に不作法な胡坐をして居た。

『失禮しちやつてね大變。先程は着物を有難う！』と保子は景氣よく言つて、風呂敷包みを引寄せながら、仕立ての出來榮えを見て、

『まあすつきりと出來てるわ。着よささうねえ！　ほんとに有難う。』

政吉はやつぱり浮かぬ顔をして居た。

『政ちやんはお錢は取つて呉れないし、何をお禮にしたらいゝでせうねえ。』

『おお禮なんぞ、要りませんよ。及ばずながら、力になつて、やつちやんの、成功を祈つてるんだから。』

と、政吉は何處やら不滿さうな調子に力を入れて、『ああの人、よく遊びに來んの！』

『さうね、たまあに。』と保子は取合はず、

『あゝ、今夜はすつかり興奮しちやつた！』

政吉はそれからくど／＼と、今夜は保子を誘つて宮戸座を驕る積りだつたことを繰り返して、氣を落しながら間もなく歸つて行つた。

それから一週間ばかり過ぎての夜、保子が寢間着に着替へたところへ突然遣つて來た。絞りの廣口の筒

袖などを着て、雪駄を履いて居た。そして若い一人の男を連れて居る。近所の床屋の若い衆なさうで、これから吉原へ行くのだと言つて、政吉は財布を出して金勘定を初めた。

「あるく〳〵。さうら、な、此處に道具があらァ。」と何の積りか紙幣を見せびらかして、ちよい〳〵保子の顔を見て居る。

「大變景氣がいゝのね。」

保子はたゞ笑つて居た。何だか此男の爲る事がちつとも解せなかつた。

ばら〳〵ばら〳〵と密やかに屋根を打つ雨の音が聞え出した。するとそれて暫く愚圖々々して居たが、やがて傘を貸して呉れといふので、一本きりない蛇の目で、明朝現在困るとは思つたが、早く歸したいばかりに快く貸してやつた。

保子はつく〳〵すべてが煩はしくなつた。

車坂の貧民窟近い露路口に、店を張り出した天麩羅屋の、油の匂ひが胸惡く漂つて、パン菓子屋の店の日除けが、夕日の殘りを力なく遮つて居る。不景氣な八百屋の店に腐つたバナヽの轉つて居るのから無暗に水を流すので、青苔の生えた魚屋の板の間など、暑さと仕事に萎え切つた保子には、どれもこれも眉の顰められるやうな所を通つて、漸く宿に歸つて來る此頃は五時である。まだすつかり去り切らぬ暑さのうちに、湯屋に驅けつけるのが一つの息つきであつた。夜にのみ生きて居るやうな保子の此頃の

プログラムには、或日又政吉が加はつて居た。
吉原行があつてから間もなくのことて、
「此間の晩は面白かつて？」と保子が冷かした積りて云ふと、政吉はあべこべに怨み言を言ひ出した。それはあの晩あの若衆と涼臺て落ち合つて、ふとしたことから廓の話になり、勢ひ繰り出さうといふ段取りになつた。ところが政吉は若衆が無一文なのを見拔いて居たので、勘定は自分が持たねばならず、それが何日になつても取れる見込みのないことを經驗して居るから、如何にかして調子を外さうと考へた。て思ひついて保子の所に行き、面白く話して別れようと思つたのてあつたさうだ。ところが旨い工合ひに行かなかつたので、金ても見せびらかしたら、さすがに保子も留めるだらうと、要もないのに財布を引き出したりして、留めて吳れるのを待つてたのてあるさうな。
「だつて政ちやん、いつかそら、あんたが吉原に行くのも附き合ひだから仕方がないつて言つてたぢやありませんか。だもの、私はあの晩だつてさうだと思つたわ。それを止めるのも不粹だらうぢやありませんか。」
保子は政吉があまりの眞面目さに、腹を抱へる譯にも行かず、たゞ苦笑するより外はなかつた。
「いゝえ、附き合ひも、割前ならいゝけれど、つまりませんよ、あゝんな奴に、たゞ出して遣んのは……。」と、政吉は慌てゝ辯解した。そして暫く何か考へてる風だつたが、やがて憚るやうに、
「やつちやん、此間、いゝつて云つたこと、ほんとにいゝの？」

「何が？」

「だつて、お酒飲んでもいゝつてこと。」

「あゝさうね。」

保子はさつと厭な顔をした。それは政吉からいつか、料理屋に行つては金が要るので、差支へがなかつたら此家で飲まして呉れないかと言はれた時に、別に大したことゝも思はなかつたし、まさかとも云ふやうな氣持ちから、うつかり宜い加減の挨拶をして置いたのであつた。

「全く、料理屋に行くと、い、い一兩二兩は直ぐ飛んでしまひますよ。女にだつて傍に附いてられりやあ、五十錢位投げてやらなけりやなりませんしね。」

保子の人の好い一面と、今は少し棄て鉢氣味の氣分が合致して、斷り切れず承知をすると、政吉は喜んで表に出て行つた。

保子はほつと溜息をして、机に倚りかゝりながら、政吉に就いての今までを振りかへつて見た。利用するには、利用され得るものから、又それだけの犧牲を要求されて居るのであつた。駈引の握り合ひにも等しい、利益の交換！　何といふ馬鹿々々しいことであらう！

「お待遠さま！」

びくりとして首を擡げると、それは酒屋が德利をコトリと椽先に置いて行つたのであつた。見馴れぬ其男の意味ありさうな目に出つ逢すと、妙な聯想を喚び起して、不思議にも徒めたさが胸一つぱいにな

つた。

「お待遠樣！」

續いて魚屋が刺身を屆けて來た。保子の胸は益々穩かでなくなつた。自分から仕出來したことゝは言ひながら、何といふ侮辱であらう！

政吉は間もなく戾つて來た。そして懷から新聞紙に包んだ小笠原產のバナヽを取出した。保子の喰べるものにといふ積りなのである。

保子は仕方なく宿の小母さんを呼んで、お膳と杯と箸とを貸して貰つた。政吉はお燗をして貰ひたさうであつたが、潔癖家の小母さんが、鐵瓶の中に入れることを拒んだので、政吉は冷たいのを貧乏德利のまゝで、ちびり／＼と遣り出した。それを小母さんが、橫目で見て居るのにも保子はハラ／＼した。

越えて二日、煩さゝに弱り切つて居る保子のところへ、政吉は鬱金の風呂敷包みを一つ預けて行つた。淺草に行つて來るから、明日の朝まで預つて置いて吳れといふのである。中は披いても見なかつたけれど、手觸りは古着物らしかつた。

保子は遂々堪へられなくなつて、その朝小母さんに圓く遠ざかつて貰ふやうな言傳てを賴んで、早くから家を出てしまつた。

風通しの惡るい編輯室に一日閉ぢ籠められて、夕方眼の大きくなつた顏をして歸つて來ると、小母さ

んは待ち構へてたやうに保子を掴へて、

『ね縣さん、言つて遣りましたよ。縣さんは忙しいんだから、さう〳〵度々來られちやあ勉强が出來やしないつてね。お前も男なら、女一人のところに、あんまり遲くなつて來るのは愼むものだ。おまけにお酒なんぞ飲まれちやあ、家で淫賣宿でもしてると思はれて甚だ迷惑だ。縣さんにしろ、嫁入り前の大事な體だから、そんな噂さを立てられた日にやあ甚だ以て迷惑だつてね、さう言つてやりましたよ。そしたらね、縣さん、奴さん大變謝つてましたよ、大きに惡うございましたつていふから、大きに惡るいも何もないから、是から少し遠慮して貰ひたいのでね、びし〳〵やつつけてやりましたよ。』と、得意になつて說きたてた。

　さうまで露骨に言つて貰ふ積りはなかつたのだけれど、言つてしまつた以上は仕方もない。常から保子のところへ來る澤山な友達のうちに、自分の好き嫌いを定めるやうな小母さんであるから、腹立ち紛れに何も彼も言つてしまつたのであらう。と、保子は氣勢ひたつた小母さんから、がみ〳〵怒鳴りつけられて、悄々と歸つて行く政吉を目の前に見るやうな氣がして、さすがに氣の毒さに堪へられなかつた。それに、却つて自分が怨まれやしないかとそんなことも心配になつた。

　小母さんはよつぽど政吉が氣に喰はなかつたものと見えて、猶いろ〳〵に言ひ募つた。

『ね、縣さん、誰だつて訪ねて來るのに、「縣さんいらつしやいますか」つてさういひますよ。それだのにあの奴、「居ますか？」からだ。さうしてぐん〳〵通つてしまひますからね、何日か小つ酷く叱つてや

つたんですよ、あゝ縣さんの留守ん時さ。「おい！　誰だ、人の家へぐん〳〵はいつて行くのは」つてね、ほんとに好かない奴さ。」

心に懸りながらも、さう言つてしまつたものを、今更どうにも出來ず、保子はぐづ〳〵に忘れ去らうと心に努めた。

翌日の午後、四五通の投書の中に交つて、一封の手紙が保子宛に編輯局に屆いた。井上政吉といふ下手な字が目に注くと、保子はあまり快い手紙でないことを直覺した。切手が二枚も貼つてある程長い卷紙だつた。冒頭から讀めない字に出つ會しながら、片假名と平假名を交ぜこぜにした、當字澤山な文句を判じ〳〵讀んで行くと、それは皆怨みの言葉であつた。こんなにまで字を忘れてしまうものかと思はれる程、間違ひだらけであつた。それに依つて見ると、小母さんは髮を結ひながら、丁度はひつて來た政吉に睨みかゝつたものらしい。『世間あるきの髮結ひ風情の前で辱めなくとも、保子自身から注意して呉れたなら、どんなに嬉しからうものを』といふやうな意味のことが、繰り返し〳〵言つてある。そして其日は、家に歸ると仕事としないで寢てしまつたことや、惡意あつて要らぬお世話をしたのでない事を、廻らぬ筆で辯明してある。

あまりに小母さんの高飛車が利き過ぎたらしいので、保子は讀んで居るうちに只管氣の毒になつて來た。此後何處に越すやうな事があつても、居所だけは知らして呉れと添へ書きしてあるので、何處までも不思議な絆を曳からうとすることが、厭はしくもあつたが又可憐でもあつた。

たゞ一個所どうしても判斷の出來ぬ所があつたので、暫く眉を顰めて考へて居たが、ふと思ひつくと、保子は思はずぷつと失笑してしまつた。そして獨りでお腹を縒つて笑ひ轉げた。それは、『貴方とふふになるつもりはありませんでしたが』とあるので、ふふとは夫婦の積りなのであつた。其露骨な表現の言葉に、すつかり興ざめのした保子は、當り障りのない緩和な返書を認めて、早速添へ書きの通りにその手紙を送り返した。

蒸すやうな日が二三日續くと、保子は一堪りもなく痩せてしまつて、ともすれば仕事の方も休み勝ちになつた。何處へか遁れたい、遁れたいとは思ひながら、獨り立ちの女の足と手は、丁度糊づけにでもされたやうに、燬けるやうな都會を離れることが出來ないのであつた。

編輯間際の忙しさに、つい夜更しをしたのが障つて、輕い腸加答兒を起した保子は、一日江戸櫻を貼つた顳顬を押へながら、机に頰杖をついて、凝乎と海から來た畫家の便りに見入つて居た。そこへ十二三の小僧が、結び文を持つて木戸口からはひつて來た。それは政吉からの使ひで、『貴女も氣持ちが惡るからうから、それではいつぞやの仕立賃を、九十五錢だけ頂きます。此者にお渡し下さい。』といふ意の文面であつた。

保子は蟇口から一圓の紙幣を拔き取ると、この手紙にくる〳〵と卷いて、默つて小僧に手渡した。そして、これですつかり帳消しになつたといふやうな、晴々とした氣分になつた。

祇園會

但村はつ子

蓬々として櫛も通らぬつくも髪、七十に間もないお絹婆さんの、みづ齒ぐむ口許にも、何處やら捨てがたい昔のおもかげ、京は新町四條邊、巽に當つて大きな角倉。池田屋と人も知つたる造り酒家、その愛娘だつた若いさかりの艶姿は、いつも自慢の昔ばなし、その祇園會の粧ひてどもしのばれる。

吹玉やふきだま、花火せん香、山鉾番づけ。とふれ歩く朝の程より、家々は重代の屛風衝立、金、銀、砂子に、扇面ちらし、土佐に狩野に、四條圓山、粋を衒つて引めぐらし。庭の打水。床の華。焚き込むる名木は往き來るさの袖に薫り、内は床しき玉だれのおくの間も表ざしきも古渡り毛氈し

きつめ。打ち通して涼風も吹ぬけるこしらへ。はや暮れ近く絹ぼんぼりに灯匂うて、をちこちに管絃のさんざめき。木深い庭の燈籠も折珍しく灯を入れ、片枝さし出す松の梢に端居の君のかざしの花が咲く風情。若し家に美人あらば、金屏のかげに琴をいだき、翠簾のほとり、柳とさくら相對して烏鷺を戰はすなど、凡好き者ならずとも足を止めて垣間見させられるのは此祭の折である。

山や鉾の祇園ばやしに、更くるをしらぬ宵宮の、大路小路は子供や娘たちの着飾つたむれ、伊達染のゆかたによしこのなどを小聲にうかれて行く町々の若い衆扇子に白たびの若旦那、などに人なみを作つて、辻々の小暗がりには赤い小提灯の砂糖水や、心太、しら玉の店、飴湯、甘酒、烏丸の枇杷葉湯屋が丁稚小厮を客に呼ぶ、あくる祭日は朝より町々の山鉾四條を東へ寺町を南、松原を西へ各々其町へ日ぐれ近う曳き歸りてしばしの容赦もなく取こぼつ習ゆゑ今宵一夜と浪うつさまも凄じい人の出さかりを、幾度となく打つれて涼みがてら見せありく妙齢の娘たち、船鉾町は池田家の評判娘は十六、時の流行の江戸紫に、小萩もやうの絽の振袖、しづと呼んでうす色紅梅の絽ちりめんを細くつけたつまの優しさ、帶は緋がの子麻の葉しぼり二尺あまりのだらりに、白と萌黄の手綱ぐけのおびしめを蝶にしめ、宇之助油の香もなつかしいつぶし島田に金元結切つてはなし、銀の芒のかんざしに小い鈴がころ〳〵と歩むたびに音をたて、前髮くゝりの緋ぢりめんに、色映ゆる厚化粧細い項にさしかざす塗柄うちわの間から、のぞいて見える淺黄綸子の半えりも竹屋町ぬひのおとなしい好み。

お向ふのお駒さん、それは商買柄とて極上々の地を選んだ濱ちりめんを紺に絞つた派手好み、白地小柳

に輪ちがひとうろこを摺箔の中幅お八を吉彌むすび。髪のつくりにいちの長い奴しまだに水色かの子。また下隣の絲問屋、岩國屋のお町さんは、十二から板倉様へ上られて五六年、此春おいとまもらつての嫁入前、まだ失せぬお屋敷風のものごし、これは高髷に、白打紐のまさたてに銀の平打。太鼓のびらびら。すべてものがたく、今紫の絹のふり袖、流れに天の戸わたる梶の葉ちらしの高もやう。古唐紙色に大内菱の絲錦を高々とやの字結び、紅の丸ぐけをおびしめに、うこんちりめんのしごきにもたえぬ細腰、花ならば白い虞美人草か。お駒さんのさらりとした派手姿はさしづめ若葉のかげの花あやめ。またお絹さんのしほらしい娘ぶりは紅芙蓉が似合しいと噂もとり〳〵の三人娘、三條から五條、御幸町から油の小路の界隈切つての美形、まさりおとりの各々の方人、きの字、この字、否、まの字、と中々勝負は果てなかつた。

それは元治元年七月のこと、年々の祭禮に變りはないが何となく物騒しい世の中、いつどんな事がと、美しく飾り立てた家の隅々にも不安な氣がみち〳〵て、宵宮の更けた門涼みの床几にも、噂はいつかこれのこと大名がどうして、禁裏さまがどうと流石國の大事、明日にも京洛中がどうなるやら、と心細がらせられた。

祭の日といふのに、未明より駿馬の士の往き來、町々非常をいましむる騒しさ、早午の刻より逃仕度して鉾も山もあつたものではなく、洛中は祭の酒ごとより戰の庭に移りゆく淒じさ、池田家の一家も三條を東へ大津街道をちり〳〵に近江の知邊へ落ちて行つた。

『越後屋の土藏が落ちた――』

『蛤御門が危い――』

人々は叫びながら逃げてゆく。

紫のふり袖姿そのまゝ、素足に重ね草履、鬢のほつれもものかはと切り結ぶ刃の下をくゞり〳〵。あとふり向けば早我家は焔の中、船鉾を預つて由緒の深い彼の巽の角の倉ばかり、たのみありげにそびえてゐた。



裏面

國木田治子

（一）

或日千代子が勤めて居る洋食店へ、實弟の春吉が尋ねて來た。

勘定書きを書いて居た千代子の側の階下を受持つて居るお組といふ女が來て

『此方が貴女に御眼に掛りたいと言つて、裏へ來ましたとさ』

とお組は胡散臭い眼付きて千代子を見ながら鼠色によごれた名刺を千代子の眼の前に突きつけるやうにした。

『おやさうですか。如何も難有う』と千代子は受取つて、何氣なく名刺を見るとおぼつかない書體で安藤春吉と書いて有つた。

それを見た千代子は思はず息を飮んで、凝と名刺を見詰めたぎり、暫時は口がきけなかつた。意地悪のお組は冷やかな眼で千代子の有様を見て居たが、須臾て

「お知合の方なら此處へお通し申しませうか」

と言つたので、千代子はやう／＼自分に返つた。

「否！　如何致しまして私が下へ行つて面會してまゐります、私の弟なので御座いますが、それは／＼よく／＼の親不孝者で最早四五年家出をして居つたので御座いますよ。何にしに參まりしたらう。又心配を掛けに參つたので御座いませう。困つたものです」

と千代子はお組になまじ秘し立てをして、くだらない疑ひを受けるのは自分の不爲と思つたので、問はれぬ先に眞實の事情を打明けてしまつた。それを聞くと。

「マアーそれは御心配で御座いませう」

とお組は殊更に氣の毒相な顔をして見せた。

「それでは憚りさまですが、暫時此處をお願ひします。おわかりにならない事が有りましたら、お琴さんに聞いて下さいまし。直ぐ行つて參りますから」

と千代子は丁寧にお組に頼むで勘定場を離れて階下に降りた。裏とお組が言つたので、臺所の方へ來てコックに聞いて見ると。

「お千代さん、彼んな者を御存じなんですか立ちん坊みたやうですぜ?!」

と玉どんといふ出前持ちが顔をしかめながら千代子の側へ來て小聲で私言やくので、千代子は顔を赤くしたが。

『私の實家の方に少し關係の有るものなのですよ。眞實に困つた男だネ――何んと思つて私の處へなんぞ來るのだらう』

と千代子は邊りの人にきこえよがしに言ひながら、其處に有つた下駄を借りて、裏へ出た。ぼろ〳〵の股引に色の褪めた印半纏を着た春吉が、日光のあたつて居る塀に寄り掛りながら眼を眠むつて腕組をして居た。

餘りに變り果てたその姿を見た時は千代子は胸が一杯になつたが。それでも春吉の側へ寄つて

『春さん!!』

と呼び掛けたが、それと同時に冷やかな平常の千代子の眼に返つて居た。千代子の聲を聽いた春吉はぽつかり眼をあいて

『姉さん!!!』

と懷かしげに呼び掛けながら二足、三足。千代子の方へ寄つて來た。

春吉に前に出られたので千代子は思はずあとずさりをした。

『隨分失禮な人だネ――そんな乞食のやうな姿をして、姉さんに恥をかゝせに來たのだネ――用があるなら手紙でもよこせばいゝのに。』

とむづかしげに言つた。その冷淡やかな態度に思はず鈍い眼を見張つた春吉は、暫時凝と千代子の背反けた横顔を恨めし相に眺めて居たが。

「姉さんお前は薄情だなア……!?」

とやがて春吉は沁々言つて又後ろの塀に寄り掛かつて眼を瞑つてしまつた。

薄情と言はれた千代子は顏を赤めたが弟の言葉を他人が聞はしなかつたかと思はず四方を見廻した。所が幸ひ此の裏は洋食店一軒が出入をする露路で、一方は隣家の藏だからホツト息をついたと同時に今日は兎も角も欺ましてなりと、早く歸へつて貰らはうと思案して。

「私はお前から薄情と言はれる覺えはないけれど、お前がさう思つて居るなら仕方がない。さう思つて居るが可いよ。一體今日は何しに來たのだい。私は朝早くから晩まで少しも手を離せない事務をして居るのだからぐず〳〵して居られては困るんだがネ――何んならお前の家へ歸へりに寄つてあげても好いから所をおきかせな」

と千代子は帶の間から少いさな手帳を取り出した。

「家――?!」

と春吉は仕方なささうに、眼をあいたが。

「アハヽヽ　!!姉さんお暢氣だア――!。家なんぞ有つてたまるもんか」

と投げるやうに言ひながら春吉は笑つた。

「それぢやお卷さんや子供達は如何したのだえ」

と畳み掛けて千代子は聞いた。

「一人は死んだよ、男の方が。女の方はお卷と一所に田舍に居らア‥‥」

「田舍つてお卷さんの親里かい？」

「ア‥‥」

「何時頃から預けてあるの。」

「最早彼れ是れ三年に成らア‥‥」

「マア‥‥‥」

と千代子は驚きの眼を見張つた。

「音信不通だから、最早お卷も今頃は他家へ嫁に行つたかも知れないよ」

と春吉は暢氣なことを言ひながら、何にか懷中をごそ／＼探がして居たが。やがて卷煙草の吸ひ掛けを取り出した。さうして。

「姉さん濟まないが、マッチを貰つてくれないか。」

と言ふので、千代子は仕方なしに臺所の方へ行き掛けると、それを春吉は又呼び止めてお客の吸ひ掛けが澤山有るだらうから。それを貰つて呉れと言ふ。

「そんな外聞の悪いことが言はれるものかネ――」

と恐い眼をして弟を窘なめてさつさと行つてしまつた。その後姿を茫然と見送つた春吉は舌打ちをしながら。

「駄目らしいなア――。」

と思はず溜息をついた。

「俺ァ――如何して斯様心が弱いんだらうな。ウンと油を取つてやらうと思つて來たのに、顔を見ると矢張りさうも出來ない。こんな心だから。乞食のやうに段々なり下がつてしまつたのだなア……!!」

と沁々情けなささうに獨言をいつて、今更らしく汚たない姿を見た。

其處へ千代子が笑ひながら。敷島とマッチを手に持つて出て來た。それを見ると。

「流石姉さんだ。素敵々々」

と矢庭に手を出した。仰山な春吉の態度に千代子は八の字を寄せたが、捨てるやうに煙草を春吉の手に渡すと、直ぐ袂から結んだ紙包を取り出して。

「春さん家は無いつたつて。宿る所は有るのだらう。其處を姉さんに言つておいて、其内折を見て行つてあげるから。さうして最早そんな姿をして姉さんに逢ひたいなんて此處へ來て呉れては困るよ」

「俺ァ――姉さんなんて言ひはしないよ」

と春吉は美味さうに煙草を喫しながら、けろんとして居る。

「當然さ――けれどお前と私は二見かと。幼少い時言はれたんだから、度々來れば終には姉弟といふ事

がわかつてしまふもの。」

「だつて仕方がないや。姉弟なんだもの」

「それはお前が人間並の姿をして來るのなら姉弟だもの。來てもいゝが、そんな——今の店では立ちん坊だなつて言ふんだもの、私はこれても多少は此店て他人を使つて居るんだからネ——お前のやうな人が弟だなんていふ事が知れやうもんなら使はれて居るものが。私を馬鹿にして仕方がないもの。サア——!これは、少しだけれど當分のお小使にてもしておくれ。私だつて當時は私の痩腕て家内を養なつて居るんだから。それは〳〵苦るしいのだよ。此のお金だつて御主人から借りて來たのだから、仇やおろそかに思つてくれちや困るよ」

と千代子は言ひながら金包を春吉に渡たさうとした。

處が案外にも春吉は一寸金包を見たばかりて、手を出相ともせず。

「姉なん、だからお前は薄情だと云ふんだ。私が何にしに來たか其の譯も聞かずに小遣を呉れて追拂らはうなんて餘り酷いやア——。」

と春吉に眞顔て恨まれて、千代子は大方金の無心と早合點したのが何んとなく氣まりが惡るかつた。

「それても今日は大變いそがしいのだから、ぐず〳〵しては居られないのだよ。話があるなら住所さへ知らせて呉れゝば、私は其處へ行つてあげるわ。今日は氣の毒だけれど歸へつておくれ、後生だから!!」

と千代子は泣かぬばかりに言つて、金包を渡たさうとした。けれど春吉はなか〳〵それを受取らうと

もせず。

「俺ア――それこそ立ちん坊をしたつて喰ふには困らないのだから、金なんか不用ないや。姉さんだつて俄やおろそかな金ぢやないんだから。無理に人に遣ることもないやネ――。姉さんこそ仕舞つて置くがいゝや――。それぢやきつと如何な處へても來てくれるかね。」

と春吉は念を押した。

「それは行くがね。一體如何な處だへ？！」

と千代子は心許なさそうに春吉の顏を見ると。

「本郷の家へ來ておくれな。」

と春吉は言ひながら千代子の顏を凝と見た。

「エッ――本郷――？！」

と驚ろく千代子の顏を氣味よさゝうに見ながら

「晝間はおつかア――一人なんだから、一寸都合して來ておくれよ。」

「それおやお前は本郷の家に居るのだね。」

「如何して〳〵俺ア勘當の身の上なんだから、實家へなんて寄りつけるもんか。」

「それぢや何故本郷へ來てくれと云ふのだえ。アヽ……解つた……又謝罪をさせられるのだね。」

「謝罪だつて……戲談いつちや困る。先方から此度は謝罪を入れなけりや……」

と春吉は言つて大口開いて笑つた。その暢氣な顔を眺めながら、千代子は春吉が今日來た事情をそれからそれと想像して見たが。矢張り終には始終氣に掛つて居る或る事情へ考が落ちて行くのであつた。

「親爺ニアー――勘當されたつて、おつかア――からは何にも言ひ渡された覺えはないのだから。親爺の留守にちよく／＼行くのさ。」

「マア――?! その姿で……。」

と眼を見張つて、

「御近所も門並御多分に漏れない方だから平氣さ――。」

「マア――呆れた人だネー。けれど此度の家はそんなに汚ない人達ばかり居る處なのかしら。」

「ウン――」

と返事をして春吉の眼からは急に大粒の涙がぼろ／＼漏れた。それを見た千代子は、此の頃の實家の模樣が想像されたと同時に、何んの便りもないのをよい仕合と、永年打捨てゝ置いた自分の仕方が恥かしかつた。

「眞實に私も親爺さんやお母あさんの事を思はないのぢやないんだが。お前は委しい事情は知るまいけれど、私の家も旦那が死去なつた後はそれは／＼不幸續きでね――。」

と申譯けをする千代子の言葉を春吉は五月蠅さゝうに聞いて居たが。

「姉さん處の樣子なんぞ聞かないだつてよく知つてらア――だから本郷へ來てくれつたつて、決して姉

さんに迷惑や心配を掛けやうつてんぢやないんだ。唯だおつかアーが餘り久しく逢はないから、一寸でも顔を見たいと言ふんだから、行つてやつておくれよ。」

と千代子の言葉を遮つて斯う言つた。

「行くともね。行かないとは言ひはしないよ。私だつて親爺さんやお母さんに如何に逢ひたいが……」

「うまく言つてらアー――?!」

と春吉に皮肉られて流石の千代子も顔を赤くした。機會に千代子の頤に當つて、地上へ落ちたものがあつた。驚ろいて見ると紅い薔薇の花瓣が四方に散つて居た。

「マアー――酷い。」

と亂れた髪に手を掛けながら窓を見ると。二階の家から正岡が此方を見て居るので爾笑しながら挨拶すると。正岡は恐ろしい眼で千代子を睨むだ。千代子は妬いて居るんだよ――と腹のうちでは可笑かつたが。此方も敗けずに睨み返へした。すると未だ持つて居た花を此方へ投げつけやうとした時。お組も窓の處へ來て正岡が投げやうとするのを笑ひながら止めて、何か二言三言言ふと正岡も苦笑しながら室のうちへ姿を隱くした。千代子はお組に頭を一寸さげると、それに應じながら忙しく手招をしてお組も窓を離れてしまつた。

　塀にぴつたり寄掛つて居た春吉は、二階の模様は見えなかつたが變な樣子をする姉の顔を呆氣に取られて眺めて居た。

「それぢやア――ね春さん。明日にも本郷へ行くから、今お客が大變立て込むで忙しくなつた模樣だから。かうしては居られないわ。サアー遠慮せずに持つておいてな」

と又紙包を春吉の眼の前に突きつけた。

「不用なかつたら。本郷へ行く時おつかアーにそれて土産でも買つて行きねえ――。ぢアや俺は歸るよ。さつと行つておくれ。行かなきやアー又迎ひに來るから。アハヽヽ」

と春吉は嫌がらせを言ひながら、さつさと往來の方へ出て行つてしまつた。

千代子はあとを追つてまで紙包を渡さうともせず。姿が見えなくなるとホッと息をついて、急いで臺所の方へ引つかへした。

（二）

「公園ッて騷々しい所だなア……橋一ッ越せば別天地が有るのに。わざ〱こんな所へ引張り込むなんて君も酷い姉人だなア――。おち〱話も出來やせん」

と男は不興氣に杯を取りあげた。

「濟みません――けれど今夜は如何しても早く家へ歸へらないと困ることが有るもんですから、御無理を願つて眞實に申譯がありません」

と相手の女が言譯をするのを聞いて、

「臺間の男が待つて居るんだらう。アハヽヽヽ。」

と男は取つて付けたやうに笑つた。

「マア……」

と女は殊更仰山らしく驚いて見せて。

「貴方も餘りな方ね。私に幾度同じ事を言はせようとなさるの」

と男の顔を恨めし相に見た。

「御實弟ださうだつたなア――。」

と笑ひながら女の顔を覗き込んだ。

「存じません――」

と女は顔を一寸そむけたが。

「御覧に入れゝばよう御座いましたねえ」

と冷やかに言つて男の膳に有つた杯をいきなり取つて。ゴクリと不味さうに眼をつぶつて飲み下した。

男はあわてゝ女の飲まうとするのを止めやうとしたが、間に合はなかつたので、其處に有つた燗徳利を急いで自分の側(わき)へ隠くした。

「お酒つて眞實に不味いのね――」

女は眼をぱッちり開いて嬋妍(あでや)かに莞爾(につこり)したが。

「私――最早今夜はお先に歸へりますから」

と急に居坐を直して顏を下げた。

女の態度に凝ッと眼を付けて居た男は。

「千代子さん役者があがつたなァ――」

と沁々言つて髮に差して有る翡翠の簪に眼をうつした。

「御仕込みてねえ――お蔭樣て此頃は千兩役者になれさうてす」

女は俯向いたなりて、斯う言つた。見る〱女の耳や襟元は紅を差したやうに赤くなつて來た。

それを見た男は

「千代子さん。苦しいだらう――飮めもしない酒なんか飮むんだもの――」

と優さしく言ひながら、有り合せたサイダーをコップに注いて、

「サア――マアこれても飮み給へ」

と女の側へ持つて來てくれた。それても女は暫時顏をあげなかつた。

中腰に成つて居た男は膝を突いて女の肩へ手を掛けて引起した。

「アヽ――苦るしい――」

と引起こされた女は、苦しさうな息をついたが。

「打捨て置いて下さい――貴方みたやうな方私恐ろしくなつた。私しや貴方の御蔭て亡夫のお友達なん

かに綺麗な顏をして逢へない身に成つてしまつたのですよ。それを……それを最早厭たれんだから、詰まらない事を大變な事情でも有るやうに言つて、仕舞の果に役者があがつたなんて、餘りてす〳〵そりや世間から古狸と諢名のついて居る貴方に仕込まれるのですもの。如何に馬鹿だつて少しはねェ――」

と女は捨鉢な事を眼を据えながら言つた。何時もにない氣の荒い女の態度を見ると男は。

「御免〳〵僕が惡るかつた。何んで千代子さんに厭きなんかするもんか。若し嫌に成つたのなら何んて無理に今夜なんか逢はうと言ふもんか――お組の奴が變に吹込むだものだから、僕だつて氣に成らうぢやないか――けれど最早すつかりわかつたから――一寸でも君を疑かつたのは僕が實際惡かつた。サア機嫌を直して歸へらうね。こんな始めて來た處で、ごた〳〵すると變に思ふよ」

と男は一生懸命に女を宥めた。

「お組さんも餘りな人だ。そんな事を言ふと困ると思つて、恥を忍んで打ち明けたのに――」

と口惜しさうに言つた。

「水を差すつもりだつたのだよ」

「憚りながら――!!」

と莞爾したが。

「私の方はその積りて居ても、貴方の方は澤山有るんですものね。眞實に張合が無いこつたら。考へると何時捨てられるか心細いつて、まさか捨られたからつて。貴方の商會へ暴れ込みも出來ずね」

と寂しく笑つた。

「だから貴女の安心するやうに。柏木の別莊をあげるから住居になさいと言つても——。」

「だつて。その御深切は嬉しいけれども、私の體は自由にならないんですもの。」

とほつと溜息をついた。

「それは貴女が餘り慾が深いからさ。世間へは貞女顏をして。」

「貞女だつたのですよ。それを——」

「最早その先は聞かないてもわかつて居る。」

と男は周章て遮つた。

「けれども法學士の未亡人といふ肩書を取つてしまつて。今迄通り姑さんや子供と一所に居ればいゝぢやないか」

「又そんな無理ばつかり。當時だつて如何に姑さんに貴方と私の仲が知れないやうと。苦心するてせう——。」

「だつて嫁に喰はせて貰つて居ながら——最早止めやう此の話は——僕は君の胸中をよく知つて居るから。決して汁に煮湯を飲ますやうな事は斷じてない。僕だつて多少實業家仲間ては知られて居る男なんだからな——。誰れにても聞いて見給へ今迄に薄情な事は決してして居ないつもりだ。然し不快い事を言ふやうだが。ちよく〳〵噂が耳に入るぜ」

と男は千代子の心の中を讀みつくさうとするやうに鋭い眼て、斯う言ひながら女の顏を凝つと見入つた。

「マア――如何な――?!」

と案外女は平氣に聞き返へした。口では平氣に言ひながらも。用心深い閃めきが眼に現はれた。ところが幸ひに醉ひの爲めに潤んで居たので。鋭い男の眼からも見逃がされた。

「如何なつて――御親類筋が澤山有るといふことさあ――」

「ホヽヽ」

と女は笑つて。

「それは寃罪よ――一體男の方は一度宴會て逢つた藝者でも。名刺の一枚も貰ふと、最早自分の情人のやうに吹聽するのですもの。私の事だつて矢張りそんなことなのよ。貴方と御目に掛るのだつて。姑が喧しいので。沁々御目に掛れないぢや有りませんか。それが如何してそんな――貴方もそれぢやその噂を信じて居らつしやるの?!」

「全然信じもしないが。何にも彼も相談する僕に無斷て高價な頭の品や指環が殖るやうに――?!」

と不機嫌な顏をした。

「髮飾――?!」

と頭に手をあげた女は翡翠の束髮差しを笑ひながら拔き取つて

『贋物に見えますなら貴方に賣りませう。それから此の指輪は誰かに賣つて吳れといふ。賴まれものてす。』
と女は躍る胸を押靜めながら。淀みなく言つて、男の顏色を窺つた。
『また仲店品か……。外聞が惡いね。欲しければそれこそ本物を買つてあげます。丁度いゝ——仲直りに明日白牡丹へても行つて——』
と男は機嫌を直して、千代子の手のひらの指輪と束髮差しを、一寸見たばかりて、手に取らうともしなかつたので、ホッとしたが。
『貴公の疑ひさへ解ければそれて結構——何品も欲しくは有りません。』
と口ては言つたが、濟まぬ顏をして居るので
『僕が眞實に惡るかつた。勘辨し給へ。自分一人の所有と思ひ込むて居る千代子さんを、種々に噂されりやア好い心持はしないからな』
『それはさうてすとも——けれど決して他に關係などして居る方はありませんから安心して頂戴……』
『必ず——』
『エヽ』
千代子は頷きながら莞爾した。
『それては明日——明後日の晩はゆつくり逢はれるね』

と男は言ひながら時計を出して見たが、急に思ひ出したやうに、

「さう〳〵時計の約束があつたね。此度來る時こそ、必ず持つて來てあげます。鏈は首から掛けるのにしようか――嫌かねそれぢやァ僕に任せるさ――今夜はすつかり千代子さんの舞臺顏を見てしまつた。アハヽヽヽ」

「未だそんな――正岡さんだつて隨分恐い眼をなさつてよ――私ぞつとしましたわ」

「さうかねァハヽヽヽ」

と笑ひに紛らせながら、女中を呼ぶべく手を鳴らした。

そのまゝに千代子は膝の蔭に置いてあつた指輪と束髮差しを急いで、紙に包んで帶の間へ入れて了つた。

「明後日の晩はゆつくりされるやうに都合して、來給へ――」

と男に言はれて、

「久しぶりでね――」

と媚を含むだ眼で男の顏を見た。

(三)

幾年ぶりかで千代子が來るといふので、母親のお松は、たつた一室しか無い家を幾度もかたづけ直して、やつと火鉢の前に坐つた處へ。主人の民藏がひよつこり歸つて來た。

それを見ると。お松は我れを忘れて、煙管を持つたなり立ち上つて、
「お老爺さん……如何したのさ」
と咎めるやうに言つて、上り端へ出て來た。
「何んだか、氣がむしやくしやして、商賣して居るのが厭になつたから、歸つて來たのよ」
と民藏は浮かぬ顔をしながら、さつさと土間へ商賣物の大根や人參をはこび込むので、お松も見ても居られず、手傳ひ掛けると、民藏はお松にあとを任せて置いて風呂に行つて了つた。
「如何したらいゝだらうね——」
と民藏の後姿を見送つたお松は當惑の眉を寄せた。千代子が今日來ることは民藏には知らされぬ事情が有つて、隱して置いたので、若し出合つたら、如何ばつを合せたものかと思はず思案に暮れて居る處へ、最早民藏は五合徳利をさげて歸つて來た。
「朝から御馳走だね」
と仕方なしに斯う言ふと。
「酒でも飲まなきや居られないや」
とさつさと一人で燗徳利に酒をうつして鐵瓶に入れて火をかき立てるので、お松も膳立をして持つて來た。
何時になく片付いて居る其處らを見ると。

『お客でも有るのか』

と言つたので、お松はハツとしたが、

『片付けて待つ程のお客が來る家でもないぢやアないか』

と笑ひに紛らせて臺所へ立つた。小皿に嘗味噌が、ちよつぴり有るばかりの、寂びしい膳の上を見ると、

『何にか見て來て呉ないか』

と肴の註文をしたが、お松は家を開けることが出來ないので、

『最うすこしお待ちな。魚常が來るから』

と宥めて置いて手早く瓜揉をこしらへて持つて來た。

『こりやアがうぎだ。何んぼ有物だつて、當今の瓜を揉むなんて贅澤だ……』

とは言つたが、それを肴にちびり／＼飲み始めた。お松も千代子が來たら、來た時のことゝ、度胸を据ゑて內職の仕立物を始めた。

『なアお松――此頃お千代の噂を誰れからも聽かないか』

と民藏は突然斯樣に聞いたので、お松は胸に針を刺されたやうな心持がした。

『三丁目に居た時分は近所の人が、何んだ彼だと、おせつかいに、色々聽かせて呉れたけれど、駒込へ移つてからは少しも――お前さん、何にかお聽きなのかえ』

「ウン」
「如何なことを……」
お松は思はず膝を進めた。
「今朝お得意先で全然聴いて來たが、お千代は此頃旦那取りをして居るんだとよ——情ない奴だな——」
と沁々情なさゝうに言つて、顔を背反けた。
「如何になんても、旦那取りとは……それは人の噂させう」
とお松は苦しい思ひをしながら、それを打消すと。
「否、眞實らしい。お千代が此頃勤めて居るといふ。洋食店に一所に居る女中の話なんだから間違ひあるまい」
「それなら猶更眞實にはならないよ。お千代は多勢の女中の取締とかをして居るんだ相だから、古るくから居る女中かなんかに、妬まれて、そんな評判を立てられたのかも知れないやね」
「眞實に噂だけなら消える時節も有るが、春吉とちがつて、餘り正直でねェ氣質のお千代だからなア、金に眼がくれて若しやと俺らア心配するんだ——」
「けれど私は、本間の親類達も餘りだと思ふね。子供や姑をお千代一人に押付けて、知らん顔をして居るなんて。お千代だつて女の痩腕で一軒の家をすぐして行くんだもの。可哀相だよ」
「ぢやアおめえは、お千代が旦那取りをすることを、無理もねエと言ふのだな、そりやアこちとらのや

うに。身分の低いもんなら、好い事ぢやァ無いが、マア〳〵仕方がないとするが、本間さんは立派な學士だつたんぢやァねエか。その末亡人が、如何に困るからと言つて、旦那取りをするなんて――ト死んだ本間さんに對してそれぢや濟むまいぢやァねエか。お千代がそんな恥晒しなことをすれば、俺達だつて世間に顔向けが出來ねエやな――八百屋の娘だなんていつたら、お千代の肩身が狹からうと思つて、辛らい思ひをして親子の縁切りて、嫁に遣つたものゝ。矢張り俺達の娘なんだから、他人から惡い噂を聽きやァ心持が惡いばかりぢやねエ、如何に心配だかと言つたつて心配される御當人は、縁切りを好い仕合と年始狀一つよこさない薄情者だからなァ――」

と民藏はいま〳〵しさうに言つて、ころりと肘を枕に横になつてしまつた。お松はせつな相な顔をしながら民藏の話を聞いて居たが、

「老爺さん――お千代の噂は私の耳へも先頃から入つて居るんで、實は今日此處へ呼び寄せて、とつくり意見をしようと思つて、使を遣つた處が、來ると言つてよこしたので、待つて居た處なんだよ」

と言ふのを聞くと

「それぢやァ――今日お千代が此家へ來るんだな……」

と民藏は飛び起きて。

「ぢやァ俺が居ちやァ都合が惡いや……」

「何に惡いことが有るもんかね。丁度いゝから老爺さんも側から何んとか言つてお呉れよ」

「そいつは否ねエや。俺だと直ぐ喧嘩になるから、矢張りおめえが。やわ〳〵小言を言ふ方が利目があるよ――仕方がねえ夕方迄遊んで來よう――」

と民藏は出掛ける支度をするので

「それおやお前さんは、お千代に逢ひたくないのかえ」

と言ふと。

「顔はちよく〳〵見て居るから。別段あらためて逢ひ度もないや」

「おや何處で――」

「洋食店の向側にめしやが有るんだ。其處へ行くと、よく二階の窓から首を出して居るから。自然に見るのよ」

「それおやわざ〳〵其處へ喰べに行くんだね」

「何にわざ〳〵といふ譯もねえが。マアそんな事は如何ても……」

と言ひ捨て出ようとしたが、

「おつと、どつこいお松おめえの喜ぶ話も有るんだぜ――」

と立歸つて上り端に腰をおろした。

「お千代の話てすつかり氣をくさらせたもんだから忘れて了つたが、春吉が深川の親方の處へ歸つたとよ――此度こそは性根を入變へたやうだから。安心しろと親方も受合つたが、如何か長續きがすればい

いがな、仕事はたしかだといふことだが、彼奴の瑕は唯直き物事に厭きて了つて、食ふに困りながらもぶら〳〵して居やがるんだから、始末が惡い」

「マアそれは何によりだね、けれど何時頃深川へ行つたのだらう――」

「一昨日の晩だとよ。春の野郎泣いて居た相だ」

「さうかえ」

と言つたが千代子の處へ使に遣つた晩だとお松は思つた。

「性根を入れ變へたのなら、いつそ家へ引取つて世話をしてやらうぢやないか」

と民藏の顏色を窺ふと。

「いけねえ〳〵おめえは直ぐさう甘やかさうとするから……マア二三年樣子を見てからのことよ。春吉は勘當して有るんだぞ……」

「それは知つて居るよ。けれど春吉は家の大切な相續人なんだからね」

「相續なんかして貰らはなくても好いや。俺れが死んだら、おめえは田舎へ行くがいい」

「それは田舎へ行けば一生喰べるには困るまいが、矢張り自分の子の世話に成つて死にたいね私は――」

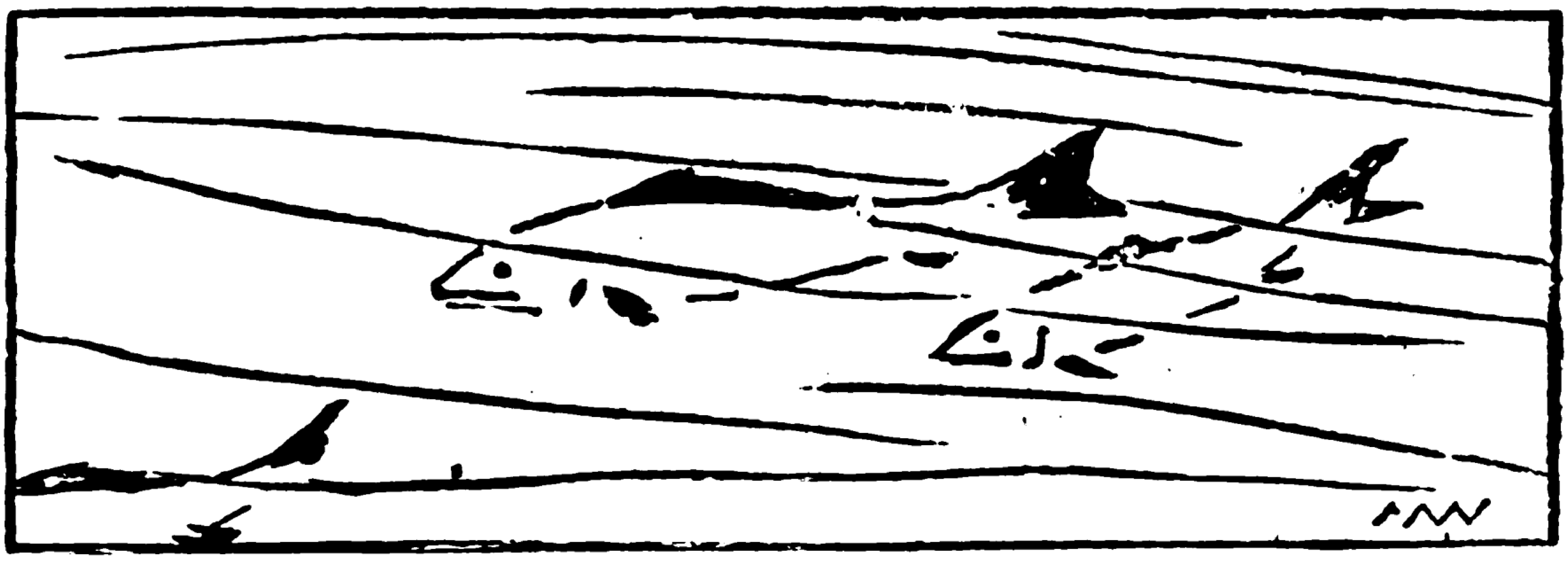
「それぢやアおめえはおめえの勝手よ……俺は俺だ……」

「けれど此度は春吉も辛抱するだらうと私は思ふよ――」

「俺れも何處かそんな心持がするんだ……がマア當にしてがつかりするより。當にしずに居よう」

「それもさうだね」
「ときにお千代は何時頃に來ると言つたんだい」
「朝のうちといふのだが、最早十一時だつていふのに如何したのだらう……急に都合が惡るく成つたのぢやないかね——」
「うまく欺されたのぢやねえか——」
「まさか……」
と言つたが、とう〳〵其日千代子は來なかつた。洋食店へ電話を掛けると。今日は休むだといふ返事……
するよ翌日の書頃春吉が來て。
「おつかア——姉さんの事は諦らめるが好いゝや。」
と力なく言つたきり。お松が何を聞いても春吉は話さなかつた。

（完）



ある一場

——對話——

時雨

なんとおつしやつても、それは御無理でございますよ。貴方様のお母様は、なんにもおわかりにならないのですから。

ほんとでございますよ若様、只今ね、いねが申ましたとほり、お母様はお氣が變になつてらつしやるのですから。

お前達は、いつてもそんなことばかりいつてるんだね。私はきかないよ、もう何といつてもきかないよ。私はもう十一だもの、何だつてしつてるよ。

おやおや、若様はなんてゝ御存じなのですか。不思議でございますねえ。

何が不思議なんだ。

だつて貴下はお盲目さんぢやあございませんか。いいえね、惡いとは申

しませんよ。けれど何ても知つてるなんておつしやると、をかしくなりますわ。
ぢやあ盲目なら、なんにも知らないといふのだね。
さうぢやございませんか。それとも御承知ですか。
知つてるよ、知つてるよ、盲目だつて、分ることだけは知つてるよ。
知つてらつしやるのですとさ、おいねさん。あの事うかがつて見ませうか。
およしなさいよ。罪だわ。
罪? 罪つてなんだい。
そら御覧あそばせ、なんにも御存じないくせに。
いいえ。知つてるよ。
ぢや貴下様はどなたのお子。
母さんのさ。
母さまつて、どなた――あの狂人様のことでございますか。
狂人さんて何だい。私の母様は母様だよ。
だからおきちさんてせう。
さうぢやないよ。
お煩さいのねえ若様は、だから貴下にはおわかりにならないのですよ。

そんなに仰しやるなよ。お可哀さうにねえ若様、ぢや、いねが今度(こんど)はうかがひませう。

ああ。

貴下はお十一ですつてね。何處でお生れになりましたの。

此城(ここ)でだよ。

お父様御存じですか。

……あの、あの、私は見えないから。

いいえ、お見えにならなくつても、お逢ひになつた事がおありですか。

ああ、幼少い時分にはよく逢つたの、だけれど覺えてゐないよ、見えなかつたから。

――ねえ、中々怜悧者だわね、覺えてゐないつてさ、見えなかつたからだつて、うまいねえ。

ほんとにねえ。――ねえ若様、それぢやお母様はどんなお方、覺えてゐらつしやいますか。

それも知らないの、矢ッ張り見えなかつたのだもの。

ぢや若様、あなたお日様の光線(ひかり)をごぞんじですか。――まあ御存じないの、それでは駄目ですわ、

何もかも御存じの筈がありませんもの。

いいえ、いいえ、知つてるよ。

知つてらつしやるものですか、あなたは眞つ暗なところから、眞つ暗なところへゆく筈だつたのを、

お助かりなすつた代りにお目が見えないのですよ。

まつ暗つてどんなだい。
何もかも見えないこと、貴下のやうに。
いいえ、私は見えるよ。
まあ氣味の惡いことを仰しやる、そんな筈がありません。
ぢや若樣、今は夜ですか晝間ですか。
晝間はどんな色て、夜はどんなてす。
それは分りやしない。だけれど私には、お城の中の廣さも大概分るし、お前達のゐるところもわかるし、母樣がどんなことしてゐらつしやるかも分つてるよ。
嫌なことを仰しやるものではございません。氣味が惡いぢやございませんか。
若樣、それでは貴下のお部屋はどんなところか御存じてすか。
ああ、それは知つてるとも、お城中て、一番淋しいところ、明ずの間といつてね、お天守の櫓よりも淋しい、まつ暗なところだとさ。
まあ嫌だ、若樣あなたは見えるのですか。
いいえ見えやしないよ。だけれど私の耳は聽えるもの。
まつたくてございますねえ、おきこえなさるのだもの。――ねえおいねさん、若樣は何もかも聞いてゐて御承知なのかも知れない。

御自分が殺されようとしたのも。――まさかねえ。
お父様が誰だが知れないつていふこともね。
その爲に狂人におなりのこともね。
今でも此方を見ると、むら〳〵となさるつていふことも御承知かしら。
さあ――それはどうだか。――あ、ああ嫌だ、おちかさん、早く其蠟燭を消して下さい。
どうしたの、消しましたよ。
ああ嫌だつた、若様のお顔つてつたら、ああ嫌だ、氣味がわるい。
――ちか、いね、蠟燭を消すと見えなくなるのかい。
ええ、灯を消すと暗くなりますから。
なんにも見えなくなるかい。
ええ。何にも見えません。貴下様の通りになります。
私は見えるよ。
いやですよ若様、またそんな氣味の惡いことを仰しやつて。
嘘ぢやないよ、其處にお前達が二人立つてゐるのもわかつてゐるよ。後に窓のある、此處は外廊下なのもわかつてゐるよ。
嫌だ、若様。

それからね、お母様のお顔も私には見えるよ。
よして下さいましよ若様、こんな薄暗い、氣味の惡いところで、そんなことを仰しやつては嫌です。どうしても仰しやるなら、私はお暇を頂いて歸つてしまひます。こんな、こんな、薄氣味のわるい方ばかりゐるお邸なんぞ、早く下りたい。
だつて、お前達が分るまいつていふからさ、分るつていつたのぢやないか。
まあ若様、貴下泣いてらつしやるのですね、まつ青なお顔色になりましたよ。さあ、早くお寢遊ばせ。
寢られやしないよ。
何故でございます。
毎晩お母さんが、戸の外までお出なさるもの。
まあ、またあんなことを仰しやる。どうしてそんな事が知れます。
足音がするもの。
え、足音が……。けれど、どうしてそれがお母様だと知れます。
溜息をなさるもの。
溜息を？
ああ、私がね、ずつと幼少い時にきいた通りの溜息なんだもの。その溜息をなさつた時にね、乳母が泣きながら、お氣が狂ひましたねといつたよ。あの乳母も死んでしまつたし、詰らないねえ。

もうおだまりなさつて、お寢遊ばせ、ね。

その時に――も一つ覺えてゐたよ。ぴたりと冷たいものが私の頰つぺたへあたつたよ。

嫌てすつたら若樣、そんなお咄しばかりなさつて、貴下樣の御顏つたら、ごふだんからまつ青なのに――あッ嫌だ。お母樣がなさる通りてすよ。何故そんなに悲しさうなお顏をなさるのてす。此方の蠟燭もたちさうになつてきましたから、お早くお寢なすつて下さいまし、ね、それてないと、貴下樣を此方へおいてきぼりにいたしますよ。

かまはずに行つて好いよ。私は燈火かなくつても、一人てお部屋へゆかれるから、心配しなくつても好いよ。

ほんとてございますか若樣。

まつたくのところは、お部屋までお連れまをすのが、嫌て〳〵仕方がないのてございます、薄つ氣味が惡いから……。

だからお前達行つても好いよ。私は一人てゆく方が靜て好いから。

こわくはございませんか。

お淋しいてせうね。

うゝん、ちつとも。

お可哀さうにねえ、日光のさすところや、花の咲くところへは、生れてから一度もお出になつたこと

がないのだものねえ。

あら、笑つてゐらつしやるよ、どう遊ばしたの。

お前達、私が好いものを探しだしたのを知らないだらう。

好いものつて? 貴下様の胡弓は絲がきれてしまつてるぢやございませんか。

胡弓は母様のお古なのだから、もう絲がきれてしまつて、ぼろ〳〵て鳴りはしないよ、あんなものぢやない。

おいねさん、早く行きませうよ。若様にかまつてゐると夜が更けるばかりですわ。

お前達、私の好いものをきかないのかい。

いいえ、うかがひますよ。

あら、おいねさんてば、もう蠟が垂れきつてしまふわ。早く行きませうよ。若様はいくら暗くつてもおよろしいでせうけれど、私達こんな場所にゐるのは嫌でございます。

おちやあ去つても好いよ。——だけれど、いねは聴きたくないかい。

若様御願ひですから早くきかせて下さいましな。

ああ、何でもないことなのだもの。あのね、お天守には大きな太鼓があるよ。

まあ貴下、あんなお櫓へお登りになつたのですか。

ああ。

誰がお連れをしました。

一人で。

お一人で？　嘘でせう。

一人でなの。けれどね、ほんとを云へば母樣のあとからついていつたの。

母樣ですつて？

おいねさん、私は行きますよ。こんな氣味の惡い方のそばにゐられやしない。逢はせたこともないし、此處にゐらつしやることもお知らせしないのに、母樣母樣つて、さも御一所にゐるやうなこと仰しやるのだもの。

すこし變ねえ。それとも狂人樣がお逢ひなさつたのかしら。

そんな筈はないでせう。あのお方樣は、此頃でこそ御自由だけれどお座敷牢へお入れをしてあるし、此お方は、明ずの間がお住居ですものね。

若樣、貴下どうして太鼓つていふことがお分りになりました。

死んだ乳母やがね、お天守には大きな太鼓がある筈だつていつてゐたよ。私は見えないけれど、乳母にさはつてるから、何でも知つてゐるよ。太鼓へもね、かうやつて觸つてみたらば、ちひさな音が、ぶるぶる、ぶるぶるつてしたの、だから太鼓だと思つたのさ。

おや貴下は、いつでも諸方を步いてらつしやるのですか、夜中に。

ああ。乳母がさういつたもの、晝間は人の目についていけないから、夜運動をなさいましつて。だから私は、母様のお住居も、お前達のゐるところも、お天守も、お城のあの廣いお庭も、みんな知つてゐるよ。

まあ。

此頃は、またお叔母様がお出になつたらう、淋しくなくつて好いね。

まあ、それも御存じなのですか。

どんなお方か御存じですか。

いいえ、まだ知らないよ。だつて、夜分はちつともお出にならないもの。私は晝間は出られないだらう。だから知らない。

ぢやどうして、お叔母様がお出になつたこと御承知になりました。

お聲がきこえるぢやないか。お叔母様のお聲は、あたしの胡弓のやうな音がするね。

嘘ばかり、あんな陰氣ぢやございませんわ、御陽氣な方ですもの。

胡弓だつて陰氣ぢやないよ。私はね、小鳥の囀りを眞似て彈いてるのだもの。

小鳥ですつて、まあ嫌な。貴下様のお彈きなさる音をきくと、まるで牢獄の中でないてゐる、蝉のやうぢやございませんか。

さうぢやない、鳥の聲だよ。

噓でございますよ。

――おちかさん、若樣のおつしやるのもほんとかも知れませんよ。だつて若樣、小鳥の囀る聲なんぞ、お聽きになつた筈がないでせう、だからね。

あるよ、あるよ、あるよ。私のお部居へも聽えてくるよ。

だからさ、あの厚い壁と、堅固い窓の扉と、あの廊下とへだてがあつて、それからが閉切つたお部屋でせう。小鳥の聲だつて幽にきこえるぐらゐなものでせうよ。ね、だから若樣は、小鳥の囀るのはあんなものだと思召すのだわ。

おかわいさうだねえ。

お叔母樣のお聲も近くてお聽にならないから、やつぱりさう思召すのだわ。

さうかも知れない。

――いね、ちか。遠くつてそんなに違ふものかい。

ええ、違ひます。

御免よ、噓をついたのぢやないのだから、私はね、お前達と時々咄しをするつきりて、外のことはみんな遠くてきくばかりだからね、それて違つたのだよ。

お母樣のお聲もてすか？

お母樣のお聲は知らない。

貴下も？

御存じないのですか？　それなのに、どうしてお母様がお分りになります。

お母様にはね、溜息と、しづかな音がついてゐるの。乳母はね、其事を忍び足つていつたよ。私のお部屋の外で、忍び足がするとね、乳母は私を抱いて慄へてゐたのだもの。だから私はよく知つてゐるよ。

おちかさん、何だか嫌だねえ。

若様はお母様がお出になるのが知れると、お逃げになりますか。

いいえ、此頃は私が探しにゆくのだよ。

何處へ？

お天守へ。

あッ嫌だ。――行きませうよ、行きませうよ、おいねさん。

若様、お天守へは妖怪(おばけ)が出るのですよ、古くつから。

嫌だつてつたらおいねさん。あッ、蠟燭がたつてしまつた。

お姉様、お姉様。――お分りになりますか。私が。

八重さんなのでせう。

ああお分りになりますね。——お姉様、隨分おかはりになりましたねえ。

もう十一年にもなりますもの。

さうでございますねえ。あの頃私はやつと十五でございましたもの。お姉様はお幾歲でしたらう。

私は廿二でした。

お廿二? それからずつと此儘でお出になりましたの。

さうですよ八重さん、それからずつと其儘です。私が口をきいたのも、あれから後今夜がはじめてです。

まあ。皆がまをすのが本當なのでございますか。

本當ですとも。

お氣が狂つたといふのも?

ええ、氣も狂ひませうよ。十一年もかうやつてゐてごらんなさい、どんな者でも變になりますでせうよ。貴女はさうお思ひなさりませんか。

私? さあ——思はないこともありませんけれど。

此儘で暮せるとお思ひになつてゐるのですか。

いいえ。

さうでせう、さうでせう、私でさへさう思ふのですものね。氣性の激しい貴女に、とても居られやしませんよ。

お姉さま——まあ何て冷たいお手なのでせう——貴女の祕密を、すつかりきかせて下さいませんか。さうすればまた私がどうともお力になりますから。

有難う、だけれどももう徒爾ですよ、私達はね、夜寒になつても籠へ入れつぱなしにされてゐるきりぎりすのやうなもので、其うちにおり〳〵と弱つてゆくのですわ。

わたしたちですつて？　わたし達つて、誰と誰のことですの。

貴女と、あたしと……。

あたくしと、貴女と？

あたしの影つぼしと。

お姉様、お氣を鎮めておはなしをなすつて下さいましよ。お互に大切なことなのですから。

有難う、だけれどもね、貴女には大切でも、私には遲い。

何故、何故。どうして遲いのです。あなただつてまだお卅三ぢやありませんか。

年齡ではありませんよ。あたしは救はれたつて、嬉しくもなんともないのです。

まあ、待つて下さい。あなたは本氣でそんなことを仰しやるのでせうか。何にしても暗くつて仕方がありません、待つて下さい。

あッ、そんなもの光らせては嫌です。あたしは暗にならされてゐるから、光りを見ると何にも言へません。いくらあなたが親切にいつてくれても、御返事をしなくなるかもしれませんよ。

――おかはりになりましたねえ。

かはりました、かはりました。貴女は私を、もとの儘の小金だと思つてらつしやると、大變な違ひですよ。あたしは人殺してすもの。え。

あたしはね、自分の子供を殺さうとしたのですもの。畜生ですわ、鬼ですわ、ですもの明るいところへなんか出られやしません。

本當なのですか、お姉樣。

まつたくですとも。

其お子樣は、いまどうしてお出になるでせうね。

――母の罪でね、生れきても光りも見せずに、暗いところにゐるのですよ。

ぢや、なくなりましたか。

いいえ。

生てゐて？　何處に、何處にゐるのです、ようお姉樣。――お泣きになつてゐては分りません、何處にかくしておありなさるの。

此城にゐます。

え、此城に。ちつとも知りませんてした、姉さまのお手許にゐますか。

いいえ、あたしは生れた子が、男か女かさへ知らないのてす。

それならどうして此城にゐることをお存じなの。

それはね、それはね。八重さん、赤ん坊が泣きましたもの。

ああ。

夜になると、何處からかなく聲がきこえてきましたもの、私は諸方を探ねましたよ。其時にはね、ほんとに氣が違ひさうてした。そればかりぢやありません、氣が違つたふりでもしなければ、生てゐられやしませんものね、其うちにとう／＼本當に氣が違つてしまつたのですと。

――あらッ、何だか、何處かて泣いてゐるやうな。

あれなら分つてゐます。あれはね胡弓てすの。

胡弓？　てせうか、あたくしにはどうしても人の泣く聲のやうにきこえましたもの。

胡弓てすよ、私のもつてゐた古い胡弓てす――もう絲もなにもすつかりきれてしまつてゐたでせうにねえ。

さうてせうか、それにしても今時分、誰が彈くのてせう。

明ずの間にゐる子が彈くのてす。

え、明ずの間に誰かゐるのですか。

わたしの子がゐます。

まあ、信實てせうか。お姉様、貴女氣をしづめて下さいよ。

ほゝ、貴女はまだあたしが氣が違つてゐると思つてらつしやるのね。

でも、貴女は……。

まあ、お待ちなさい。――誰か泣てるやうだと仰しやつたねえ、私にもいまそんなやうに聽えましたよ。

懐中電氣をつけて見ませう。

いけません、それはいけません。そんなことをなさると、私が逃出しますよ。觸つて見て下さい、あたしは此通り痩せてしまひましたのね。鏡なんぞは、何日見たか、もう忘れてしまふほどですわ。あたしは自分で自分の顔を見るのが恥かしくつて、切なくつて。

まあ、貴女はそんなにお自分をお咎めなさいますの。そんなに心が咎めるほど惡いことだとお思ひなさるのですか。

八重さん、貴女はさう思ひませんか。

さあ、あたくしが知つてゐる事だけならば、そんなにまでお心を苦しめなくつたつて好いだらうと思ひますわ。

貴女が知つてゐることだけつて？

お姉様、貴女がそれほど切なく召思すのは、赤様をどうかなさらうとしたことですか。

だつて、あたしの罪のむくいですもの、此世におくだけ可哀さうだと思つたから。

いえ、それが惡いとはきまりませんよ。氣を鎭めて下さいまし。

だからあたしは、自分てはどうする事も出來ないから、御天守閣へ出る妖怪のふりをして、毎晩毎晩忍んていつたのてす。ええ、殺すつもりていつたのてす。あたしだつて死ぬつもりてすわ。すると、なんだか地蟲が土の底て泣くやうた聲が、戸の透間から洩れてくるぢやありませんか。それはね、あかんぼが泣くのを、乳母が無理にとめてゐたのてすよ。あたしはそれをきくと、どうすることも出來なくなつてしまつたのてす、自分も死ぬことが出來なかつたの。

御自分も？

死にたかつた、死にたかつた。死んてしまひたかつた。ても、あの子を殘しておいて死ぬことは出來ないぢやありませんか。あたしはね、氣が狂ひはしないと云ひましたけれど、まつたくは妙になつてゐたのてす。それてなくつて、此樣なところにどうして十年からゐられませう、生てゐるのが不思議なほどてすわねえ。

――あ、何てせう。何だか探りよつてくるやうぢやございませんか。

――ああ來たのてせう、あたしを慕つて來たのてせう。あの子は今夜お叔母樣のお聲もはじめて聽き

ましたよ。

あの子がてすか。

あたしの聲もはじめて聽いたのでせう。あの子はあたしの居どころをよくさぐりあてて、夜中になると屹度あたしの影のやうに、後についてゐますよ。

それでもお姉様は、聲もかけておやりにならないのですか、抱いてもおやりにならないのですか。

だつて、あたしはあの子に、生れて來たことと、父親（おや）のことをきかれたらどうしようと思つて…。

そんな、そんな母親（おや）が何處にありませう。さあお逢ひ遊ばせ。

あれッ、いけないといつたら、いけないといつたら、消して下さい、消して下さい。

お姉様、此子は見えないのですねえ、御覽あそばせ、顫へて、涙をながしてをりますよ。さあ、お前の母様のところへおいて、可哀さうにねえ。

消して下さい、消して下さい。今頃そんな、灯の光りが外へもれようものなら、また明日から嚴敷されます。八重さんは知らないでせうけれど何をしても、何一言いつても、すぐに本邸（ほんてい）へ知れてしまふのですよ。——あたしは何にも言はずに十年の間、此子の命のつきるのをまつてゐたのです、八重さん、あたしは無悲慈な母親で、此子が生れてから、優しいこと一ついはず、抱いたこと一つありませんけれど、此子が生てゐるうちは、あたしはどうしても生てゐようと思つてゐます。生れてきても、名もない、籍もない、此不具（かたわ）な子のために、あたしは命をそしんでゐます。

——貴女は矢つ張りお美しい。お痩せになつたし、お年もすこしめしたけれど、それでも矢つ張りお美しい。

——貴女こそ。あたしは昔が思ひだされますよ、貴女の今の御様子が、すつかりお母様ですもの。——あたしは急にお母様がお懐しくなつて仕方がない時がありますの、お母様さへ御在世たつたらば、あたしたちもこんなにはなりますまいにねえ。

お姉様あなたもお可哀さうねえ。

八重さんだつて、此城へよこされるのですもの、よつぽど苦勞がおありだらうと察してゐますよ。

お姉様、察して下さいますか。屹度ですか、屹度ですか。

八重さん、疑はないで下さいよ。察してゐればこそ、もうあたしはどうともならないから、あなただけても此城を出したいと思つて、十年も口をきかないあたしがお咄しをするのです。あたしはね、此子を連れて、毎晩城の中を歩き廻りますのよ。もう暗ても目がすつかり馴れてしまつて、大概なことがわかりますからね、それで今夜は此處の窓に…。

ては、ては、お姉様は何か御覧になりやあしませんか。

見ました。今夜は暗てすけれど、あすこの木立の蔭に立つてゐる者がありますよ。さ、開けてあげませう。其かはりもう何にも云つてはいけませんよ、一言も。

ま、まつて下さい、お姉様あたくしは何とお禮をいつてよいか…。

お禮なんか、そんな他人行儀なことを。そんなことはかまひませんから早く。

ま、まつて下さいまし。あたくしは何とお詫びしたらよいのか、あんまり自分が勝手すぎるので面目なくなりました。お姉樣が此城へ押籠められた時に、あたくしは貴女の爲に何をいたしましたらう。十年の間あたくしは貴女に何をいたしましたらう。

そんなこと、そんなこと、今いつても仕方がありやあしません。よし、なさつて下さる思召があつたつて、あたしの心はあたしが牢獄へ入れて、繩をかけてしまつてあるのですもの、どうして下さらうつたつてそれは無駄ですよ。貴女は違ふ、あたしとはまるで違ひます。あたしは自分を逃すよりも、あなたを逃してあげた方が、どれほど嬉しいかしれやしません。あたしは此子と、此眞つ暗な城のなかで、人の氣がつかないうちに、白い骨となつてしまふのですもの、それも、眞夜中に天守閣へでも上つて、あすこでゞも死ななければ、母子抱きあつてゐることも出來やしません。

お姉樣。

八重さん、もうお別れです。決して此城へ連戻されないやうに用心なさいよ。――灯の光りを見せるのが合圖なのですか。

ええ。

それはやめた方が好いでせう。他の者に氣がつかれては何にもなりやしません。

お姉樣、あたくしはあなたに懺悔をいたします、どうか聽いて下さいまし。あたくしには夫がござい

ました。それてゐて‥‥。

何にもおつしやるな、二人ともおんなじ道ですわ。あたしは氣が弱くつて、自分の心も通されず、といつて、强附けられる貞操を大切にすることも出來ず、身を殺せば濟むことを、戀しい人の爲に死ぬことも出來ずこんな羽目になつて、人も苦しませ、自分も苦しんで、今こそ死ねさうなものを、矢つ張り此子ゆゑに迷つてゐるのですものねえ。あなただけは氣を確かりして下さい、世の中や、他人に强附けられた貞操なんぞ、どうなつたつて好いぢやありませんか、自分の心がはづかしくないやうに、自分の心の操を何處までも守つて下さいよ。いくら責られたつて、自分の意志を他人(ひと)の爲にまげちやあ嫌ですよ。どうぞね、それを忘れないで下さい。あなたがさうして下されば、あたしは何處で朽ちてしまつても、あたしの心持ちもあなたの體をかりて生るのですわ、頼みましたよ。頼みましたよ、八重子さん。

お姉樣、あたくしはもつと委敷お話しをしなくつては‥‥。

そんな事をしてゐては時が遲れてしまふぢやありませんか。あたしがかうやつて貴女を引止めたのも、丁度見廻りが、あの森の外を通つてしまふ時をはかつて待つてゐたのですから、無駄ではなかつたのです。さあ、もう行かなくつちやいけません。

お姉樣、それではお言葉にあまへます。お恩は一生忘れはいたしません。あたくしがあの森のところまていつたころに御覧になつて下さいまし、あの人も、屹度此方へむかつて手を合せてお禮をまをすてございませう。

どうか幸福に暮して下さいよ。もし二人のなかに氣まづい事が出來た時には、この姉と此子と、それからどうぞ、一生私達親子二人の身の上を案じくらしてゐる、此子の父親の心を思ひやつて、二人とも忍耐しあつて下さいよ。

お姉様、只今のお言葉を屹度忘れはしません。ではもう參ります。

體を大事にして下さいよ。

……あなたも。

……………。

ぼうや、左樣なら。

さ、窓をあけましたよ。綱はもつてゐますか。あたしが此處でしつかり持つてゐるから、下り切つてしまつたらお曳きなさいよ。此綱の兩端をはなすときが、姉樣の長い別れになるのですよ。

お姉樣、後生ですから坊やにも綱を曳かせて下さいまし。

あの子は、鳴りもしない胡弓を引きこすつてゐますよ。

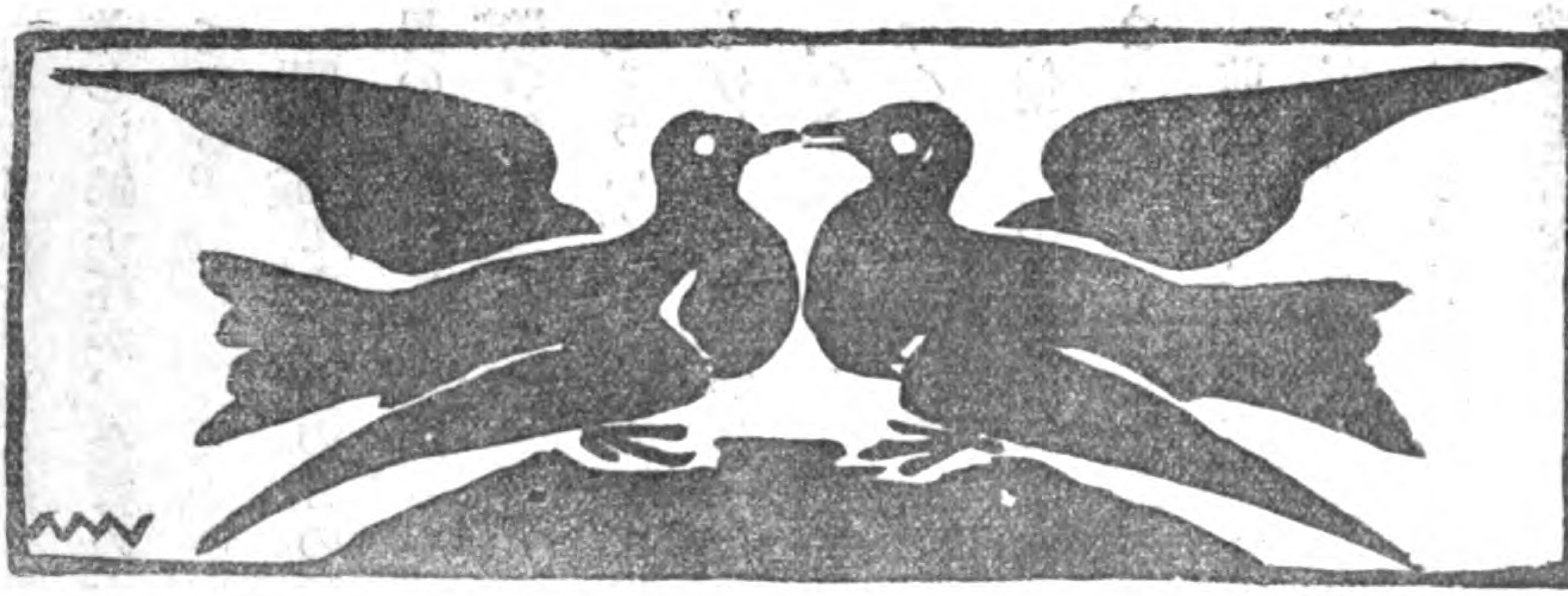
お姉さま、明日の騷ぎは大變でございませうね。あなた方に災(わざはひ)がかかりやしますまいか。

其時はあたしの心が樂になる時でせう、案じずにゐて下さい、暗の中で嵐があれば、暗が吹きちぎれるより外はないぢやありませんか。

お姉樣さま。

左樣ならよ。

左樣なら、お姉さま……………。



雌蝶

松井すま子

『とんぼ』、と言ひながら不手際な紙撚の先に、火を付けたのを、根元を持つて次へ渡した。見れば手織らしい、黒つぽい大きい子持縞の絲織に、白地に紫矢絣の上にいろ〳〵な菊を染め出した壁縮緬の帯を、小さくやの字に結んでゐる。髪は根の高い桃割れをお稚兒まがひに結つて、幅廣の白の丈長を掛け、下げた前髪の分け目のあたりへピラ〳〵のさがつた、モール製の大きい前ざしを飾した十二位の娘。

四角な火鉢を圍んで同じ様に着飾つた、あと二人の女の子の一人が、嬉しさうに夫を受け取つた。そして受取つた紙よりの先のたれ下がつた曲線のあたりをヂツと見つめながら暫くして『時計』と言つて次へ渡した。

室は十疊と八疊の間の襖を取拂ひ、十疊の床の間には壽の掛物と、高砂の島臺、雌蝶雄蝶ののしめの美しい銚子杯が、今宵の大役を果すべく先程から支度せられて、高くかゝげられた燈火と共にかゞやいて居る。

閾を隔てた八疊の方の隅の火鉢に、斜子の黑紋付に仙臺平の、荒い縞の袴をつけた、十三四と見える男の子が、さつきから手持ぶさたに目のつけ處に困つて居る。そして此方の三人の方へは顏をそむけて壁の色を見入つて居る。此方には『時計』と言つて紙撚を渡された、三人目の女の子が、

『もういくら考へたつて出やしない――ウー――困つちやつたア、』と言ひながら持てあました紙撚を恨じげに見つめ、突然『ときどき、』と言つて次の前ざしの子に渡さうとする。

『やあだ〳〵、ときどきなんてもな有りやしないに、アハヽヽ』

『アハヽヽ』『アハヽヽ』と三人は腹を抱へて笑ひころげる。

仙臺平の男の子は此騷ぎに、そむけた顏を思はず三人へ向けたが、上目遣ひにチラと見たばかりて其まゝうつむいてしまふ。

前ざしの子は、下座へ向いて坐つてるだけに此樣子を目ざとく見つけた。て、手に持つた紙撚を眺めながら、心の中ては此男の子の淋しげな樣子を氣にして、誰か此子の遊び相手はないか知らなどゝ考へて居ると、手先は何時か、紙撚の先をおもちやにして居た、そしてチクッと指先に感じたと思ふと火は消えて居た。

此様子をさつきから、をかしさをこらへて見て居た二人は、言合せた様に聲をあげた。
「サアかつみさんの火が消えた、サア何かおやり、何かおやり」
「さくら〳〵がいゝよ、」と左右からせめつけられて、かつみは、當惑した顔に笑ひながら、
「そんなら唄ふさ、」と言つて仙臺平の子を一寸見る。
仙臺平の子は此聲に顔を上けたが、かつみの目と視線が合ふと驚いてまた下をうつむいてしまつた。
「早くお唄ひやア」
「早くさア」
「少しお待ちやア、そんなにせかれると歌はれやしないに」
かつみは他の二人の靜かになるまでを待つ様に、表通りに向いたひぢ掛け窓に目をやつたまゝ「さーア、」と歌ひかける、すると口元の筋肉が動いてはふき出したくなるので、何うにかしてごまかす工夫はないものかと考へはじめた。
「水を呑んで來て」
つと立上ると、いち早く次の間へ逃げる。あとの二人はやるまいとして、キャッ〳〵と言ひながら追すがる、果てはころがして腋の下から喉元をくすぐつた。
「アハヽヽアハヽヽ苦しい〳〵アハヽヽうたうてのに〳〵アッ苦しいアハヽヽ歌うてのに」
犬ころのやうなふざけ方をしたあとて、やつと斯う言つて二人に手をゆるめて貰ふと、はだかつた襟元

をかき合せながら起なほつたかつみは、又も二人のすきを窺つて八疊の室から廊下への出入口へ、一足飛びに走り出樣とした、仙臺平の子の傍をかすめて。そして再び追すがつた二人に兩袖を取られると、ふすまをがた〳〵と音させると同時に、よろ〳〵として仙臺平の子のひざ元近くへ倒された。二人は盛んにくすぐる、かつみは見知らぬよその男の子のそば近くての犬ころ騷ぎに耳まで赤くなりながら、「よして――」と言ひながら死物狂ひて起き上らうともがく、けれどももがけばもがく程、仙臺平の子の方へ追ひつめられる、仙臺平の膝は少しづゝ向へ動く、顏はあちらを向ひたまゝてある。

「ハーハー」と言ふ苦しげな息づかへと共に首を縮め、兩のひぢをしつかり付けたまゝ忙しく二人の手を拂ひのけて居るかつみ、くすぐるのにもうあいた二人は、目配せすると同時に一生懸命の力で、いきなりかつみの身體を仙臺平の膝元へ投り出すと「ワアー」と言ひながら手を打つて遠くはなれた。

「母アさアん」

泣聲を上げたかつみが兩手を顎にあてたまゝ出て行くと、仙臺平の子も顏をまつかにして立上つた、そして窓の障子を開けて其顏を表通りに向けて居たが、其目には涙が光つて居た。

「もうすぐお嫁さんが見えるからお前もお振り袖を着てお酌をするのに、そんなに泣いて居ては出來ないよ」

下の小座敷に三四人と話して居たかつみの母は、之から三三九度の席て、雌蝶の大切な役をつとめるかつみの機嫌を損じてはと思つて殊更にやさしくなだめた。そして母親の袂の先をひつぱりながら甘え

てはなれぬかつみを持あまして、『少し早いけれども、』と言ひながら手を取つて化粧室へ入つた。亂れた髮を結びなほして湯殿へ連れて行く間も、かつみは絶えず毛がつるとか洗ひ方が痛いとか言つては鼻をならした。そしてやつと鏡に向つて白粉下をつけると、シミルと言つてかたく兩手で顏をかくしてつつぷしてしまつた。かつみの母は手の付けられない我子の樣子にため息をしながら煙管を取上げた。

座敷の方では人々が嫁御寮を待受ける支度に忙しく、かつみがかね〴〵稽古に行く、表千家の茶の師匠などの聲も交つて聞える。やがて、

『かつみさんや〳〵』と言ふ師匠の呼聲が聞えると、かつみがハッとして身粧ひするひまもなく、頭のよくはげた師匠は顏を出した。

式の順序の下稽古をするのだからと言つて連れに來たのであつた。

さつきから不機嫌にすねて居たかつみは、師匠の顏を見るとすぐ何時もの顏に歸つて、一重帶のしどけない姿のまゝ廣間に來、仙臺平の子と竝んで坐つた。敎へられながら、かつみは今宵の役をつとめるために新たに仕立られた大振袖を着る嬉しさを思ひ浮べていそ〳〵として居た。

『此おてんちやんが！　そんなに上の空で居ちや仕方がない、もつとおちついておいで』

かつみの叔母は、常からかつみの女らしくない性質を知つてるので、殊更に今宵の役を案じ、夫に師匠へ氣を兼ねて、時折斯う言つてたしなめた。かつみは口やかましい叔母の言を平氣に聞ながすのが例なのだけれど、今宵は何故か氣にさはつて、『そんなにがみ〳〵人前で言はなくたつてよいだらうに』と

心の中に思ひながら、其度毎にいやな顔をした。

仙臺平の子は何時も默つたまゝ數へられる通り動いて居た。

二人の女の子は中宿へ嫁御寮を見にと出掛けて行つた。

かつみは化粧部屋で母親に化粧して貰つて、一尺の餘も有る腰上げや、袖にまで縫ひ上げの有る着物を着る珍しさに、支度して貰ふ間も『ぢつとして』を何度か母親にくり返へさせた。赤地絲錦の帶を立やの字に結んで、鬱金ちりめんの帶を長く結びさげ終ると、母親につれられて部屋を出た。

丁稚が廊下を通りすがりに、仰山な言ひかたでかつみにからかつた。

「まあかつみさんな、嫁さんの樣だなア」

廣間には所在なさに困つてる、仙臺平の子が、表通りの窓をあけて嫁御寮の來るべき道すぢを見やつてる。闇の夜を照らす家々の燈火が靄に包まれて町々に、ほけた樣な光を投げて居る、町内には高くかかげられた弓張提灯がボンヤリとかがやいて居る。

「一郎さん、お嫁さんはまだかえや」

斯う言ひながらかつみの母はかつみを連れて這入つて來た。一郎は振り返へると、かつみの着飾つた姿がまばゆく目に入るので、目をそらしながら口の中で小さく答へた。

やがて三人は交る〳〵道すぢをのぞいては其遲いのをつぶやいた。

かつみの母は、一郎の羽織袴をつけた立派な子供姿を見て居たが、『小さい可愛いらしいお婿さん!』

と言ひながら窓を離れた。

遠い〳〵向ふて『嫁よう〳〵』とかすかに聞えはじめる。『ソラ』と言ふと三人は一度に窓へよつた。向近所の家々からもあわてゝ表へ飛び出す氣はひがする。つゞいて師匠の聲で『かつみさん、一郎さん』と呼ばれると三人は急いて二階を降りた。そしてドャ〳〵と混雜する中を通り拔けて師匠の聲をたよつて門口へ出た。

かつみはかゞやく目に、手に持つた松明を高くあげて『嫁よう』の聲の方を見つめた。ほうづきの様な提灯の群が遠い火かげに淡く寫る人々の漸く近づく頃は出迎への人も見物する人もひとしく聲を呑んで居た。車がつくとかつみは待ちに待つたお嫁さんの顔を見逃がすまいとしたが、お嫁さんは白むくの着物て顔を赤くしてうつむいてばかり居るので、其美しさうな顔もよくは見えなかつた。

高砂やァの謠の聞える頃は、廣間の上座には白無垢に綿帽子をしたお嫁さんを中にして、つゞいて坐つた禮服の人たち、下手の正座に竝んて坐つたかつみと一郎が、今師匠から渡された雌蝶雄蝶の銚子を取上げると、かつみは常のお俠にも似ずしとやかに膝を立てると其まゝ一郎の方へ向いて、一郎の差出す銚子の口に自分の銚子を合せ様とする、と兩人の手先はかすかにふるへて、見事に口と口とはそれてしまふ。それから二度まて同じ様な仕損じをして三度目は思ひ切つて、立ひざになつた身體を乘り出してカチリと銚子を合せた、其はづみに一郎の五分がりの髮の毛がサラ〳〵とかつみの額を突ついて、男の汗ばんだ香ひが暖かく顔に觸れた。立上つてすり足て裾をさばくと縮緬の和かな肌ざはりが心持ちよ

く足にまつはりついた。かつみは夢心地になつた。

翌日は嫁御寮と一緒に來た親類の人たちと公園へ行つたが、途中で一人おくれて畑に在つた古繩を拾つて繩飛びをしながら一行を追かけて行つた。『そらまたおてん婆が』と叔母に叱られた時は今までになく恥かしかつた。

お俠として何人にも許されて居たかつみは、此頃から落着いたしとやかな娘になつた。

かつみに甘い兩親は夫を何よりの自慢にもした、そしてあちらこちらと賴まれると喜んで何處へでも連れてあるいた。かつみは其後幾度となくすきな振袖を着て雌蝶の役をつとめたが、何時も雄蝶になる相手は變つて居た、最初の仙臺平の子とは再び顏を合せる機會がなかつた。

* * * * * * *

德川二代將軍に辛い目を見せた要心堅固な眞田の城も、今はたゞ空しく桑の木を植ゑられた、二重三重の堀あとや、入口の左右に高くつみ上げられた櫓あとなどが、荒れ果てた色にこけむして居る上へ、西へ落ち掛つた太陽が哀れに弱い光を投げて居る。

その崖下は一面に田畑になつて、そこゝに咲いた蓮華草を、ゑび茶袴の二人の女の子が餘念もなく摘み集めて居る。やがて二人はやつ口をくけた絲を引拔いて、その花をたばねながら、そろ〳〵と、歩を移して田のあぜを拔けて川ぶちへ出た。水の面を吹いて來る風が快よく、頰へさがる亂れ毛をなぶつて、のどかに春の歌を口ずさんだ一人はかつみだつた、前川ぶちの倉庫の前から、今もまた狐が住むと

言はれてる、左手の雜木の立込んだ陰に深い溝を隔てゝ竝んだ、だら〳〵になつた坂、其坂をやつと越すと又一つ車坂、二人は息をハア〳〵言はせながらやつと上り切つた、左手の中學校へ通ふ道から二三人の學生服を着けたのが、二人の前を横切らうとして其内の一人が何か高聲に話しながら何心なく二人に目をつけた、かつみは一目見るとハッとして立止つた、先方の一人も一寸驚いた顏をして此方を見つめて居た、眉の秀てた目のやさしい顏を、かつみはすぐ思ひ出した、いつぞやの雄蝶になつた仙臺平の子、と思ふと雙方一緒にニッコリして默禮した。

ボンヤリと其後影を見送つたかつみへ、連の娘は「誰さ」と問ひかけた、

「え、親類の人」

かつみがどぎまぎと答へる顏をうさんさうに見た娘は、

「いゝ顏の人だ事――」

「……　……」

耶蘇敎會の圍ひの中から茂り出した、無花果の葉をむしり取つたかつみは、指先て夫を細かく〳〵引ちぎりながらあるいた。

其事が有つてから暫くの間は、かつみの學校友達の間に、かつみと一中學生と言ふ事が何時も話の種子になつて居た。

其頃かつみの方の遠緣て、お針奉公を望んで、近村からかつみの家をたよつて來たお末と言ふ女が有

つた。二十一二の小ぶとりの可愛いらしい顔だちだつた、そして××と言ふ生絲業の家へ世話する事になり、かつみの母は或晩お末を連れて出掛けて行つた。此時の話して其××と言ふのが一郎の家であることをかつみは初めて知つた。

其後暫くの間は、お末も一向姿を見せなかつた、夫が或日驅け込む様にしてやつて來た、そしてあわたゞしく話す所によると、一郎は父の印を利用して同業の某から大金を借り出して、其まゝ姿を隱したとの事であつた。

かつみは一郎の周圍の事情などは少しも知らなかつたからそんな話を聞いても、何と言つてよいのか分らなかつた。けれども何となく淋しい感じがした。自分の身體の上にふわりと投げ掛けられた、かるい〳〵、殆んど感じさへもおぼえない程な、美しい薄衣を突然はぎ取られてしまつた樣な心持ちがした。

其後一郎は臺灣にゐるとか聞いた。

此頃からかつみの何となく淋しい氣持が家の中にも廣がつて行く様だつた。

父は春からきざして居た病氣が移り變る時候と一緒に重くなつた。

家の中に灰色の空氣が、どこともなくしみ込んで永久に消えなくなつた。父も其内亡くなつた。

男主人の無い一家となつてから、かつみの母はよく外出する用事が多かつた。其度毎にかつみは、近所に住む友だちを呼びあつめては時ならぬかるた遊びや、かくれんぼに家の中をさん〴〵に荒して心やりにしてゐた。でなければ母の歸る時刻に近づくと稚子の様に門口まで出迎へて、何處かに鳴る時計の

音をかぞへながら待わびる事もあつた。其頃一郎はまた詫がかなつて歸つて來て居た。

二三月たつてある日お末は身體が惡いと言つて、主家から暇を貰つて歸ると其まゝ床についてしまつた、起きたり寢たり、ブラ〳〵して居て日の暮れる空などを涙ぐんだ目に見つめて居たと思ふと、フラフラと何ともなく散歩して歸る事などが有つた。

『年が上だからに、私が一郎さんを欺した樣ですけれど決して〳〵さうぢやごわしね、私が年ばかりして居ても氣が弱いもんだからに、』とすゝり上げながら訴へる樣なお末の聲と母の聲とが、或日ふとかつみの耳に這入つた。

『ハア、だけれど私が馬鹿なのかは知れやせんが　私も一郎さんに欺された樣にも思はれやしね、さうかと言つてこんな身體になつた時の事も前から案じては居やしたけれど——

ても自分で自分の心を何樣にもしようがなかつたものだから、——其内に目さとい御新造さんが東京の女學校から許嫁の孃さんを俄に呼返へす相談やらて、一郎さんと私とはその晩そつと庭へ出て泣きやした、………私は此まゝ何にも言はず家へ歸る事に決めやした……』

あとはしめやかにすゝり泣く聲、夫を慰さめる母の聲が聞えた。

かつみは其夜は眠れなかつた。そして四五日の後はもうお末の姿はかつみの家に見えなかつた。

かつみの親戚間には、かつみへ養子をむかへる說を主張するものが有つた。けれども母親はまだやつと十六だからと言ふので、其事は當人の心任せとばかし答へて居た。

暫く經つてからかつみは、自分の望みで東京へ出た。

三年ばかりして父親の三年忌に故郷へ歸つたかつみは、一郎が其の後再び大金を盜んで上京したきり便りがないと言ふ話しを聞いた。けれども今度は淡い心で夫を聞く事が出來た。もうかつみも昔のかつみではなかつた。

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE HANSEI-SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正二年七月十四日印刷納本
大正二年七月十五日發行（毎月一回一日發行）

中央公論婦人問題號（第二十八年第九號）